めをとずみ 女夫住・妻夫住・夫婦住【名】夫婦二人にて住むこと。男女の同棲。平家女護島「殖生(ハエ)の夫婦住」

めをとーづか 女夫塚・妻夫塚・夫婦塚【名】ひよくづか(比翼塚)に同じ。松風村雨東帰鑑「末は、淀野や男山、麓に立てる夫婦塚」

めをとーづれ 女夫連・妻夫連・夫婦連【名】ふうふづれ(夫婦連)に同じ。心中刃は氷の朔日「こな様と疾うから夫婦にしたと言ひなし、國へ遣るにも女夫連」

めをとーなか 女夫仲・妻夫仲・夫婦仲【名】ふうふなか(夫婦仲)に同じ。太閤・爐開(ロビ)や世に遁れたる夫婦仲(ナカヤト)」

めをとーねんぶつ 女夫念佛・妻夫念佛・夫婦念佛【名】夫婦揃ひて、念佛すること。三代男「頭を剃り、髪をおろして、夫婦念佛といはるとも」

めをとーびな 女夫雛・妻夫雛・夫婦雛【名】男女一對の雛人形。俳諧古選・逢墓「夫婦雛娘の問はばいかがせん」

めをとーぶね 女夫船・妻夫船・夫婦船【名】ふたまたぶね(二股船)に同じ。

めをとーぼし 女夫星・妻夫星・夫婦星【名】牽牛星と織女星と。二星。曾根崎心中「われと和女(ナヤ)は女夫星、必ず添はうと」

めをとーぼたん 女夫釦・妻夫釦・夫婦釦【名】かふすぼたん(カフス釦)を、婚約のしるしに贈る時にいふ語。

めをとーまげ 女夫髷・妻夫髷・夫婦髷【名】女の髪の結び方の一。江戸時代の末期に、二十歳前後の者の間に行はれたり。

(げまとをめ)

めをとーまつ 女夫松・妻夫松・夫婦松【名】二本並びてある松。俗曲「雪海波「名も高砂の女夫松」

めをとーまど 女夫窓・妻夫窓・夫婦窓【名】二つ續けて設けたる窓。ふうふまど。

めをとーわかれ 女夫別・妻夫別・夫婦別【名】ふうふわかれ(夫婦別)に同じ。天の網島「身代破、夫婦わかれする時は、男ばかりの恥ぢやない」

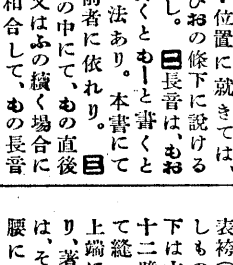
も

【發音】㊀ま行第五の音。子音mが母音oに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、まゑびおの條下に說けるが如し。㊁長音は、もおと書くともーと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。㊂一語の中にて、もの直後にう又はふの續く場合には、相合して、もの長音に發音すること多し。例へば、いもうと(妹)・もうと(蒙古)・おもふ(思ふ)をイモオト・モオコ・オモオと發音する類。但し、そのふが四段活用の動詞の語尾なる場合には、ウと發音し、直前の音と音節を分ちて、發音す。例へば、おもふ(思ふ)をオモウと發音する類。

【字源】平假名もは「毛」(呉音モウ)の草體。變體平假名毛・ゑも同字の草體、爲は「茂」(呉音モ)の草體、母は「母」(呉音モ)の草體より出づ。片假名モは「毛」の略體。萬葉假名としては、前記「毛」・「茂」・「母」の外、字音に據れるものに「莫」・「漠」・「暮」・「墓」・「摸」・「藐」・「牟」・「謀」・「忘」・「望」・「莽」・「文」・「門」・「問」・「聞」・「悶」・「木」・「目」・「勿」・「物」・「无」・「儛」等、訓を取りたるものに「藻」・「喪」・「面」等あり。

も 妹【名】いも(妹)の略。〔古語〕萬葉「旅とへど眞旅(ヒマ)になりぬ家のもが著せし衣に垢附きにけり」

も 裳【名】㊀古、腰より下部に纏ひし衣。


(㊁ も)

うはも(上裳)・したも(下裳)參照。萬葉「松浦(マツ)川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹がもの裾濡れぬ」㊁古、男子の禮裝の時、表袴(ハカマ)の上に著用せしもの。上は四幅、下は六幅なるを、十二襞に疊みて縫ひ附け、上端に横紐あり、著用の際は、その紐を腰に引きまはし、前方に引き違へて、裾にて結びたり。㊂古、婦人の正裝の時、唐衣(キヌ)と共に著用し、上衣の上より、後方のみに、腰より下の部分に當てて用ひし物。形は袴に似、深く襞を立て、裾を引くやうにし、小腰とて、紐を、左右の脇の下より前へ廻して結び止め、腰に當る部分を大腰といひ、これに附けたる懸帶といふを、肩より打ち越して、胸にかけ、又、左右には、引き腰と呼ぶ飾の紐を、六尺五寸の長さに引き垂るるやうにせしもの。地質は繡物(モノ)・織物など、染色・模樣は纈纈(カウケツ)・目染・下濃(ゴヤウ)・地摺(ヂザク)などなりき。枕「しりに、摺りたる裳、やがてひろげながら打ち懸けなどしたるは」同唐衣はあか色・藤、夏は二藍(フタアヰ)、秋は枯野、裳はおほ海」㊃僧侶の腰に纏ふ衣。榮花「裳・袈裟」盛衰記「黑衣(ゴロモ)の裳短きに、黑袴、脛高に著」

裳の腰【句】裳の紐。裳裾(ヲモス)の腰。萌黃の裳の腰」

裳の下(シタ)の犢鼻褌【句】たふさぎ(犢鼻褌)を見よ。和名「孫、孫子、毛乃之太乃太不佐岐、一云、水子。小褌也」

も

喪【名】㊀人の死にし時、その親族たちの、憂に沈みて籠り居ること。紀「喪禮、モノコト」㊁わざはひ。凶事。〔古語〕萬葉「たまきはるうちの限は事もなくもなくもあらむを」同「旅にてももなくはや來(コ)と我妹子(モヲ)が結びし紐はなれにけるかも」

も 藻【名】〔植〕水中に生ずる隱花植物の總稱。藻類(ルイ)。和名「藻、和名毛、一云毛波、水菜也」

藻に棲む蟲の【句】『古今和歌集の戀五の歌に「海士(アマ)の刈る藻に棲む蟲のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ」に本づく』自ら招きたる事なれば、如何ともなしがたしとの義なる「我からといふ語の上に、序詞として、屢ば用ひらるる語。松風村雨東帰鑑「取梶も櫓櫂(ロカ)も及ばぬ戀の海、……、藻に住む蟲の我からと、焦れ、あこがれ」

も

【副】もうに同じ。狂言・抜殼「も、斯う參りまする」同(鉢根草)「も一度、御前へ戻らずばなるまい」

も

【助動】むの終止形の轉訛。〔東國の古の方言〕萬葉「玉かづら花のみ咲きてならざるは誰が戀ならも我は戀ひもふを」同「上(ヒ)つ毛野(ケ)佐野田(タ)の苗のむら苗にことは定めつ今はいかにせも」

も

【助】㊀或點に於ては、共通の性質・狀態を有する、又は反對なる性質・狀態なる事物を並べ擧ぐるに用ふる語。但し、その一つのみを擧げて、他を略する場合あり、又、疑問の語の下にありては、一切の事物を指す。「大人も、子供も」「夏も、冬も」「お前も一緒に行け」「何れも惡しからず」「可もなく、不可もなし」「あまり善くもなし」㊁或範圍に屬する事物中の極端なるものを擧げて、他は言ふまでもなき意。「何と言はれても、致方なし」「言ふまでも無し」㊂感嘆の意。萬葉「もののふの八十氏川(ヤソウヂガハ)の網代木(アジロギ)にいさよふ波の行くへ知らずも」㊃もぞ・もこそを見よ。

㊀も 又はどもに同じ。(動詞及び多くの助動詞にては連體形、或助動詞にては連用形に添ひ、又、形容詞にては、後世は連體形に添ひ、もとは連用形に添ひたり)「少くも百位の數には達せん」平治「矢は當らざりしも、痛手は負ひぬ」愚管抄「人はいみじく猛くも、力及ばぬ事なりけり」八犬傳「渠、鳥ならずも、羅に入りぬ。獸ならずも、狩場に在り」「誤。

もーあひ 最合・催合【名】もやひ(舫)㊁の

もーあふ 最合ふ・催合ふ【動四自】もやふ

(紡ふ)Ⅱの誤。

もい 萌い【動自】もゆ(萌ゆ)の連用形もえの轉訛。〔古語〕 萬葉「春さればひこえ萌いつつ」

もいか 藻鳥賊【名】〔動〕あふりいか(障泥烏賊)に同じ。

もいくわ 梅花【名】『もいは梅の字の宋音』梅の花を模様としたるもの、又その模様を織り出せる絹。下學集「梅花、モイクワ、絹紋織ニ梅花一也」

もいを 藻魚【名】もうを(藻魚)に同じ。

もう【名】〔動〕『次條の語の轉義』もうもうを云ふ。〔幼兒の語〕

もう【貌】もうもうに同じ。

もう 蒙【名】次の條を見よ。

蒙を發し、落(ラク)を振ふ【句】『史記の汲黯傳に「至ル設ニ丞相弘一、如下發ル蒙振ヒ落耳」とあり。物の上を覆へる巾(キン)を發き、落葉を振ふ義』事の極めて容易なる譬。

蒙を啓(ヒラ)く【句】道理に蒙(クラ)きを、わかるやうに教へ導く。けいもう。

もう【副】Ⅰもはや。すでに。Ⅱこの上に。なほ。 一茶「もう一つ川を越ゆとよ飛ぶ螢」

もうは未(ダ)なり、未はもうなり【句】Ⅰ米相場などの、豫期に反して、高低すること多き形容。〔諺語〕Ⅱ世の中の物事の、思ふとほりにはならぬ形容。〔諺語〕

もうう 濛雨【名】濛濛と曇りて降る雨。

もうき 濛氣【名】濛濛と立ち籠むる氣。

もうき 朦氣【名】心のはれやかならぬこと。太平記「死人の首を目に見れば、心地の蒙氣するとて、……、日ごとに、二三人が首を切りて」Ⅱも(喪)に同じ。

もうぎう 蒙求【名】〔書〕『易の蒙卦の「童蒙求ル我」の句に本づきて名づけたるもの』經史の中より、古人の事蹟五百九十六件を選び、その相類せるもの二つづつを相對せしめ、記誦に便ならしむるために、一一、四字句の標題を加へたるもの。三卷。支那唐の李瀚の撰。玄宗の天寶年間、饒州刺史李良、これを朝廷に薦む。後、又、元の胡炳文、純正蒙求三卷を著す。狂言「箕かづき」「勸學院の雀は蒙求を囀り、智者のほとりの童(ワラハ)は、習はぬ經を讀むといふが」

もうぎうわか 蒙求和歌【名】〔書〕支那の蒙求の二百五十の話題を抄出して、國語に譯し、話題毎に、四季・戀・雜の和歌を配して詠みたるもの。例へば、「漢祖龍顏」に「立春」の題を、「丁固生松」に「子(ネ)の日」の題を充てたる類。十二卷・二册。源光行の作。

もうきさ 濛氣差【名】〔天〕たいきさ(大氣差)に同じ。

もうく 毛孔【名】けあな(毛孔)に同じ。

毛孔を寒からしむ【名】「身の毛を立つ」に同じ。太平記「その怨靈ども、此所に留りて、月曇り、雨暗き夜は、叫喚・求食(クジキ)の聲、啾啾として、人の毛孔を寒からしむ」

もうけん 蒙縣【名】〔地〕支那の莊子の生地。その故城は、今、河南省歸德府商邱縣の東北に在りと稱し、縣の東南に祠廟を起して、これを祀れり。れいきやう(厲卿)參照。

もうこ 蒙古【名】〔地〕支那の外藩の一。支那本部の北、滿洲の西、西比利亞の南、新疆省の東。 增鏡「蒙古おこるとかやいひて、世の中騷ぎ立ちぬ」

蒙古の碑【句】「燕澤(ヤクタク)の碑」に同じ。

もうこご 蒙古語【名】ウラルアルタイ語族の一派。蒙古本部に行はるるシャルヲ(Churro)方言、西方露西亞に近き地域に行はるるカルムク(Kalmuk)方言、北方バイカル湖附近の地方に行はるるブリヤト(Buriat)方言の三大方言に分れ、文法上の組織は、頗る朝鮮語・日本語・滿洲語に類す。

もうこし 蒙古史【名】蒙古の歷史。

もうこしふらい 蒙古襲來【名】げんこう(元寇)に同じ。

もうこしふらいえことば 蒙古襲來繪詞【名】〔書〕蒙古襲來のさまを畫きたる繪卷物。三卷。繪は姉小路長隆及びその子長章の筆と傳ふ。詞書は竹崎五郎兵衞尉季長の作。季長は、蒙古襲來の防禦軍に從ひて功ありし人にして、その功績を後世に殘さんがために、この繪卷を作りしが、竹崎氏衰ふるに及び、繪卷は、宇土城主伯耆顯孝の手に歸し、顯孝の女、天草の城主大矢野種基に嫁するや、種基の祖種保兄弟、亦、蒙古襲來の役に從軍したりしより、これを種基に贈り、明治二十三年、大矢野氏の後裔、これを宮內省に獻じてより、帝室の御物となる。一名、竹崎五郎繪詞。

もうこじん 蒙古人【名】蒙古の住民。

もうこじんしゆ 蒙古人種【名】人類學の祖と呼ばるる獨逸のブルウメンバハ(Blumenbach)氏の、世界の人類を五大變種に分ちたるものの一。亞細亞の住民の大部分、歐羅巴の北部に住するフィン(Finns)・ラップ(Lapps)の兩族及び亞米利加の北部なるエスキモオ(Eskimo)族等、これに屬し、その特徵は、皮膚の黃色なる、頭髮の硬直にして黑き、頭部角張り、顏面廣く、鼻小く、顴骨秀で、眼裂細く、顎の突出の弱き等の諸點とす。後人中、この名稱を襲用し、その範圍を亞米利加の土人、南洋諸島の蕃族にも及ぼせる者、又、謂はゆる蒙古語を用ふるもののみに限らんとせる者等あり。

もうこもんじ 蒙古文字【名】蒙古語を記すに用ふる文字。回紇(ヰキツ)文字に基づきて作製し、數次の補修を經たり。

もうざう 夢想【名】Ⅰ心の苦しくて、夢を見ること。Ⅱふせい(遺精)に同じ。

もうぞく 水雲・海雲・海蘊・苔菜【名】〔植〕もづく(水雲)に同じ。

もうぞこ 水雲・海雲・海蘊・苔菜【名】〔植〕もづく(水雲)に同じ。

もうぢん 蒙塵【名】『佐傳の僖公二十四年の條に「天子蒙ニ塵于外一」とあり』天子の、難を避けて、京師を落ち延びたまふこと。「同じ。

もうちゆう 朦中【名】もちゆう(喪中)に同じ。

もうてん 蒙恬【名】〔人〕支那秦の武將。始皇の命により、兵三十萬を率ゐて、匈奴に備へ、萬里の長城を築き、始皇崩じて後、藥を仰ぎて自殺す。この人、始めて、兎の毛を用ひて、筆を製したりといふ。

もうどう 朦艟【名】いくさぶね。戰艦。

もうに【副】『猛(タケ)にの義かといふ』多く。澤山。〔信濃國・上野國の方言〕

もうまい 蒙昧・曚昧【貌】Ⅰ『三國志蜀の郤正傳に「昔在鴻荒、曚昧肇初」とあり』天地のくらきさま。Ⅱ目の見えぬさま。めくら。 著聞「老病、身にまとひて、耳目蒙昧なりけるが」

もうまい 濛昧【名】霧などの立ち籠めて昧(ヌ)きこと。「じ。

もうめい 濛溟【貌】めいもう(溟濛)に同

もうもう【名】『もうもう(朦朦)』Ⅱの轉義といふ』やまひ。病氣。 御湯殿上日記「若宮の御方、御もうもうの御立願なり」

もうもう【名】〔動〕『鳴聲によりていふ』うし(牛)を云ふ。〔幼兒の語〕

もうもうのおっぱい【句】ぎうにゆう(牛乳)を云ふ。〔幼兒の語〕

もうもう【貌】牛の鳴く聲。

もうもう 濛濛【貌】霧又は細雨などのために薄暗きさま。

もうもう 朦朦【貌】Ⅰ空のうす暗きさま。おぼろ。ぼんやり。Ⅱ心のはれやかならぬさま。ぼんやり。 太平記「執事兄弟、只朦朦としたるばかりにて」

もうむ 蒙霧・朦霧【名】Ⅰ薄暗きまでに立ち籠めたる霧。Ⅱ心のはれやかならぬこと。 東鑑「迷惑恐歎、未ル散ニ蒙霧一也」

もうりんくわ もうりん花【名】〔植〕まつり(茉莉)に同じ。

もうる 毛宇留・毛琉【名】もおるに同じ。

もうろう 朦朧・蒙籠【貌】Ⅰ雪・霧などのために、薄暗きさま。Ⅱ物事の分明ならぬさま。Ⅲ心のはつきりとせぬさま。

もうろうしやふ 朦朧車夫【名】一定の客待場を有せず、諸處に徘徊して、乘客より不當の賃金を貪りなどする車夫。

もうろうたい 朦朧體【名】〔文〕詩文・繪畫などの、明確なる意義・輪廓などを有せぬもの。

もうを 藻魚【名】〔動〕ねうを(根魚)に同じ。日本水産藏「魚は養生の一大事なるに、毒魚と知りながら鮠汁(ヲウジル)、これに風味變らずして、藻魚といふもの、何の氣遣なかりき」「た。

もえ 燃【名】燃ゆる難易の程度。もえかも。

もえ-あがる 燃上る【動四自】燃えて、焔、高く上る。やけあがる。

もえ-いし 燃石【名】〔鑛〕せきたん(石炭)を云ふ。〔氣前國黑崎の方言〕

もえ-いづ 萌出づ【動下二自】一もゆ(萌ゆ)に同じ。萬葉「岩走るたるみの上の早蕨(ワラビ)のもえ出づる春になりにけるかも」二心におこる。思ひはじむ。新勅撰「春來れば雪の下くさ下にのみもえ出づる戀を知る人ぞ無き」

もえ-かた 燃方【名】燃ゆる狀態。もえ。

もえ-かへる 燃返る【動四自】もゆ(燃ゆ)三を強めていふ語。百日會戰「腸が燃えかへり、胸の蟲が、むかむかと」

もえ-がら 燃殼【名】燃えをはりたる後に殘りたる物。

もえ-ぎ 萌木【名】芽又は葉の萌え出でたる木。源氏「色色のひもときわたる花の木ども、わづかなる萌木の陰に」夫木「生ひにける庭の萌木の小櫻にそこはかとなき涙とまらで」

もえ-ぎ 萌黃・萌葱【名】『葱(キ)の萌え出でたる時の色の義なりとも、前條の語の轉義にて、春、木の葉の萌え出づる時の色のやや黃色を含めるよりいふとも、又、草木の萌え出づる時の黃ばめる色の義ならんともいふ』一青と黃との間の色。もえぎいろ。もよぎ。みどり。二襲(ネ)の色目の一。枕「今は、紅梅は著でもありぬべし。されど、もえぎなどの憎ければ」

萌黃に澤瀉(ダケ)を縅(ド)す【句】萌黃縅に、他の色にて、澤瀉縅と同樣の形の添はるやうに縅す。盛衰記「萌葱に澤瀉縅したる鎧」

もえぎいと-わたあか 萌葱絲肩赤【名】萌葱絲縅の、肩赤なるもの。

もえぎいと-わたしろ 萌葱絲肩白【名】萌葱絲縅の、肩白なるもの。

もえぎいと-をどし 萌葱絲縅【名】鎧の、萌葱色の絲を用ひて縅しなるもの。盛衰記「萌葱絲縅の鎧」〔(萌葱)一に同じ。

もえぎ-いろ 萌葱色・萌黃色【名】もえぎ

もえぎ-にほひ 萌葱匂・萌黃匂【名】一萌葱縅の、匂縅(ニホヒ)にしたるもの。平治「萌黃匂の鎧」二襲(ネ)の色目の一。萌葱色にて、下に濃きを用ひ、上部に至るに從ひて、次第に色を薄くせるもの。女房の裝束の場合には、その下に、紅の單(ヒトヘ)を著用す。

もえぎ-もめん 萌黃木綿【名】萌黃色に無地に染めたる、裏地用の木綿織。

もえ-きる 燃切る【動下二自】全部燃ゆ。曠野(荷兮)「燃えきれて紙燭を投ぐる薄かな」

もえぎ-をどし 萌葱縅・葱黃縅【名】もえぎいとをどし(萌葱絲縅)に同じ。盛衰記「萌黃縅の腹卷」

もえ-くさ 燃種【名】火を燃すための材料。燃料。

もえ-くち 燃口【名】燃えつく狀態。

もえ-くひ 燃杭【名】やけぼくひ(燒木杭)に同じ。和名「燼、毛江久比、火餘木也」燃杭には、火が附きよい【句】「燒木杭(ヤケボ)には火が附き易し」に同じ。〔諺語〕傾城佛原「燃杭に火がつきよいと、又、今川に馴染(ナジミ)重なり」

燃杭に火【句】前條の略。〔諺語〕一代男「燃杭に火とは、この人の昔にかへる」

もえ-こがる 燃焦る【動下二自】もゆ(燃ゆ)四に同じ。宇治「瞋恚の炎に燃えこがれ」

もえ-さかる 燃盛る【動四自】さかんに燃ゆ。

もえ-さし 燃止【名】もえのこり(燃殘)に同じ。

もえ-しざる 燃退る【動四自】次第に後の方へと燃ゆ。續七部集「燃えしざる薪(キ)を後手(デリ)にてさしくべて」

もえしま-ごらう 燃しま五郎【名】わりき(割木)を云ふ。〔越中國の方言〕

もえ-たつ 萌立つ【動四自】さかんに萌ゆ。續猿蓑(正秀)「なぐりても萌立つ世話や春の草」

もえ-たつ 燃立つ【動四自】一さかんに燃ゆ。拾遺「島邊山谷に烟の燃えたたばはかなく見えし我と知らなん」太平記「厚總の鍬(クワ)の燃立つばかりなるを懸け」二もゆ(燃ゆ)を強めていふ語。

もえ-つく 燃附く【動四自】火移り附きて燃ゆ。枕「近き程に火出で來ぬといふ。されども、燃えはつかざりける」

もえ-のこり 燃殘【名】燃えをはらずして殘れる部分。もえさし。徐盧。

もえび 藻蝦【名】〔動〕甲殼類に屬する節足動物。我國、太平洋岸の灣内、大葉藻(ホンダワラ)などの繁殖せる處に棲み、形、芝蝦に似て、體長三四寸、甲殼は多少透明にして、淡綠色を呈し、柔し。

もえ-ひろがる 燃擴がる【動四自】次第に燃えて、ひろがる。

もえ-わたる 萌渡る【動四自】廣き範圍にわたりて萌ゆ。後撰「萌えわたるなげきは春のさがなれば大かたにこそあはれとも見れ」

もえ-わたる 燃渡る【動四自】一廣き範圍に渡りて燃ゆ。二永き年月に渡りて思ひ悶ゆ。玉葉「下にのみもえわたれども年を經てわがおもひをば消つ人も無し」

もおたあ (英 Motor)【名】〔理〕はつどうき(發動機)に同じ。

もおたあ-ぼおと (英 Motor boat)【名】〔理〕はつどうきせん(發動機船)に同じ。

もおたあ-るうる (英 Motor rule)【名】〔理〕「左手(ヒダリ)の規則」に用ひ。

もおとる (英 Motor)【名】〔理〕もおたあに同じ。

もおとる-るうる【名】〔理〕もおたあるうるに同じ。

もおにんぐ【名】次條の略。

もおにんぐ-とおと (英 Morning coat)【名】『西洋にては、男・女共に、每日、朝・晝・夜の三回に衣服を替ふるを禮とし、この服は午前の服なりしよりの名なるべしといふ』フロックコオトに似て、前幅狹く、前方の裾先を弧形ならしめたるもの。上衣に黑、ズボンに縞を用ふる時は、略式の禮服或は紳士の平常服となり、上下共に縞を用ふれば、全く平常服となる。はんまんてる。

(ぐんにおも)

もおる 莫臥爾(葡 Mogol の訛とも佛 Moire, 英 Moir の訛ともいふ)【名】『Mogol は、即ち草臥爾(モウガル)帝國にて、印度產の義なるべし』一緞子(ドン)に似たる、浮織の織物。經(タテ)は絹絲にて、緯(ヨコ)に金絲を用ひたるを金モオル、緯に銀絲を用ひたるを銀モオルといひ、後世は、金絲又は銀絲のみを撚り合はせたるをいふ。二厚くして、大なる皺(ボ)ある、一種の革。應帝(ディン)の類。一枚の大さは、通常、方約三尺、なほ、小(コ)莫臥爾・女(ノ)莫臥爾等の種類ありたり。

もおる-いと モオル絲【名】普通綿絲(ノ)二十番手・三十二番手若しくは四十番手の單撚絲二本を引き合はせて、强撚を施し、この二本の間に柞蠶(サン)絲を自動的に、二分乃至三分の一定の長さに截斷しつつ挾み、然る後、これを、前と反對に撚り返して製したる絲。けむしいと。

もおる-おり 莫臥爾織【名】もおる(莫臥爾)一に同じ。

もおる-がは 莫臥爾革【名】もおる(莫臥爾)一に同じ。

もおる-すき 莫爾斯機(英 Morse instrument 又 Morse ink writer)【名】モオルス符號を、現字紙上に印出せしめて通信する電信機械。北米合衆國モオルス氏の發明に係る。

もおる-すきがう 莫爾斯記號【名】次條に同じ。

もおる-すふがう 莫爾斯符號(英 Morse code alphabet)【名】モオルス機にて通信する時、長短二種の縱線を種種に配合したるを、文字に代用する符號。我國には、イとAとは・—、ロとBとは、—・・・、一と1とは・————、二と2とは・・————、濁點〻は・・、半濁點○は・・—・、終點・は・・・・、讀(ヨ)點、は————など定めらる。又、この符號は、夜間

又は霧中に於ける號砲・汽笛などの信號にも應用す。「言」

もか【名】蓮の葉。〔伊勢國・美濃國の方言〕

もーが【名】**もだんがある**の略。〔俚語〕

もーが【助】願望の意。萬葉「石竹(シナヅ)の花にもが朝にけに手に取り持ちて戀ひぬ日なけむ」同「足(ア)の音せず行かむ駒もが葛飾(カツカ)の眞間(マ)の繼橋(ツギ)止まず通はむ」

もがあるていこく 莫臥爾帝國・莫臥兒帝國(英 Empire of the Mogrus)【名】〔地〕『英臥兒は、蒙古(Mongol)の訛といふ』西曆第十六世紀の初葉より第十九世紀の中葉にかけて、印度に存立せし、回教の帝國。蒙古の成吉思汗(スカンギ)の裔と稱し、その後繼者を以て任じたる帖木兒(ティムール)大王の遠孫なるバベル(Bibal)の建設に係り、一時は國勢盛大なりしが、約三百年繼續の後、英國東印度商會の保護に屬し、一八五七年、英國の權下に屈伏して、從來の帝號を奪はれ、遂に滅亡す。一名、もがるていこく。

もーかい 模楷【名】てほん。のり。ぼか。

もーかう 末額・抹額【名】磯に紅帛を鉢卷にしたる、細纓(エボシ)の冠。衞士(エジ)又は賀茂の競馬などに、騎手のかぶりしもの。

もーかう 帽額【名】〔植〕『帽額の字の宋音か。もと被物(カブリモノ)にて、杜氏通典に「古之人帽而額」と見え、帽子と抹額(即ち鉢卷)となるべしといふ。一說には、額(ヒタイ)を帽(オ)ふ義にて、その下をくぐりて出入する人の額を覆ふよりいふともいへり』御帳(ミチヤウ)・上長押(カミナ)又、後には、御簾の上部の外側に、横に、幕の如くに張りたる、一幅の帛。後世の水引幕の類にて、簾の上部は御簾に附著し、下部は遊離せるを常とし(御簾の外側の緣にも、帛を附く)、窠(クワ)の紋などを染め出し、御帳及び上長押の、額隱(ヒタイカクシ)ともいひ、御即位の時には、獸形を畫きたるを用ひ、諒闇には、布製のを用ふ。ひたひかくし。空穗「簾の帽額には、大紋の錦をせさせたまふ」江次第「東西北面、懸五位帽額」「徒然「倚廬の御所の樣など、板敷を下げ、蘆の御簾を懸けて、布の帽額あらあらしく」〔三〕帽額の簾」の略。枕「三尺の几帳を立てたるに、帽額の下(モ)は、ただ少しぞある」〔三〕

もーかう(木瓜)に同じ。「木瓜」増鏡「萌黃の下襲(ヒタガサネ)、御家の紋のもかうを、いろいろに織りたりしにや」

帽額の簾(ス)【句】帽額を取り附けてある簾。枕「帽額の簾は、ましてこはき物のうち置かるる、いとしるし」

もーかう 摸倣・模倣【名】**もはう**(模倣)に同じ。

もーかき 藻搔【名】熊手の爪の如きもの二つに、八九尺の柄を取り附けたる、昔の船軍の具。「藻搔」に同じ。

もがきいばら【名】〔植〕**さるとりいばら**(馥)

もがきーごと 跪言【名】苦しみ悶えていふ言葉。傾城反魂香「姫かはいいと云うてくれと、もがき言が、おいとしさ」

もがきーじに 跪死【名】苦しみもがきつつ死ぬること。先代萩「虛空を摑んでもがきじに」

もがきーまはる 跪廻る【動四自】甚しく跪く。和合人「もがきまはる程、泥の中へ、づぶづぶ踏込(フミコン)むから、上ることは出來ず」

もがく 跪く【動四自】〔一〕苦しさに、手足を動かす。あがく。〔二〕あせる。いらだつ。あがく。

もがさ 痘瘡・疱【名】**ほうさう**(疱瘡)に同じ。續記「豌豆瘡、俗曰三裳瘡」榮花「ことしは、世の中に、もがさといふもの、いできて」

もかさかーぶね もかさか船【名】魚を捕ふるための船なりとも、群がり集まる船なりともいふ。〔古語〕昊竹集「浦こしの明石の松に音づれてもかさか舟も出でしとぞ思ふ」

もーがし 膽八樹【名】〔植〕**ほるとのき**(膽八)「樹」に同じ。

もがーな【助】『**な**は感嘆の助辭』**もが**の意を強めていふ語。榮華「わが身、ただ今、人人しくてもがな、むくいせんと思ふも、胸はしる」其角「黃菊白菊その外の名は無くもがな」

もがみ 最上【名】〔地〕羽前國の十郡の一。郡役所を新庄町に置く。上古は、今の村山郡邊の地をも含みしを、仁和二年、これを分ち、延文中、最上氏管領となりし時、又、これを合し、文祿中復舊せしが、その際、古の最上郡は村山郡となり、舊村山郡の北部なる狹小の地のみ、最上郡となりて、地域、古とは、全く顚倒するに至れり。〔二〕**もがみがは**(最上川)の略。〔三〕**やまがた**(山形)〔四〕の舊稱。

最上の鼻かまず船【句】水流の速さに、船頭鼻もかみあへぬこと。

もがみーがた 最上形【名】鎧の胴の、後世の形式の一。鐵板を、横に五段に重ね、鋲にて綴ぢたるもの。出羽國最上より出で、南北朝頃よりのものなるべしといふ。

もがみがは 最上川【名】〔地〕羽前國第一の大川。國の東南境なる吾妻火山の北陰より發し、上流は松川といひ、北流して、米澤(ヨネ)市の東を過ぎ、流域に米澤平原を作り、西北に走りて、西置賜(イキタマ)郡に入り、始めて、最上川の稱あり。それより、山形平野・新庄平地・庄內平地を流れ、末は、羽前・羽後兩國の境とし、酒田港の附近に於て、日本海に入る。その間、幾多の支流を合はせ、下流は酒田川の名あり。流程六十里、我國三急流の一に數へらるれども、下流は流緩やかにして、河口より約五十里、小舟を通じ、全川水路を合算すれば、六百里餘に達し、運漕の便、灌漑の利、甚大なり。

もがみざむらひ 最上侍【名】最上藩の侍。人情濃かならぬ田舍侍。ひさご「戀には難き最上ざむらひ」

もがみーそで 最上袖【名】最上形の鎧の「袖」。

もがみーどう 最上胴【名】最上形の鎧の胴。

もがみーどうまる 最上胴丸【名】最上形「の胴丸」。

もがみーとくない 最上德內【名】〔人〕探險家。名は常矩、字は士規、鶯谷と號す。出羽國楯岡の農、高宮甚七の子。數理・測量の事を喜び、露人の蝦夷を侵略するを聞き知りて、邊防の急を思ひ、江戸に出で、姓名を、最上德內と變じ、幕府の醫官山內立長の家僕となり、更に本多利明の門に入りて、天文・測量等の學を修む。天明四年、松平定信の、幕吏を遣して、擇捉(エトロフ)・得撫(ウルップ)より樺太(カラフト)を探檢せしむるや、本多利明の推薦により、一行の從僕となりて隨行し、探査大いに努め、功によりて、士分に列し、寬政三年、再び蝦夷地を巡察し、翌年、又、樺太に入り、五年、露國の使節ラックスマン(Laxman)、伊勢の漂民幸太夫を送りて、松前に來りし時、幕使を輔けて、應接に功あり、遂に御目見(オメミエ)以上の格に陞り、後、箱根奉行支配調役・富士見寶藏番を經て、御簾中御廣間添番に昇り、天保七年致す。年八十三。著す所、蝦夷草紙等あり。明治四十四年、正五位を贈らる。

もがみびと 最上人【名】事を容易に承け引かぬ人をいふか。**もがみざむらひ**(最上侍)參照。若鳳俗「よき物、人も知る事ぞと、最上人も、商口(アキナヒ)を出して、よろづに買物、心元なし」

もがみーよしあきら 最上義光【名】〔人〕武將、義守の子。父の後を承けて、山形城に居り、四隣を攻略し、夙に織田信長・豐臣秀吉・德川家康に交權し、關ヶ原の役、東軍に屬し、南部・秋田等の諸氏を率ゐて、背後より上杉景勝を攻め、役後、功によりて、莊內・仙北四十二萬石に封ぜられ、左近衞少將・從四位上となり、慶長十九年、病歿す。年六十九。

もがみーりう 最上流【名】和算の一流。寬政の頃、出羽國最上の人會田(アイタ)安明の創めしもの。

もがーも【助】**もがな**に同じ。萬葉「津の國の海のなぎさに船(フネ)よそひたし出も時に母(モ)が目もがも」

もがもーな【助】『**な**は感嘆の意』前條を強めていふ語。萬葉「河上のゆつ岩むらに苔むさず常にもがもな常處女(トコヲトメ)にて」萬葉「み空往く雲にもがもな高く飛ぶ鳥にもがもな」

もがもーや【助】『**や**は感嘆の意』前條に同

じ。 萬葉「あの飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び歸るもの」

もがらみ 藻搦【名】青菜の、湯びきて、細かに裂きたるを、魚の身を摺り崩したる中に入れ、薄たれを掛けたる食品。

もがり 殯【名】あらき(殯)に同じ。〔古語〕紀「殯斂、モガリ」同「葬、モガリ」

殯の宮【句】ひんきゆう(殯宮)に同じ。〔古語〕紀「殯宮、モガリノミヤ」

もがり 虎落【名】㊀昔、軍などの時、竹を筋違に組み合はせ、繩にて繁く結(ヒ)固めて、柵としたるもの。〔茂架・茂番離・雲雁・雲眼竹〕㊁物を掛けて乾かすために、枝の著きたるままの竹を立て並べたるもの。 重井筥「門の戸明くれば、德兵衛、もがりの蔭に隱れしを」

もがり 強請【名】もがること、又もがる人。ゆすり。〔強請〕 本朝櫻陰比事「自今はこの里の物になすべしと、俄かに虎落を頼み、この事、京都の奉行所の御評定となりぬ」 男色大鑑「もがりといふは、非道を元として、言分(イヒ)をこしらへ、利を得るたくみなどする者を、斯くいふなり」

もがり-ごと 強請事【名】もがること。ゆすりごと。 長町女腹切「慾づらの繼父(ままちち)めが、年切增(ネンキヤ)のもがり事」

もかり-ごろも 藻刈衣【名】藻を刈り取る時に著る衣。 五人女「清十郎、お夏を盜出し、……、もかり衣、濱びさしの幽かなる所に船待(マチ)をして」

もがり-だけ 虎落竹【名】虎落㊁に用ふる竹。 三二職人歌合「手あたりのよき枝あれば折るもうし花のかこひのもがり竹召せ」

「白」㊃に同じ。

もがりは もがり葉【名】〔植〕うらじろ(裏白)に同じ。

もかり-ぶね 藻刈船【名】藻を刈る時に用ふる船。もぶね。 萬葉「藻刈舟沖漕ぎ來(ク)らし妹が島かたみの浦に田鶴(ツル)かける見ゆ」

もがり-もの 虎落者・强請者【名】虎落㊁を爲す者。 本朝櫻陰比事「町中、これに不便(フビン)を懸け、後家を一つにして、跡を襲がする内談せしに、後家が虎落者にて、なか

なか人の差圖を合點せず」

もがり-や 殯屋【名】もや(喪屋)に同じ。

もかり-をぶね 藻刈小舟【名】もかりぶね(藻刈船)に同じ。 夫木「たづの鳴く夕潮さゐの湊洲に藻刈を舟も今や寄すらん」

もがる 强請【動四自】㊀强ひて理窟を言ひたつ。㊁ゆする。かたり取る。 壽の門松「七十になる淨閑がもがられたといふ外聞わるさ」

もがる 强請る【動下二自】前條㊀に同じ。 源氏十二段長生島臺「異議に及ばば、討って捨てよともがるれば」

もがるていこく 莫臥爾帝國・莫臥兒帝國【名】〔地〕もがあるていこく(莫臥爾帝國)に同じ。

もぎ 劃【名】和船の一本水押(イオシボン)の一部。もぎさき。

もぎ 【名】ねっき(根木)に同じ。

もぎ 裳著【名】古、女子の、始めて裳を著用せし式。十二歲乃至十四歲の頃、結婚に先だちて行ひ、豫め日時を卜し、尊屬又は德望の人に請ひて、裳の腰を結ばしむる事ありて、これを腰結(コシヒ)といひ、同時に、垂髮を改め、結髮す。上古には、結髮の事のみありて、髮上(アガ)の稱ありき。 源氏「宮たちの裳著の日」 續後撰「女一の宮の裳著侍りけるに」

裳著の屏風【句】裳著の儀式の時に飾る屏風。 大鏡「御裳著の屏風に、公忠の辨、行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに と詠むは、この御子の宮なり」

もぎ 模擬・摸擬【名】かたどり擬(ナラ)ふること。他の物事のさまに似ること。ぼぎ。

もぎ-あふり 劃淡落【名】和船の一部。外艫(ドマモト)の方に在る淡落。

もぎ-き 挽木【名】枝を挽ぎ取りたる木。 源氏「よそにては挽ぎ木なりとや定むらん下に匂へる梅の初花」 堀文「枯れはててもぎ木となりし昔より焚きすてられん日をぞ數ふる」

もぎ-くわさい 模擬火災【名】毎年一月の消防の出初(デゾ)式に、足場を高く構へ

たる頂に、家の形せる物を造り、これに火をかけて、出火に擬し、ポンプにて消し止めて、消火の練習をなすこと。

もぎ-こくくわい 摸擬國會【名】法學生などが、集合して、國會になぞらへて行ふ討論會。

もぎ-さき 劃先【名】もぎ(劃)に同じ。

もぎ-しけん 摸擬試驗【名】入學試驗登用試驗などに合格する力ありや否やを試むるために、その試驗になぞらへて行ふ試驗。

もぎだう 沒義道・莫義道・無義道【名】人たる道にはづれてあること。非道。 明天皇職人鑑「はて、もぎだうな」 一谷嫩軍記「とっくりと譯も言はず、……、もぎだうに叱るばかりが手柄でもムんすまい」

もぎだう-もの 沒義道者・莫義道者・無義道者【名】もぎだうなる者。 冥途飛脚「彼奴(キヤツ)は木で鼻、もぎだう者」

もぎ-たつ 挽立つ【動下二他】さかんに挽ぐ。 散本「もぎ立つる梢を見ればいとどしくあたりを拂ふ八重櫻かな」

もぎ-たて 挽立【名】果物を木より挽ぎ取りてより、未だ時を經ぬこと、又その果物。

もぎ-つけ 挽附【名】㊀矢柄(ヤガラ)の、節を削り落さぬもの、又その矢柄。 太平記「箙(ヘ)の太さは、尋常の人の蟇目柄(ヒキヤラ)にする程なる三年竹を、挽ぎ附けに押削りて」㊁敵の首を、兜と合はせて取ること、又その首。

もぎ-てん 摸擬店【名】園遊會などにて、來會者の好に任ずるために、園内などの處處に、飲食物販賣の店に擬して設けたる店。

もぎ-とり 挽鳥【名】鷹の捕りたる鳥。

もぎ-とる 挽取る【動四他】挽ぎて取り去る。物に固著せる物又は相手の持てる品などを、力を籠めて奪ふ。

もぎぬ 喪衣【名】もふく(喪服)に同じ。 源氏「衣(キ)の色、いと濃くて、橡(ツルバミ)の喪ぎぬ一かさね」

もぎは 衽【名】おくみ(衽)㊀に同じ。〔古

語〕 字鏡「衽、モギハ・クビ・オホクビ」

もぎ-はなす 挽離す【動四他】挽ぎ取るやうにして、引き離す。 用明天皇職人鑑「引いて行く手をもぎ離し」 絣縮緬卯月の紅葉「こなたの手へ直さうか、權柄になさるな、ともぎ放せば」

もきり 藻切【名】藻を刈り取るに用ふる刃物。

もきる 挽る【動四他】もぐ(挽ぐ)に同じ。

もく 木【名】もくめ(木目)の略。 枕「めでたきもの、……、作佛(ボツクワ)のもく」

もく 目【名】㊀みやうもく(名目)に同じ。㊁國司の主典(サクワン)。上國と中國と下國とのは、定員一人、大國のは、大・少の二等に分ち、各一人を置きたり。㊂〔法〕豫算を編制するに、項の細別として、彼此互に流用し得と定むるもの。㊃〔動〕『英Order』動物の分類上、綱(カウ)を細別したるもの。更にこれを細別して、科とす。例へば、哺乳動物を、靈長類・翼手類・食肉類等の十數目とする類。㊄碁盤の目。 俗曲「十二段君が色香「碁盤に盛りし目の數は、四方に四季の九十目、合せて三百六十目、これ、一年の日數にて」

もく 木工・杢【名】『杢は、麻呂の二字を合はせて麿と書くと同樣に、木工の二字を合はせて作りたる和字』 もくれう(木工寮)の略。(主としては、その職員の上につきていふ) 枕「木工の允(ウジヨウ)」 雙生隅田川「木工・修理(シユリ)の兩棟梁」

もく 目【助數】碁盤の目(イ)の數。「一目置く」「五目ならべ」

もぐ 挽ぐ【動四他】捩(ネ)ぢて引き離す。ちぎる。もぎる。 盛衰記「この馬……、なほ留めんと引く程に、手綱三つに切れければ、左右の水附とらへたり。左右の水附引きもぎて、心の儘に引きて行く」

もく-あみ 木阿彌【名】「元(モト)の木阿彌」を見よ。

もくあん 木庵【名】〔人〕黃蘗宗の僧。名は性瑫(シヤウタウ)。俗姓は吳氏。支那泉州晉江の人。明の崇禎二年、開元寺に剃髮し、八年、鼓山の永覺に從ひて、具足戒を受く。順治五年、黃蘗山に隱元に謁し、八年、

首座(ソウ)となり、座を分ちて、法を說き、十一年、象山の慧明寺に出世せしが、翌年招かれて、我國に來り、明曆四年、隱元の法席を繼ぎて、宇治萬福寺の第二世となり、貞享元年寂す。年七十四、法臘五十六。

もくあん 默庵【名】〔人〕臨濟宗の僧。名は周諭。武藏國の人。天龍寺の夢窓疎石に從ひて參究すること多年、又、雪村友梅・無極志玄等に就きて、益を受く。天龍寺に善入院を開き、又、金剛寺・尊持院に住し、應安六年寂す。年五十六。

もくいん 木印【名】木材に刻みたる印章。小右記「令ノ彫二木印一者」

もぐうるていこく 莫臥爾帝國・莫臥兒帝國【名】もがあるていこく(莫臥爾帝國)に同じ。「を見よ。

もくえう 木曜【名】しちえう(七曜)■■■

もくえうび 木曜日【名】七曜■の一。水曜日の次、金曜日の前。

もくえふ 木葉【名】■木の葉。このは。■鏃の形の一。

もくか 目下【名】■がんか(眼下)に同じ。■さし當りたる時。まのあたり。現今。現下。目今。

もくかう 木香【名】南蠻諸國より渡來せる藥品。薩摩歌「肩に木香かたげても、地黃(ヂワウ)に大根しらがまで」

もくかう 木瓜【名】〔植〕■虎耳草(ユキノシタ)科に屬する灌木。花は白色にして、淡紅色を帶び、花瓣厚くして肉質、觀賞用として栽培す。■もっかう(木瓜)を見よ。

もくかう 目耕【名】『目にて耕す義。書を讀むを、農夫の田を耕すに譬へていふ。世說の言語篇下に「王濟之少、家貧、而好學、嘗三日絕レ糧、執レ卷不レ輟、家人謂レ之、困窮如レ此、何不レ耕、王徐答曰、我常目耕耳」となるに本づく』**とくしょ**(讀書)に同じ。「と。默念。

もくかう 默考【名】沈默して考ふること。

もくかういばら 木香薔薇【名】〔植〕薔薇(ティ)科に屬する常綠灌木。莖は細長くして、攀登性を有し、二丈に達するもあり。葉は羽狀複葉にして、三乃至七小葉より成り、各小葉は、長楕圓狀披針形を呈し、滑かにして、光澤を有し、細鋸齒を具へ、五六月の頃、淡黃色にして、芳香を有する、直徑約八分なる複瓣花、繖形花序をなして開く。原產地は支那の南部。觀賞用として培養す。すだれいばら。もくかうくわ。

もくかうくわ 木香花【名】〔植〕前條に同じ。「に同じ。

もくかうばら 木香薔薇【名】〔植〕前條

もくかさん 木假山【名】『五雜俎に「見二木假山一座一、岩洞峯巒、皆木頭疊成、不レ用二片石坏土一也」とあり』木の根などの、化石して、自然に山嶽の形をなせるもの。

もくかん 木幹【名】木質の莖。みき。

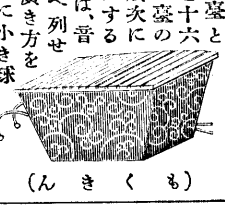
もくほん(木本)參照。

もくかん 目姦【名】〔基〕『新約全書の馬太傳第五章第二十八節に「凡そ婦を見て色情を起す者は、中心すでに姦淫したるなり」とあるによりていふ』女を見て、姦淫の心を起すこと。「じ。

もくがん 木雁【名】**ぼくがん**(木雁)に同

もくきう 木毬【名】『支那唐の雪峰禪師、參徒の來るごとに、木毬を三箇投げ出したりといふ故事に本づく』錢三百文の異稱。〔京都五山の僧の語〕

もくきん 木琴【名】清樂に用ふる、一種の樂器。但し創始の年代は、詳かならず。二本の木を、一端は間隔狹く、他端は廣くなるやうに並べて、臺とし、その上緣に、釘を十六本づつ立て、これに、臺の間隔に伴なひて、順次に長さと厚さとを異にする橫木を插して、叩けば、音階をなすやうに並べ列せめたるもの。間隔廣き方を右とし、細き棒の先に小き球を取り附けたる撥(チ)を、左右の手に一本つづ持ち、かはるがはる打ち鳴らし、又、奏曲中、間合ある時は、撥にて、板の面を、右より左へ摩擦して鳴らすことあり。

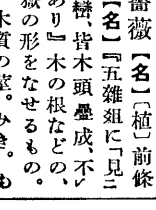


(もくきん)

もくきやう 木强【名】**ぼくきやう**(木强)に同じ。

もくきよ 默許【名】■暗默の間に、許可の意を示すこと。それとなく認許すること。默認。默諾。■見て知りながら咎めぬこと。見のがすこと。めこぼし。

もくぎよ 木魚【名】■『蘇軾の詩に「木魚呼粥亮且淸」とあり。昔、印度の一僧、常に師の訓誡を奉ぜざりしため、死して、大魚となり、背上、一大木生じ、爲に苦痛を受くること限なく、殊に波起る時には、その木動搖し、往往、背上に血を流すことありて、深く師を恨む。師の、船に乘りて、海を渡るや、却つて、これに害を加へしより、師、魚に對して、その自業自得の道理思ひ知るべきを諭す。魚、その言に服し、師願はくは、わが背上の木を以て、法器に作りて、わが苦難を救はれよと云ひ終りて死す。師卽ちかの木の形に隨ひて、刻みて魚となし、粥飯の器に備へ、用ひて、その腹を擊ち、畜生の苦を救ふことなれるに基く(婆婆論に見ゆ)ともいへど、又、魚は晝夜、目を閉ぢず、故に不斷勤修の意を寓せるなりともいふ』木にて、魚に擬へて、圓圓・中空に造りたる佛具。元來は、魚鼓(ギヨ)をも含める名稱なれども、今は專ら圓圓・中空のをいひ、その用途も、讀經に和して鳴らし、なほ、阿房陀羅經(アホウダラキヤウ)などにも、その小形なるを造りて用ふ。■姙娠してある女。「俚語」



(■よぎくも)

もくぎよこう 木魚講【名】■葬儀の時の費用を辨ずる目的にて、平生より、互に金錢を醵出しおく講。葬儀の時は、講中の者、首に、紐を附けたる大なる木魚を掛けて、打ち鳴らし、念佛を唱へつつ送りゆく。柳樽「木魚講きんまんもんの神のやう」和合人「木魚講と、ははあ觸坊主だな」

■輪姦。念佛講。「物。

もくぐ 木具【名】木材にて造りたる器

もくぐ 木偶【名】次條に同じ。

もくぐうじん 木偶人【名】木にて造りたる人形。木偶。でく。

もくくわう 目光【名】**がんくわう**(眼光)に同じ。「目光、炬の如し」

もくくわせき 木化石【名】木の久しく土に埋もれなどして、化石したるもの。しでいし。

もくくわん 木管【名】■木にて造りたる管(カン)。■紡績機械の一。粗紡機・精紡機・撚紡機等にて、絲を卷き取るに用ふる管。「りたる環。

もくくわん 木環【名】木を刳(ク)りて造

もくくわんたいさう 木環體操【名】二人相對し、二箇の木環を、左右の手にて持ちたるまま、身體を種種の形に動かして行ふ體操。西曆一八六〇年代、亞米利加合衆國の體育家リユイス(Lewis)の創案に出づ。環全部の、直徑は約五寸、用材の太さは、徑約七分なるを常とす。「じ。

もくげ 木槿【名】〔植〕**むくげ**(木槿)に同

もくけい 木契【名】檜(ヒノキ)にて造りたる割符。古、固關(コカン)の時、その右方を官廳に留め、左方を使者に與へ、その國司に下して、證としたり。

もくけい 默契【名】暗默の間に、相互の意思の一致すること。「互に默契あり」

もくけい 牧溪【名】〔人〕支那南宋の畫僧。蜀の人。名は法常、資性英爽、酒を嗜みて、常に醉ひ、好んで畫きし所は龍虎・猿鶴・蘆雁・山水・樹石及び人物にして、何れも、意に任せて揮灑し、法度に拘らず。これがために、風雅の玩となすに足らずと評する者もあれど、その畫は、我國、足利時代の諸大家に大なる影響を與へ、その筆と稱して、我國に傳ふるもの尠からず。中にも、京都大德寺所藏の觀世音・猿・鶴の三幅と龍虎の雙幅との如き、最も名高くして、國寶に指定せらる。

もくけう 木橋【名】木にて造りたる橋。

もくげき 木屐【名】木にて造りたる履物(モノ)。下駄。木履。

もくげき 目擊【名】『擊は觸るる意、卽ち、目にて觸るる義』實際に見ること。

もく-げき 默劇【名】〔藝〕『英Pantomime』古代の希臘に於て行はれし、一種の演劇。言語を用ひず、動作・表情のみにて行ひしもの。ぱんとまいむ。

もく-けん 木硯【名】木にて造りたる硯。雅遊漫筆「木硯は、懐中に携ふるに、輕くしてよし。固き木にて作る」

もくげん-じ 木槵子・無患子【名】〔植〕一『梵Arista（阿梨瑟迦柴）の譯語。千手合藥經にあり、註に「阿梨瑟迦柴者、木槵子是也」と見ゆ』**むくろじ**（無患樹）に同じ。盛衰記「その神の前に大いなる木槵子の木あり」二無患子（ムクロジ）の實。寶物集「百八の木槵子を貫きて、彌陀の名號を唱ふべし」

もくげん-じ 欒樹【名】〔植〕無患樹（ムクロジ）科に屬する落葉喬木。原產地は支那、我國、信濃國の山地に多し。幹は高さ二三丈に達し、葉は互生し、長さ一尺ほどにして、四對乃至七對の小葉を有する奇數羽狀複葉をなし、各小葉は、卵形にして、鋸齒あり。上面は平滑、下面は毛茸生じ、六七月の頃、黃色にして、中心に紅色を交へたる小花、大なる圓錐花序をなして開き、花瓣は三片乃至四片にして、一側に偏し、花後、三稜形の蒴果を結ぶ。材は薪料に供し、種子は數珠の玉に用ふ。せんだんばのぼだいじゅ。はまぼだいじゅ。ぼだいじゅ。むくれし。むくれにし。むくれんじのき。

もくげん-じゅ 木槵樹【名】〔植〕一**むくろじ**（無患樹）に同じ。二前條に同じ。

もくけんれん 目犍蓮（梵Maudgalyāyana）【名】〔人〕『萊茯根・胡豆・採菽など譯す』釋迦の十大弟子の一人。神通第一と稱せらる。婆羅門種の出にして、摩伽陀國拘理迦邑に生る。少時より舍利弗（シャリ）と親交し、その告ぐる所によりて、目犍蓮も共に釋迦に從ひ、常に相隨伴して、教團の中心となり、釋迦に先だちて入寂す。通常、略して、目蓮といひ、又、尊びて、摩訶（カ）目犍蓮、若しくは目蓮尊者といふ。

もく-ご 目語【名】『唐書の則天皇后傳に「道路目語」とあり。目にて語る義』目くばせして、互に意思を通ずること。

もく-ご 默語【名】不言の裡に、意思を他に傳ふること。

もく-こう 木工【名】一大工（ダイク）。こだくみ。木匠。二工藝美術家中、木を材料として、製作に從事する者。

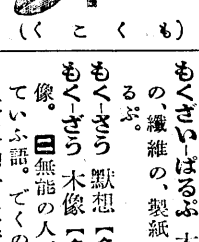
もく-こう 木公【名】〔植〕『松の字を偏（ヘン）と旁（ツク）とに分解して、音讀せる語。**もくぼ**（木母）參照』**まつ**（松）一の異稱。

もく-こう 沐猴【名】〔動〕**びこう**（獼猴）に同じ。

沐猴にして冠す【句】『史記の項羽本紀に「說者曰、人言、楚人沐猴而冠耳、果然」とあり』衣冠のみ立派にして、心の野卑なる譬。〔諺語〕「虎にして冠す」參照。

もく-こう-ちゃう 木工長【名】**りくぐんもくこうちゃう**（陸軍木工長）の略。

もく-こく 木斛・厚皮香【名】〔植〕山茶（ツバキ）科に屬する常綠喬木。我國、殊に暖地の海濱に產し、幹は高さ二三丈、周圍四尺に達し、樹皮は黑褐色にして平滑、葉は互生し、全緣革質にして、厚く、長楕圓狀倒卵形をなし、長さ二三寸、上面は深綠色にして光澤あり。五月より七月にかけて、枝上・葉腋の腋部に、白色・五瓣の花開き、果實は球形にして、熟すれば、紅色となりて、裂開し、通常五箇の種子を藏す。觀賞用としても栽培す。材は堅密にして、櫛・文房具・床柱又は鏝工材に用ひ、樹皮は、茶褐色の染料に供す。あかみのき。あかもも。いくき。さいま。ほっぽう。もっぽう。



（くこくも）

もく-とじ 木居士【名】『韓愈の題二木居士一詩に「火透波穿不レ計レ春、根如二頭面一榦如レ身、偶然題作二木居士一、便有二無窮求レ福人一」とあり』自然木にて造れる神佛の像。

もく-こつ 木骨【名】〔建〕木材を、建築の骨組とするもの。（鐵骨などに對して）

もくこつ-れんぐわ 木骨煉瓦【名】灰條の略。

もくこつれんぐわ-づくり 木骨煉瓦造【名】木にて骨組を造り、その間を煉瓦にて塡充したる、家の造り方。

もく-とん 目今【名】**もくか**（目下）二に同じ。

もく-ざ 默坐【名】默したるまま坐ること。

もく-ぞ 藻草【名】〔植〕**も**（藻）に同じ。夫木「沖つ浪しきりに寄する濱邊には藻草かきわけ只も拾はん」

もく-ぐさ 艾【名】〔植〕一『燃草（クサ）の略といふ』**よもぎ**（艾）に同じ。二前項の艾の葉を乾かして採み、その裏面なる白毛を採集し、綿の如くにせるもの。細くちぎり、灸點の點火の料とす。三織物の、經（タテ）と緯（ヨコ）とに、各異なる一種類の色絲を使用して織りたる柄合（アヒ）。

二年の艾【句】「七年の病に、三年の艾を求むるが如し」を見よ。

もく-ざい 木材【名】建築・器具の材料の木なること。木の材料。（石材等に對して）

もくざい-ぱるぷ 木材パルプ【名】木材の、纖維の、製紙の原料となるもの。ぱるぷ。

もく-さう 默想【名】**もくねん**（默念）に同じ。

もく-ざう 木像【名】一木にて造りたる像。二無能の人、又は沈默せる人を嘲りていふ語。でくのぼう。

木像物言はず【名】『木と、物と、頭韻を成す』無言にて居るを嘲りていふ語。〔諺語〕

もく-ざう 木造【名】木にて造ること、又、木にて造りたる物。「木造の家屋」

もくざうがん 木象嵌【名】色澤と木理との美しき木片を、色澤・木理共にこれと異なる、他の木材を臺木として嵌め込みて、種種の模樣・形態を現す細工。又、金屬・大理石・貝甲・蝟などを交へて嵌め込みたるもあり。**もざいく**參照。

もくざう-せん 木造船【名】主として、木材を用ひて造りたる船。木船。

もく-さく 木柵【名】木材を使用して設けたる柵。

もく-さく 茂吠【名】『**もく**は形容詞の連用形、**さく**は動詞なるを、誤解して用ひたる語。**もし**（茂し）參照』茂りて吠くこと、又その所。夫木「もくさくのみづ野を見ればゆ衣手を葦毛の駒ぞ草づきにける」

もく-さく 木醋【名】〔化〕『英Wood vinegar又Pyroligneous acid』木材を乾餾して得る醋酸。木精・アセトン等をも含有し、醋酸としては、極めて不純なるものにして、そのまま防腐劑として、木材に塗布し、又、精製して、醋酸を得る材料にも用ふ。次條參照。

もくさくさん-てつ 木醋酸鐵【名】〔化〕木醋酸に鐵片を投入しおきて溶解せしめたる、焦臭（ヤケガ）き、茶褐色、乃至黯黃色の液體。主成分は醋酸第一鐵なれども、幾分のタアル質をも含有せるため、純粹なる醋酸鐵に比して、酸化の度遲く、久しく貯藏し得る便あり。染色上、單寧（タンニン）と伍して、媒染劑及び黑染劑となし、又、近年、クロム鹽に配合して、木綿のカアキ色を染むるに用ふ。

もくさく-じょう 木作丞【名】木工寮（ムクリヤウ）の主典（ソウ）なる木工允（ジヨウ）の唐名。

もくさく-ゐん 木作尹【名】木工寮（ムクリヤウ）の長官なる木工頭（カミ）の唐名。

もくざく-じま 艾縞【名】艾二の織方なる縞。仕懸文庫「年は二十三四、艾縞の越後に白襦袢、黑絽の羽織」

もく-さつ 默殺【名】『殺は助辭にて、意義なし』他人の言動に對して、是非をいはず、爲すがままにすること。

もく-さん 目算【名】一見つもり。目分量（ブンリヤウ）。二かねての計畫。みこみ。もくろみ。豫期。三圍碁にて、占有したる目（ヲ）の數を計算すること。東鑑「有二圍碁會一……心靜加二目算一之後、起レ座」

もくさん-ちがひ 目算違【名】かねての計畫のはづること。豫期に違ふこと。みこみちがひ。碁太平記白石噺「女でも岡目

八日(チヤウヌハ)、助言に附くが當世と、渡る所を渡らせぬ目算ちがひに、さすがの常悅」

もくさん-ちがへ 目算違【名】前條の轉訛。浮世風呂「山師殿、大きに目算ちがへだ」

もく-し 目眦【名】まなじり。めじり。

もく-し 目眦、盡(ツクト)く裂く【句】『史記の項羽本記に「頭髮上指、目眦盡裂」とあり』大いに腹立ちて、目をいからす形容。

もく-し 默止【名】無言のままにて止(ヤ)むこと。もだすこと。

もく-し 默示【名】一暗默の間に意思を表はし示すこと。二(基)けいし(啓示)三に同じ。「天の默止」

もく-し 默視【名】干渉せず、無言のままにて見てゐること。

もく-し 目視【名】目にて視ること。

もく-じ 目次【名】題目の次第。めやすがき。目錄。

もく-じき 默識【名】『論語の述而篇に「默而識之」とあり』無言の中に識(シ)ること。

もく-じき 木食【名】『宋高僧傳の智對傳に「田二蒲津安峰山、禁足十年、木食澗飲」とあり』山中に苦行などして、五穀を絶ち、木の實のみを食して生活すること、又その人。太平記「卿相・雲客は木食草衣(エサ)なれば、禪僧は珍膳・妙衣に飽けり」

もくじき-でら 木食寺【名】ゑんまんじ(圓滿寺)に同じ。

もく-しつ 木質【名】木たる性質。

もく-しつ-さいはう 木質細腕【名】〔植〕『英Woody cell』細胞膜の中に木質素を含める細胞。

もく-しつ-せんゐ 木質纖維【名】〔植〕『英Woody fibre』植物の木質部に存在する纖維、又、木質素を含める纖維。

もく-しつ-そ 木質素【名】〔植〕『英Lignin』植物の細胞膜の中に往往現出し、その細胞膜を著しく堅牢ならしむる、一種の物質。木材は、即ち全部これを含める細胞より成るものにして、化學的成分は未だ明かならざれども、これを含める細胞膜は、フロログルシン(Phloroglucin)と濃鹽酸とによりて、赤紫色を呈し、硫酸アニリンによりて、黃色を呈する等、特種の化學反應を呈するによりて、直ちに通常の細胞膜と區別するを得。

もく-しつ-ぶ 木質部【名】〔植〕「部」に同じ。

もく-しやう 木匠【名】もくこう(木工)に同じ。

もく-じゆう 木銃【名】木にて造りたる「銃」。

もく-じゆう 默從【名】異議を言はずに從ふこと。

もく-しゆく 苜蓿【名】〔植〕うまごやし(苜蓿)の漢名。

もく-しよく 目食【名】次條を見よ。

目食、耳視(シ)【句】『司馬溫公の迂書に「嗚呼、衣食之奢、日甚二於一日一、不二以耳視而以目食一者鮮矣」とあるに本づく』飲食物を、色を附けなどして飾り、味の如何を問はずして、目のために、又、衣服を、時の流行を聞きて飾り、體に適すると否とを問はず、徒に衣食の外觀を裝ひて、奢侈に流るるを歎ぜし語。

もくしろく 默示錄【名】〔書〕『英Revelation又Apocalypse of St. John』新約聖書の最終の巻。ヨハネ(John)の、パトモス(Patmos)島に流竄せられし時、見たる事を記して、亞細亞の七教會に贈りしもの。一名、約翰(ヨハネ)默示錄。

もくす 默す【動佐變自】言葉を發せず。だまる。もだす。

もくす 沐す【動佐變自】頭髮を洗ふ。「雨に沐し、風に梳(クシケ)る」

もくす 目す【動佐變自】一『史記の樊噲傳に「噲直撞入、立二帳下一、項羽目レ之、問爲誰」とあり』目を著く。きつと見る。二『史記の項羽本記に「范增數目二項王一、舉二所レ佩玉玦一以示レ之者三」とあり』目にて知らす。目くばせす。三『後漢書の許邵傳に「曹操微時、常求二邵爲一己目一」とあり』優劣・善惡を品評す。品さだめす。「我を目して、賊となす」

もく-ずね 木髓【名】木材の中心。木の心(シン)。「ビ。

もく-せい 目睛【名】がんせい(眼睛)に同

もく-せい 木製【名】木にて製すること、又木にて製したる物。木造。

もく-せい 木精【名】一こだま(木靈)二に同じ。三〔化〕『獨Holzesgeist』めちるあるこおる(木精)に同じ。

もく-せい 木星【名】〔天〕太陽系に屬する惑星の一。火星の外、土星の内に在りて、大さは他の六惑星の何れよりもまさり、赤道に於ける直徑は八七六八〇哩にして、地球の約十一倍に當り、質量は地球の三百十七倍半餘、容積は百三十九倍、比重は二倍三分の一弱、自轉の周期は九時五十五分、公轉の周期は四千三百三十三日、九箇の衛星を伴なひ、周圍には雰圍氣あり、地球よりの距離は、最近約三億九千萬哩、最遠約五億五千萬哩、光度は他の惑星中、金星に次ぎ、望遠鏡によりて眺むるに、赤道に平行なる數條の黑色なる帶認められ、その形狀と位置との絶えず變轉するによりて、雲によりて生ずるものならんと推察せらる。三百九十九日(地球の一年餘)ごとに、地球と太陽とに對して、ほぼ同一の關係位置を占む。歲星。

もく-せい 木犀【名】一〔植〕木犀科に屬する常綠小喬木又は灌木。原產地は支那及び印度。觀賞用として栽培し、高さ一丈餘に達す。葉は對生し、厚くして、卵形・長楕圓形又は披針形をなし、邊緣は鋸齒又は全緣をなし、秋の末、合瓣白色の小花、多數相集まりて、總狀花序をなして、枝頂と葉腋とに開き、特殊の芳香を放つ。果實は、野生のものにのみ結び、楕圓形をなす。變種に金木犀あり。ぎんもくせい。〔嚴桂・銀桂〕二きんもくせい(金木犀)の略。

もくせい-くわ 木犀科【名】〔植〕顯花植物・被子類、雙子葉門、合瓣花區の一科。これに屬するものは、通常灌木又は喬木、稀に半灌木にして、木犀・迎春花(ゲイ)・連翹(レンギヤウ)・柊(ヒイラギ)・青たど・素馨(ソケイ)・阿列布(レイラク)・マンナの木など、二十一屬三百九十種を算し、我國に自生し、又は栽培するものは九屬三十六種あり。

もくせい-さう 木犀草【名】〔植〕木犀草科に屬する一年生の草。原產地は亞弗利加の北部。莖は、枝を分ち、高さ一尺餘に達し、微しく毛あり。葉は、篦形又は倒披針形にして、概ね全緣なれど、往往三裂す。帶黃白色なる、芳香を有する花、總狀花序をなして開き、蒴果を結ぶ。にほひれせだ。れせだ。

もくせいさう-くわ 木犀草科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區の一科。通常草なれども、稀には灌木なるもあり。六屬六十種を含み、我國に自生するものなし。れせだ科。「ビ。

もく-せう 木梢【名】じゆせう(樹梢)に同

もく-せう 目笑【名】『目にて笑ふ義』笑ふ意の目つきに現ること。「と。

もく-せう 默笑【名】默しながら笑ふこ

もく-せう 默照【名】〔佛〕公案に依らず、單に內省して、悟を開かんとすること。〔禪宗の話〕遠羅天釜「諸侯・大夫は、朝覲を怠り、國務を廢して枯坐默照し、武夫は射御を疎かにし、武術を忘れて、枯坐默照し、商賈は戶店を鎖し、算盤を碎いて枯坐默照し」

もく-せふ 目睫【名】目と睫(マツ)と。目睫に迫る【句】次條に同じ。目睫の間に在り【句】『目と睫とは、極めて接近せるよりいふ』極めて接近してあり。「に同じ。

もく-せん 木船【名】もくざうせん(木造船)

もく-せん 木栓【名】こるくに同じ。

もく-せん 目錢【名】鎌倉時代及び室町時代に、商船・酒屋の桶又は反別(ソリ)などに課せし雜稅。「ビ。

もく-ぜん 目前【名】がんぜん(眼前)に同

もく-ぜん 默禪【名】默して坐禪すること。

もく-ぜん 默然【名】默してあるさま。無言のさま。もくねん。默默。

もくせん-けいせい-そう 木栓形成層【名】〔植〕表皮自身又は表皮の直下又は皮層の內部又は內鞘の部に形成せらるる胞層(內鞘の部に形成せらるるは、內根に於て、極めて普通なり)。その分裂組織の作用によりて、外方に木栓層を形成し、又

時としては、内方にも、木栓皮層と稱する組織を形成することあり。木栓皮層は、その性、普通の皮層と相類似し、葉綠粒を含有す。

もくせん-しつ 木栓質【名】木栓の有する性質。

もくせん-そう 木栓層【名】〔植〕『英Cork-layer』根の莖又は根の外部に存する、木栓質の細胞膜を有する細胞層。木栓形成層の分裂組織の作用によりて形成せられ、概ね葉綠粒を生ぜざるのみならず、原形質をも全く含有せず。樹木に於ては、極めて普通のものにして、樹皮は、その下に、この層の生ずるがために、營養の途を絶たれて生ずるものなれど、この層の厚薄は、植物の種類によりて著しき相違あり、その厚層を形成する植物は、即ち木栓の採取に適するものなり。

もくせんな 木旃那【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する落葉喬木。舶來種にして、高さ五六尺に達し、疎らに枝を分ち、葉は羽狀複葉をなし、各小葉は倒卵形にして、微凸頭を有し、葉の基部なる相對する小葉の間に、小腺あり。花は黃色、五瓣、果實は、莢にして、形、狹細、扁平なり。こばのせんな。

もくせん-ひそう 木栓皮層【名】〔植〕**もくせんけいせいそう**(木栓形成層)を見よ。

もくせんね 木纖維【名】**もくさいばるぶ**(木材パルプ)に同じ。

もくそう 目送【名】立ちどまりたるまま、他の人又は物の動き進むを、遠く見遣ること。見送ること。「ること。

もくそく 目測【名】目分量にて、測定す

もくたある 木篋兒【名】〔化〕『英Wood-tar』木材を乾餾する時に得るタアル。燃料又は塗料に用ひ、又、精製すれば、藥用クレオソオト・グワヤコオルなどを得。

もくたある-なんかう 木タアル軟膏【名】〔醫〕『英Tar ointment』黃蠟四分と木タアル十分とに、微溫を與へて熔し合はせ、冷却するまで攪拌して製する藥品。日本藥局方の定むる所にして、防腐性並びに微弱なる刺戟性を有し、寄生性及び慢性皮膚病等に用ふ。「よ。

もくたい【名】**あくたいもくたい**(芥藥屑)を見

もくだい 目代【名】『耳目に代る義』一王朝時代に、地方官、殊に國の守(カミ)に任ぜられたる人の、自らその任地に赴かざる時、その子弟又は家人などを、その地に遣して、その事務を代行せしめしもの。中世以降、王政漸く亂れ、地方官は多く遙授遙任となりしより起りて、公授の官にあらず。利得多かりしため、賄賂を行ひても、これに補せられんことを欲せし者も多く、或は武士にして、源頼朝の推擧によりて、これに補せられし例もあり。めしろ。眼代(ガン)。 平治「伊勢國の目代につれて、上野に下りけるが」 二『國司は、すべて揚名の官となりて、治務を行ふこと絶え、從ひて、その目代を設くることも止みしより、その名稱の轉用せられしなり』

しゅごだい(守護代)・**ぢとうだい**(地頭代)などに同じ。めしろ。眼代(ガン)。〔室町時代の語〕 三伊勢大神宮の古の神職の一。 四古、寺にて、寺領以下の雜務を攝せし職。

もくたう 默禱【名】無言のまま、心の中にて祈禱すること。「たる道。

もくだう 木道【名】木煉瓦を敷き詰め

もくだく 默諾【名】暗默の間に、承諾の意を示すこと。それとなく許諾すること。默許。

もくたちばな 木橘【名】〔植〕**みやましまみ**(深山樒)に同じ。「じ。

もくたつ 【名】〔植〕**にはさと**(接骨木)に同

もくたん 木炭【名】一〔化〕木材を炭化せしめて得る、黑色・無定形にして、多孔質なる物。通常、燃料として用ふれども、腐敗瓦斯の吸收、水の濾過などにも用ふ。すみ。ぼくたん。 二下繪を畫くに用ふる、細く柔かなる木炭。黃楊(ツゲ)・柳などの木にて製す。

もくたん-ぐわ 木炭畫【名】〔美〕『英Charcoal drawing』木炭一にて描く素描畫。鉛筆畫・ペン畫などに比し、太き線を引き得る便あるにより、大幅物の下繪などに適し、剝落を防ぐには、霧吹にて、溶解ラックを吹き附くる法行はる。

もくたん-し 木炭紙【名】木炭畫を描くに用ふる紙。大さは縱二尺一寸、横一尺

六寸にて、面粗く、縞目あるを普通として、白色なるもの外、鼠・藍鼠・白茶等のもあり。素描の練習用としても、一般に用ひらる。「炭」二に同じ。

もくたん-ひつ 木炭筆【名】**もくたん**(木

もく-くつ 藻屑【名】海中に在る、藻などの屑。源氏「よるべなみかかる渚に打ち寄せてあまも尋ねぬ藻屑とぞ見し」

もくづ 水雲・海雲・海蘊・苔菜【名】〔植〕「漢名。

もくづ-うつ 木通【名】〔植〕**あけび**(木通)の

もくづ-がに 藻屑蟹・毛蟹【名】〔動〕『殼皮の茸毛の端、曲りて鉤をなし、藻類、容易に附著して、他の動物の目には、藻の塊と見ゆるため、攻擊を免るるよりいふ』**つがに**(津蟹)に同じ。

もくづ-び 藻屑火【名】藻屑を焚く火。千載「もくづ火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき」「よ。

もくてう 木鳥【名】**たちはき**(帶刀)を見

もくてう 木彫【名】**きぼり**(木彫)に同じ。

もくてき 目的【名】成し遂げんとする目標の事物。めあて。

もくてき-かく 目的格【名】〔語〕『英Objective case』名詞・代名詞の格の一。目的語たるを示すもの。二種ありて、直接目的語たるを示すものを直接目的格、間接目的語たるを示すものを間接目的格といふ。斜格。賓格。

もくてき-ご 目的語【名】〔語〕『英Object』文章中にて、動作の目あてとなる事物を示す語。例へば、「我、これを、彼に與ふ」の「これを」「彼に」の類にて、前者を直接目的語、後者を間接目的語といふ。斜語。

もくてき-しゅぎ 目的主義【名】〔法〕**じつりしゅぎ**(實利主義)二に同じ。「す土地。

もくてき-ち 目的地【名】到著せんと目ざ

もくてき-ぶつ 目的物【名】或行爲の目的となる物。「に同じ。

もくてき-ぶっけん 目的物件【名】前條

もくてき-ろん 目的論【名】〔哲〕『英Teleology』一宇宙又はその一部たる事物の存在を、究竟の目的を立てて說明する見

解。その目的を、事物に對して超越的に見る超越的目的論と、事物に潛在せりと見る內在的目的論とあり。希臘のプラトン(Platon)、基督敎の神學等は前者の例にして、希臘のアリストテレス(Aristoteles)、獨逸のカント(Kant)等は後者に屬せり。明極論(機械論に對して) 二倫理上、善惡の差別を、行爲と意向との人間の本質及び生活を保存し進歩せしむる傾向を有すると然らざるとによりて立つる見解。(形式論に對して)

もくてきろんてき-しょうめい 目的論的證明【名】〔哲〕『英Teleological argument』宗敎哲學上、世界の創造者としての神の存在を說くのみならず、宇宙の萬有を秩序整然たるものとし、その秩序の整然たるは、これを支配する神の性質の全知全能なるに因るとする說。希臘にありては、ソクラテス(Socrates)、これを『へ、中世には、アウグスチヌス(Augustinus)、近世にありても、啓蒙時代の諸學者フェヒネル(Fechner)・キルヒネル(Kirchner)等、これを唱へたり。物理神學的證明。(本體論的證明・宇宙論的證明・道德的證明に對して)「的。

もく-ど 目途【名】めあて。あてど。目

もく-どく 默讀【名】聲を發せずして讀

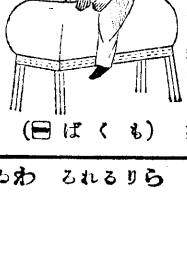
もく-にん 默認【名】**もくにょ**(默許)に同じ。「じ。

もく-にんどう 木忍冬【名】〔植〕**きんぎんぼく**(金銀木)に同じ。

もくの-かみ 木工頭【名】木工寮の長官。續紀「阿部朝臣若足爲二木工頭一」「むこと。默想。默考。

もく-ねん 默念【名】默然として考へ込む。

もく-ば 木馬【名】一『南史の齊記に「始欲レ騎レ馬、未レ習二其事一、愈鑾諷爲作二木馬一、人在二其中一、行動進退、隨二意所一レ適、其後遂爲二善騎一」とあり』木にて、馬の形に造りたるもの。ぼくば。 二古、罪人を跨らせ、その兩足に



(ばくも)

石を吊り下げて、拷問するに用ひし、馬の背の如くなる具。十訓「人を欺きすかすは、その咎輕からぬ事なりとて、雑色所(ゾウシキドコロ)へ下して、木馬に乗せんとする間」傾城酒呑童子「太四郎(タロウ)様からせんよ様へ文(ブミ)持って來ました。それ、それが木馬の基」 ㊁木材にて、馬の形に造りたる、機械體操の用具。廣場に据ゑおき、後方又は側面より駈けゆき、跳躍の勢にて、その背に輕く手を突きて、飛び越す。

木馬天に嘶ゆ【句】〔佛〕解脱(ゲダツ)の相(ソウ)の譬。撰集抄「泥牛水を走り、木馬天にいばゆなんといふ公案を」

もく-はい 木杯・木盃【名】木にて作りたるさかづき。「い。

もく-はい 木牌【名】木のふだ。ぼくは

もく-はい 默拜【名】默して拜すること。

もく-はう 木方【名】『五行(ゴギヤウ)を五方に配當する時、木を東とするよりいふ』とうばう(東方)に同じ。海道記「木方初發の因地より萌して、金剎(コンセツ)極證(ヨウクヒン)の果門を開かんと思へり」

もく-ばうい 木防己【名】〔植〕あをつづら(青葛)の漢名。

もく-ばーめ 木馬責【名】木馬㊁にて拷問すること。

もく-はん 木版・木板【名】木の板に書畫を彫刻したる、印刷用の版面。

もく-はん-ぐわ 木版畫【名】畫を、木版に覆製したるもの、又は、木版の彫刀を筆に代へて描きたる畫。

もく-はん-くわつじ 木版活字・木板活字 木を材料としたる活字。「職業。

もく-はん-げふ 木版業【名】木版を彫る

もく-はん-し 木版師【名】木版を彫ることを職業とする人。

もく-はん-ずり 木版刷・木板刷【名】木版にて印刷すること、又その印刷したる物。

もく-はん-てうこく 木版彫刻【名】木版を彫ること。

もく-はんてうこく-し 木版彫刻師【名】

もくはんし(木版師)に同じ。

もく-はん-ぼん 木版本・木板本【名】木版刷の書籍。はんぼん。

もくはい

もくはん

もく-はん-や 木版屋・木板屋【名】はんぎや(版木屋)に同じ。

もく-ば-や 木馬屋【名】神社にて、奉納の木馬を据ゑおく小屋。

もく-ひ 木皮【名】㊀じゆひ(樹皮)に同じ。㊁てっこつもくひ(鐵骨木皮)を見よ。「と。

もく-ひ 默祕【名】告げずに祕密にすること。

もく-ひつ 木筆【名】㊀目木畫にて、生木の尖端を碎き、その部分に墨汁を含ませて描くもの。多くは木槿を用ひ、一種の雅趣あり。ぼくひつ。 ㊁えんぴつ(鉛筆)に同じ。

もく-ぶ 木部【名】〔植〕『英 Xylem』維管束の一部。これを構成せる細胞の細胞膜は、殆ど全部木質にして、植物體を強固ならしむると、地中より吸ひ上げたる水液を通導するとの二つの任務を司る。但し、これを構成せる細胞の種類は、裸子植物にありては、殆ど全部假導管と稱する細胞より成り、被子植物にありては、導管・假導管・木質柔細胞等の種種なる細胞より成る等。植物の部門の異なるに隨ひて、趣を異にせるが故に、この部の構造により て、木材の種類をほぼ鑑定するを得。吾人の木材と呼ぶものは、即ちこの部分を指すものなれども、樹木のみならず、草にも、この部分無きにはあらず、只、その發育顯著ならざるのみ。材部。木質部。ねんりん(年輪)・しぶ(篩部)參照。

もく-ぶつ 木佛【名】木にて造りたる佛像。きぶつ。「蓉)㊁に同じ。

もく-ふよう 木芙蓉【名】〔植〕ふよう(芙

もく-へう 目標【名】㊀目あてのしるし。めじるし。 ㊁測量の時、地上に立てて、目じるしとするに用ふる、眞直なる木製の棒。長さ約一丈、一尺毎に、交互に赤と白のペンキにて塗り分け、その地面に立つる方の一端は、尖らして、石突を附く。

もく-べつし 木鼈子・木別子【名】㊀〔植〕胡蘆(ヒサゴ)科に屬する蔓生の草。主に印度に產し、我國にては、臺灣に生ず。葉は三裂し、花は、直徑約三寸、青白色にして、黃色を帶び、紫斑あり。花後、長楕圓形にして、表面に疣狀の突起ある果實を結び、紅色を呈し、長さ三寸乃至五寸半に達し、熟すれば裂開し、內に、扁平にして、長さ八分、幅六分厚さ一二分ほどの、表面粗き、灰白色なる種子を藏す。なんばんからすうり。「土木鼈」 ㊁前項の植物の仁(ジン)。藥用に供せらる。

もく-へん 木片【名】木のきれはし。きぎれ。

もく-ぼ 木母【名】〔植〕『俗說辨の卷四十四に「梅を木母といふ說……湖海新聞に曰く、北朝山濤字致遠、赴レ召、宋神宗問曰、卿自二山路一來、木公木母如何、濤曰、木公正儆レ歲、木母正含レ春、木公松也、木母梅也」とあり。梅の字を、偏(ヘン)と旁(ツクリ)とに分解し、旁の上部を省きたるを音讀せる語』うめ(梅)㊀の異稱。

もく-ほ 木浦【名】〔地〕『モッポと發音す』朝鮮の全羅兩道、務安半島の南端、江山江の江口にある都會。朝鮮六大港の一。商業盛大なり。

もく-ぼーじ 木母寺【名】武藏國南葛飾(シカ)郡隅田村にある、天台宗の寺。本尊は五智如來。梅柳山・隅田院と號す。貞元元年の創立に係り、もと梅若山・梅若寺と稱せしに、德川家康入府の際、梅柳山の號を與へらるといふ。梅若塚(カツメカ)の在るにより て名高し。明治初年、一旦神社となり、村社に列し、梅若社と稱せしが、二十二年、舊に復して寺となる。

もく-ぼん 木本【名】『國語に「伐レ木不レ自二其本一、必後生」とあり』木の根もと。 ㊁〔植〕木質の莖、即ち木幹を有する植物。喬木と灌木との別あり。きだち。ぼくほん。(草本に對して)

もく-ま 牧馬【名】古、宮中の御物たりし琵琶の銘。枕「琵琶は玄上(ゲンジヤウ)・牧馬・井手・渭橋・無名(ナナシ)など」絲竹口傳「牧馬は、槽に、四角ある馬の形を、木繪(エ)に彫入れたり」「(野木瓜)に同じ。

もく-まんぢゆう 木饅頭【名】〔植〕むべ

もく-め 木目・杢目【名】木材の斷面に、その年輪纖維・導管・髓線等の配列狀態の、種種の文(アヤ)をなして現れてあるもの。その狀態の如何によりて、珠目(ヲメ)・如鱗目(ンリンモク)など、種種の名あり。きめ。きさ。「有する板。め。もく。木理。

もく-めーいた 木目板【名】美しき木目を

もく-めーおり 木目織・杢目織【名】木目に似たる、又は波のごとき模樣を織り出せる織物の總稱。木綿・絹・毛織にもあり。

もく-めーつば 木目鍔【名】木目の模樣ある鍔にや。仕懸文庫「刀は、……鐵の木目鍔に、腕ぬきの附いたやつ」「漢名。

もく-めん 木綿【名】〔植〕ばんや(木綿)の

もく-もく 默默【名】默してあるさま。

默默に付す【句】知りてあれども、咎めずにおく。默許す。

もぐ-もぐ【貌】むぐむぐに同じ。

もく-もく-あん 默默庵【名】佐川田喜六の、致仕後の隱宅の號。

もく-よく 沐浴【名】髮を洗ひ、湯あみをすること。身體を洗ひ淸むること。湯沐。

もく-よく-かいめん 沐浴海綿【名】〔動〕海綿の一種。地中海に多く產し、海底の岩礁に附着す。塊狀をなし、纖維は、緻密にして、太さ一定し、彈性に富む。生時は、上部暗褐・側面と下面とは鮮黃灰色、四月頃、淡黃色の卵を產す。「鼠」に同じ。

もぐら 鼹鼠・土龍【名】〔動〕むぐらもち(鼹

もぐら 葎【名】〔植〕むぐら(葎)に同じ。名義抄「葎草、モグラ・ハハコ」

もく-らい 默雷【名】〔佛〕「維摩(ユイマ)の一默、雷の如し」を見よ。

もく-らに 木蘭【名】〔植〕もくれん(木蘭)に同じ。「古語」名義抄「木蘭、モクラニ」

もぐら-ねずみ 鼹鼠【名】〔動〕はたねずみ(畑鼠)に同じ。

もく-らふ 木蠟【名】黃櫨(ハジ)の果實より採取したる蠟。果實を粉碎し、加溫し、蠟分を熔しつつ壓搾して得。外觀は蠟に似たれど、眞正の蠟にあらず、主成分はパルミチンとステアリンとにして、粗製品は汚灰黃色なれど、精製品は白色、蠟燭・マッチの製造、器具の鼈甲(ベッカウ)等に用ふ。にっぽんらふ。「(銀蠟梅)に同じ。

もくらふーげ 木蠟花【名】〔植〕ぎんらふばい

もくめい

もく-らん 木蘭【名】㊀〔植〕**ひならん**(雛蘭)に同じ。㊁**もくれん**(木蘭)に同じ。㊂**もくらんじき**(木蘭色)の略。㊃織色の一。經(タテ)は黑、緯(ヨコ)は黄。の色目の一。表は黄、裏は黑。四時通じて用ひたり。

もくらん 木蘭【名】〔人〕支那の古の女丈夫。男子に扮して從軍し、夷狄に捷ちて歸れりといふ。その傳詳かならざれども、その事蹟を歌へる唐以前の樂府「木蘭歌」によりて有名なり。

もぐら-もち 鼹鼠・土龍【名】〔動〕**むぐらもち**

もくらん-じき 木蘭色【名】淺黑にして、黄ばみたる染色。天竺にても、支那にても、袈裟の色の一として定められ、我國にても、大寶令の制に、僧尼の服色として定められる。木蘭樹の皮にて染めたりといふ。かうぞめ。きつるばみ。

もくらん-ぢ 木蘭地【名】『梅は芳香ある木なるより、木蘭といへりともいへど、前條の色に似たるよりいへるにはあらざるか』梅谷溢(ツヤ)を用ひて染めたる、狩衣・直垂(ヒタレ)などの地。その色、赤くして黄を兼ね、濃く染むれば、焦色に近し。むくれんぢ。保元「木蘭地の直垂」

もくらん-ぬり 木蘭塗【名】五彩の繪具を交へたる、一種の塗方。

もく-り 木理【名】**もくめ**(木目)に同じ。

もく-り 蒙古・蒙古裡【名】〔地〕**もうこ**(蒙古)に同じ。百合若大臣野中護「蒙古裡退治の勅說蒙り、當春西海へ向はれしに」

もぐり 潛【名】㊀もぐること。むぐり。㊁〔動〕**にほ**(鴨)に同じ。㊂**もぐりあきうど**(潛商人)に同じ。

もぐり-あきうど 潛商人【名】次條に同

もぐり-あきんど 潛商人【名】**せんしやう**(潛商)に同じ。

もぐり-こぐり【名】**むぐりこぐり**に同じ。

もぐり-こむ 潛込む【動四自】もぐりて入り込む。和合人「おいらの懐中へもぐりこむは」

もぐり-だいげん 潛代言【名】次條の略。

もぐり-だいげんにん 潛代言人【名】さんびやくだいげん(三百代言)に同じ。

もぐりつ

もぐり-っ-ちよ 【名】〔動〕**にほ**(鴨)に同じ。

もぐり-や 潛屋【名】取引所の仲買人にして、ひそかに、その業務を營む者。

もぐる 潛る【動四自】㊀くぐりて、深く入り込む。㊁許可を得ずして、事を行ふ。

もく-れい 目禮【名】目つきにて敬禮すること。

もく-れい 默禮【名】無言のまま敬禮す

もく-れいし 木荔枝【名】〔植〕衞矛(キニギ)科に屬する常綠灌木。我國の暖地に自生し、又、觀賞用として栽培す。葉は、對生し、全緣、革質にして、楕圓形又は倒卵形をなし、綠白色の小花、聚繖花序をなして開く。ふくぼく。

もく-れう 木工寮【名】宮内省㊀の被管の一。職員に頭(カミ)・助・大允(ダイジヨウ)・少允・屬(サカン)・史生(ヤウジ)・算師・寮掌・工部・使部・直丁(ヤキヤウ)・驅使丁ありて、宮殿の造營・採材の事を掌り、又、後、中務(カツカサ)省の內匠(タクミ)寮の主掌せる細工の事をも掌り、大同元年には造宮職、同三年には、宮內省の鍛冶司、天長二三年の頃には修理職(シユリシキ)を併合するに至りし所。又その被管に工部ありて、木工・轆轤工・檜皮工・鍛冶工・石炭工等、これに屬したり。こだくみのつかさ。こだくみれう。こだくみれう。唐名、將作監。

もく-れん 木蘭・木蓮【名】〔植〕『花の形によりていふ』木蘭科に屬する落葉灌木。觀賞用として栽培す。莖・枝叢生して、高さ一丈餘に及ぶ。冬より枝梢に蕾を著け、綠褐色の苞を被り、毛茸生じ、四月、葉に先だちて開花す。花は、形、蓮(ハス)のに似て、直徑三四寸、花瓣六枚あり、倒卵狀長楕圓形をなし、厚く、やや肉質にして、外面は濃紫色、內面は白色、蕊は小く、花裏ふる頃に、新葉互生す。葉は全緣・倒卵形にして、上面は平滑にして、下面には細毛生ず。材は、質緻密にして、黄色を帶ぶ。しもくれん。もくれんげ。もくらに。

もくれん 目連【名】〔人〕**もくけんれん**(目犍連)の略。源氏「目蓮が、佛に近き聖(ヒジリ)の身にて、忽ちに救ひけん例(ヒタヒ)にも」

もく-れん-くわ 木蘭科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門離瓣花區の一科。これに屬するものは、喬木又は灌木にして、九屬、凡そ一百種を含み、我國に存するは、木蘭・白(ハク)木蘭・更紗蓮花(サラサ)・辛夷(シン)・厚朴(ホウ)・黄心樹(アガキ)・百合樹(ユリ)・楠(ミキ)・南五味子(ツツネカ)・朝鮮五味子(チウセン)等、六屬、凡そ二十一種なり。

もく-れんぐわ 木煉瓦【名】**きれんぐわ**(木煉瓦)に同じ。

もく-れん-げ 木蘭花・木蓮花【名】〔植〕**もくれん**(木蘭)に同じ。

もく-れん-じ 木欒子・木練子【名】**もくげんじ**(木槵子)㊀に同じ。宇治「木練子の念珠」

「化しがたき鷺」〔謠語〕

木欒子は白くならず【句】天性は變ずの念珠」

もく-れん-ず 木欒子・木練子【名】〔植〕**もくれんじ**(木欒子)に同じ。宇治「もくれん

もく-れん-そんじや 目連尊者【名】〔人〕「地」に同じ。

もくれん(目蓮)の尊稱。

もく-れん-ぢ 木蘭地【名】**もくらんぢ**(木蘭地)に同じ。

もく-ろく 目錄【名】㊀名目又は題目を記錄して、一覽に便ならしめたるもの。古今「ふる歌奉りし時の目錄の長歌」東鑑「因幡前司廣元、去十九日注二進沒官京地目六、今日二品所レ經二御覽一也」㊁實物を贈るに先だちて、その品目のみを紙に記して贈るもの。㊂進物として、包みて贈る金圓。㊃藝道を門人に傳授し了りたる時、その藝道の名目と傳授し了りたる由とを記して授與する文書。

もくろく-がき 目錄書【名】目錄を書きしるしたるもの。

もくろく-ちやう 目錄帳【名】古、大帳と稅帳との目錄を集め、一覽に便ならしむるために、大帳及び稅帳の敕文の一として差し出ししもの。「案、設計。企畫。

もくろみ 目論【名】もくろむこと。考次第を書きたるもの。設計書。

もくろみ-がき 目論書【名】もくろみの

もく-ろむ 目論む【動四他】『目論の語尾を、麻行に變化せしめたる語』計畫を立てて試む。企て計る。考案す。設計す。

もく-わん 木椀【名】木を剜りて造りたる椀。普通、漆を塗りて製す。單に椀(ワン)といへば、普通、これを指す。

もく-ね 目園【名】馬の目尻の上に生えたる旋毛。「目尻下の旋毛」

もけ 木瓜【名】〔植〕**ぼけ**(木瓜)に同じ。本草和名「木瓜、毛介」

もけい 模形【名】次條㊀に同じ。

もけい 模型【名】㊀かた。いがた。模形。ぼけい。㊁原物と同一なる形に似せて作りたるかた。ひながた。ぼけい。

もげる 捥げる【動下一自】捥ぎ取りたるが如きさまに離れ落つ。脫落す。

もこ 【名】『許處(コモ)の略といふ』**もど**(許)に同じといふ。一說に、**もころ**の略、即ち如くの意といふ。「古語」「ちはやぶる宇治のわたりにさをどりに早けむ人しわがもこに來(コ)む」

「ぼんやり。

もこ 模糊・糢糊【貌】分明ならぬさま。

もこし 喪輿【名】棺槨を載する輿。一說に、棺槨、喪葬儀抄「龕(ガン)といふは、則ち棺をいふか。棺をばひつぎとよむ。龕をばもこしと訓む。……、喪に乘る輿なれば、御云ふか」

もこし 裳層【名】**しやうかい**(裳階)に同じ。扶桑略記「寶塔二基、各三重、有二裳層一」

もこそ 【助】**もぞ**㊀を一層强めていふ語。古今「うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目を守(モ)ると見るがわびしさ」金葉「音に聞く高師の濱のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ」

もこ-もこ 【貌】**むぐむぐ**に同じ。

もこ-よふ 【動四自】うねり動く。腹ばひ動く。のたくる。まごつく。「古語」紀「逐蛇、モコヨフ」源氏「かかる齡の末に、若くさかりの子に後れ奉りて、もこよふことと、恥ぢ泣きたまふ」

もころ 【助】ごとく。やうに。(名詞の下の、助辭**の**に續き、又は、動詞・助動詞の連體形に續く)「古語」萬葉「沖に棲も小鴨(カモ)のもころ八尺鳥(ヤサカドリ)いきづく妹を

おきて來(ケ)ぬかも」 同「松の木(ケ)の並みたる見れば家人(ヒイト)の吾を見送ると立たりしもこス」

もーごろも 裳衣【名】田植などする女の、腰に纏ふ服。 榮花「若うきたなげもなき女ども、五六十人ばかりに、裳ごろもといふ物、いと白う著せて」

もころを もころ男【名】己のごとき男。〔古語〕 萬葉「かなし妹を弓東(ユヅ)並(ヤ)卷きもころをの事とし言はばいやかたましに」

もさ 猛者【名】一まうさ(猛者)の訛。 二ばんざうもさ(坂東猛者)の略。 油地獄「生(ウ)と)は、陸奥(ムツ)會津(アヒ)……、やい、もさめ、この女郎、こっち〳〵貫ふ、置いて歸れ」

もさい 茂才【名】しうさい(秀才)に同じ。

もさい 募債【名】ぼさい(募債)に同じ。

もさいーく(英 Mosaic)【名】有色の大理石・玻璃・著色粘土などの小立方體を組み合はせて、人物・風景・模様などを現し、床(ユカ)・壁・天井・柱・羽目など、建築の一部の裝飾に用ふるもの。よせいしざいく。

もーさう 摸相【名】もつさうめし(物相飯)の略か。 俗つれづれ「正月は、衆寮に集まる僧も、摸相を許されながら」

もーざう 摸造・模造【名】形を眞似て造ること、又その造りたる物。

もざうーし 摸造紙・模造紙【名】鳥子(トコロ)紙に似て、淡黃色を帶び、やや透明なる、印刷用の、一種の洋紙。パルプにて製し、質緻密・優良にして、しかも價格低廉、主として、墳太利の產なれども、近年、我國にても盛んに製造す。

もざうーひん 摸造品【名】摸造したる品。「物。

もーさく 摸索【名】『摸の字、探す意なれば、音、正しくはばく』手さぐりにて探すこと。ぼさく。「暗中に摸索す」

もし 持し【動他】もつ(持つ)の連用形「持ち」の轉。〔東國の古の方言〕 萬葉「白玉を手に取りもして見るのすも家なる妹を又見てももや」

もし 茂し【形二】生ひ茂りてあり。しげし。〔古語〕 **もくさく**(茂咲)參照。 紀「蒼蔚、モクシゲシ」 同「脉功茂焉、ソノイサヲモシ」 萬葉「水傳ふ磯の浦回の岩つつじもく咲く道を又見なむかも」

もし 若し【副】云云ならばと假定する意。萬一。或は。もしも。もしや。もしか。若し夫(ソ)【句】方面を他の事物に轉ずる時、又は、發端の語句に冠して用ふる語。

もしの事【句】「もしもの事」に同じ。 延慶本平家「もしの事の候はん時には、二つなき命を、君に進らせ」

もし【感】注意を促し、又は念を押す掛聲。

もーじ 文字【名】一もんじ(文字)に同じ。 堂藝「同じもじをさまざまに變へて書けり」 二ことば。文句。 源氏「別(ワカ)といふもじこそ、うたてはべれ」 三讀書。學問。 浮世床「ちっとは、文字の方へも這入って見ろ」 四かた(形)九を云ふ。〔畿内の方言〕

もじ 綟子【名】もぢ(綟)の誤。

もじ【名】もぢ(捩)の誤。

もじ 門司【名】〔地〕豐前國の西北部にある市。開港場にして、若松港と共に福岡縣の石炭輸出口にして、又、九州鐵道の起點たり。その繁盛、開港場中、横濱・神戸・大阪に次ぎ、下關(シモノセキ)海峽を隔てて、下關市と相對し、瀨戸内海の西口を扼する要害の地なるにより、下關市と共に要塞地帶に屬す。小倉(コクラ)市の東北三里。

もじ 文字【接尾】物の名又はその他の語の頭音又は初の二音に添へて、婉曲にいふに用ふる語。〔主に女の語〕「湯もじ」「髮(カミ)もじ」「黑もじ」「お恥(ハ)もじながら」「お推(オシ)もじ下されたく候」

もじーあつかひ 文字扱【名】もじづかひ(文字遣)に同じ。 醒睡笑「後先(アトサキ)へ入らぬ文字あつかひや」

もじーあはせ 文字合【名】漢字の偏(ヘン)と冠(カムリ)と旁(ツクリ)とを分ちて、歌ガルタの如くに記し、旁のは、悉く座上に並べおき、他は、裏を上にして、積み重ねおき、その積み重ねたるを、一枚一枚めくりゆき、現れたる偏又は旁と合して、一字を成すべき旁を拾ひゆき、多く拾ひ取りたる者を勝とする、一種の遊戲。

もじーうつり 文字移【名】もじぐさり(文字鎖)の類なるべし。 義經記「白拍子の上手にてありければ、音曲・文字うつり、心も、言葉も及ばれず」

もじーうら 文字占【名】一個の文字、又は圓形を書かせ、それによりて、その人の運命を判ずること。 墨色(イスミ)判斷。 「誤、

もじーおり 綟子織【名】もぢおり(綟織)の

もしーか 若しか【副】もし(若し)に同じ。

若しかすると【句】事によれば。成行(ナリユキ)次第にて、或は。

もじーがーせき 門司が關・文字が關【名】〔地〕もじのせき(門司關)に同じ。 博多小女郎浪枕「長門の秋の夕ぐれは、歌に詠むてふ文字が關・下の關とも名に高き、西國一の大湊」

もじーがへし 文字返【名】『もじ(文字)四を見よ』地面に線を引き、その線の外より、錢を、相手の錢に投げ附けて、その相手の錢を裏返し得たる時は、勝とする遊戲。

もじーぐさり 文字鎖【名】『鎖の鎖と鎖との如く連ぬるよりいふ』一上の文句の終の音を、次の文句の頭に置きつつ、次第に連ねゆきたる、歌謠的の文章。 著聞「弘徽殿女御歌合に、花からじしらまゆみといへる文字ぐさりを、歌の句の上にすゑて、折句の歌に詠ませられける」 二婦女子の打ち寄りて、一人が或古歌を讀むに、他の一人は、その歌の最後の音を頭に置きたる他の古歌を讀み、同樣にして、次第に承け繼ぎてゆく遊。例へば、「云云めづらしきかな」といふ古歌を、一人が讀めば、他の一人が、これを承けて、「名にしおはば云云」といふ類。

もしくーは 若しくは【接】きもなくば。それとも又。又は。あるひは。もしは。

もじーどけ 文字苔【名】〔植〕文字苔科に屬する地衣。含青色又は帶黃灰白色を呈し、薄膜狀をなして、連續して擴がり、全部、樹面に密著す。

もじどけーくわ 文字苔科【名】〔植〕隱花植物、囊子地衣類の一科。文字苔・星苔など、これに屬するもの二十屬あり。

もじーさき 門司崎【名】〔地〕豐前國門司市の東北なる岬角。下關(シモノセキ)海峽中、最隘の所、早鞆(ハヤトモ)瀨戸を扼し、對岸長門國の壇浦(ダンノウラ)・龜山と相距ること三百間。一名、早鞆崎。

もじーずくな 文字少【名】歌文を書くに、假名を多くし、漢字を少くすること。 源氏「三くだりばかりに、もじずくなに好ましくぞ書きたまへる」 「捩摺石」を見よ。

もじずりーいし 文字摺石【名】もぢずりいし

もじーせんさく 文字穿鑿【名】文字につきて、その構造などを調ぶること。 南瓜咄「昔、禪寺にて、小僧ども寄合ひて、いろいろ文字穿鑿するを聞けば、土の上に一文字書きては、何と讀むぞといふ」

もじーたいふ 文字大夫【名】〔人〕ときはづもじたいふ(常盤津文字太夫)を見よ。

もじーづかひ 文字遣【名】文字の遣ひ方。漢字のつかひざま。もじあつかひ。 狹衣「今樣の手は、草(ウサ)がちに濃く薄く曇つき紛らはして、打ちょろぼひて侍りつる、これは、强きもじづかひ、昔やうにて侍る」

もじーどめ 文字止【名】〔文〕俳諧にて、一句の終に、名詞を用ふること。脇句(ワキク)は、必ずこの形にする規定なり。

もじーな 貉・狢【名】〔動〕むじな(貉)に同じ。んじなまり。

もじーならひ 文字習【名】文字を書き習ふこと。習字。 類政集「忘れじと契りし文のもじならひかねて見えにし斯かるべしとは」

もじーぬめ 文字滑【名】昔行はれし一種の賭博。錢の表の現はるると裏の現はるるとによりて、勝負を定めしものなるべし。 風流女大名丹前記「今は、天狗賴母子(テングンモノ)、もじぬめなどにて、渡世をくらせど」

もじーのーせき 門司關・文字關【名】〔地〕昔、下關(シモノセキ)海峽を往來する人馬・船舶

のために設けし關所。豐前國門司市にその址ありて、延曆中既に存し、元曆二年、平知盛これを守りて、源範頼に擊破せられたり。 拾玉「思ふ事を書くぞ嬉しき文字の關心とむべき道ならなくに」

もしは 若しは【接】**もしくは**(若しくは)に同じ。 源氏「つれづれなる夕ぐれ、もしは物あはれなる明ぼのの」

もじ-ひらなか 文字ひら中【名】一文一錢の僅かの勘定。 曾根崎心中「奉公に、これ程も油斷せず、商物も、もじひらなか違へた事のあらばこそ」

もしふ 募集【名】**ぼしふ**(募集)に同じ。

もじ-ふだ 文字札【名】四書・五經の中の文句又は名所・魚鳥などの熟語を、歌カルタの如くに書きたる札。歌カルタと同樣に、座上に撒きちらし、一人の讀み上ぐるに連れて、歌員と同一の方法にて拾ひ取り、多く拾ひたるを勝として遊ぶ。

もしほ 藻鹽【名】[一]海藻を、簀に積み重ね、その上より潮水を幾回も注ぎて、鹽分を多く含ませたるもの、又、これに注ぐための潮水。古は、斯くの如くせる藻を燒きて、水に搔きまぜ、その上澄(スヤシ)を釜にて煮つめて、鹽を採取せり。 萬葉「夕凪に藻鹽燒きつつ」 新古今「もしほ汲む袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人」 [二][植]**あまも**(大葉藻)に同じ。

藻鹽の衣(モジ)【句】藻鹽を汲む人の衣。 夫木「汲みぬらす藻鹽の衣吹きほさで風の見せたる袖の月影」

もしほぎ 藻鹽木【名】藻鹽を燒くに用ふる薪。 新古今「須磨の浦に蜑のこりつむ藻鹽木の辛くも下にもえわたるかな」

もしほ-ぐさ 藻鹽草【名】[一]藻鹽に燒く材料となる海藻。(搔き集めおきて、潮水を注ぐより、歌などに、書き集むる緣語的修飾として用ふること多し) 源氏「書きつめて見るかひもなし藻鹽草同じ雲井の烟とをなれ」 盛衰記「たとひ、身は、八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草書きおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はりはべれかし」 [二][植]**あまも**(大葉藻)に同じ。

もしほ (藻葉)參照。 [三][植]**のこぎりさう**(鋸草)に同じ。 [四][書]歌道に入らんとする者のために、歌詞を、天象・時節・地儀・山類・水邊・居所等の二十部に分ちて彙集し、いろは順に次第したるもの。二十卷又は二十四卷。宗祇の門人月村齋宗碩(三條西實隆にも學べりといふ)の撰。又、この書に倣ひて、萬葉集の言葉を彙集し、諸說を引きて、註釋を加へたる、撰者不詳の書に、續藻鹽草あり。十卷。

もしほ-び 藻鹽火【名】藻鹽を燒く火。 榮花「旅の空よはの煙とのぼりなばあまの藻鹽火たくかとや見ん」 新古今「沖つ風夜寒になれや田子の浦の蜑の藻鹽火たきまさるらん」

もし-も 若しも【副】**もし**(若し)に同じ。

もしもの事【句】[一]思ひかけぬ出來事。不慮の變。自然の事。萬一の事。もしの事。 [二]死ぬる事。死亡。「あの人に、もしもの事がある時は」

もし-もし 【感】『もしを重ねていへる語』注意を喚び起す掛聲。

もしもし-しきぶ もしもし式部【名】『**むらさきしきぶ**(紫式部)に擬へていふ』**でんわかうくわんしゆ**(電話交換手)の異稱。【俚語】

もしもし-ぢやう もしもし孃【名】女の電話交換手の異稱。交換孃。

もし-や 摸寫・摹寫【名】文字・繪畫などを形を眞似て寫し取ること。臨摸。ぼしや。

もし-や 摸紗【名】**もしやおり**(摸紗織)を見よ。

もし-や 若しや【句】**もし**(若し)に疑の助辭**や**の添ひたる語。 玉葉「思ひこめてさてはおかれぬ心なればもしやと人を恨みてぞ見る」 俳諧古選(考室)「おろおぼえもしや植ゑしと花の春」

もじ-や 【名】[植]**くろもじ**(黑文字)[一]に同じ。

もし-や 喪草【名】喪中にある人の、その意をあらはすために、衣の胸又は腕の部などに附くるしるし。

もし-やう 摸唱【名】『獨Nachsingen』唱歌の教授の時、教へらるる者が、教師の範唱に倣ひてうたふこと。(範唱に對して)

もじ-やう 文字樣【名】文字の書きざま。源氏「文字やう……好み書きたまへる枚(ウヒ)もあり」

もし-やおり 摸紗織【名】經(テヒ)絲と緯(コヨ)絲との交叉組織の關係より、兩者に離合・粗密の部分生じ、外觀恰も綾織(オモリ)の如くなる織物。又、この織方の組織を摸紗といふ。擬紹織。れえす織。

もじ-や-ぐじや 【貌】**もじやもじや**[一]に同じ。 淀鯉出世瀧傳「奥樣お呼びなさるる時のもじやくじやも如何(ガテ)と、お暇を乞ひましたれば」

もし-やし-ゆぎ 摸寫主義【名】【哲】次條に同じ。

もし-やし-ぜつ 摸寫說【名】【哲】『獨Abbildtheorie』或觀念の眞なりや否やは、實在を正しく描寫せりや否やに依りて定まるとする認識說。即ち獨斷的に、實在と精神とを對立せしめ、認識の客觀性の根據を、主觀より獨立して存在する實在に置けるなり。

もしやてきけんかい 摸寫的見解【名】【哲】**ふきよふ**(不許不)[一]を見よ。

もじや-もじや 【貌】[一]亂れてまとまらぬさま。ごたごた。 もじやくじや。 丹波與作「もじやもじや言へば、氣が戻る」 [二]毛などの、亂雜に繁く生ひてあるさま。

もし-ゆ 喪主【名】葬式を行ふ當主。

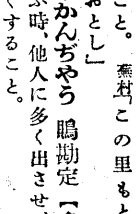
もし-ゆ 毛朱【名】【動】怪鳥の名といふ。鵺(ヌエ)の類か。 盛衰記「毛朱とは、鼠の唐名なり」

もじ-ゆ 茂樹【名】茂りてある木。

もし-よう 茂松【名】茂れる松。

もじ-よみ 文字讀【名】[一]**そどく**(素讀)に同じ。 廣宮記「說命上、文字讀被レ遊レ之」 [二]熟字の漢語を、直譯的に訓讀すること。例へば、石竹(ナデシコ)を「いしのたけ」、心緒(シンショ)を「こころのを」といふ類。

もじ-ゑ 文字繪【名】文字を、武者などの形に書き、頭と手足とは、繪にて書き添へたるもの。



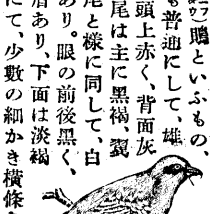
(ゑじも)

もす 毛斯【名】**もすりん**(毛斯綸)の略。

もす 燃す【動四他】**もやす**(燃す)に同じ。

もす 摸す・摹す【動佐變他】形を眞似て造り又は書きなぞす。似す。擬す。

もす 鴫・百舌・百舌鳥・伯勞・伯勞鳥【名】【動】燕雀類に屬する鳥。形、鶫(ツグ)より小けれど、頭大く、嘴の先端鉤狀に尖り、その側緣に齒狀の缺刻あり。赤鴫・稚兒(チゴ)鴫・縞鴫・大鴫など、數種の別あれど、入道(ニフダウ)鴫といふもの、最も普通にして、雄は、頭上赤く、背面灰褐、尾は主に黑褐、翼も尾と樣に同じ、白斑あり。眼の前後黑く、白眉あり、下面は淡褐色にて、少數の細かき橫條あり。腹側は赤褐色、雌は、背と尾との赤褐色を帶ぶること、眼の前後純黑ならぬこと、下面に鱗狀の細條多數に存すること、翼に白紋なき等の諸點に於て、雄と區別すべし。四時、共に我國に棲息す。保護鳥の一。 はくらう。



(ずも)

鴫の草莖(クキ)【句】『草莖は、實は草潛の義』鴫の、草深くくぐり入ること。一說に、「鴫の早贄」に同じ。 萬葉「春されば伯勞鳥(ヲナ)の草ぐき見えねども我は見遣らむ君があたりは」 蕪村「水仙や鴫の草莖花咲きぬ」

鴫の贄刺(ニヘサシ)【句】次條に同じ。 夫木「秋の野に鴫のにへさしいかならん露吹き結ぶ夕ぐれの風」

鴫の早贄(ニヘ)【句】鴫の、捕へ得たる蟲・蛙などを、木の枝に貫きて殘しおくもの。 散木「垣根には鴫の早贄立ててけりしでの田をさに忍びかねつつ」

もず-おとし 鴫落【名】鏈竿(ザサヲ)を設け、傍に囮(ワト)を置き、鴫を誘ひ寄せて捕ふること。 蕪村「この里もとかく過ぎけり鴫おとし」

もず-かんぢやう 鴫勘定【名】金を出しあふ時、他人に多く出させ、自己は負擔を輕くすること。

もすく (英Mosque)【名】『亞刺比亞語Masjid 又 Mesjid の訛といふ』回教の禮拜堂。

もすくば 莫斯科（露Moskva）【名】〔地〕露西亞國の首府。もすこお。むすこびや。

もすけ 茂助【名】物にすねて、事を事とせぬ者。〔伊勢國の方言〕

もすこお 莫斯科（英Moscow）【名】〔地〕

もすくば 〔莫斯科〕に同じ。

もすこし も少し【副】なほ少し。その上少し。もそっと。もっと。もっと。まちと。

もすこびや （蘭Moscovia）【名】〔地〕露西亞國モスクバの產を、和蘭人の舶齎せし革（がわ）。應帝（ヤウ）革に似て、皺（ぢ）あり、色は種種ありて、袋物などに作る。〔地〕**ろしや**（露西亞）に同じ。〔德川時代の語〕西域物語「ロシヤ（モスコビヤを云ふ）」

もすそ 裳裾【名】裳の裾。裳（も）。新古今「いかばかり田子のもすそもそぼつらん雲間も見えぬ五月雨の頃」

裳裾の腰【句】「裳（も）の腰」に同じ。

桑花「四月には、枇杷殿、一品宮の御裳著とて、春より、よろづに急がせたまふ。……。御裳裾の腰は、大宮の結び奉らせたまふべければ」

もず-の 百舌鳥野【名】〔地〕『仁德天皇、この地に行幸ありて、陵地を定め、壽藏を築かしめられし時、鹿あり、役民の中に走り入りて仆れ死ししより、これを檢せしに、百舌鳥、その耳の中を咋割きて飛び出でたりとの傳說に本づく』和泉國泉北郡にありし野。堺市の東方にして、今の神石（かみいし）・百舌鳥（もず）・舳松（へまつ）・向井（むかい）四村の地に當り、南北一里、東西やや狹し。一名、百舌鳥耳原（もずみみはら）・石津（いしづ）原。

もず-みみはら 百舌鳥耳原【名】〔地〕前條に同じ。

もずみみはら-きた-の-みささぎ 百舌鳥耳原北陵【名】反正天皇の御陵。和泉國泉北郡向井村大字中筋にあり。土俗、楯井（ぶ）山と呼ぶ。

もずみみはら-なか-の-みささぎ 百舌鳥耳原中陵【名】仁德天皇の御陵。和泉國泉北郡舳松（へまつ）村に在り。堺市の東郊に當り、河內國なる應神天皇のと共に、帝陵中の最大なるものにて、御生前の造營に係り、前方・後圓の形をなし、土俗、大仙陵（だいせんりょう）と呼ぶ。

もずみみはら-みなみ-の-みささぎ 百舌鳥耳原南陵【名】履仲天皇の御陵。和泉國泉北郡神石（かみいし）村大字上石津（かみいしづ）に在り。堺市の東南郊に當り、仁德天皇の御陵の南方約八町、土俗、擂鉢（すりばち）山と呼ぶ。

もすりん 毛斯綸（英Muslin）【名】『元の亞細亞古耳土メソポタミヤ地方の首都モスル（Mosul）より產出せしもの、その初なるよりいふ』上等の梳毛絲を用ひて、粗く平織にしたる織物。めりんす。唐縮緬（ちりめん）。もす。

もすりん-いうぜん 毛斯綸友禪【名】モスリンに染めたる友禪。めりんす友禪。

もぞ【助】〔一〕〔も〕をやや强めていふ語。萬葉「石橋（いはし）に生ひ靡ける玉藻もぞ絕ゆれば生ふる打橋に生ひをれる川藻もぞ枯るれば生ゆる」〔二〕云云なるかも知れずと、疑ひ想像する意。新古今「うつろはでしばし信太（しだ）の森を見よかへりもぞする葛のうら風」同「玉の緒よ絕えなば絕えね長らへば忍ぶる事のよわりもぞする」

もつく（水雲）に同じ。

もぞこ 水雲・海雲・海蘊・吾菜【名】〔植〕

もそっと【副】**もすこし**（も少し）に同じ。狂言「交相撲」「もそっと減（こ）さう。ずんと減して、二人（りょう）置かう」

もそろ 醪【名】味薄き酒。濁酒。〔古語〕和名「醪、之流。一云、毛曾呂。酒薄也」

もそろ-もそろ【貌】少しづつ徐かにするさま。そろそろ。〔古語〕出雲風土記「河船のもそろもそろに、國來（こ）、國來と引き來て」

もだ 默【名】次條を見よ。

默有り【句】〔一〕無言にてあり。もだしてあり。〔古語〕紀「默、モダアルコト」萬葉「なかなかにもだもあらましを何すとか相見そめけん逢ひざらなくに」〔二〕そのままに捨ておく。〔古語〕萬葉「咲きぬとも知らずしあらば默（もだ）もあらむこの秋萩を見せつつもとな」同「しかすがに默（もだ）も得有らねばわが背子が行きのまにまに追ひしきて」

もだあん （英Modern）【名】〔一〕現代的・近代風・現代人・近代人・近代思想に生ける人間。〔二〕**もだんがある**又は**もだあんぼおい**の略。

もだあんがある【名】**もだんがある**に同じ。

もだあんぼおい【名】**もだんぼおい**に同じ。

もたいな 物體無・勿體無【形】**もたいなし**（物體無し）の語幹。**もったいな**（物體無）に同じ。枕「あなもたいなの事どもや」一茶「勿體なや晝寢して聞く田植唄」

もたいなし 物體無し・勿體無し【形一】**もったいなし**（物體無し）に同じ。

もだえ 悶【名】もだゆること。煩悶。

もだえ-じに 悶死【名】もだえながら死ぬること。悶死（もんし）。

もだ-がき もだ書【名】**むだがき**（無駄書）を云ふ。〔尾張國の方言〕勢衣參考「妖物（もだ）の見越も、もだ書のヘマムシも、蛸も、入道の號あれば」

もたぐ 擡ぐ【動下二他】**もちあぐ**（持上ぐ）〔一〕〔二〕の約。枕「小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き」

もだ-ぐだ【貌】**もだもだ**に同じ。源氏十二段長生島書「自脈取るやう、もだぐだと、居姿崩れて、譯も無し」

もたし-かく 持掛く【動下二他】**もたせかく**（持掛く）の轉訛。五人女「狀箱を、……、持佛堂の隣にもたし掛けておきました」

もたし-す 持たす【動下二他】支へ保つやうに仕掛く。寄せかく。立てかく。五人女「おせん、空解（ときほ）を出せば、久七、右の足を持たす」

もだす 默す・默止す【動四自】〔一〕口をつぐむ。だまる。默す。紀「默歸、モダシカヘリ」〔二〕干涉せずに捨ておく。一代男「その恩の程、默止し難し」

もたーせ 持【名】〔一〕『**せ**は敬意の助動詞**す**の居名詞語』人の持ち來りたることの敬語、又その物。狂言「比丘貞「あん太郎が持たせの竹筒（ぢつつ）を廣めさしませ」〔二〕女の髮の結ひ方の一。形、銀杏髷（いちやまげ）に同じくして、德川時代に、大阪に行はれしもの。〔三〕〔植〕茸の一種。木などに持たせかけたるさまをなして生ずるもの。

もたせ-かく 持掛く【動下二他】**もたす**（持たす）〔一〕を强めていふ語。狂言（河原新市）「竹の先に、杉葉附け、腰掛に持たせかけおく」

もたせ-ぶり 持たせ振【名】感ずるところあるが如くに、他人に思はする樣子。ありげに思はする樣子。大磯虎稚物語「さし俯向いてゐたりしを、虎、さては持たせぶりと、ちと憎くや思ひけん」膝栗毛「これ、何が氣に入らぬやら、めっきりと持たせぶり」

もたひ 甕・甕【名】〔一〕酒を入るるに用ふる器。〔古語〕和名「甕、……烏貢反。字亦作缸。毛太比」〔二〕〔地〕備中國淺口郡にありし泊舟の地。今の玉島町なりとも、又、池田村大字八島の內なる龜山なりともいふ。龜山は、上古陶器を製せし地にして、今も、往往、土中より、古甕の破片を得る事あり。且つ、古は、その前面は海にして、舟を泊するに便なりしなりといふ。又陶器を製せしは、龜山の北なる吉備郡穗井田村大字陶（すえ）なりとの說もあり。夫本「澄ぐ船に醉ふ人ありと聞きぬるはもたひに泊るけにやあるらん」「見よ。

もたふ 悶ふ【動下二自】**もたゆ**（悶ゆ）を作る。

もだま 鮟魚【名】〔動〕板鰓類に屬する魚。我國、東北及び西南の海に多く、體は淡灰色を呈し、一丈に餘るものあり。口吻長く、腹白し。

もだま 槌藤子【名】〔植〕荳（ず）科に屬する、蔓生・木質の植物。我國、琉球・臺灣に產し、又、印度・馬來地方及び太平洋諸島に廣く播布す。葉は互生し、偶數の羽狀複葉にして、各小葉は、全緣の楕圓形をなし、長さ約二寸、幅一寸二三分、白色の花、穗狀の總狀花序をなして開き、花後、莢を結び、長さ三四尺、幅約三寸に達す。種子卽ち豆は、扁く圓くして、紫黑色を呈し、光澤あり。徑三寸餘、熟すれば、甚だ硬くなり、印籠などを製するに用ふ。

もたまふ 持給ふ【動四他】『持（せ）給ふ

の略』もつ(持つ)の敬語。亭子院歌合「左のそうは、櫻の枝に附けて、中務(ナカサ)のみこもたまへり」

もだん-がある (英 Modern girl)【名】一自由平等の近代思想の下に、個性の發揮を強調する女。日露戰爭後より大正年間にかけて、舊弊を脱せんとして、歐米國の流行に感化せられたるもの。多くは、善良なる習慣・道德・宗教までも無視せんとする傾あるがために、ややもすれば、不良少女の別名なるが如くに考へらる。新しき女。二髮形・服裝など現代的なる女。

もだあん-ぼおい【名】一近代思想の下に個性の發揮を強調する男。二流行を追ひて、服裝などの新形を好む男。

もだ-もだ【貌】悶え惱むさま。もだくだ。一代女「いつの頃か、もだもだと思ひそめ、逢はれぬ首尾をかしこく」

もだゆ 悶ゆ【動下二自】『もだふの假名なりとの說もあれど、新撰字鏡に「悶困」の字を「已已呂太由」と訓ぜるによりて、もだゆの方、取るべきに似たり』思ひ惱む。思ひ煩ふ。

もたらす 齎す・賈す【動四他】持ちて來り又は行く。

もたらふ 持たらふ【動四他】次條の延、といふ。「古語」

もたり 持たり【動長變自】持ってあり。持てり。所有せり。「古語」

もたる 【動下二自】『もつ(持つ)の受動形の轉義』一わが身を寄せかけて支へ保つ。寄りかかる。「靠る・凭る・凴る」

もたれ-あひ 靠合・凭合・凴合【名】もたれ-あふ 靠合ふ・凭合ふ・凴合ふ【動四自】互に、相手の力に依賴しあふ。相倚り、相助く。持ちつ、持たれつす。

もたれ-かかる 靠掛る・凭掛る・凴掛る【動四自】一もたる(一)を強めていふ語。

もたれ-とみ 靠込・凭込・凴込【名】かけもち 糯【名】米・粟・黍などの一品種。その種子の、粘力に富み、搗きて、餅とするに適するもの。(稷(ヤ)に對して)

もち 餅【名】『もちひ(餅)の略』糯米を蒸し、搗きて粒を潰し、一團となしたるもの。形又は用途によりて、延(ノビ)餅・生子(ナマ)餅・供(ク)餅などの種類あり。又、他の物を交へたるものに、粟餅・小豆(アヅキ)餅・草餅などあり。

餅に搗く【句】『さまざまに捏ね返す意なるべし』處置に困る。もてあます。

餅の音【句】餅を搗く音。

餅の中から屋根石【句】極めて稀な非人ども、家々の門に立ちて、餅搗の祝にとて餅をもふこと行はれ、乞ひ得たる家と未だ乞はざる家とを區別するため、判を捺したる紙を、門の柱に貼りおきし、その紙札。

餅の札【句】徳川時代に、年の暮に餅を搗き、家々の門に立ちて、餅搗の祝にとて餅をもふこと行はれ、乞ひ得たる家と未だ乞はざる家とを區別するため、判を捺したる紙を、門の柱に貼りおきし、その紙札。

餅の飯(メシ)【句】ほたもち(牡丹餅)を云ふ。「下總國・越前國の方言」

餅は餅屋【句】物は、それぞれ、それを取り扱ふ專門家あり。餅屋は餅屋。「諺語」

餅屋は餅屋【句】前條に同じ。

餅を搗く【句】一糯米を蒸して、臼に入れ、杵にて搗きて、餅を製す。二蚊、夕暮に、軒端などに、數多集まりて、上になり、下になりして、飛びちがふ。

もち 望【名】『望月(モチヅキ)の出づる日なるよりいふ』陰曆の十五日。竹取「月の(一)りかける雪は六月(ナガツキ)の十五日(モチ)に消(ケ)ぬればその夜ふりけり」

望降つ【句】陰曆十五日より後となる。萬葉「望くだつ清き月夜に」

望の日【句】もち(望)に同じ。萬葉「十五日(モチ)に出でにし月のたかだかに君をいなせて何をか思(モ)はむ」

もち 【名】せみ(蟬)二の車。

もち 持【名】一持つこと。手にもつこと。二永き間に亙りて、變らぬこと。たもつこと。維持。三わが物としてあること。所持。所有。女殺油地獄「錢・小判・俵物(モチノ)の相場あきなひ、上げうと、下げうと、高下(ダカ)は自由、持のお方が値上したい祈には、強氣(キッ)に上(ア)り」四受け持つこと。擔任。負擔。擔當。五負・優劣の無きこと。持(ヂ)。亭子院歌合「右は勝ちたりとも、勝の御歌二つをくちにて出て語れば、右一つ負けにたり。されど、歌は、もちどもにぞしける」六もちだち(持太刀)二に同じ。蜷川親元記「御太刀、持」七商品の賣れ殘ること。

もち 屯【名】絹の量の單位。六兩を一屯としたり。「古語」和名「絹六兩爲屯、一屯讀二飛止毛遲一」

もち 持【接頭】專らその事をする意。もて。「もち扱ふ」「もち齊(ツ)く」

もち 持【接尾】狀態の意。「面(オモ)もち」「心もち」「肘(ヒジ)もち」「腹もち」

もぢ 鍜【名】もぢり(鍜)二に同じ。和名「鍜、鑽也、毛遲」

もぢ 綟・綟子【名】目を粗く織りたる麻布。五十年忌歌念佛「綟子の蚊帳」

もぢ 捩【名】もぢ(捩籠)の略。南瓜咄「もぢといふ魚を捕る物を、川伏せて置き」

もち-あがる 持上る・擡る【動四自】一持ち上ぐる事を得。もちやがる。二事、起る。事件發生す。もちやがる。和合人「うまい事が持ちあがつて來たぞ」三小學校・中學校などにて、學級擔任の教師が、生徒と共に、初年級より年年漸次に、上級に進む。

もち-あぐ 持上ぐ・擡ぐ【動下二他】一持ちて、高く上ぐ。もちやぐ。もたぐ。二自己の頭部又は手などを、高く上ぐ。もちやぐ。もたぐ。三ことさらに譽む。おだつ。もちやぐ。

もち-あぐむ 持ちあぐむ【動四自】持ち扱ひて、あぐむ。てこずる。

もち-あそび 玩・翫弄【名】もてあそび(玩)に同じ。新永代蔵「五つ・六つの時より、もちあそびの人形を疎末にせず」

もちあそび-もの 玩物・翫物・弄物【名】

もてあそびもの(玩物)に同じ。

もち-あそぶ 玩ぶ・翫ぶ・弄ぶ【動四他】

もてあそぶ(玩ぶ)に同じ。字鏡集「翫、モチアソブ」「具はれる味。(つけ味に對して)

もち-あぢ 持味【名】その食品に元よりおだつ。もちやぐ。

もち-あつかひ 持扱【名】もちあつかふこと。とりあつかひ。

もち-あつかふ 持扱ふ【動四他】『もち(持は接頭語)』一用ふ。使用す。あつかふ。

もち-あぢ 持味【名】その食品に元よりおだつ。もちやぐ。

もち-あつかひ 持扱【名】もちあつかふこと。とりあつかひ。

もち-あつかふ 持扱ふ【動四他】『もち(持は接頭語)』一用ふ。使用す。あつかふ。本朝齋隣比事「町人無用の武道具を持ち扱ひ然も人の一命を斷つ事」二あつかふ。とりはからふ。世話す。もてあつかふ。新古「山がらのまはす胡桃(クルミ)のとにかくにもち扱ふは心なりけり」三取り扱に困る。もてあます。もてあつかふ。盛衰記「東國一の强馬(ツヨ)なり。……岡崎所望して乘りけるが、……、持和(ツヨガ)ひて」同「若輩招き集めて、恭・雙六隙(ヒマ)なかり

ければ、師匠も持扱ひて過しける程に」

もち-あは 糯粟・餅粟・稲・粘穀【名】〔植〕粟の一品種。その種子の、粘力に富み、搗きて餅とするに適するもの。(粳粟に)に対して)

もち-あはす 持合はす【動下二他】『あはす(有合はす)参照』偶然に持つ。その時、丁度所持す。狂言 針立雷「腰のいたみに、鍼を持合せました。鍼を致しませう」

もち-あはせ 持合【名】持ちあはせること、又、持ちあはせたる金品。

もち-あひ 持合【名】■互に持ちつ持たれつすること。長短相補ひて助けあふこと。あひもち。もたれあひ。謠「世の中は持合・持たれあひ」■〔商〕相場の、上放(ナレバ)も、下放(ナレバ)もせぬこと。〔取引品の語〕

もち-あひ-さうば 持合相場【名】〔商〕持合■なる相場。〔取引所の語〕

もち-あひ-じよたい 持合世帯・持合所帯【句】もやひじよたい(舫世帯)に同じ。

もち-あひ-ね 持合値・持合直【名】〔商〕持合■なる値段。〔取引所の語〕

もち-あふ 持合ふ【動四自】■雙方の釣合にて、辛うじて保つ。■〔商〕値段又は相場が、持合■の状態にあり。

もち-あふぎ 持扇【名】常に所持する扇。陣中に用ふる軍配・團扇と區別していふ語。狂言 月近大名「それは、常の持扇、この要(カナ)を目近う打ったを、目近といふ」

もち-あぶりあみ 餅炙網【名】次條■に同じ。 織留「年玉の遺物、火箸・爛鍋又は餅あぶり網など」

もち-あみ 餅網【名】■小く切りたる餅を乾かすために入れて、天井に吊しおくに用ふる網。■炭火の上に置き、餅を焼くに用ふる網。もちあぶりあみ。金網。

もち-あみ 持網【名】四隅に竹を張り、鉉にかけ、手にて支へて、魚を捕るに用ふる網。山家「見るもうきは鵜縄に逃ぐるいろくづをのがらかさでもしたむ持網」

(みあちも)

もぢ-あみ 綟網・綟子網【名】綟織■の編方(カタ)にしたる網地。細小なる魚、又は小鰕などを捕るに用ひ、又、奥網の一局部に使用す。

もち-あみ-ぶね 持網船【名】淺水に繫ぎて、持網を引き上ぐるに用ふる船。「と。

もち-あるき 持歩行【名】持ちあるくこ

もち-あるく 持歩行く【動四他】■持ちてあるく。■もちまはる(持廻る)に同じ。「方方持ちあるいた擧句に」

もち-いつく 持齋く【動四自】『もち(持)は接頭語』いつく(齋く)に同じ。記「この三柱(シラ)の綿津見(ワタツミ)は、阿曇連等(アヅミ)が祖神(オヤ)ともちいつく神なり」

もち-いね 糯稻・餅稻【名】〔植〕稻の變種。形態は普通の稻と殆ど同一にして、種子即ち米の、粘力に富むもの。その米を糯米(モチゴメ)といふ。「や。

もち-いへ 持家【名】所有せる家。もち

もち-うめ もち梅【名】〔植〕あんずうめ(杏子梅)に同じ。

もち-おくり 持送【名】■和船の出屋根(ヤネ)にある船具。その小きを、小猿(コザル)といふ。■〔建〕突出部の下に取り附けて、それを承け支へしむるもの。鐵・木又は石などを用ふ。

もち-おもり 持重【名】持つに、重く感ずること。持ちて、手の疲るること。膝栗毛「四條通を寺町へ下りて行く道道も、梯子の持おもりして、つぶやきながら」

もぢ-おり 綟織・綟子織【名】■經(テ)にも、緯(ヨコ)にも麻絲を用ひて、搦(ミ)織にせるもの。主として、漁獵に用ふれど、組織の精巧・緻密なるは、夏の肌著その他衣服の料とす。伊勢國津市の產、最も名あり。又、津綟(ツモ)の稱あり。近江國の產も、有名なり。■綟網(アミモ)に用ふるために、片撚(カタヨ)にせる麻絲又は葛絲を、普通の織物と同樣に織ると共に、この片絲を撚り合はせて、偏倚せぬやうに組織(ウミ)にし、目を方形にせるもの。

もち-かく 持掛く【動下二他】しかく(仕掛く)■に同じ。持って參る」參照。「儒話(ナヤシ)を持も掛く」

もち-かた 持方【名】■手に持つ方法。■永き間に亙りて變らぬやうにする方法。維持の方法。

もち-がたな 持刀【名】その人の差料(サシ)なる刀。川中島合戰「嫁のお勝が携へし持刀、膝に引寄せ」

もち-かたむ 持固む【動下二他】維持して堅固にす。持ちこたふ。胸算用「これ程に身代持固めたる人の才覺は格別と、耳をすまして聞く所へ」「房」に同じ。

もち-かづら もち葛【名】〔植〕まつぶさ(松

もち-かふ 持替ふ【動下二他】もちなほす(持直す)■に同じ。「る株劵。

もち-かぶ 持株【名】所有せる株。所有せ

もぢ-かぶ 捩かぶ【動四自】もぢる(捩る)に同じ。平假名盛衰記「さし汐、引く汐にもぢかうて、舟に過ある時は」

もち-がほ もち顏【名】『もちは望の義なるべしといふ』物事足りととのひてあることなるべしといふ。山家「刈殘す水の眞菰に隱ろひて陰もちがほに鳴く蛙かな」謠曲 實盛「風も涼しき夕波に心も澄める水桶のもち顏ならぬ身にしあれど」

もち-がほ 持顏【名】取持をするらしき樣子。美女薄命の松「搖手になっての持顏」

もち-がみ 持髮【名】一度結ひたる髮を、二日以上に亙りて、こはれ損ぜぬやうにすること。(日髮(ヒガミ)に對して)

もち-がゆ 望粥【名】正月十五日に調へて食する小豆粥(アヅキ)。 枕「十五日は、もち粥の節供(クヒ)まゐる」

もち-がゆ 餅粥・餅饘【名】■『もと前條の意なりしを、望を餅の義に取りなししもの』正月十五日に、餅を入れて調へて食する小豆粥(ガユキ)。十五日粥(ジフゴニチガユ)。侍中寶要列見定考後朝、自二官廚家一、獻二餅饘一(人二折櫃一)」■餅を入れて調へたる粥。「鰐」に同じ。

もち-がれい 餅鰈【名】めいたがれひ(目板)

もち-きげん 餅機嫌【名】『さかきげん(酒機嫌)』といふ語あるに對して、特にいふ正月、下戸の、餅を食ひて、好機嫌なること。鬼茸「五器の香や春立つ今日の餅機嫌」

もち-きたり 持來【名】以前より又は生來、その物、その人に具はり來れること、又その性質。在來の事。「衣。

もぢ-ぎぬ 綟衣・綟子衣【名】綟織■の

もち-きび 糯黍・餅黍・糯稷・餅稷【名】〔植〕黍の一品種。その種子の、粘力强く餅とするに適するもの。(粳黍(ウルキビ)に對して)

もち-きよまはる 持清まはる・持淨まはる【動四自】『もち(持)は接頭語』きよまはる(清まはる)に同じ。祝詞 大殿祭「齋玉作等(ツクリタマヒ)が持齋(ユミマ)はり持淨まはりて造り仕へまつれる璫(タマ)の八尺瓊(ヤサカニ)のみほぎの五百(イホ)つ御統(ミスマル)の玉」

もち-きり 持切【名】持ち切ること。

もぢ-ぎり 錐錐・綟子錐【名】刃の部分、螺旋狀をなし、把手は丁字形をなし、その丁字形の兩端に、左右の手を掛け、廻しつつ孔を穿つやうにしたる錐。南蠻錐。

もち-きる 持切る【動四自】始より終まで、同一の事物のみにて繼續す。

もち-く 持區【名】受持に屬する區域。

もち-ぐさ 餅草【名】■〔植〕『草餅を造るに用ふるよりいふ』ははこぐさ(母子草)に同じ。■艾の若葉。餅に雜ぜて搗く。

もち-ぐさり 持腐【名】次條に同じ。

もち-ぐされ 持腐【名】所有せるのみにて、利用せぬこと。「寶の持腐」

もち-ぐす 持具す【動佐變他】たづさふ(携ふ)■に同じ。增鏡「勿に、歌を持具したまふ」

もち-ぐそく 持具足【名】所有せる具足。鴉鷺合戰「自餘の持具足、思ひ思ひなり」

もち-くだち 望降【名】望(チモ)より後。十五日以後。〔古語〕萬葉「望降清き月夜(ツクヨ)に吾妹子(モヒモ)に見せむと思ひし宿の橋」

もち-くち 持口【名】受け持ちたる方面。もちば。「す」を見よ。

もち-くづす 持崩す【動四他】「身を持崩

もちくひ-がさ 餅食笠【名】あみだがさ(阿彌陀笠)に同じといふ。俳諧世話盡「餅食笠」

もち-ぐみ 持組【名】持弓組と持筒組と

もち-ぐみ 餅組【名】餅を好む仲間、即ち下戸の仲間。「茶」餅組も一座敗なり梅の花」

もち-ぐわし 餅菓子【名】餅類を主なる原料として、柔く製したる生菓子。例へば、櫻餅・大福餅など。又生菓子と同意にもいふ。

もち-げい 持藝【名】その人の熟達せる藝。持前(モチマヘ)の遊藝。

もち-こ 持籠【名】もっこう(畚)に同じ。

もぢ-こ 捩籠【名】魚を捕ふるに用ふる、一種の籠。十七本もしくは二十本ほどの竹を、蔓にて結ひて造り、魚のおのづからその中に入るを待ちて捕ふ。主に鰻(モ)を捕ふるに用ふ。もざ。

もち-こし 輿【名】『持輿の義か』こし(輿)[一]に同じ。「古語」 令集解「漢語抄云、輿、母知許之」

もち-こし 持越【名】[一]もちこすこと、又、もちこしたる物。[二]飲食せし物の、胃中に停滯すること、又その停滯せる飲食物。[三]ふつかよひ(二日酔)に同じ。浮世風呂「宿酔(ヨヒ)で(と、胸を叩き)、爰が痛うごぜえますから」

もち-こす 持越す【動四他】[一]持ちて、次の場所へ送り移す。 萬葉「泉の河に持越せる眞木のつま手を百(モモ)足らず筏に作り」[二]そのままの狀態にて、後の時日にまで殘す。完了せずして、次へ延ばす。

もち-こす 持越す【動四自】飲食せし物、胃中に停滯す。もたる。

もち-こたふ 持堪ふ【動下二他】支へて、長く續く。たもつ。もつ。維持す。持續す。もちこらふ。

もち-こたへ 持堪【名】もちこたふること。もち。もちこらへ。維持。持續。

もち-こづつ 持小筒【名】徳川幕府の職制にて、小筒を携帶する、西洋式の歩兵。

もちこづつ-ぐみ 持小筒組【名】徳川幕府の職制にて、持小筒を以て編制したる軍隊。

もちこづつぐみ-さしづやく 持小筒組差圖役【名】徳川幕府の職制にて、持小筒組を差圖せし役。三百俵高なりき。

もちこづつぐみさしづやく-どうどり 持小筒組差圖役頭取【名】持小筒組差圖役の長。

もちこづつぐみ-の-かしら 持小筒組頭【名】若年寄の支配の下に、持小筒組を統轄せし役。菊間(キク)南敷居の外に伺候し、慶應二年九月、撒兵頭と改稱せり。

もち-こばた 持小旗【名】武士などの、手に持つ小旗。「持ってある駒。

もち-ごま 持駒【名】將棊をさす時、手に持ち込みたる物。 根南志具佐「程なく正月二の替(カハ)、嘉例の曾我に、種種の持込」

もち-こみ 持込【名】持ち込むこと、又、

もち-こみ-ちん 持込賃【名】次條に同じ。

もち-こみ-れう 持込料【名】運び入れし勞力に對する賃金。もちこみちん。

もち-こむ 持込む【動四他】[一]或場處に持ちゆく。運び入る。[二]形式の一定せる或事に、他の事を加へ交ふ。[三]或事件の採用・解決などを希望して、相手の處へ相談に行く。「相談を持ち込む」

もち-ごめ 糯米・糯・餅米【名】糯稻(イモネ)より收穫する米。粘力に富みて、搗きて餅とするに適す。(粳米(ウルル)に對して)

もち-ごもり 持籠【名】もちごもること。本朝二十不孝「十七の正月に祝言取り急ぎけるに、これも懐姙して、月を重ね、姉の如く持籠にして果てけり」

もち-ごもる 持籠る【動四他】兒を胎内に宿す。はらむ。 傾城酒呑童子「わが子を持ちごもって死ぬるを見捨て」

もち-こらふ 持堪ふ【動下二自】もちこたふ(持堪ふ)に同じ。「同じ。

もち-こらへ 持堪【名】もちこたへ(持堪)に同じ。

もち-ざうり 持草履【名】『從僕の持ち行く習なりしよりいふ』なかぬきざうり(中抜草履)に同じ。

もち-さぐ 持下ぐ【動下二他】「身を持ち下ぐ」を見よ。

もち-さけ 餅酒【名】能(ク)の狂言の一。越前國の百姓は、その國の名產圓餅を、又、加賀國の百姓は、同じくその國の名產菊酒を、各、京都への年貢として携へ上る途中、道連となり、しかも、年貢を納むる家も、二人同一にて、打ち揃ひて、これを納め、大いに悦ばれて歸る由を作れるもの。

もち-ざを 鵜竿【名】鳥・昆蟲などを捕ふるために、先端に鵜を釣りたる竿。

もち-しほ 望潮・望汐【名】陰曆十五日の潮。 夫木「天の原空行く月の望潮の滿ちにはらしな難波江の浦」

もち-じほ 持鹽【名】魚類などに、元來含みをる鹽氣(ケシホ)。

もち-じやく 持尺【名】布帛などの場合に、物差を手に持ちてあてがひて度ること。(置尺(ヤキヂ)に對して)

もち-じろ 持城【名】所有せる城。 風流軍配圖「女を取らるるは、持ち城を落されしよりは無念」

もち-ずり 捩摺【名】『捩(モヂ)摺の略』[一]しのぶもぢずり(信夫捩摺)を見よ。[二]〔植〕もぢずりぐさ(捩摺草)の略。「綬草」

もぢずり-いし 捩摺石【名】岩代國信夫(シノブ)郡岡山村の觀音寺の境内にある名石。麥の葉にて、この石の上を磨けば、相思の人の姿現るといひ、又、信夫捩摺は、布帛をこの石の面に當て、忍草(シノブ)にて、石の紋を摺り出ししなりともいふ。信夫の山に草庵を結びて住みし僧の、砌の石に線を刻みて、細布(ホソノ)に摺り寫し、價に代へて、その母を養ひしが、その文參差として亂れたるにより、捩摺の名起りて、世に珍重せらる。後、相思の人の姿見ゆる由誤り傳へらるるに及び、來り試むる者踵を接し、附近の麥畠荒蕪するに至りしため、土民、土中に埋めしより、石上の紋磨滅したりと傳ふ。元祿九年、福島の城主紀正虎、碑をその傍に建てて、これを表せしもの、今も存す。

もぢずり-ぐさ 捩摺草・綬草【名】〔植〕ね

ぢばな(綬花)に同じ。

もぢずり-ごろも 捩摺衣【名】捩摺[一]を施したる衣。 夫木「陸奥(ハタ)の信夫(シノブ)の里の秋風に捩摺衣打ちもたゆまず」

もち-そくひ 餅續飯【名】餅にて造りたるそくひ。 鷹筑波「年の緒をつぐや鏡の餅そくひ」

もち-そふ 持添ふ【動下二他】持つ物の重き時、手を添へ加へて持つ。

もちそへ-ち 持添地【名】寺院にて、境内の地域に接續せる所有地。

もち-だし 持出【名】[一]持ちて、外へ出すこと。[二]所有金を支出して、總費用の一部を辨ずること。[三]相撲(スマヒ)の手の一。四(ヨツ)又は雙差(モロザシ)に組みて挑みあふ内、機を見て、相手を抱き上げたるまま持ち出すもの。やぐら(矢倉)[六]參照。

もち-だす 持出す【動四他】[一]持ちて、外へ出す。[二]親・主人などの所有せる金品を盜みて、自己の費途に充つ。つかみだす。[三]持つことを始む。[四]所有の金を支出して、總費用の一部を辨ず。自腹(ジバ)を切って、不足分を補ふ。[五]試に或事件を告げて、相手の同意・判斷・裁判などを求む。「主人に持ち出す」「議會に持ち出す」

もち-たち 持太刀【名】[一]その人の差料(サシカタナ)の太刀。[二]進物とする時の、無銘の太刀。もち。

もち-たて 持立【名】持ちてより、未だ時を經ぬこと。 浮世風呂「持立の女房」

もち-たて 持楯【名】各自、手に持ちて使用する楯。(置楯(オキタテ)に對して) 太平記「面面に、持楯をはがせ、その面にいため革をあてて、たやすく討たれぬやうに拵へて」

もち-だな 持店【名】その人の所有に屬する貸屋。

もち-ちまき 餅粽【名】糯米にて製したる粽。 續猿蓑「炭翁「熊笹の廣葉うるはし餅粽」

もち-つき 餅搗【名】[一]糯米を蒸して、臼に入れ、杵にて搗きて、餅に作ること、又その人。 續猿蓑「馬佛「餅搗の手つだひす

るや小山伏」 ㊁夕暮、蚊の、軒端などに數多集まりて、上になり、下になりして、飛びちがふこと。傾城反魂香「誰も、口では夕暮や、……、軒に藪蚊の餅搗も」 ㊂男女交接すること。〔俚語〕 義經千本櫻「娘ば嬉しくても、粋な父(ぢ)さん、離れ座敷は隣知らず、餅搗きせうと、おお、をかし」

もちーづき 望月 【名】陰暦十五夜の月。最中(カモナ)の月。ぼう。ぼうげつ。滿月。 和名「望月、毛知豆岐」

もちづき 望月 【名】〔地〕 ㊀信濃國北佐久郡本牧(ヤモキ)村の大字。舊中山道の一驛。八幡(ヤハタ)驛より三十五町、蘆田驛へ一里二十町。この邊、蓼科(シナ)山の裾野にて、古來、牧馬をもって著れたり。 拾遺「逢坂關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒」 ㊁姓氏の一。滋賀・海野(ウノ)と同祖より出で、望月太郎・同三郎重隆・同四郎兵衛尉・同餘一師重などの名、東鑑に見え、皆、騎射の名人として傳へられ、天文中、信雅の時、武田氏に隆附し、その子甚八郎に至りて滅ぶといふ。 ㊂謠曲の一。信濃國の住人安田庄司友春の臣なる小澤刑部友房、都に在りし間に、主人友春の、從兄弟望月秋長と口論の末討たれしより、走り歸りて復讎せんとすれども、敵の用心嚴しくして、本國に入る能はず、近江國守山(ヤマヤ)の宿なる甲(カウ)屋の亭主となりて、暫く世を忍べる所へ、友春の妻は、一子花若を伴なひて國を出で、偶然甲屋に宿り、又、望月は、庄司殺害の咎にて、所領を沒收せられしが、申し開きて、本領安堵の御教書(ミケウ)を得て、京都よりの歸途、同じく、甲屋に來宿し、花若母子と友房とに復讎せらるる事を作れるもの。

もちづき-ぎょくせん 望月玉蟾 【名】〔人〕 畫家。名は重勝、通稱は藤兵衛、字は守靜。京都の人。家、世世、描金を業とす。六歲にして、土佐光成に就き、後、光成の媒によりて、山口雪溪の指導を受けて、寫生に努む。性、恬淡にして朴訥、名利に淡し。延享年間、禁裡に召されて、風竹・雨竹の二圖・毛寶白龜・老聃青年の二圖を上る。寶曆五年歿す。年八十三(一説には六十四、又一説には六十三)。

もちづき-さうば 餅搗相場 【名】〔商〕年末に生じやすき、高低不定の相場。〔取引所の語〕

もちづき-さんえい 望月三英 【名】〔人〕 醫者。名は君彥、鹿門と號す。江戸の人。服部南郭の門に學びて、聲名あり、又、藏書家なりしより、百家の醫書に眼を曝し、吉益(ヨシマス)東洞と共に、當時の二大名手と稱せられ、元文二年、奥醫師に擧げられ、法眼に敍せらる。明和六年歿す。

もちづき-しばゐ 餅搗芝居 【名】 ㊀年の暮の餅搗の料金を得るために興行する義。 ㊁芝居に於ける年末の興行の最後の日などに、滑稽を交へて演ずる劇。 ㊂落語家などの、年末に、滑稽を交へて、演劇の眞似を演ずること。

もちづき-の 望月の 【枕】 ㊀滿月は、圓くして缺けたる所なきより、たたはしたる(足る)にかけていふ。 萬葉「望月のたたはしけむと」 同「望月の足れる面(モ)わに花のごと咲(エ)みて立てれば」 ㊁滿月は、見るに珍しきより、めづらし(珍し)にかけていふ。 萬葉「鏡なす見れど飽かず三五月(ミモツキ)のいやめづらしみ思ほしし君」

もちづき-は 望月派 【名】〔美〕繪畫の一派。望月玉蟾を祖とするもの。

もちーつける 持附ける 【動下一他】持つに馴る。「持ちつけぬ大金」

もちーつたふ 持傳ふ 【動下二他】代代持ちとほす。 胸算用「定めて、佛具も、人手に渡るべし。中にも、青銅(カネ)の三具足、代代持ち傳へて惜しければ」

もちーづつ 持筒 【名】その人の持料なる鐵砲。 近江源氏「弓矢・持筒・引く馬の飾もきらつく鎧武者」

もちづつ-がしら 持筒頭 【名】徳川幕府の職制にて、若年寄支配の下に、持筒組を統率し、陣中にては、將軍に侍して、旗本を警護し、平時は、江戸城本丸の中門、又、その西の丸との間の中仕切門、二の丸の銅門等に勤番せし役。初は役料を給せられしが、後、千五百石高と定められ、菊間(ヲキ)敷居詰なりき。又、元祿以前は、火附盗賊改にも出役したり。

もちづつ-ぐみ 持筒組 【名】徳川幕府の職制にて、大抵與力十騎、同心五十五人までを一隊として編制せられ、陣中にては、持筒頭の指揮に從ひて、將軍の旗本を固め、平時は、江戸城本丸の中門、又、その西の丸との間の中仕切門、二の丸の銅門等の警衛に任ぜしもの。元和九年六月、始めて、三組を置かれ、寛永九年六月四組となり、安政の頃は五組となりしが、文久二年、持弓組を併せ、慶應二年廢止せらる。

もちづつ-くみがしら 持筒組頭 【名】持筒頭の指揮の下に、持筒組の各組の長。

もちーつつじ 黐躑躅 【名】 ㊀〔植〕石南(クヒナ)科に屬する小灌木。高さ一二尺ばかり、丘陵等に自生し、莖・葉共に長毛あり。葉は枝頭に簇生し、開展すれば、外方に反捲し、各、倒披針形又は楕圓狀披針形をなす。花は、淡紅色なる漏斗狀鐘形花冠を有し、繖形花序をなす。花梗長く、花梗にも、萼にも、腺毛ありて粘著性に富む。ねばつつじ。むらさきつつじ。〔紫躑躅〕 萬忠百首「年經たる岸の岩根に根は入りて散ることかたきもちつつじかな」 ㊁〔植〕 **れんげつつじ**(蓮花躑躅)に同じ。 字鏡「羊躑躅花、毛知豆豆自」 ㊂襅(カサ)の色目の一。表は紫、裏は紅。女房の衣には、上は蘇枋色を三つ匂はせ、下に、青の濃きと淡きとを重ね、單(ヒト)は白を用ふ。春季の著用に屬す。

もちづつゆみ-の-かしら 持筒弓頭 【名】持筒頭と持弓頭との併稱。持弓筒頭(モチツツ ユミカシラ)。持弓鐵砲物頭(モチユミテツパウモノガシラ)。持頭(モチガシラ)。

もちーて 持手 【名】 ㊀**もちぬし**(持主)に同じ。 ㊁或物を手に携へ持つ人。

もちーて 保出 【名】保持する時間の長さ。もちこたへ。

もぢーてすり 綟手摺 【名】てすり(手摺)㊁を見よ。

もぢてすり-むかしの-でく 綟手摺昔木偶 【名】〔人〕「松の葉」の小唄に見えたる富度(フド)の吉三(キサ)といふ名を借りて趣向を構へたる讀本(ヨミ)。五卷。柳亭種彥の作。

もちーどうしん 持同心 【名】徳川幕府の制職にて、持與力(モチヨリ)と共に、持筒組又は持弓組を組織せし同心。

もちーどり 黐鳥 【名】黐に粘りつきたる鳥。

もちどりーの 黐鳥の 【枕】黐に粘りつきたる鳥は、離れがたきものなるより、かかる(懸る)にかけていふ。 萬葉「黐鳥のかからはしもよ」 ㊁を見よ。

もちーなす 持成す 【動四他】「身を持成す」

もちーなでしこ 黐撫子 【名】〔植〕**むしとりなでしこ**(蟲取撫子)に同じ。

もちーなは 黐繩 【名】鳥を捕ふるために、黐を塗りて張りわたしたる繩。 著聞「水鳥とらんとて、黐繩の具など用意して」

もちーなへ もち苗 【名】稻を刈り取りたる跡に生ゆる稻。馬の藥とするに適すといふ。**ひつぢ**(穗)に同じきか。

もちーなほす 持直す 【動四他】 ㊀改めて持つ。持方(モタカ)を直す。持ちかふ。 ㊁「身を持直す」を見よ。

もちーなほす 持直す 【動四自】元の如く善くなる。回復す。 天の鶯鳥「身上(シンシヤウ)持直し」

もちーなめ 持滑 【名】花合(ハナアハセ)㊁にて、わが札のなめ札の相手札なること。

もちーなもち 【名】〔植〕次條の轉訛。「じ。

もちーなもみ 【名】〔植〕**めなもみ**(豨莶)に同じ。

もちーに 持荷 【名】持ち運ぶ荷物。 後撰「數ならぬ身を持荷にて吉野山高きなげきを思ひこりぬる」

もちーにげ 持逃 【名】他人の所有せる品を持ちて逃ぐること。

もちーぬし 持主 【名】その物を所有せる人。所有者。

もちーの-かしら 持頭 【名】**もちづつゆみのかしら**(持筒弓頭)に同じ。

もちーの-き 黐木 【名】 ㊀冬青(ヒイラギ)科に屬する常綠喬木。我國、暖地の山野に自生し、又、庭園に栽培す。高さ二三丈、樹皮は帶綠淡赭黑色にして、初は平滑、後、粗糙となる。葉は互生し、長楕圓形にして、質厚く、光澤あり、小形帶白色の花、雌雄異

株に開き、球形・赤色の核果を結ぶ。材は堅硬緻密、邊材は淡暗綠色、心材は帶褐暗綠色を呈して、美しく、印材又は鏤工用材とするに適し、樹皮より鏡を採取す。もち。「細葉冬青」 ㊁やまぐるま(山車)に同じ。「わ(冬青科)に同じ。

もちのきくわ 冬青科【名】〔植〕そよごく

もちのーめし 餅飯【名】ぼたもち(牡丹餅)を云ふ。〔越前國・越後國の方言〕

もちーのり 餅糊【名】餅をつぶして、練りて造りたる糊。「代男」「針、絹の絲、餅糊、耳掻」

もちば 持場【名】㊀受持に屬する場所。もちくち。占有せる場所。「用ふる箱。

もちーばこ 餅箱・餅筥【名】餅を入るる箱。

もちーばこ 鏡箱【名】鏡を入れおく箱。浮世床「鏡箱、腰に下げ、鏡笙、手に持ち」

もちはこび 持運【名】もちはこぶこと。

もちーはこぶ 持運ぶ【動四他】持ちて、他の場所へ運ぶ。はこぶ。「ずる蓮根。

もちーはす 餅蓮【名】煮れば粘り氣の生

もちーはだ 餅肌【名】滑かにてきめごまかなる肌(主に、女のにいふ)。

もちーばな 餅花【名】㊀昔、枯枝・竹などに、丸く編き紅・白・黃の三色の小き餅を、多く取り附けて、花の咲きたる枝に擬へ、たるもの。正月などに緣起物、小兒の玩物などとす。宗長手記「冬の梅……、あまりに、正月の童の餅花附けたるやうに咲きたるを」 ㊁薄く花の形に造りたる紅・白などの餅を、網袋に入れて賣り、小兒の炙りて食ひしもの。德川時代には、目黑不動の附近にて、土產物として賣りしもの有名なりき。「花の餅」參照。柳樽「餅花が四手(ヨツ)の中になったやう」 「に同じ。

もちーばな 捩花【名】〔植〕ねぢばな(捩花)

もちばなーいり 餅花煎【名】正月に用ひし餅花を貯へおき、二月、涅槃會(ネハエ)に煎りて、供物とせしもの。又、正月の餅を、あられの如くに煎りても用ひたり。

もちーばら 餅腹【名】餅を食ひたる後の、腹の張りたる感じ。

もちーばり 綟張・綟子張【名】綟を張りた

る上を漆にて塗ること、又その造り方の漆器。 鶉衣(煙草說)「やどとなき座敷に、綟子張の煙草盆をもまた」

もちーひ 餅【名】『餅飯(モチヒ)の略』もち(餅)に同じ。「古語」 和名「餅、毛知比」 頭李集「火きりとて、近江より供御に參らするもちひは」

餅の鏡【句】かがみもち(鏡餅)に同じ。 擬文「今日よりは我をもちひのます鏡嬉しき影をうつしてぞ見る」

餅の使【句】三日(カ)の餅を配るために遣されし使。三夜(サヨ)の使。 增鏡「もちひの使、頭中將(トウノチユウジヤウ)隆顯つかうまつる」

餅の夜【句】みか(三日)㊁を見よ。 榮花「四五日ありてぞ、御所あらはしありける。……、今宵は、もちひの夜とか聞きはべりつる」

もちひ 用【名】『古くは、もちゐと書きたり。もちふ(用ふ)參照』㊀用ふること。用(ヨウ)。 ㊁役に立つこと。もちひどころ。つかひみち。用途。

もちひーうり 餅賣【名】餅を賣りあるく人。 七一職人歌合「もちひうり、暖かなるもちひ參れ」

もちーひかがみ 餅鏡【名】かがみもち(鏡餅)に同じ。 源氏「齋がための祝して、もちひかがみをさへ取り寄せて」 濱松「鏡にすゑてかい撫でつつ、もちひかがみ見せ奉りたまふ」

もちひーかた 用方【名】用ふる方法。用

もちひーどこ 用所【名】次條の略。

もちひーどころ 用處【名】用ふる場合。つかひどころ。つかひみち。

もちひとーわう 以仁王【名】〔人〕後白河天皇の皇子。母は宮人藤原成子。母の貴からざるがために、親王となるを得ずして、快快たりし折から、源頼政の平家討滅の謀に與し、自ら最勝親王と稱し、檄を、諸國の大寺或は源氏に傳へて、令旨と稱す。事露るるや、廷議、王の名を源以光と改め、土佐國に徙さんとして、その第を圍ましむ。王、婦人の服を被りて遁れ、園城

寺に入り、顧攻尋いで至り、延曆興福二寺の援兵に賴らんとす。延曆寺、約を變ぜしため、更に奈良に赴きて、興福寺に據らんとし、一旦、宇治の平等院に、平氏の追兵を禦ぎて敗れ、逃れて井手(ヰデ)の渡に至り、流矢に中りて薨ず。年三十。三條宮又は岩倉宮と稱す。自ら親王と稱し、檄文を發せし由の東鑑の記事は、後人の假作なるべしとの說あり。

もちひーのーき 鏡木【名】〔植〕もちのき(鏡木)に同じ。 夫本「君が住む宿の軒端のもちひの木變らぬ色はときはかきはに」

もちふ 用ふ【動上二他】『もつ(持つ)より出づたる語。古くは、もちゐる(用ゐる)と書きて、和行上一段なりしやうなれど、今は、後世の用法に依る。又、訛りして、もちゆとして、也行上二段にも用ふ』㊀役に立たしむ。つかふ。使用す。もちゐる。 ㊁職に就かしむ。使用す。任用す。採用す。擧用す。登庸す。 ㊂同意して、その說の如くに行ふ。採用す。

用ふれば鼠となり、用ひざれば鼠となる【句】『漢書の東方朔傳に「抗之則在三青雲之上、抑之則在二深泉之下一、用之則爲虎、不用則爲鼠」とあるに本づく』天下に志ある者、幸に明主の擧用を得れば、勢を伸ばし、用ひられざれば、凡人と伍して終る。〔諺語〕 太平記「用ふれば則ち虎も鼠となり、用ひざれば則ち虎も鼠となると云ひおきし東方朔が虎鼠の論」

もちーふ 持夫【名】荷物を持ち運ぶ人夫。もちよぼろ。 狹衣「戀の持夫をば、わが身にならひたまへれば」 清輔集「あまたたび驚きてさきに過ぎにしをしゐの持夫に我を思へる」 「じ。

もちーふ 持ふ【名】もちぶん(持分)㊀に同

もちふ 捫ふ【動下二他】もちる。よぢる。〔古語〕 紀「捫レ腰、コシヲモヂフ」

もちーぶん 持分【名】㊀所有に屬する部分。もちぶ。 甲陽軍鑑「我が持分を捨て、越後へ立退き」 ㊁〔法〕共有の目的たる物件又は權利の、共有者各自に屬する部分。

もちーぶね 持船【名】所有せる船。

もちーぶり 持振【名】物を手に持つ樣子。 狂言(しし狩)「から持ちやれ。……。おお、持ぶりようおぢやるぞ」

もちーふるし 持舊【名】持ちふるすこと、又、持ちふるしたる物。

もちーふるす 持舊す【動四他】持ちて、ふるびしむ。用ひたる綉果、古き物とす。使ひふるす。

もちーまはり 持廻【名】持ちまはること。

もちーまはる 持廻る【動四他】物事の採用・意などを求むるために、諸所を訪ふ。もちあるく。

もちーまへ 持前【名】㊀生來又は固有の性質。本色。本分。 ㊁所有に屬する部分。

もちーまる 持丸【名】金錢を多く所有してあること、又その人。かねもち。まるもち。

もちまるーごけ 持丸後家【名】財產を所有せる後家。金持の寡婦。 艷道通鑑「持丸後家をちよろまかす」

もちまるーちやうじや 持丸長者【名】多くの金を所有せる人。かねもち。富豪。 冥途飛脚「たとへ持丸長者でも、金に詰まるはある習」

もちーむしろ 餅筵【名】搗きたる餅を載せおく筵。 續俳家奇人談(紀逸)「時つ風加へて草の餅筵」

もちーもち 「貌」ためらふさま。 長町女腹切「言譯してくれと、もちもちと」

もちーもの 持物【名】㊀持つ物。持ちてある品物。手荷物。 ㊁所有に屬する物。持物は主に似る【句】持物㊁は、持主の好む所を示す。〔諺語〕

もちーもり 餅盛【名】人の死後四十九日に當る日に、丸餅四十九個を盛物(モリ)として、霊前に供ふること。五人女「四十九日の餅盛など、お七親類、御寺に參りて、せめて、その戀人を見せたまへと歎きぬ」

もちーや 餅屋【名】餅を搗きて賣り、又は單にそれを賣る家、又はその人。

餅屋は餅屋【句】「餅は餅屋」に同じ。〔諺語〕

もちや 持屋【名】もちいへ(持家)に同じ。

もちやがる 持上る・擡がる【動四自】もちあがる(持上る)[一][二]の轉訛。

もちやく 持役【名】持前に適せる役目。和合人「福岡貢が自己の持役で」

もちやげる 持上げる・擡げる【動下一他】もちあぐ(持上ぐ)の轉訛。柳樽「大家(オホ)から蓋ももちやげぬ餅をくれ」

もちやすび 玩・翫・弄【名】もちあそび(玩)の轉訛。

もちやすび-もの 玩物・翫物・弄物【名】もちあそびもの(玩物)の轉訛。

もちやはす 持合す【動下二他】もちあはす(持合す)の轉訛。

もちやき 餅燒【名】餅を食するために燒くこと。

もちやり 持槍・持鑓【名】その人の持料とする槍。甲陽軍鑑「長くは長刀、それより遠きは持槍」

もちやり-の-もの 持槍者【名】徳川幕府の小吏。

もちやり-ぶぎやう 持槍奉行【名】やりぶぎやう(槍奉行)に同じ。

もちゆ 用ゆ【動上二他】もちふ(用ふ)の訛。饅頭屋本節用集「用、モチユ」

もちゆう 喪中【名】喪に服してある間。

もちゆき 餅雪【名】餅の如く固まりて降る雪。わたゆき。犬子集信隆「餅雪に齒がたを附ける木履かな」芭蕉「餅雪を白絲となす柳かな」

もちゆまはる 持齋はる【動四他】『もち(持)は接頭語』ゆまはる(齋はる)に同じ。觀詞「新年祭「忌部(イミベ)の弱肩に太(ハ)だすき取り掛けて、持ちゆまはり仕へ奉(マツ)れる幣帛(ヘイハク)を」」同「大殿祭「齋玉作等(マイタマツクリ)が持齋はり持淨(ヨモチキ)はり」」

もちゆみ-がしら 持弓頭【名】徳川幕府の職制にて、若年寄支配の下に、持弓組を統率し、陣中にては、將軍に侍して、旗本を警護し、平時は、江戸城本丸の中門、その西丸との間なる中仕切門、二の丸の銅門等に勤番せし役。初は給料を給せられしが、後、千五百石高と定められ、菊間(キクノマ)敷居詰なりき。又、元祿以前は、火附盜賊改にも出役したり。

もちゆみ-ぐみ 持弓組【名】徳川幕府の職制にて、大抵與力十騎、同心五十五人までを一隊として編制し、陣中にては持弓頭の指揮に從ひて、將軍の旗本を固め、平時は、江戸城本丸の中門、又、その西の丸との間の中仕切門、二の丸の銅門等の警衛に任ぜしもの。元和九年六月始めて、一組を置き、寛永九年六月三組となり、文久二年廢止、持筒組に合併す。

もちゆみ-ぐみがしら 持弓組頭【名】持弓頭の指揮の下に、持弓組の各組の長たりし役。

もちゆみつつ-の-かしら 持弓筒頭【名】もちづつゆみのかしら(持筒弓頭)に同じ。

もちゆみてっぱう-ものがしら 持弓鐵砲物頭【名】前條に同じ。

もちよね 糯米・糯・餅米【名】もちごめ(糯米)に同じ。

もちよぼろ 持ー【名】もちぶ(持夫)に同じ。[古語]紀「荷丁、モチヨボロ」

もちよもぎ 餅艾【名】[植]もちぐさ(餅草)に同じ。

もちより 持寄【名】持ち寄ること。

もちよりき 持與力【名】徳川幕府の職制にて、持同心(モチドウシン)と共に、持筒組又は持弓組を組織せし與力。「寄り集まる。

もちよる 持寄る【動四自】各自持ちて

もぢり 捩【名】[一]もぢること、又、もぢりてあること、又その物。盛衰記「七もぢりなる眞弓の、しめ塗に塗りたるに」[二]俗曲にて、詞を所所滑稽的に替へて唄ふもの。[三][文]先づ題を出して一句を附け、その一句を、又、その題として附くるもの。字もぢり・本もぢりの二種あり。前者は、例へば、「丸かぶり」といふ題にて、「鋤鎌鍬を持つ土民」といふ句を附けたりとすれば、次は、その「土民」を題として、「娘の子髮梳いてゐる三谷町(サンヤマチ)」と附くる類、又、後者は、例へば、「年の市」といふ題にて、「臼あり杵あり兎もあり」といふ句ある時、次には、「兎もあり」を題として、「細長い耳をあられに切る」など附くる類。段段づけ。[四]東京にて、荒仕事などする時に、著物の上より著重ねて用ふる一種の筒袖。ひっぱり(引張)參照。

もぢり 捩【名】[一]木工の用ふる道具。もぢ。和名「鎹、毛治利」[二]そでがらみ(袖搦)に同じ。

もぢり 淚【名】あやさり(綾取)に同じ。

もぢり-どう 捩藤【名】せんだんどう(千段藤)に同じ。

もぢり-ば 捩羽【名】もぢれたる羽。謠曲(大會)「羽風を立てて、翔らんとすれども、もぢり羽になって飛行(ヒヤウ)も叶はねば」

もぢる 捩る【動四他】[一]ねぢりて、戻らしむ。よぢる。ねづる。[二]他の言葉の口調に似せたる言ひ方をなす。言ひまはしを眞似て言ふ。

もちーれう 持料【名】持ち料とする物。

もちーろん 勿論【副】『勿論の字の呉音』言ふまでもなく。言はずとも知れたるとほり。論なく。ろなう。

もちろん-かいしやく 勿論解釋【名】[法]法令の解釋方法の一。情狀の輕微なる、又は分量の狹少なるものなどに對しての禁止の規定は、情狀の重大なる、又は分量の廣大なるものに對しては、勿論適用せらるべきものと解釋すること。

もちーわく 持別く【動下二他】方面を別けて受け持つ。分擔す。記「この速秋津日子(ハヒアキツヒコ)・速秋津比賣(ハヒアキツヒメ)二柱(フタハシラ)の神、河(カハ)・海(ウミ)に因りて、持別けて生みませる神の名(ナ)は」

もちね 用【名】もちひ(用)に同じ。

もちゐる 用ゐる【動上一他】もちふ(用ふ)に用ひ。もちふ(用ふ)參照。空穗「つたなき身にて、高き位をもちゐるべからず」

もちーゑふ 持醉ふ【動四自】取り扱ふに困る。もてあます。盛衰記「目に餘りたる不用人なりければ、上下、いかがせんと持醉ひたり」「語」

もつ 物【名】鳥の臟物(ザウ)。[勞働者の

もつ 持つ【動四他】[一]手の指と掌とにて支ふ。手にす。執る。[二]わが持とす。所有す。所持す。領ず。[三]もちふ(用ふ)に同じ。(但し、主に連用形に用ふ)記「木鍬(ハツ)もち打ちし大根(オホネ)の」續後記「清く直(ネ)き心もちて」[四]受け持つ。引き受く。擔任す。擔當す。[五]保つ。守る。支ふ。維持す。支持す。蕉「馨めらるる身の持ちにくさ」萬葉「すめろぎの食(ヲ)す國なれば御言(ミコト)もち立ちわかれなば」[六]生來、その物を身に備ふ。

持たぬ子には苦勞はせぬ【句】子なき者は、子につきての苦勞なし。[諺語]

持ちつ、持たれつ【句】互に力を借りあふ。相依り相助く。蕉(ヲモ)れあふ。

持ちも提(サ)げもならず【句】取り扱ふべき方法無きに苦しむ。

持ったが病【句】その人の、止めんとして止められぬ、惡しき癖・遊蕩・博奕などの形容。[諺語]

持った病は直らず【句】持って生れたる缺點は、容易に改め得ず。[諺語]

持って生る【句】生來、身に具はる。生れつく。一茶「花の木の持って生れた果報かな」

持って參る【句】もちかく(持掛く)を謙遜していふ語。一代女「谷の好(ス)くやうに持って參り、凉日(ヒヒ)なく、親方のためによき者となりぬ」

持つべき者は子【句】人として、子は無かるべからざる者なり。[諺語]謠曲(刈萱)「何者か、この山路を凌ぎ、はるばる來(ク)べき。持つべき者は子にて候」

持(モ)て【句】持ちての略。蕉葉「袈裟や數珠やうの物は多くもて集まりたるに」狂「冬は曉……、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし」

もつ 持つ【動四自】[一]永き間に亙りて、變り衰へず。久しく損はれ、腐れなどせず。堪ふ。[二]面目を保つ。特色を維持す。蕉「膾は酢で持て、男は氣で持て」俗謠「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ」

もっ-かう 木瓜【名】『もかう(帽額)[三]の訛にて、御簾の帽額に多く織り出されしものなるよりいふ。又、木瓜は胡瓜(キウリ)にて、その横斷面の形なりとの說もあれど、

胡瓜は三室・三子房の果實なれば當らず』

くわ(窠)[二]に同じ。縱に長きと横に長きとによりて、縱木瓜・横木瓜の名あり。その輪廓を形づくれる瓣の數によりて、三(ミツ)木瓜・四(ヨツ)木瓜・五(イツ)木瓜などあり。配列の形又は附屬物の種類によりて、三盛(モリ)木瓜・九曜木瓜・崩(シダ)木瓜・蓮木瓜・菱木瓜・割木瓜・蘆(ヨシ)に木瓜などの種類あり。もかう。

「[二]に同じ。

もっかう-ぎぬ 帽額絹【名】**もかう**(帽額)

もっかう-ぐるま 帽額車【名】帽額の簾を掛けたる車。物奥太郎「もっかう車に乘りて院參する」

もっかう-ふんどし 帽額褌【名】褌の一種。短き布片の前後を紐にて綴ぢ、足を踏み通して、紐の一端を結ぶやうにせるもの。京畿搢紳の間に用ひられたり。越中ふんどん。狂歌百人一首(葉計多樹)「貧乏を曾我殿ばらと人やいふ紫の庵にもっかうふんどし」

「方の一。

もっかう-むすび 帽額結【名】緒の結び

もっか-こおひい モッカ珈琲【名】亞剌比亞のモッカ港より輸出する珈琲。

もっき 物忌【名】『塩嚢鈔の卷四に「迦毘羅衛國中、有二桃林、其下有二大鬼王、號二物忌、其鬼王邊、他鬼神曾以不レ得レ寄、爰彼大鬼神王、發二誓願一云、利二益六趣有情、實我名號、若人宅物怪屢現、惡夢頻示、可レ蒙二諸凶害一時、臨二其日一書二吾名一門立、其故他鬼神不レ令二來入一、又書二吾名一令レ持、人人如レ影可レ令二守護一」とあり。されどただ物忌を音讀したる語なるべし』**もの**

いみ(物忌)に同じ。東鑑「若君御物忌也。物忌字注レ札、付二御簾等一」

もっ-き 物機【名】[佛]衆生の機根。

もっ-き 木槿【名】[植]**むくげ**(木槿)を云ふ。[上總國・下總國の方言]

もっきつ 勿吉【名】**まっかつ**(靺鞨)を見よ。

もっ-きり 盛切【名】『**もりきり**(盛切)の音便』酒を、大いなる器にて飲むこと。[奥州の方言]

もっ-づく 水雲・海雲・海蘊・苔栄【名】[植]褐色藻類に屬する藻類。我國到る處の沿岸、殊に内灣の如き靜穩なる所に生じ、干潮線以下の他の海藻及び礫塊に著生す。體は、細き圓柱形にして、絲の如く、數回、多數の分枝をなし、全長三四寸乃至七八寸に達し、粘滑にして柔軟なり。三杯酢として賞味す。もうぞく。もうぞこ。もぞこ。もくづ。ものはな。和名「水雲、毛豆久」

もづくう-り 水雲賣・海雲賣・海蘊賣・苔栄賣【名】[植]水雲を賣りあるく人。

もづくー-かみ 水雲紙【名】**かみやがみ**(紙屋紙)[二]に同じ。

もづくー-じる 水雲汁・海雲汁・海蘊汁・苔栄汁【名】水雲を實としたる汁。

もっ-くわん 沒官【名】[一]官に沒收すること。ぼっくわん。[二]王朝時代に、謀叛又は大逆を犯せる者に對する附加刑。その父子、又は家人・資財(奴婢は、この中に含む)・田宅及び彼此俱罪の領及び犯禁の物、若しくは、人の盜みたる物を盜みたる場合の倍贓等を、官に沒收せしこと。又、沒官の物は、贓贖司、これを處分し、種類に從ひて、更に諸司に分配したり。**もっ-しゅ**(沒收)[二]參照。盛衰記「京より西をば賜(タ)ばんずらんと思ひつるに、僅かに伊豫の一國、沒官の地二十箇所知行せよとの源二位の所存」

もっくわん-ち 沒官地【名】沒收せられて、官領となりたる土地。沒官領。沒收(モッシュウ)官領。沒收(モッシュウ)地。沒收(モッシュウ)領。東鑑「平家沒官地、未レ被レ補二地頭一」

もっくわん-でん 沒官田【名】輪地子田の一。戶主の犯罪によりて、その田地の、沒官せられたるもの。ぼっくわんでん。

もっくわん-りやう 沒官領【名】**もっくわんち**(沒官地)に同じ。東鑑「忠度於二一谷一被二誅戮一之後、爲二沒官領一武衛令二拜領一」

「ざびき。

もっ-つけ 裳附【名】黑色なる素絹の僧衣。

もっ-つけ 物附【名】**もっつけ**(物附)の略。

もっけ 物怪・勿怪【名】思ひがけぬこと。意外。不思議。狂言(鶴)「手中風(カヂチュ)がおこりました。はてさて、もっけな事ぢや。して、それは、いつもおこるか」

物怪を起す【句】はらだつ。立腹す。

もっ-け 物化【名】**ぶっくわ**(物化)[二]に同じ。物故(ブツ)。

もっ-けりせふ 沒交渉【名】交渉する所なきこと。兩事互に背きて、相應ずる所なきこと。無關係。(もと禪語)

もっけ-がほ 物怪顏・勿怪顏【名】思ひがけずといふ顏つき。意外と思へる面持(オモ)ち。不思議がほ。聖德太子繪傳記「ちと容體お尋ねなされいへば、廣海、物怪顏」

もっ-と 奔賣【名】『盛籠(コモリ)の音便とも、持籠(コモリ)の音便ともいふ』**ふご**(奔)に同じ。『撃「おだてと奔に乘りたくない」

奔に乘る【句】『德川時代には、死刑に處せらるる者は、奔にて、刑場に運ばれしよりいふ』死刑に處せらる。

もっこ 物故【名】**ぶっこ**(物故)に同じ。物化(モッ)。太平記「過去聖靈藤原氏の女、並に物故(モッ)秦武文(ブンタケフミ)、共に三界の苦海を出でて」

もつ-ご 沒後【名】**ぼっご**(沒後)に同じ。盛衰記「清房が沒後をも弔ひ、且は老父が心をも慰めん」

もっこう 奔【名】**もっこ**(奔)の音便。膝栗毛「棒の先に、奔など括り附けて」

もっこう-づきん 奔頭巾【名】**もっこづきん**(奔頭巾)の音便。

もっこう-ふんどし 奔嚬鼻褌【名】**もっこふんどし**(奔嚬鼻褌)の音便。

「同じ。

もっこつ 沒骨【名】[美]**つけたて**(附立)に

もっこ-づきん 奔頭巾【名】形、奔に似たる頭巾なるべし。雀子集「もっこ頭巾かぶる頭(ヅク)や擔旋毛(ツナヒモ)」

もっこ-ばな 木香花【名】[植]**もくかうばら**(木香薔薇)に同じ。

もっこ-ふんどし 奔嚬鼻褌【名】**もっかうふんどし**(帽額褌)に同じ。

もっこ-べこ 奔べこ【名】『**へこ**を見よ』前條に同じ。[豐前國の方言]

もっこ-ぼう 奔棒【名】**てんびんぼう**(天秤棒)を云ふ。[肥後國の方言]

もっ-さう 物相・盛相【名】飯の量を計り、又は飯を人別に供するために盛る器。昔、獄内にて、囚人に飯を供するにも用ひ、又乞食なども用ふ。(散(シタ)に對して)醒睡笑「物相一飯をもてなし」雍州府志「倭俗量レ飯之器謂二物相一。或一合、或二合、或三合、隨レ用而有レ之。相木形之謂也」

もっさう-あたま 物相頭・盛相頭【名】物相の形に似たる頭。孕常髮「もっさう頭の奴が聲」

「に盛りたる飯。

もっさう-めし 物相飯・盛相飯【名】物相物相飯を食ふ【句】獄に投ぜらる。奥い飯を食ふ。

もっ-しう 沒收【名】**もっしゅ**(沒收)に同じ。運歩色葉集「沒收、モッシウ」

もつ-じみ 沒滋味【名】滋味なきこと。禪家の公案などの形容にいふ。太平記「たとひ宗論を致すとも、天台は唯受一人の口決(クケツ)、禪家は沒滋味の手段、理を辨じ、玄を談ずとも」

もっ-しゅ 沒收【名】[一]**もっくわん**(沒官)[二]に同じ。[二]鎌倉・室町兩時代に、罪人の動産・不動產等を、幕府に取り上げしこと。領地を沒收すると、田宅・資財を沒收するとの別ありて、共に、その一部を沒收すると、全部を沒收するとあり。**もっくわん**(沒官)[二]及び**ぼっしう**(沒收)參照。[沒取]盛衰記「所領を沒收せらる」

もっしゅ-くわんりやう 沒收官領・沒取官領【名】**もっくわんち**(沒官地)に同じ。

もっしゅ-ち 沒收地・沒取地【名】前條に同じ。東鑑「賜二美濃國中沒收地等一」

もっしゅ-りやう 沒收領・沒取領【名】前條に同じ。東鑑「雖爲二沒取領一、自レ院分二給本領主一」

もっしよく-し 沒食子【名】『支那の邊疆の語にて、支那にては、無食子ともいふ』沒食子蜂(バチ)の、擬などの枝葉に寄生するによりて生ずる、瘤狀の物。沒食子酸製造の材料に供す。ぼっしよくし。

もっしよくし-さん 沒食子酸【名】[化]『英Gallic acid』單寧(タンニン)酸を稀薄なる酸類と共に熱すれば得らるる、白色にし

て、絹絲狀の光澤ある針狀結晶物。天然には、植物界に汎く分布するが故に、沒食子・茶などよりも製するを得。融點二二〇度、熱すれば、分解して、炭酸と焦性沒食酸とを生じ、溫水・酒精・エーテルに溶解し、還元性强く、又、鹽化第二鐵に逢へば、青黑色の沈澱を生ずるによりて、黑染・インキの製造等に用ひらる。ぼっしよくしさん。

もっしよくし-ちんき 沒食子丁幾【名】五倍子の粗末一分と稀酒精五分とにて製する丁幾。收斂劑とし、又、外用としては、凍瘡・潰瘍等に塗布す。五倍子(イボ)丁幾。

もっしよくし-ばち 沒食子蜂【名】〔動〕ふしばち(沒食子蜂)に同じ。

もっす 沒す【動佐變自】ぼっす(沒す)に同じ。盛衰記「觀音を念ぜば、波浪に沒する事なからん」

もっ-たい 物體・勿體【名】物物しきこと。おもおもしきこと。おほげさ。仰山。國姓爺「さすが五常軍甘輝と名に負ふ、その物體」

物體を附く【名】もったいぶる(物體ぶる)に同じ。「代女「少し勿體も附け、むつかしく見せて」

もったい-かほ 物體顏・勿體顏【名】もったいぶりたる顏つき。物物しき樣子。博多小女郎浪枕「諸色受込んで、差配らしげに勿體顏」

もったい-くさし 物體臭し・勿體臭し【形二】もったいらし(物體らし)に同じ。

もったい-な 物體無・勿體無【形】もったいなし(物體無し)の語幹。もったいなしの意。感動句に用ふ。諸曲(鵜遣)「あら勿體なの御事や」

もったい-なし 物體無し・勿體無し【形一】〔一〕おもおもしき所無し。體面を損じてあり。盛衰記「帶・紐解きひろげて、思ふ事なくおはする事、勿體なし」甲陽軍鑑「腹を立て、御申し候ふは、曲淵殿は、近頃勿體なき事を承り候ふものかな」〔二〕畏れ敬ふべくあり。畏れ慎むべくあり。大切に扱ふべし。狂言(こんくわい)「斯樣のおそろしき獸などを、わごりよ達賤しき分にて括る事、勿體ない事」〔三〕濫りに費す事惜しむべし。

もったい-ぶり 物體振・勿體振【名】もったいぶること。もたせぶり。

もったい-ぶる 【動四自】重重しげに振舞ふ。もったいを附ける。樣子ぶる。容體(ヨウ)ぶる。

もったい-らし 物體らし・勿體らし【形二】物物しく見せかけてあり。もったいぶりてあり。ことごとし。大層らし。もったいくさし。もっともらし。

もっ-たら 沒倒【名】奪ひ取ること。横領。盛衰記「白山權現の御領、末寺・末社の莊園を沒倒し、神事・佛寺の供米(クマ)を押領し」太平記「一圓に九院を沒倒し、衆徒を逐出して」

もっ-たてる 持立てる【動下一他】持ち上げて立つ。きのふはけふの物語「うつぶしになり、腰より上を穴の中へ入れ、尻をもつ立てて掘る折節」俗曲「かはづ「草押し分けて、蛇(クチナハ)が、鎌首もっ立て」

もっ-つけ 物附【名】さっつけ(取附)〔一〕に同じ。もつけ。

もって 以て【助】〔一〕もて(以て)の音便。但し助辭をと共に用ひて、「を以て」といふこと常となりたり。によりて。にて。もて。「筆を以て書く」〔二〕副詞又は副詞句に添へて、その意を强むるに用ふる語。狂言(七騎落)「それがしは、船よりもって全く下(オ)りまじき」甲陽軍鑑「一人に五百貫づつ……御知行遣さるべきの旨、何より以ての御事なり」佐久間象山手簡「ミニストル差置き候儀は、尤も以て難ノ被ノ下ノ成ノ御許容ノ趣」〔三〕副詞・副詞句以外の語にも添へて、その意を强むるに用ふる語。狂言(御冷)「つらつら世間の有樣をおもんみるに、……、朝顏の露、電光・石火の光、人間以て同じ事なり」新永代藏「百目も、千貫目も道理は以て同じ事なり」

もっ-てい 持って來い【名】極めて似あはしきこと。この上なく當てはまりてあること。〔俚語〕「あの人には持って來いの仕事」

もって-の-ほか 以外【名】普通以外なること。道理をはづれたること。保元「君に立てあひ奉らんと御支度、以ての外の御誤なり」

もって-の-ほか 以外【副】以ての外に。平治「以ての外、然るべからざる振舞かな」

もっ-と 【副】その上に。更に。一層。もそっと。「題。格言。金言。

もっとお 標語(英 Motto)【名】標語。標題。

もっとゆひ 元結【名】もとゆひ(元結)の訛。

もっとも 尤【副】『もとも(尤も)の音便』〔一〕この上なく。極めて。いと。(主として、形容詞又は形容動詞の上に用ふ)〔二〕全くそのとほりに。いかにも。(形容詞性の句の上に用ひ、又下の語句を省略して、名詞の如くにも用ふること多し)保元「今夜の發向、尤もなり」狂言(月近大名)「目近といふは、尤もその樣な扇の事なれども」

尤かし 【句】『かしは助辭』甚だ尤もなり。全くそのとほりなり。道理至極なり。文武五人男「尤かし殿御のいとしさ、それは、それは、日本・唐・天竺七萬實に、も替へがたく」「尤至極せり」國姓爺「憤、

尤至極 【句】前條に同じ。

尤千萬 【句】前條に同じ。齋門松「尤千萬、今の言葉は聞所(キキドコロ)」

尤なり 【句】「尤かし」に同じ。

もっとも 尤【接】然は言ふものの。ただし。狂言(箕かづき)「やあら、おのれは憎い事をいふ奴ぢや。尤、某(ガシ)が、日頃、連歌に好いて、農作を怠る故に」

もっとも-どかし 尤倒【名】相手の言ふ所の理非如何にかかはらず、尤なりと同意して、誠意無きこと。

もっとも-の-さうし 尤草子【名】〔書〕清少納言の枕草子に倣ひたるもの。二卷。作者詳かならざれども、慶長よりは後、寛永よりは、前に成れるものなり。

もっとも-らし 尤らし【形二】〔一〕いかにも道理にかなひたるやうなり。〔二〕もったいらし(勿體らし)に同じ。

もつ-にち 沒日【名】ぼっにち(沒日)に同じ。

もつ-にふ 沒入【名】ぼっにふ(沒入)に同じ。

もっぱら 專ら【副】『もはら(專ら)の音便』他の事物はさし置きて。主として。ただ。一向に。

もっぶ (英Mob)【名】暴徒。一揆。土賊。

もっぽう 【名】〔植〕もくこく(木斛)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

もづめ-たかみ 物集高見【名】〔人〕文學博士。豐後國杵築(キツキ)町の人。國語に精通し、長く文科大學教授たりしが、明治三十二年學位を授けられて、程なく辭職し、後、宮內省御用掛を勤む。昭和三年歿す。年八十。編著に日本大辭林・日本文明史略・廣文庫・群書索引等あり。

もつ-もづ 【貌】もちもちに同じ。

もつ-やく 沒藥【名】アラビヤ及びアビシニヤに產する一種の灌木より分泌する液を採收して製したる藥品。普通、やや透明なる赤褐色の堅き塊粒をなし、特殊の臭氣と苦味とを有し、水中に混ずれば、乳狀液を作る。强壯劑及び麻醉劑として、醫藥に供する外、香料ともす。はなもつやく(花沒藥)參照。

もつり-しま 沒利島【名】〔地〕長門國六連(ムツ)島の古稱。紀「沒利島・阿問島爲」御筥割」

もつる 縺る【動下二自】〔一〕結ばれて解けず。入り亂れて離れず。〔二〕筋道亂れて、解決附かず。葛藤生ず。

もつれ 縺【名】〔一〕結ばれて解けぬこと。〔二〕紛爭。葛藤。ごたごた。

もつれ-がみ 縺髮【名】もつれたる髮。梳らぬ頭髮。關取千兩幟「もつれ髮撫でつけておかうより」

もつれ-ね 縺寢【名】もつれ合ひて寢ぬること。丹波與作「岡崎女郎衆と縺寢よ」

もて 面【名】おもて(面)の略。〔古語〕萬葉「あがもての忘れもしだは筑波嶺をふりさけ見つつ妹はしぬばね」

もて 以て【助】〔一〕もちて(以)の略。もちよ(用)と共にもつ(持)より派生したる語なるべし』にて。によりて。もつて。意味を强めていふときは、助辭をと共に用ひて

「をもて」といふ。 萬葉「吾妹子(ゐもこ)がかたみの衣無かりせば何物もてか命つがまし」 著聞「その効驗言葉をもて述ぶべからず」 ㊁或動詞と動詞との間に插みて、助辭てと同樣の意に用ふる語。 躬恒集「秋風の吹きもて來(コ)ずば白雲の天つしらべをいかで聞かまし」 源氏「日も暮れもてゆけば」

もて 持て【句】**もつ**(持つ)の條下を見よ。

もて 持【接頭】**もち**(持)に同じ。「もて扱ふ」「もて隱す」「もて惱む」「もてはやす」

もて-あがむ 持崇む【動下二他】『**もて**(持)は接頭語』**あがむ**(崇む)に同じ。 源氏「親など立添ひ、もてあがめて」

もて-あそび 玩・翫・弄【名】もてあそぶこと、又その物。もちあそび。もちやすび。

もてあそび-だらぐ 玩道具・翫道具・弄道具【名】次條に同じ。

もてあそび-もの 玩物・翫物・弄物【名】もてあそぶ物。もちあそびもの。玩弄物。玩具。

もて-あそぶ 玩ぶ・翫ぶ・弄ぶ・弄ぶ【動四他】『持ちて遊ぶの義』㊀手に持ちて遊ぶ。もちあそぶ。玩弄す。㊁見又は樂器などを取り扱ひて、慰とす。愛(メ)で興ず。賞玩す。 貫之集「梅花・殘雪をもてあそぶ」 ㊂侮り嘲りて慰む。おもちやにす。なぶる。愚弄す。

もて-あつかふ 持扱ふ【動四他】『**もて**(持)は接頭語』㊀**もちあつかふ**(持扱ふ)㊁に同じ。 枕「筐の笛は、……所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる」 ㊁**もちあつかふ**(持扱ふ)㊀に同じ。 醒睡笑「古田織部の、數寄(スキ)に出さるる程の物をば、その道を學ぶも、學ばぬも、天然と賞翫し、もて扱ひし故」

もて-あまし 持餘【名】もてあますこと、

もて-あまし-もの 持餘者【名】もてあます程の者。始末に終へぬ人。 若鳳奇仁玉 國助とや、關東にかくれもなきもてあまし者なり」

もてあまし-もの 持餘物【名】もてあます事物。

もてあます 持餘す【動四他】『持ちて餘すの義』取り扱に苦しむ。處置に困る。手に餘す。もちあつかふ。もてあつかふ。 若鳳奇「姿人形、……、我が物ながら、さりとては持餘し」 和合人「御當人が持てあましてゐる大首だ」

もてありもの-つかさ 喪儀司【名】さうぎし(喪儀司)に同じ。

もて-いづ 持出つ【動下二自】『持ちて出づの義』外部にあらはす。 榮花「關白殿、いともて出であらはれてにはあらねど」 增鏡「新院も、のどかにおはしますままに、御歌をのみ詠ませたまへど、よろづの事もて出でぬ御本性(ショウ)にて」

もて-いつく 持齋く【動四他】『**もて**(持)は接頭語』**もちいつく**(持齋く)に同じ。

もて-かくす 持隱す【動四他】『**もて**(持)は接頭語』**かくす**(隱す)に同じ。 源氏「顏をもて隱して、御いらへも聞えたまはねば」

もて-かしづく 持傳く【動四他】『**もて**(持)は接頭語』**かしづく**(傳く)に同じ。 枕「上達部(カンダベ)の又なきにもてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事もうち語らひ、慰めなどするかし」

もて-かへす 持返す【動四自】入り込み、立騷ぐ。ごった返す。もてかやす。 曾我會稽山「人の足音、どろどろどろ、右往左往にもてかへす」

もて-かやす 持返す【動四自】前條の訛。 夕霧阿波鳴門「醫者の出入(デイ)やら、巫子(ミコ)の、御符(フ)のと、屋内(ヤウ)がもてかやいても」

もてぎ 茂木【名】〔地〕明治の初年設置の縣の一。四年七月、下野國舊茂木藩の地に立てしもの。同年十一月、宇都宮縣に入り、宇都宮縣は、六年六月、栃木縣の一部となる。

もて-さわぐ 持騷ぐ【動四他】持ち扱ひて騷ぐ。 伊勢集「風さへももて騷ぐかな櫻花心とだにも散るにまかせて」

もて-しづむ 持鎭む【動下二他】『**もて**(持)は接頭語』**しづむ**(鎭む)に同じ。 源氏「ここら世をもて鎭め給ふ御心、皆亂れて」

もて-そこなふ 持損ふ【動四他】『持ちて餘損ふ義』身持を過つ。 源氏「あさましくもてそこなひたる身」 同「我より外に、誰かはつらき。心づからもてそこなひつるにこそあなれ」

もて-つく 持附く【動下二他】『持ちて附くの義』足らぬ所を附加して、體面を繕ふ。みにくからぬやうに注意す。もてなす。 源氏「うはべの情は、自らもてつけつべきわざをや」 榮花「中宮、いとめでたく、昔より、内わたりにおはしまし馴れ、人人も、もてつけやすくおはします」

もて-つけ 持附【名】もてつくること。もてなし。 源氏「大かたの有樣・もてつけ、心にくく、立並ぶ人なき御有樣」

もて-なし 持成【名】㊀身のこなし方。人前にての振舞。 源氏「胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり」 同「いとわろかりし有樣なれど、もてなしに隱されて、くちをしうはあらざりきかし」 ㊁相手に對する振舞。とりなし。あへしらひ。あしらひ。待遇。 源氏「世の例(シウ)にもなりぬべき御もてなしなり」 ㊂ふるまひ。饗應。馳走。 二代男「井筒、道心をもてなしに、茶事の花餅などして」

もてなしより執成(ナトリ)【句】客人に對しては、饗應よりは、取り持の方が大切なり。 〔諺語〕

もてなし-かた 持成方【名】もてなす方法。相手を取り扱ふ方法。あしらひかた。

もて-なす 持成す【動四他】㊀身をこなす。人前にて振舞ふ。おこなふ。たしなむ。 枕「あるに隨ひ、定めず、何事ももてなしたるを、こそ、よき事にはすれ」 增鏡「當帝(ダイ)も、また、敷島の道をもてなさせたまへば、いつしかと、勅撰の事仰せらる」 ㊁相手を取り扱ふ。相手に對して振舞ふ。あへしらふ。あしらふ。待遇す。 枕「さやは、けにくく、仰言を、はえなくもてなすべき」 平家「さてこそ、わが子とはもてなされけれ」 ㊂よく見えしむ。修飾す。 拾玉「しづのをが片岡しめて住む宿をもてなすものは夕顏の花」 ㊃飲食物を供へて、相手を取り扱ふ。饗應す。振舞ふ。 狂言「鱸屬」「鱸が無うても、苦しうない。……。一つもてないてやらうぞ」 醒睡笑「物相(ナウ)一飯をもてなし」 ㊄大事にす。愛撫す。 曾我「いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けて、もてなしけり」

もてなやみ-ぐさ 持惱種【名】もてなやむ物事。もてあましもの。 源氏「人のもてなやみぐさになりて」

もて-なやむ 持惱む【動四他】『**もて**(持)は接頭語』思ひなやむ。心配す。 源氏「いと斯うしも、何かは、苦しきまでもてなやまましし」 榮花「この内大臣殿を、なほ、御心おきて、心をさなくては、いかがはあべからんと、傾きもてなやみ聞ゆる人人多かるべし」

もて-ならす 持馴す【動四他】『持ちて馴す義』常に持つ。 源氏「かのしるしの扇は、……なつかしうもてならしたり」

もて-のく 持退く【動下二他】『持ちて退く義』引き込ます。 枕「忌みたるやうにて、口をふたぎて、顏をもてのくべきにもあらねば、くひをるにこそあらめ」

もて-はなる 持離る【動下二自】『**もて**(持)は接頭語』はなる。へだたる。遠ざかる。かけはなる。 枕「賭弓(ユミ)に、……、はづしたる矢の、もて離れて、異方(カタヘ)へ行きたる」 盛衰記「今度はもて離れたる事はなし、相計らはるる旨もありなん」

もて-はやす 持映す【動四他】『**もて**(持)は接頭語』**はやす**(映す)を强めていふ語。 榮華「只今の御代のおぼえ、たぐひなき君なれば、もてはやさんとて、大臣も出でゐて待ちたまふに」 紫式部日記「大かたの空も艷なるにもてはやされて」

もて-ひがむ 持僻む【動下二他】『**もて**(持)は接頭語』**ひがむ**(僻む)を强めていふ語。 源氏「まして、もてひがめたる頭つき・心おきてこそ頼もしげなけれど」 同「おはせましかば、斯くもてひがむる事もなからましし」

もてる 持てる【動下一自】㊀**もつ**(持つ)の能動形「持たる」の口語は「持たれる」にて、その更に約まりたる語』持つ能力あ

り。持ち得。 ㊁好遇せらる。人氣あり。歡待せらる。〔俚諺〕

もでる(英Model)【名】㊀型(カタ)。模型。模範。 ㊁美術家の、製作の準據とする人又は物。 ㊂畫家又は彫刻家の、製作の準據とするために目前にて用ふる人。

もでる-かせぎ モデル稼【名】モデル女となりて生活すること。

もでる-だい モデル臺【名】繪畫・彫刻等を製作する室の一部、モデルを置くために、一段高くしつらひたる處。

もでる-ばあさん モデル婆様【名】モデル女の口人(イキヒ)を職業とする老婆。

もでる-をんな モデル女【名】美術家に雇はれて、モデルとなる女。

もてわらひ-ぐさ 持笑種【名】『もて(持)は接頭語』**わらひぐさ**(笑種)に同じ。 榮花「その君たちも、ただ、この宮をぞ、もて笑ひぐさにし奉りたまひければ」

もと 本・元【名】㊀物事の起る所。はじまり。はじめ。おこり。根本(コンポン)。根元(コンゲン)。(末(スエ)に對して) ㊁物事の主要なる部分。もとゐ。根據。(末(スエ)に對して) 蘇「孝は、百行の本なり」 源氏「才(ザエ)をもととしてこそ、大和魂の世に用ひらるる方、强う侍らめ」 ㊂高く長き物の下部。樹木ならば、根又は幹の邊。(末(スエ)又は末(ウラ)に對して) 紀「葉びろ熊櫃(クマガシ)もとには、いくみ竹生ひ末べにはたしみ竹生ひ」 記「もとごとに花は咲けども、何とかも美し妹がまた咲きて來ぬ」 ㊃和歌の上の句。(末に對して) 枕「歌どものもとを仰せられて、これが末はいかにと仰せらるるに」 ㊄神樂の樂(ガク)にて、二闋に分れし人人の、先づ唱ふる方。(末に對して) ㊅**かうほ**(酵母)に同じ。〔酒〕 ㊆**もときん**(元金)に同じ。(子に對して) ㊇もと。資本。 ㊈**もとね**(元値)の略。 ㊉以前の時。まへ。むかし。〔舊・故〕 源氏「内には、もとの淑景舍(シンゲイ)を御曹子にて」 宇治「聖(ヒジリ)は、もとはいみじき惡人にて」

元が掛る【句】資本を要す。

元が切れる【句】「元値が切れる」の略。 浮世風呂「お前(ソ)に頭(カシラ)を賣つて、三文本が切れちやあ、お蔭は無(ネエ)え」

元が引込む【句】「元値(モト)が引き込む」の略。 浮世風呂「高けりやあ、よしなせえ。無理には賣らねえ。……爰で、本直(モ)が、四貫づつも引き込まあな」

本、降(クダ)つ【句】年老いて、身體の弱り衰ふる譬。 古今「笹の葉に降りつむ雪の末(ウレ)を重みもとくだちゆくわがさかりはも」

本繁し【句】本立(ケモノ)繁し。莖又は幹の數多し。 萬葉「大和の室生(ムロ)の毛桃(ケモモ)本繁くいひてしものをならずは止まじ」

本つるぎ、末ふゆ【句】『**つるぎ**(劍)は、**つむがり**の約にて、物を一刀の下に切り放つ意に出でたる語、**ふゆ**は**ひゆ**(冷ゆ)の轉といふ』刀の、本より末へかけて、切味よく、氷のやうに見ゆとの美稱なるべしといふ。〔古語〕 記「品陀(ホムタ)の日の御子大雀(オホサザキ)、大雀、佩かせる太刀、本つるぎ末ふゆ」

元になる【句】「元値になる」の略。

本の國【句】生れたる國。鄕國。本國。もとつくに。 紀「本貫、モトノクニ」 萬葉「平けくゐて歸りませもとの國べに」

本の心【句】㊀以前の愛情。昔馴染の心。もと連れ添ひし者に對するしたしみ。 古今「石上(イソノカミ)ふるから小野のもと柏もとの心は忘られなくに」 同「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」 ㊁**ほんしん**(本心)に同じ。 枕「物の怪(モノ)にいたう惱む人……、もとの心失ひて」 同「わが本の心の本性(ホンシヤウ)とのみのたまひつつ、改まらざるものは、心なりとのたまへば」

本の鞘へ嵌(ハ)る【句】次條に同じ。

本の鞘へ收まる【句】夫の家を出でたる妻、主家を離れたる奉公人などが復び元の身分に歸る。

本の鞘へ收む【句】夫の家を出でたる妻、主家を離れたる奉公人などを、復び元の身分に歸らしむ。

本の雫(シヅク)【句】「末の露、本の雫」を見よ。 榮花「御顏に單(ヒトヘ)の御衣の袖をおしあてて、立たせたまへるより、御涙のつくづくともり出でる程、もとの雫やと、哀におろかならず」

本の誓【句】「佛」**ほんせい**(本誓)に同じ。 源氏「不動尊の御もとの誓あり、その日數をだにかけとどめ奉りたまへ」

本の露、末の雫【句】「末の露、本の雫」に同じ。 蜻蛉「本の露末の雫や花木槿(ハナムクゲ)」

本の拍子(ヒヤウシ)【句】神樂など、樂曲を前後の二部に分つ時の、前の方の拍子。本方(カタ)の拍子。もとびやうし。(「末の拍子」に對して)

本の妻(メ)【句】前に連れ添ひし妻。離別したる妻。舊妻。こなみ。 後撰「もとのめに歸り住むと聞きて、わがためはいとど淺くやなりぬらん野中の清水深さまされば」

本の妻(メ)に媒(ウナカ)無し【句】一旦離別したる妻と舊緣に復する場合には、媒介者を要せず。〔諺語〕 狂言(法師物狂)「諏訪・八幡も御示現あれや、元の妻に媒無しと、太刀を取りて打擔(カタ)げ」

元の木阿彌(モクアミ)【句】『天正軍記に「南都の市中に、盲人木阿彌あり。筒井順昭、病篤きに臨み、老臣を枕上に召していふやう、嗣子なほ幼し、我死なば、敵國來り攻むべし、盲人木阿彌、その音聲、我に甚だ似たり、宜しく、彼を延きて、寢所に置き、我の如くに事へて、外樣(ヤウ)の者に見しめよと、即ち木阿彌を召し、すべて遺言の如くせしが、嗣子長ずるに及んで、木阿彌、又、もとの市人となりぬ」とあり』一時榮えたる者、再び元の如くに衰ふる譬。〔諺語〕

元の木庵(モクアン)【句】前條の訛。〔諺語〕

元の木椀(モクワン)【句】「元の木阿彌」の訛。〔諺語〕

本の男【名】前に連れ添ひし夫(ツマ)。一旦離別したる夫。したを。 和名「前夫、之太乎。一云、毛止乃乎止古」

元へ【句】『動作を元へ戻せとの義』一度下したる命令を直ちに取り消さんとする時、號令として用ふる語。

元を入る【句】元手として注(ギ)込む。資本を投ず。元を掛く。

元を掛く【句】前條に同じ。

もと 下【名】『**もと**(本)㊀の轉義』㊁下の處。あたり。「本」 源氏「障子(シヤウジ)のもとにぞ出でたまふ」 同「立寄らん蔭と頼みし椎がもと空しき床となりにけるかな」 ㊂從屬すること。した。配下。 ㊃次條を見よ。 ㊄のち。後の世。「百世の下」

一言の下に斥く【句】考慮を待たず一言にて輒ちこれを斥く。

もと 許【名】『前條の語㊁の轉義』居る處。在る處。がり。 萬葉「かる白は田ぶせのもとに吾が背子はにふぶに笑みて立ちませり見ゆ」

もと 元【副】以前に。はじめに。さきに。むかし。 後撰「夕闇は道も見えねど古里はもと來し駒に任せてぞ來る」

もと 本【助數】㊀草木の數にいふ。株。本(ホン)。 萬葉「一もとの撫子植ゑしその心誰に見せむと思ひそめけむ」 夫木「同じくは千もとを引かん姫小松君がよはひは數にまかせて」 ㊁鷹などの數にいふ。羽(ワ)。 醒睡笑「大鷹、一もと、遙(ソ)れて來たり」

もと-あら 本疏【名】本立(ケモノ)の疎(ソ)なること。 好忠集「わが宿のもとあらの櫻咲かねども心をかけて見ればたのもし」 古今「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」

もと-いんぎん 元印銀【名】德川幕府にて、元和五年より正德年間まで發行せし印銀。その一匁は、錢凡そ六七十文に通用し、寶曆十一年、通用を禁ぜり。

もと-いれ 元入【名】『元を入る』を見よ』元手として注(ギ)込むこと。

もといれ-しほん 元入資本【名】〔商〕商店の營業主及び會社の社員・株主などが、その營業の元入として出す資本。形は、金錢・商品・土地・家屋・勤勞など、一樣ならず。(借入資本に對して)

もど-いろ 本色【名】もとよりの色。元來の色。貫之集「世の中に久しきものは雪の中にもと色變へぬ松にぞありける」

もど-うしなひ 元失【名】元手を失ふこと。譬「木(キ)一倍、元失」

もど-うた 本歌【名】**ほんか**(本歌)に同じ。

もど-うた 本唄【名】替唄の本なる唄。

もど-え 元え【名】『形、漢字の「元」の字に似たるよりいふ』平假名の「え」の字。

もど-かうぢ 本麴・元麴・酝麴【名】本國の製造に用ふる麴。

もど-かき 酝搔【名】清酒の醸造に於て、山卸の後、半切桶の中の物を攪拌して溶解を助くること。**ひらがい**(平櫂)參照。

もどかし 抵牾し【形一】■**もどくべくあり**。批難すべくあり。氣にくはず。〔古語〕然「わびしげなる車に、裝束わろくて物見る人、いともどかし」■思ふとほりにならずして、いらだたし。ぢれったし。榮花「さらぬが、これをももどかしげに思ひて、心のかぎりは劣るべき事かは」

もど-かしがる 抵牾しがる【動四他】もどかしと思ふ。ぢれったく思ふ。まちどほしがる。芭蕉「時雨をやもどかしがりて松の雪」

もど-がしは 本柏【名】■柏の古葉の、冬になりても落ちずに著きてあるもの。大嘗會の時、天皇、その葉に酒を浸して、神饌に灑ぎたる上、その葉を、神饌の上に置く。古今「石上(イソノカミ)ふるから小野の本がしはもとの心を忘られなくに」■もとよりの、主要なるもの。狭衣「おほきおとどの御方は、中のこのかみにて、もとがしはにおはすれど」

もと-かた 本方【名】■神樂の樂(ガク)にて、本(モト)に屬する人人。(末方(スエカタ)に對して)神樂歌「本方、於介(オケ)」■卸賣する店。おろしや。問屋。〔元方〕■資本を出す方の人。資本家。〔元方〕

もとかた-かねぶぎやう 元方金奉行【名】金錢の取締を掌りし金奉行。(拂方金奉行に對して)**もとはらひかねぶぎやう**(元拂金奉行)參照。

もとかた-どうしん 元方同心【名】元方金奉行の下役の同心。(拂方同心に對して)

もとかた-なんどがしら 元方納戸頭【名】**なんどがしら**(納戸頭)を見よ。**もとはらひなんどがしら**(元拂納戸頭)參照。

もとかた-なんどくみがしら 元方納戸組頭【名】元方納戸頭の下役たりし納戸組。(拂方納戸組頭に對して)

もとかた-なんどしゆう 元方納戸衆【名】元方納戸頭に屬せし納戸衆。(拂方納戸衆に對して)

もどかはし 抵牾はし【形一】**もどかしに**同じ。運歩色葉集「戾敷・鈍敷、モドカハシク」

もど-き 本木・幹木【名】■木の、幹又は根の方。(末木(ウラ)に對して)夫木「見れば かつ本木の花は散りはてて八重咲きかはるつぎ櫻かな」■嘗て關係ありし相手の者(主に、男女・主從等の間にいふ)。本木に優(サ)る末木(ウラ)無し【句】幾回取り代へても、結局、最初に關係ありし者よりすぐれたる者は無し(主に、男女・主從の間にいふ)。〔諺語〕

もどき 抵牾【名】■**もどくこと**。批難源氏「世のもどき負ひぬべき事なりなど、みけしき惡しければ」■或物に自然に似、又はことさらに擬ふること、又、その似又は擬へたる物事。(或名詞の下に附けて、複合語として用ふ)。〔擬〕和合人「諸國行脚の旅僧もどきに」■齒のこまかなる鋸。

もどき-がほ 抵牾顔【名】もどかんとする顔つき。もどきたるらしき樣子。夫木「風にあへずしてしをるる野べの草の葉をもどきがほなる庭の菊かな」

もどき-どころ 抵牾心【名】もどく心。批難する心もち。榮花「物知らぬ人のもどき心、やましくもおぼしぬべき事なれども」

もどき-しやうざう 本木昌造【名】〔人〕我國活字製造の元祖。名は永久、悟窓と號す。肥前國長崎の人。嘉永中、露船の長崎に來り、又、伊豆に難船するや、常にこれが通譯となり、又、夙に活字の製造に

心を潛め、人を上海に派して、英華書院に就きて、その術を知らんと欲したれども、目的を達せず、米人ガンフルの、英華書院を罷めて歸れるを知り、米國傳道師フルベッキを介して、これを聘し、始めて、長崎に活字鑄造及び電氣版の業を起し、後、明治五年、門人平野富二と、活字版を東京築地(ツキジ)に設けしもの、即ち今日の築地活版所の基なり。明治八年歿す。同四十五年、從五位を贈らる。

もど-きん 元金【名】■商工業を營む資本金。もとできん。もとで。もと。資本金。■金錢を貸借する時の、その貸借の金。本金(ホンキン)。元金。(利息に對して)

もど-ぎん 元銀【名】**もときん**(元金)に同じ。〔德川時代の語〕

もどく 【動四他】『語源上、**もどす**(戾す)と關係あり、即ちさからひて善き方へ戾す義』然らず、正しからずと思ふ。批難す。然「人の上をもどき」榮花「過ぎにし事も、今の事も、しどけなく、斯く所所に書きとどむるは、ただなるよりは、人にももどかれんとなるべし」

もど-くび 本頸・元首【名】頸の根もと。曾我會稽山「雁股(マカリ)早く飛鹿(シカ)の元首射切る安田の三郎」

もど-こ 元子【名】元金と利息と。元利(ガン)。本子(ホンシ)。母子(ボシ)。甲陽軍鑑「皆借用致し、暮に御算用あり、……、元子ども進上申し候」

もど-こ 左右【名】『許(モト)處(コ)の義』**もとこ**(許)に同じ。〔古語〕紀「天皇愛レ之、引二置左右一……ミモトコニ……」

もど-ごえ 基肥・原肥【名】〔農〕作物を栽培するに、基本的養料を供給するために、最初、多量に施す肥料。ねごえ。(追肥(ツイヒ)に對して)

もどこ-びと 左右人【名】左右に侍る人。おもとびと。侍者。近習。〔古語〕紀「左右、モトコビト」

もど-ごめ 元込【名】銃砲の、火門より彈丸を裝塡すること、又その裝置なる銃砲。後裝(ザウ)。(先込に對して)

もどごめ-じゆう 元込銃【名】**こうさうじゆう**(後裝銃)に同じ。

もどし 戾【名】戾すこと、又、その金品。返「戾。

もどし-うんちん 戾運賃【名】〔商〕『英Drawback』一旦收入したる運賃の割戾をなすこと。約定戾と臨時戾との二種あり。各條を見よ。もどしきん。「略。

もどし-かはせ 戾爲替【名】〔商〕次條の

もどし-かはせてがた 戾爲替手形【名】〔商〕**さいてがた**(再手形)に同じ。

もどし-ぎ 本敷【名】〔商〕**ほんじき**(本敷)に同じ。〔取引所の語〕

もどし-きん 戾金【名】■拂ひ戾す金。■〔商〕**もどしうんちん**(戾運賃)に同じ。

もどし-げぎ 本滋【名】催馬樂(サイバラ)の呂の曲の一。

もどし-げどう 本重籐・本滋籐【名】重籐の一種。握(アクセ)より下の半分は、常の重籐と同樣にし、上半は鏑籐(カブラ)と矢摺籐(ヤスリ)との外を、すべて黑く塗り籠めたるもの。太平記「長崎惡四郎左衞門尉は、……本滋籐の弓の眞中握りて、小路を狹しと歩ませたり」

もどし-ぜい 戾稅【名】『英Drawback』一旦內國稅を賦課せられたる貨物が輸出せらるる場合、又は、原料として輸入せられたる貨物が、加工品として輸出せらるる場合に、その賦課せし內國稅又は輸入稅を、納付者に拂ひ戾すこと、又、その稅金。內國產業保護の精神に出でし制度なり。

もどし-てがた 戾手形【名】〔商〕**もどしかはせてがた**(戾爲替手形)に同じ。「す荷物。

もどし-に 戾荷【名】到著先より送り戾

もどし-の 本篠【名】蘆などの幹を、末葉(ウラ)に對していふ。堤「冬寒み末の枯葉も落ちはてて本しのばかり立てる蘆かな」

もど-しの び 元偲・元忍【名】「世は本しのび」を見よ。「(再保險)に同じ。

もどし-ほけん 戾保險【名】〔商〕**さいほけん**

もど-しめ 元締・元〆【名】■金錢の勘定などにつきて、大もとの締括(クヽリ)をする役目、又、その人。■博徒などの親分。〔子分よりいふ語〕

もとじめ-くみがしら 元締組頭元〆組頭【名】鐵砲玉藥奉行に附屬して、同奉行配下の同心を率ゐし役。

もとじめ-てだい 元締手代・元〆手代【名】德川幕府の制度にて、各代官に附屬し、手代の上に位して、事務を分掌せし役。定員二人。

もとじめ-やく 元締役・元〆役【名】元締たる役目。

もと-じろ 本城【名】**ほんじやう**(本城)に同じ。

もと-じろ 本白【名】矢羽の、本の方の白きもの。平家「白箙(ハツヒ)に、鶴の本白、鵠(クヒ)の羽割合せてはいだる」盛衰記「十五束の箙箙(ハツヒ)に、鷲の羽、鷹の羽、鵰の本白、嬌(ヤ)合せたる箭を以て」

もとす 本巣【名】〔地〕美濃國十五郡の一。郡役所を北方(カタ)町に置く。

もどす 戻す【動四他】『もどく參照』一戻るやうにす。始へ返す。かへす。返戻す。返還す。二へどをつく。はく。嘔吐す。

もとす-と 本栖湖【名】〔地〕甲斐國西八代(ニシヤ)郡にある湖。富士八湖の一。周回約三里。富士西北の裾野と御阪(カサ)山脈との間に生じたる停溜湖。もと西湖(ウミヒシ)・精進湖(ウミヤサ)と連なりて、半環狀の一大湖たりしが、貞觀六年の噴火に際し、熔岩のために分離せらる。

もと-すみよし 元住吉【名】〔地〕**すみよし**(住吉)三を見よ。

もと-ずり 酰摺【名】**やまおろし**(山卸)に同じ。

もと-すゑ 本末【名】一主要なる物事と、瑣末なる物事と。根本と枝葉と。ほんまつ。源氏「はかなき事をも、もとすゑを取りて言ひかはし」二高く長き物の下部と上部と。古今「梓弓引けばもとすゑわが方によるこそまされ戀の心は」三歌の上の句と、下の句と。然「歌のもとすゑ問ひたるに」四神樂などの樂(ガク)の、本の方と、末の方と。太平記「風俗(フゾク)・催馬樂(サイバラ)、……、呂律を調べ、本末を返して、數反歌はせたまひたりしかば」

本末を知らず【句】その道を知らず。十訓「彼、弓矢の本末知らず、敵にあたはねども、さりとて、さて止まんは、安からず覺ゆ」

もと-ぞなへ 本備【名】陣立に、大將の居る所。本陣。(外備(ソトゾナヘ)に對して)

もと-ぞろひ 本揃【名】昆布三十枚を、本の揃ふやうに一把として、三箇所を屑昆布にて結びたるもの。北海道渡島國の名產。「にしたる昆布。

もと-ぞろひ-とんぶ 本揃昆布【名】本揃

もと-だか 元高【名】〔數〕元金又はこれに相當するものの金額。

もと-だち 本立【名】草本の根もとの生ひ立てる狀態。源氏「ふる川の松のもと立知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」同「前栽のもと立も、涼しうしなし」

もと-だて 本立【名】もとゐ。原因。一代男「世之介も、小兵衛も、横手を打つて、面白の春邊やな、あつばれ口舌(クゼ)のもとだて」「料。

もと-だね 元種【名】元にするたね。原

もと-ち 元地【名】もとの土地。

もと-ちやう 元帳【名】**そうかんぢやうもとちやう**(總勘定元帳)の略。

もと-ちやう-ざんだか 元帳殘高【名】總勘定元帳に於ける、各勘定科目の差引殘高。

もと-ちやう-ざんだかちやう 元帳殘高帳【名】元帳殘高を一覽する便に供するために調製する帳簿。

もと-づく 基く・本づく【動四自】『本附くの義』基(モト)とす。起る。はじまる。因る。基因す。

もと-つ-くに 本國【名】「本(モト)の國」に同じ。〔古語〕紀「桑梓、モトツクニ」

もと-つ-こ 元子【名】**もとね**(元値)に同じ。元つ子になる【句】「元値(ネ)になる」に同じ。浮世風呂「薯蕷(イモイ)にべえなっちやあ、元直(ツミ)にならねえ」

もと-つ-は 本葉【名】**もとば**(本葉)に同じ。續拾遺「榊取る卯月になれば神山の楢の葉がしはもとつ葉も無し」

もと-つ-ぱやり 本流行・元流行【名】問屋の賣行よきため、元値の高きこと。浮世風呂「四目(ヨツ)へ往って見ねえ。本っぱやりで、からっきり買附けられねえ」

もと-つ-ひと 元人・本人【名】昔馴染の人。もと連れ添ひし者。〔古語〕萬葉「つるばみの衣解き洗ひまつち山もとつ人にはなほ如かずけり」同「ほととぎすなほも鳴かなむもとつ人かけつつもとな吾(ア)をねし哭くも」

もと-つ-め 本妻【名】**ほんさい**(本妻)に同じ。〔古語〕字鏡「嫡、牟加比女。又、毛止豆女」

もと-つ-め 元妻【名】「元(モト)の妻(メ)」に同じ。〔古語〕好忠集「もとつめに今は限と見えしより誰れ馴らすらんわが臥し床」和名「前妻、毛止豆女」

もと-つめ 本詰【名】一相撲(スマヒ)の手の一。竹齋物語「すまひのとりてには、……大ごし・もとづめ・むかふづき」二瓶詰などの、製造元・釀造元などにて詰めたるもの。

もと-て 元手【名】一**もとぎん**(元金)三に同じ。狂言「俄道心」「元手は無し、商はならず」二事を爲して、利益を得る根本となる長所。苦鳳俗色道の太鼓持、心永う、物事堪忍强ぎが元手なるべし」

もと-て-いらず 元手不入【名】元手の金を要せぬこと。「元手入らずの商賣」

もと-て-きん 元手金【名】**もとぎん**(元金)一に同じ。

もと-てだい 元手代【名】德川幕府の制度に於ける郡代・代官の配下なる手代の、休職となりたるもの。「と。

もと-どぼり 元通【名】以前と變らぬこ

もと-どり 髻・本鳥【名】本取の義にて、頭髮の根本を取り上げて結ふよりいふ。鳥は假借の義』髮を頭上に總べ束ねたる部。たぶさ。たぶさ。和名「髻、毛止止利」著聞「毎日、本鳥を取りて、今日や切られんずらんとぞ待ちける」

髻の綸旨【句】昔、戰時に、小き紙片に細字にて記し、敵に見あらはされぬやうに、使者の髻の中に隱して持ち行かしめし綸旨。

髻を切る【句】出家す。僧となる。元結(ユモヒ)を切る。元結を拂ふ。盛衰記「さしもの邪見を改めて、菩提心を發(コヤ)し、本どり切りて、文覺が弟子となる」

髻を放つ【句】冠・烏帽子などをかぶらず、髻を人目にさらす。禁秘抄「主上朝夕、不ノ放二御本鳥一」大鏡「御車のしりロの簾、皆上げて、三所ながら、御もとどり放ちておはしましけるは」

もとどり-はなち 髻放【名】『前條を見よ』冠・烏帽子などをかぶらず、髻を人目にさらすこと。盛衰記「あまりに强く突かれて、度を失ひ、烏帽子も取らず、本どりはなちにて、阿容阿容(オオ)と這ひ起きて」

もと-な 元無【副】『こころもとなし(心元無し)と關係ある語なるべし』何故とは知らず氣にかかりて。やるせなくて。一說に、いたづらに。〔古語〕萬葉「目間(カヒ)にもとなかかりて安寢(イネ)しさぬ」同「あひ見ずば戀ひざらましを妹を見てもとな斯くのみ戀ひばいかにせむ」

もとな-いし 元名石【名】安房國保田(ホタ)町大字元名より產出する凝灰岩。

もと-なり 本生・本成【名】草木の莖の、根に近き部分に、實の結ぶこと、又その實。先の方のに比ぶれば、早く結び、味もすぐれたる意にて、特に言ふ。(末生(ナリ)に對して)

もと-なれ 本生・本成【名】前條の轉訛。萬葉千紅「いつはりの無き世なりせばもとなれの西瓜の皮に穴を明けまじ」

もと-ね 元値・元直【名】商品の、元方(トモク)より仕入るる時の値段。もと。もとつこ。原價。(賣値(ネウリ)に對して)

元値が切れる【句】賣値(ネウリ)が、元値より低くて、損失となる。元が切れる。

元値が引込む【句】前條に同じ。

元値になる【句】賣値(ネウリ)が、元値の金額に達す。元になる。

もとのぶ 元信【名】〔人〕**かのうもとのぶ**(狩野元信)を見よ。

もと-の-もくあみ 元杢網【名】〔人〕狂歌の名人。武藏國松山の人。姓は渡邊、通

稱は大野屋喜三郎。後、平七と改む。元歪網は戯號。別に落栗庵とも號す。江戸京橋北紺屋町に住みて、湯屋を營業とす。晩年、淺草花川戸に移り、文化八年六月歿す。年八十。

もと-は 本葉【名】莖又は幹の、根に近き部分に生ひたる葉。もとつは。(末葉(ウラ)に對して) 萬葉「さ夜ふけて時雨(シグレ)な降りそ秋萩の本葉のもみぢ散らまく惜しも」

もと-はぎ 本矧【名】矢の、矢羽の下のくきを卷きたる部分。(末矧(ウラハギ)に對して) 本矧の節(フシ)【句】矢幹(ヤガラ)の節の一。「こね(箭根)を見よ。

もと-はこね 元箱根・舊箱根【名】【地】は

もと-はず 本弭・本筈【名】弓の弭の、射る時、下になる方のもの。下方の弓弭(ユミハズ)。(末弭(ウラハズ)に對して) 盛衰記「弓の本はず」 太平記「弓の本筈・末筈とりちがへ」

もと-ばらひ 元拂【名】運賃などを、發送地にて、發送人の支拂ふこと。(先拂に對して)

もとばらひ-うんちん 元拂運賃【名】【商】荷物の發送地にて、發送人の支拂ふ運賃。(先拂運賃に對して)

もとばらひかた-なんどがしら 元拂方納戸頭【名】もとばらひなんどがしら(元拂納戸頭)に同じ。

もとばらひ-かねぶぎやう 元拂金奉行【名】元方金奉行と拂方金奉行との併稱。

もとばらひ-なんどがしら 元拂納戸頭【名】元方納戸頭と拂方納戸頭との併稱。

もと-ひ 元結【名】もとゆひ(元結)の略。もつとひ。

もと-ひき 元引【名】㊀元手の金を差し引くこと。㊁本來の數だけを差し引くこと。 持統天皇紀軍法「七十に及んで、元引したる、この命」(人の壽命を「人生七十古來稀」といふにより、七十歳以上は餘れる命なりとしていへり)

もとひ-ぎは 元結際【名】もとゆひぎは(元結際)の略。 天の綱島「もとひ際より、我が黒髪、ふっつと切って」

もとひ-ばこ 元結箱【名】もとゆひばこ(元結箱)の略。

もと-ひやうし 本拍子【名】「本の拍子」に同じ。 著聞「御神樂行はれけるに、……本拍子、德大寺左府、納言にて取りたまひけり」

もと-ぶ 元歩【名】元高と歩合(ブアイ)高と。

もとぶ-がふがく 元歩合額【名】【數】元高と歩合高との和。「條に同じ。

もとぶ-がふだか 元歩合高【名】【數】前

もとぶ-さがく 元歩差額【名】【數】元高と歩合(ブアイ)高との差。「に同じ。

もとぶ-さだか 元歩差高【名】【數】前條

もと-ぶね 本船・元船【名】㊀小船の附屬せる大船。ほんせん。(枝船(エダブネ)に對して) 俳諧新選(乞食)「本船の陰に小船の涼みけり」 ㊁沖に居りて、靜(ヤスク)によりて、陸上と交通する大船。ほんせん。(上荷船(アガリブネ)に對して) 一代女「川口に西國船の碇おろして、我が古里の嬬思ひやりて、……、外より見るも構はず、元ぶねに乘移り」

もとぶね-わたし 本船渡【名】【商】『英 Free alongside ship』賣買したる商品を、船舶の入港したる時、その船艙に積み込みたるままにて、荷受人の、艀舟を用意し來りて受け取るによりて終了する引渡(ヒワタシ)。おきわたし。(現場渡・甲板渡・停車場渡などに對して)

もと-へ 本方【名】もとの方。下の方。(末方に對して) 記「もとへは君を思ひて末へは妹(イモ)を思ひて」 萬葉「三諸(ミモロ)は人の守(モリ)る山もとへは馬酔木(アシビ)花咲きすゑへは椿花咲く」

もとほし 回・廻【名】㊀もとほすこと。㊁もとほり(回)㊂に同じ。 字鏡「衿、己呂毛乃久比乃毛止保止」 新六「御狩場の眞白の鷹のもとほしはうき世にめぐるしわざなりけり」 もとほしの袍【句】「まつはしの袍」に同じ。 壒嚢「闕腋に平胡籙(ヒラグヒ)。もとほしの袍に、革總の劍など、おもひおもひなり」

もとほす 回す・廻す【動四他】もとほるやうにす。めぐらす。まはす。 古語 記「神祝(カムホギ)ほぎくるほし豐祝(トホギ)ほぎもとほしまつりこし御酒(キ)ぞ」 萬葉「みこの柴垣やふしまりしまりもとほし」

もと-ほとぎす 本時鳥【名】古馴染の時鳥。毎年來て鳴く時鳥。 古語「あをによし奈良の都はふりぬれどもとほとぎす鳴かずあらなくに」

もとほり 回・廻【名】㊀もとほること。㊁まはり、めぐり。へり、附近、周圍。もとほし。 古語 萬葉「ありつつも見したまはむぞ大殿のこのもとほりの雪な踏みそね」 ㊂鷹狩に用ふる鷹の脚に取り附くる紐の金具。もとほし。 和名「旋子、毛度保利」

もとほる 回る・廻る【動四自】めぐる。まはる。徘徊す。たもとほる。 古語 紀「和羊、モトホリアソビ」 萬葉「大殿をふりさけ見つつ鞦なすい這ひもとほりさもらへどさもらひかねて」

もとほろふ 回ふ・廻ふ【動四自】前條に同じ。 古語 記「大石(オホイシ)に這ひもとほろふ細螺(シタダミ)の」

もとみつ 基光【名】【人】ときもとみつ(土佐「じ。基光)を見よ。

もと-みや 本宮【名】ほんしや(本社)に同じ。

もと-む 求む【動下二他】『目(ノ)求(ト)む の轉か』 ㊀尋ね探す。探訪す。とむ。 萬葉「まつがへりしひにてあれかもさ山田をぢがその日にもとめあはずけむ」 ㊁興へんこと又は許さんことを請ふ。望む。請求す。 萬葉「悔しくも老いにけるかもわがせこが求むる乳母に行かましものを」 ㊂自らその身に有害なる結果を來すべき行をなす。自ら災を招く。殺生石(謡曲)「かく恐ろしき殺生石とも知ろしめされて、御僧達は求めたまへる命かな」 ㊃買ふ。購ふ。購求す。 狂言(末ひろがり)「末ひろがりを……、上方(カミガタ)へ上り、急いで求めて參れ」

求めよ、然らば與へられん【句】『新約全書の馬太(マタイ)傳に出づ』神に祈りて、心の平和を得んとする者は、神よりこれを與へらるべし。「よ。 諺語

もと-むら 本村【名】ほんむら(本村)を見

もとめ 求【名】㊀探し求むること。㊁請ひ求むること。請求。要求。需要。 需 ㊂購ふこと。購求。

もとめ 求馬【名】東百官(アヅマツカサ)の一。

もとめ-うしなふ 求失ふ【動四他】失ひて、搜探し求むれども、得ず。見失ふ。 讀古今「念珠を求め失ひて、あらたに袈裟にまつはりてありけるを見て」

もとめ-こ 求子【名】東遊(アヅマアソビ)の歌曲の一。 舞は駿河舞、求子」 大鏡「求子を、袖のけしきばかりつかうまつり給ひて」

もとめ-づか 求女塚【名】㊀攝津國武庫(ムコ)郡にある古墳。すべて三個所、一は御影(ミカゲ)町の東北にありて西面し、一は仁吉村大字東明(ヒガシ)にありて南面し、一は西灘(ニシナダ)村大字味泥(ミドロ)にありて東面し、何れも、前方・後圓の形をなし、相隔たること、各約十五町。處女(オトメ)塚といひしを訛れるにて、古、この地の一美人、二男子に眷戀せられ、終に、池中の水禽を射たる者に嫁せんと約せしに、二人共にこれを射て、優劣を分ち得ざりしより、女、終に身を投じて死し、二人の男も、悲嘆の餘、亦、續いて投身して死せし由の傳說ある、(萬葉集卷九・卷十及び大和物語等に見ゆ)、その遺骸を葬りし處にて、中央の、が處女のなりと云ふ。三墳の內、阪神電車敷設の時、御影町のは壞たれて畑となり、東明のは一部分削られ、味泥のは、私人の所有地となれり。 ㊁謡曲の一。前項の二女・二男の傳說を作れるもの。古名、處女(オトメ)塚。

もとめ-て 求めて【副】『もとむ(求む)㊂を見よ』他の依賴に依らず、自ら進みて。好みて。

もとも 尤・最・取【副】『最は最の誤用』もつとも(尤)に同じ。 竹取「をかしき事にもあるかな。もともえ知らざりけり」 榮花「もとも女房いと多かる殿に、參り添ひて多かれは、とどまる人ぞ多かりける」

もと-もと 元元【名】賣値(ネリ)の、元値(ドモキ)に相當すること。損も得もなきこと。

もと-もと 元元【副】もとより。元來。俗曲(恨葛籠襦衣)「盡せし忠義も現れて、又、元元の主從になられませうと」

もと-ゆひ 元結・髻【名】髻(モトリ)を括るに用ふる緒。古は組絲又は麻絲を用ひ、德川時代の初頃より後は、水引㊁と同樣の形にて、紡車に掛けて、幾回も撚(ヨリ)を施し、糊を塗りたる紙撚(ヨリ)を用ふ。後者は、普通は白色なれど、松烟にて黑く染めたる黑元結、赤・靑・綠などの色元結、又、金元結、銀元結などもあり。こひねり。もっとひ。和名抄「髻、毛度由比。以レ組束レ髮也」禁秘抄「御本結紫絲也」

元結を切る【句】「髻(モトリ)を切る」に同じ。謠曲(永無瀧)「元結切り、かやうの姿と龍成りて候ふ」狂言(御冷)「元結切り、法名を西行と申すが」

元結を拂ふ【名】前條に同じ。若風俗「その座にして髻を拂ひ、惜しや、十九、田家の望」

もと-ゆひ-がみ 元結紙【名】紙撚(ヨリ)の元結の心(芯)とする紙。純粹の楮の皮にて薄く製し、なほその纖維の縱の方向に揃ひ並ぶやうにして製し、指先にて細長く裂きて、强き紙撚とし、元結に製す。

もと-ゆひ-ぎは 元結際【名】髻の、元結の結際(ムスビ)。もとひぎは。平家(石童丸)も、これを見て、元結際より髮を切る」

もと-ゆひ-ぐさ 元結草【名】ちまき(茅卷)の異稱。禁秘抄「年ごとに忍ぶの池に袖ひぢてもとゆひ草の草をこそ刈れ」

もと-ゆひ-ばこ 元結箱【名】元結を入るるに用ふる箱。

もとよし 本吉【名】〔地〕陸前國十四郡の一。郡役所を志津川町に置く。

もと-よしはら 元吉原【名】〔地〕よしはら(吉原)㊁を見よ。

もと-より 素より【副】初より。以前より。舊來。元來。枕「もとよりのよすがなどもあれば、しげうしも得來ぬを」源氏「打添へて、もとよりの憎さも立出でて」

もと-より 固より【副】言ふまでもなく。勿論。

もどり 戻【名】㊀もどること。㊁我家へ歸ること、又、その時、又、その道。もどりみち。かへりみち。歸路。俳諧新選(雲魚)「茸狩の戻は遠き山路かな」㊂釣針の端に、物を刺して引き掛くる爲に、逆の方向に尖りてある部分。㊃〔商〕下落したる相場の回復すること。〔取引所の語〕

もどり 翻筋斗【名】『前條の語の轉義。一回轉して、前の狀態に戻るよりいふ』もんどり(翻筋斗)に同じ。

もどりを打つ【句】「もんどりを打つ」に同じ。著聞「鞠を足に載せて、その板敷を蹈まずして、山雀(ガラ)のもどり打つやうに飛返られける」

もどり-あし 戻足【名】㊀家に歸る時の足の運(ハコビ)。千兩蹴「岩川が、胸のもやくさっぱりと、わが家へ歸る戻足」㊁〔商〕下落したる相場の、再び騰貴せんとする模樣なること。〔取引所の語〕

もどり-うま 戻馬【名】荷物、又は客を送り屆けて、戻りがけの馬。鶉衣(旅賦)「三文ねぎりて、戻馬にはぐれ」

もどり-うり 戻賣【名】〔商〕相場の戻を見込みて賣ること。「に同じ。

もどり-がけ 戻掛【名】かへりがけ(歸懸)に同じ。

もどり-かご 戻駕籠【名】㊀客を送り屆けての戻りがけの駕籠。㊁次條の略。浮世床「戻駕を語る所が、先生、讀めねえときてゐるから」

もどりかご-いろ-にあひかた 戻駕色相肩【名】『天明八年初演の時の俳優の一人なる初代中村仲藏が、大坂より江戸に戻り來りしをも當て込みての名』常磐津節の歌曲の一。駕籠舁吾妻の與四郎、實は眞柴久吉、駕籠舁難波の次郎作、實は石川五右衞門、島原の傾城文車の禿たよりを、戻駕籠に乘せて來り、柴野に駕籠を立てて、次郎作は大阪の新町、たよりは京の島原、與四郎は江戸の吉原の樣を振(ウ)にて話すを筋とし、三都三樣の廓の樣を描き分けて、踊を主としたるもの。櫻田治助の作。

もどりかはせ-てがた 戻爲替手形【名】手形の償還請求權を有する者が、その請求を爲す代りに、義務者に宛てて、新たに振り出す手形。一覽拂とす。「に同じ。

もどり-ぐさ もどり草【名】〔植〕をひじほ

もどり-ぐるま 戻車【名】客を送り屆けての戻りがけの人力車。

もどり-ざま 戻樣【名】戻る時。もどりがけ。一代男「亭主に一包はづむ、宇兵衞が戻りざまに、金の出し樣が早いと叱れば」

もどりばし 戻橋【名】㊀京都市上京區一條通堀川に架れる橋。三好清行、疾篤と聞き、その子淨藏、熊野參詣より歸りしに、清行既に死し、この橋に至りて、葬送に會せしかば、棺を橋上に留めて祈りしに、清行蘇生し、遂に共に家に歸れりとの傳說ありて、橋の名もこれより出づと傳へらる。傾城酒呑童子「誰が、堀江で水高き矢を射る如き川の瀨を、戻橋とは附けぬらん」㊁常磐津節の歌曲の一。洛中に惡鬼出で、夜に入りては、往來の人も無き頃、渡邊綱、源頼光の使となりて、一條戻橋にさしかかりし時、惡鬼、扇折の娘となりて現れしより、綱悟りて、送り屆けんと言ひ出で、娘は途にて、綱をたらしかかるを、妖魔ならんと星を指せば、忿怒の相を顯して、綱の襟髮掴みて、虛空に引き上げんとするより、綱、頼光より預かりたる髭切の太刀にて、鬼の腕を切り拂ひて、北野天滿宮の廻廊に墜落し、鬼は密雲の中に光を放ちつつ消え失すといふ筋。踊を主とす。古河默阿彌の作。明治二十三年十月、東京の歌舞伎座にて、始めて演じ、爾來、新古演劇十種の一に數へらる。

もどり-ぶね 戻船【名】荷物又は客を目的地へ送り屆けての戻りがけの船。歎蓑記「船に乘つて上りたりけるが、下りける戻船に乘せて」

もどり-みち 戻道【名】㊀かへりみち(歸道)に同じ。㊁道をまちがへたるために、後戻(アトモ)すること。

もどる 戻る・悖る【動四自】そむく。さかふ。道にそむく。理に逆ふ。紀「傲俱、モトリイスカシテ」

もどる 戻る【動四自】『もと(元)に語尾の添ひたるもの』㊀進みたる者、元の位置に返る。あともどりす。㊁我家へ歸る。蕪村「連歌して戻る夜鳥羽の蛙かな」㊂嫁したる女、離緣となりて、實家に歸る。出戻(アトモ)となる。㊃元の狀態に歸る。舊に復す。回復す。俳諧古選(超雪)「又水に戻るも早し初氷」㊄得たる金、費えてなくなる。長町女殺切「夜なべさしよにも、この油の高さでは儲ける程、皆戻る」

もどろ 斑【名】『まだら(斑)の轉』亂れたる文(アヤ)。〔古語〕夫本「御狩するかきの根すりの衣手に亂れもどろにしめるわが戀」

もどろかす 斑かす【動四他】㊀斑にす。もどろくやうにす。〔古語〕枕「あをいろの、くれなゐの、衣(メキ)すりもどろかしたる水干・はかま著て」㊁まぎらす。まぎらはす。〔古語〕

もどろき 斑【名】もどろくこと。〔古語〕類聚集「風をいたみ玉積む舟のもどろきは君ばかりこそまほに定めし」

もどろく 斑く【動四自】㊀斑になる。〔古語〕㊁亂れまぎる。〔古語〕空蟬「我をはからしめんとて、もどろかしむるにあらずや」

もどろく 斑く・文く【動下二他】もどろかす㊀に同じ。〔古語〕紀「文」身、ミヲモドロケ」

もど-わたり 元渡【名】こわたり(古渡)に同じ。五人女「庭藏見れば、元渡の唐織、山をなし、伽羅(ラキ)、掛木の如し」

もど-ね 基【名】『元居の義』㊀いしずゑ(礎)㊁に同じ。榮花「金・銀の棟、金色の扉、水精(ヤスリシ)のもとね」㊂物事の本づく所。根據。土臺。基礎。基因。

もとをり 本居【名】もとをりのりなが(本居宣長)の略。浮世風呂「本居信仰にて、古(ニ)ぶりの物學などすると見えて」

もとをり-うちとほ 本居內遠【名】〔人〕國學者。尾張國濱田の人。本姓は濱田氏。久次郎高國といひ、後、彌四郎高國と改

む。木綿垣(ガキ)・榛園(キヤリノ)と號す。植松有信・鈴木眼・市岡猛彦・本居大平等に古學を學び、天保二年、本居大平の第三女藤子に配して、その養嗣子となり、名を內遠と改め、四年、大平の歿後を承けて、紀州侯に仕ふ。安政元年、命により江戸に下り、諸生を教授し、二年、赤坂の藩邸に歿す。年六十四。長子豐穎(カヒヨ)、文學博士を授けらる。

もとをり-おほひら 本居大平【名】〔人〕國學者。伊勢國松阪の人。稻懸棟隆の子。父と共に本居宣長の門に學び、茂穗と稱し、後、大平と改む。家の名を藤垣內(カツチヅ)といふ。寛政十一年、宣長の猶子となり、享保元年、宣長歿するや、長子春庭盲目のため、入りて、學統を繼ぎ、因りて本居氏を冒し、通稱三四右衞門と改め、紀州侯に仕ふ。天保四年歿す。年七十八。

もとをり-しんじや 本居神社【名】やまむろやま(山室山)を見よ。

もとをり-のりなが 本居宣長【名】〔人〕國學者。賀茂眞淵の門人。伊勢國松坂の人。小津三四右衞門の子。幼名は富之助。早歳京都に出でて、堀景山に漢學を、武川幸順法眼に醫を學び、寶曆七年、二十八歳にして、醫を開業し、春庵また舜庵と號す。國書渉獵の間、賀茂眞淵の說に服し、眞淵の松坂に來りし時、訪ひて、師弟の約を結び、三十三歳、妻を娶り、三十五歳にして、古事記傳の稿を起し、五十七歳にして上卷の部成る。六十五歳の時、紀州侯に召され、奥醫師の名目の下に、國學を以て仕へ、享和元年歿す。年七十二。國學研究の中心は、古事記傳の著述にして、六十九歳の時完成し、他の著書六十餘は、その副產物なれども、何れも創見に富み、世に、荷田春滿(カダママロ)・賀茂眞淵及び宣長歿後の門人平田篤胤と合はせて、國學の四大人といふ。書齋に三十六の鈴を掛けて、自ら鈴の屋と稱せり。明治の世、前に正四位を贈られ、後、又、從三位に陞敍せらる。

(がなりのりをとも)

もとをり-はるには 本居春庭【名】〔人〕國學者。伊勢國松坂の人。宣長の長子。幼名は健藏、後、健亭と改む。後鈴屋(ノスヤ)と號す。若くして眼を患ひ、竟に三十二歳にして明を失ふ。寛政七年京に出でて、鍼術を學び、その術を以て業とす。享和元年父を喪ひ、翌年、稻懸太平を入れて家を繼がしめ、自身は鈴屋の跡を承けて、門弟を養成す。幼より父の側に侍して、和漢の學を修め、失明の後も研鑽懈らず、加ふるに强記絕倫、最も語法の學に精しく、動詞の活用の法則を大成せる詞の八衢(ヤチタ)、動詞の自他を研究せる詞の通路(ヒヨ)は、その著書として、我國語學史上に不朽の位置を占む。文政十一年歿す。年六十六。

もな【助】何れも感嘆の助辭なるもとなとを重ねて、その意を强めたる語。〔古語〕萬葉「上(カ)つ毛野(ス)まくはしまとに朝日さしまぎらはしもなありつつ見れば」

もなか 最中【名】一まんなか。中央。中心。紀「國之埴區、クニノモナカ」榮花「舞臺の御前のもなかに、舞臺結はせて」二最もさかりなる時。最中(サイチユ)。拾遺「水の面(モ)に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」三中樞。本宗。盛衰記「殿は、源氏の最中に御座(ヤ)します」四「形、最中の月に似たるよりいふ」燒きたる薄き餅の同形なるを、二片、中高になるやうに合はせ、中に餡を詰めたる菓子。餅の形は、普通圓形なれど、方形なるものなどあり。

最中の月【句】『十五日は、一個月の中央に當るよりいふ』もちづき(望月)に同じ。

もなこ (Monoco)【名】〔地〕佛蘭西の東南、伊太利との國境に近き海岸にある、世界最小の獨立國。但し、現時は、大體に於て、佛蘭西の管理に屬す。面積、僅かに八方哩。氣候の溫和、風景の美に加ふるに、大規模なる賭博會社、壯麗なる宮殿、及び海洋博物館等あり。保養・遊樂の地として知らる。

もに-ひく-つむじ 挖喪旋毛【名】馬の臀の下方にある旋毛(ツツ)。さるのぼりのつむじ。ださう。

もに-ぬく 蛻く【動下二自】一蛇・蟬など、殼(カラ)を作りて、その外に出づ。脫皮す。和名「蛻、毛沼久、蛇之解ノ皮也」二多くの中にてすぐれ秀づ。群を拔く。ぬきんづ。

も-ぬけ 蛻【名】蛇・蟬などのもぬくること、又、もぬけたる後に殘る皮。ぬけがら。和名「蛇蛻、倍美乃毛沼介」重之集「蟬のもぬけ」

蛻の殼(カラ)【句】一蛇・蟬などのもぬけたる後に殘る皮。ぬけがら。もぬけ。もぬけがら。二人の遁れ去りたる跡の家又は寢床などの譬。三魂の脫け去りたる身體。死體。もぬけがら。

もぬけがは 蛻皮【名】前條一に同じ。字鏡「蛻、毛奴介加波」

もぬけがら 蛻殼【名】一「蛻(モ)の殼」二に同じ。二「蛻(モ)の殼」三に同じ。平家女護島「散る魂のもぬけ殼」

もねえ (Money)【名】ぜに。かね。金錢。

もの 物【名】一人の、五官によりて感知し得、又感じ得ざれども、思惟し得る存在。但し、通俗には、眼にて感知し得る有形の存在を云ふ。二〔法〕自然界中、人類を除きたる中にて、場所的に存在を有せる箇體。有體物。三下の動詞などに應じて、或特種の物と知り得る物體を指す語。竹取「物も食(ク)はず思ひつつ」枕「懸盤(ケバ)ども」して、何かはあらん、物參るべし」(以上は食物をいへり)榮花「祿などをぞ賜はせける。物などは脫がせたまはず」同「物など纏ひ驚ぐ」(以上は衣類をいへり)同「この僧たちは、擧打上げ、物誦(ズ)したれば」(經文をいへり)同「柿ひたしの汁を、物の葉に附けて參らすれど」(草木をいへり)正續記「白河の御時、修理(シユ)のかみ顯季といひし人、……參議を申しけるに、院の仰に、それも、物書きての上の事とありければ」芭蕉「物書いて扇ぎ引き裂く餘波(ナミ)かな」(以上、文字・詩歌など)四こと。物がら。記「山城のつづきの宮に物申すあがせの君は涙ぐましも」枕「いみじからん物の上手」源氏「物のきこえ、ひがひがしかるべきを」同「けふは、物のまぎれに入り立ちたまへるなり」保元「齡七旬に及び候ふ間、物の用に立ちがたく候ふ」後鑑「大人(ナム)しく、物知りぬべき顏したる神官」狂言(法師物狂)「なう、そこもとへ、物を問はう」五世間一般の物事。空蟬「めでたきこと、物に似ず」源氏「柏木と、かへてと、物よりことに若やかなる色して」濱松中納言物語「愛敬(ヤイキ)いみじく匂ひ薰りて、眉、ものよりけだかく見なしたまふに」六これぞといふ程の物事。重大なる物事。特種の物。枕「すさまじきもの、物のをりの扇」土佐「今は和泉國に來ぬれば、海賊、物ならず」源氏「右のおとどの御勢は、物にもならず、おされたまへり」七事のわけ。事理。道理。條理。「物のわかった人」「物のわからぬにも程がある」八形は見えねど、不思議なる作用をなす物。神佛・病魔など。ものの、竹取「內外(トツ)なる人の心ども、物におそはるるやうにて」空蟬「物の祟」枕「物の憑(ツ)くと起上りたりけるしきも、いと心ぐるしくらうたげなり」九或物事を、おぼろげに指していふ語。狂言(盛石)「身どもは、ものを拾うた。何を。ものを。こりや、これを拾うた」同(雲雀)「それは、物で御座らう。定めて等閑なうなさるるお方から貰はせられたもので御座らう」十寺社など、志して訪ふ所を、おぼろげに指していふ語。古今「物へまかりけるに」枕「寺へ詣で、物へ行くに」十一金錢をおぼろげに指していふ語。「物が掛(カ)る」「物が入る」

もののほん (物本)に同じ。「云云の由、物に見えたり」

物合ふ【名】物事、丁度よくなる。物事よく揃ふ。**ものあひ** (物合)參照。源氏「明暮(クレ)、おぼすさまにかしづきつつ見たまふ、物あひたる心ちしたまふらん」

物言はじ、父は長柄(ナガ)の橋柱【句】「雉(キヂ)も鳴かずば打たれまい」に同じ。〔諺語〕

物言へば唇寒し秋の風【句】『松尾芭蕉の俳句』口は禍の門に同じ。〔諺語〕

物覺ゆ【句】㊀心おちつきて、物事感じ知らる。意識たしかなり。たしかなる心より出でて行動す。(打消の形にて用ふ) 枕「故事や何やと、盡きせず多かる紙の數を書きつくさんとせしに、いと物覺えぬ事ぞ多かるや」 榮花「人とひとしくならんなど思ひて、世に從ひ、物おぼえぬ追從をなし」 ㊁心にかかる。氣がかりになる。案ぜらる。 榮花「皇后宮には、あさましきまで物のみおぼえたまひければ」

物思ふ【句】「物を思ふ」を見よ。

物か【句】㊀『かは感嘆の助辭』意外の事に驚く時にいふ語。 土佐「この住吉の明神は、例の神ぞかし、ほしき物ぞおはすらんとは、今めくものか」 榮花「御つつしみなどありけれど、十月二日、枇杷殿燒くるものか」 ㊁『かは反語の助辭』云云の如き事は有る筈なし。「そんな事があるものか」

物が入る【句】費用を要す。金がかかる。「物を入る」參照。 落窪「日頃の中に、今日なん、いと猛に物入りたらんと見えける」

物が無ければ、影ささず【句】「蒔かぬ種は生(ハ)えず」に同じ。〔諺語〕

物が無し【句】 俗曲(初戀千種の濡事)「こっちの手段をけどったお染ゆゑ、逃しちゃあ、物が無(ネ)えと」

物かは【句】『かはは反語』認むるに及ばず。取るに足らず。なんでもなし。 浄世床「親のためには、命も物かはだ」

物換る【句】「星移り、物換る」を見よ。

物から【句】『物ながらの略』㊀云云にてはあれども。ものの。 萬葉「一ねろに云はるものから青ねみにいさよふ雲のよそり妻はも」 榮花「小野の宮の大臣は、歌をいみじく詠ませたまふ。すきずきしきものから、奥深く煩はしき御心にぞおはしける」 ㊁(誤りて)云云にてあるによりて。

物、けたまはる【句】『「物承(ウケタマハ)る」の略』問ひかくる時の冒頭にいふ語。〔古語〕 狭衣「物けたまはる、姫君の御前に、男、入り臥してはべり、いかがつかうまつらん」〔古語〕 榮花「やや、物けたまはる、今更に、何かは御殿ごもる、起きさせたまへと聞えさすに」

物盛んなる時は衰ふ【句】『史記の平準書に「物盛則衰、時極而轉」とあり』「月滿つれば虧く」に同じ。

物その物にあらず【句】世に在る甲斐も無き程に劣る。數にもあらず。 謡曲(鉢木)「常世(ツネ)が常に變りたる馬・物具(モノグ)や打物の、物その物にあらざる氣色、さぞ笑ふらん」

物に當り惑ふ【句】次條に同じ。 增鏡「泰時と、時房と。亂れ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ」

物に當る【句】あわて惑ふ狀。戸惑(トマド)す。 枕「物にあたるばかり騒ぐも、いと物ぐるほしく」 榮花「あさましう嬉しうて、物にぞ當らせたまふ」

物に役せらる【句】『淮南子に「聖人不二以レ身役レ物」とあり』物欲のために左右せらる。

物に凝滯せず【句】「聖人(シヤウジン)は物に凝滯せず」を見よ。

物に狂ふ【句】氣がちがふ。狂氣になる。 太平記「般若院の法印が許に召仕へける童、俄かに物に狂ひて、模樣の事を口走りけるが」

物に附かず【句】他の物に離れてあり。 芭蕉「原なかや物にも附かず鳴く雲雀」

物に爲す【句】然るべき物事となす。一かどの人物に仕立つ。しあぐ。成就せしむ。 一代女「のぼされ、その後、まんまと物になしける」

物に爲る【名】然るべき物事となる。一かどの人物となる。成就す。

物には料簡、品も有る【句】物事には、さまざまに思案の道あり。〔諺語〕 繼八卦柱曆「玉は、恨の身をふるはし、これ助左衛門、物には了簡、品もある、……と、かっぱと伏して泣きければ」

物の【句】㊀「事の」に同じ。 大鏡(師貞)「科(ホ)を、私ひとりに受け、物の見事に死にましたい」 ㊁およそ。ほぼ。約。「物の千圓も手に入らば」 ㊂ものながら。事ながら。ものから。 伊勢「君來(コ)んといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつつぞ經る」

物の彼方【句】㊀物の、己が位置より遠く離れたる側。 ㊁死後の世界。あの世。後世(ゴセ)。來世(ライセ)。 源氏「物のあなた思ひたまへやらざりけるが」

物のあはれ【句】物事に對してあはれを感ずること。人情。感傷。 枕「清範、講師(コウジ)にて、說く事ども、いと悲しければ、ことに物のあはれ深かるまじき若き人も、皆泣くめり」 五條入道「戀せずば人は心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る」

物の後【句】他人の見ぬために榮(エ)なき地位。日陰の身。 源氏「限ある御位を得たまへど、物のうしろの心地して、かひなかりけり」

物の數ならず【句】「數ならず」に同じ。 著聞「有季が小恩、物の數ならじとて、吹田(スイタ)の給物をとどめてけり」

物の數にあらず【句】前條に同じ。 榮花「物の數にもあらぬ里人さへ」

物のかひ【句】借財。負債。〔古語〕 紀「債、モノノカヒ」

物の聞【句】世間の評判。とりざた。うはさ。 源氏「覺えぬ世の騒ありし頃、物のきこえに憚りて、常陸に下りしを」

物の心【句】ものごころ(物心)に同じ。 方丈「凡そ物の心を知れりしより、四十あまりの春秋を送れる間に」

物の師【句】或學藝を專門とせる人の總稱。 源氏「うたづかさの物の師どもなどやうのすぐれたる者を召寄せつつ」

物の集【句】しふ(集)に同じ。 榮花「經とは見えたまはず、さるべき物の集などを書きたらんやうに見えて」

物の上手【句】藝道に達したる人。 榮花「いみじき物の上手の失せたまひぬることと、口をしう思ふ人多かり」

物の積【句】惡神の咎なりとも、しやく(癪)に同じきかとも、又、食物の停滯なりともいふ。〔古語〕 落窪「胸の痛く侍ればと、息の下にいふ。あないとほしの物のつみかとよ。典藥のぬし、醫師(クシ)なり。かいさぐらせたまへ」 源氏「祭・祓、よろづに至らぬ事なくしたまへど、物のつみめきたる御病にもあらざりければ」

物の音【句】㊀何物かの音(ネ)。 ㊁樂器の音(ネ)。音樂。 榮花「物の音を聞きて、天人の降りたまへるにやあらん」

物の始【句】㊀物事のはじめ。 ㊁初緣・初對面、文、職の初など、重大なる事件のはじめ。事のはじめ。ものはじめ。ことはじめ。 落窪「物のはじめに、この子のなりの萎(ナ)えたりつるを思ひつるに」 源氏「めでたくとも、物のはじめの六位宿世(セタ)よ」

物の本【句】書籍。本(ホン)。もの。 狂言(吟醫)「聟入の書が、物の本の上におりやった」

物の紛【名】『源氏物語の賢木(サカキ)及び若菜の下の兩卷に見えたる詞に本づく』源氏物語に記したる、源氏の君と藤壺の宮及び朧月夜の君と、又、柏木衛門督と女三(サンノ)の宮との密會の事件。

物の見事【句】みごと(見事)に同じ。一代女「物の見事なる騒(サワ)して、……、傾城めに心を殘さすか」

物は言うて見づく【句】『づくは接尾語』「物は相談に同じ。〔諺語〕 養山(現聲助劍)「何と、物は言うて見づくぢやが、妾を親にさつしやらぬか」

物は言成【句】「事は言成」に同じ。〔諺語〕

物は思ひやう【名】物事は思ひやう次第にて、如何やうにも感ぜらるるものなり。〔諺語〕

もの

物は相談【句】よき考の思ひつかぬ時には、他人と相談すれば、意外の便宜を得られずとも計りがたきが故に、始より斷念するには及ばず。物は談合。膝とも談合。〔諺語〕

物は時節【句】「事は時節」に同じ。〔諺語〕正章千句「少少の御訴訟ならばやめられよ（いふ句に）物は時節と待つに若かずや」

物は仕様、事は才覺【句】工夫さへすれば、難き事も爲し得るものなり。〔諺語〕狂言「笑かづき」「ならぬといふては置かれまい。物はしやう、事は才覺ぢや、何とぞ調ふやうにしてくれさしませ」

物は談合【句】「物は相談」に同じ。〔諺語〕心中萬年草「物は談合、お梅様の御祝言、未だ盃なされぬ先、彼方を變換なされて、久米様へ進ぜられまいか」

物は試（ためし）【句】物事は、一度試みぬ内は、決して斷念するに及ばず。〔諺語〕源平布引瀧「切ったる腕（かひな）に白旗持たせ、物はためし、繼ぎあはせて」

物は使ひやう【句】物事は、用ひ方によりて、善くも惡くもなる。〔諺語〕

物は機【句】物事は、勢によりて生ずる者にて、豫測することは難し。〔諺語〕

物は八分目【句】物事は、滿つれば虧くる習なれば、控目にするを可とす。〔諺語〕

物腫る【句】腫物（しゅもつ）、發生す。大鏡「蛇（をろち）れうじたまひて、その祟により、頭に物腫れて、失せたまひにき」

物は類を以て集まる【句】『易經の繫辭上傳に「方以類聚、物以群分」とあるに本づく』「友は類を以て集まる」に同じ。〔諺語〕太平記「物は類を以て集まる習なれば、かれが甥に、所太夫房快舜とて、少しも劣らざる惡僧あり」

物先づ腐りて、蟲これに生ず【句】『蘇軾の范增論に「物必先腐也、而後蟲生之、人必先疑也、而後讒入之」とあるに本づく』物事の生ずるは、必ずその誘因あり。

もの

物も言はれず【句】甚しく感じ、又はあきれなどしたる形容。きのふはけふの物語「日よし太夫、勸進能に、隅田川をして、芝居中を泣かせた。……、あの隅田川があはれにて、物も言はれぬ」

物も言ひ様で角が立つ【句】普通の物事にても、これを話す言葉のために、理窟めきて、相手の感情を害することあり。〔諺語〕

物も覺えず【句】前後を辨へず。夢中になる。大鏡「物もおぼえず、御裝束もひき亂りて、御車さし寄せつつ、人にかかりて乘りたまふ」宇治「物もおぼえずあきれ惑ひたり」

物もふ【句】「物思ふ」の略。萬葉「ものもふと人には見えじ下紐の下ゆ戀ふるに月ぞ經にける」

物故【句】次條に同じ。古今「戀すればわが身は影となりにけりさりとて人に逢はぬものゆゑ」源氏「人かずにも思されざらんものゆゑ」

物故に【句】云云なるに。古今「待つ人も來ぬものゆゑに鶯の鳴きつる枝を折りてけるかな」

物を【句】物なるを。云云なるに、なほその上に。云云なれども。萬葉「もみぢ葉のすぎがてぬ子を人妻と見つつやあらむ戀しきものを」後拾遺「恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなん名こそ惜しけれ」

物を言ふ【句】㊀言葉を出す。口をきく。語る。話す。いふ。萬葉「ありぎぬのさゑさゑしづみ家の妹に物言はず來（き）にて思ひ苦しも」㊁人の言ふと同じ効果に由りて、相手の人を屈服せしむ。「金が物をいふ」「證文が物をいふ」

物を忌む【句】事物を忌みつつしむ。物忌をす。紫式部日記「物忌みける人の行く末、命長かるめる由ども見えぬためしなり」

物を入る【句】金錢を費す。費用を掛く。「物が入る」參照。落窪「かの所をこそ、さも領ぜられめ、この年頃造りつる草木を、物入れて、それ運び取りたまへ」甲陽軍鑑「そでなき事に物を入れ、堺の紹鷗が流の茶の湯がかりなりとて、茶碗一つを三千貫にて買取り」

物を思し知る【句】「世の中を思ひ知る」に同じ。榮花「一品の宮、今は、少し物おぼし知らせたまふ程なれば、悲しき事を、かへすがへすおぼし知りたり」

物を覺ゆ【句】見聞したる事を記憶す。

物を思ひ知る【句】物のあはれを知る。道理人情を解す。落窪「いと花やかならざらん女の、物思ひ知りたらんが、形をかしげならんをこそ、唐（もろこし）・新羅（しらぎ）まで求めんと思ふ」枕「物見知り、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるをば語らひて」

物を思ふ【句】思ひわづらふ。心配す。

物案（ものじ）す。思案す。心配す。萬葉「ひとり居て物念ふ宵にほととぎすこゆ鳴きわたる心しあるらし」

物を數ふ【句】白拍子（しらびやうし）をうたふ。中務内侍日記「遊女が船ども、歌うたひ、物かずへなどするも、をかし」

物を知る【句】世の中の事を辨へ知る。枕「おのづから物知り、世の中もどきなどする人は」「す。

物を吐く【句】反吐（へど）をはく。もど

物を問ふ【句】㊀事を問ふ。質問す。話しかく。ことふ。太平記「御しのびの物籠（ものこ）なれば、都近けれど、物問ひかはす人もなし」㊁うらなふ（占ふ）に同じ。狹衣「殿の内に夥しき物のさとしのあるを、物とはせたまへば」

物を見す【句】「目に物を見す」に同じ。「いで物見せん、覺悟せよ」

物を見る【句】㊀物事を目に見る。㊁祭など、面白き物事を見る。觀覽す。見物す。枕「ひとり車に乘りて、物見る男」㊂見分く。鑑定す。大鏡「相人ならねど、よき人は、物を見たまふなり」㊃『「目に物を見す」參照』辛き目に遭ふ。懲るるほどの禍に遭ふ。諺「長居（ながゐ）をすれば物を見る」

もの

もの 者【代】『もの（物）の轉義』㊀人又は事物を指していふ不定代名詞。紀「朝妻のひかの小坂を片泣に道行く者もたぐひてぞよき」盛衰記「二騎の者には暇（ひま）をたび、我身一人、國に下り」

者その者【句】特別に言ひ立つる程の身分の者。盛衰記「者その者にあらざれば、音にはよも聞きたまはじ」

もの 物【副】およそ。ほぼ。約。薩藩歌「物三年は夜晝無し、千日の回向まで、一日懈怠（けたい）も仕らず」

もの 【感】呼び掛くる聲。もし。浮世風呂「もの、金を拵（こしら）へべい云つて、山事は惡い事だね」

もの 物【接】ものを（物を）の略。〔古語〕記「たぢひ野（ぬ）に寢（ね）むと知りせばたづどもも持ちて來（こ）ましもの寢むと知りせば」萬葉「あま飛ぶや島にもがもや都まで送り申して飛び歸るもの」

もの 物【接頭】『特に、この物事がと指して言ふことは得ざれど、物事が一體にとの義』主として、形容詞・貌詞などに添へて、何となく然る意を示す語。「物うらめし」「物珍し」『物騷し』『物暗し』『物しづかに』

もの-あえ 物肖【名】他の物事にあやかること。似ること。榮花「御衣の色よりはじめて、誰もうたてある御姿どもに、若君は物あえせさせたまはず、白う美しうおはしませば」

もの-あき 物厭【名】物事に厭くこと。浮世風呂「物あきをする者は、……、何を一つ遂げた事が無（な）え」

もの-あきびと 物商人【名】あきびと（商人）に同じ。當流小要判官「蟲籠しつらひ取持たせ、物商人に出立ちて」

ものあげ-ば 物揚場【名】りくあげば（陸揚場）に同じ。

もの-あざやか 物鮮か【貌】『もの（物）は接頭語』何となく鮮かなるさま。榮花「若君の、いと物あざやかにめでたう、山の端よりさし出でたる望月などのやうにおはしますを」

もの-あし 物悪し【形二】『もの(物)は接頭語』何となく不吉に感ぜらる。縁起わるし。蜻蛉「物のはじめに、ものあしう思ふらんと、いといとほし」

もの-あたらし 物新し【形二】『もの(物)は接頭語』何となくあたらし。

もの-あつかひ 物扱【名】物事を扱ふこと、又、その方法。源氏「あなあぢきなの物あつかひや」同「なかなか、物あつかひに、いと苦しく」

もの-あはせ 物合【名】物事を持ち寄り、雙方のを比べて、優劣を定むる遊戯。即ち歌合・根合・紅葉(モミヂ)合・菊合・撫子合・香合・物語合・繪合・貝合・蟲合・前栽合・艷書合・物語合など。枕「物あはせ、何くれと挑む事に勝ちたる、いかでか嬉しからざらん」業式部日記「おん前の有様、繪に書きたる物あはせの所にぞ、いとよう似て侍りし」

もの-あはれ 物哀【名】『もの(物)は接頭語』何となくあはれなること。源氏「遊けき野べを分け入りたまふより、いと物あはれなり」

もの-あひ 物間【名】一物と物とのあひだ。物のあはひ。謠曲(鵜飼)「太刀抜きそばめ、物あひを少し隔てて待ち給ふ」二狂言(文蔵)「互にそれぞと見しよりも、物あひ近くなりしかば」

もの-あひ 物合【名】物事の丁度よくあること。明德記「法花堂と安國寺と兩所に陣を召して、物合を能く見繕はせたまひて然るべし」

もの-あひ 物逢【名】射藝にて、射手が的に向ひたる時の作法。

もの-あふ 物合ふ【動四自】物よくととのふ。「古語」源氏「あけくれ、思すさまにかしづきつつ見たまふは、物あひたる心地したまふ」

もの-あんじ 物案【名】事を案ずること。ものおもひ。思案。心配。若風俗「物案じの顔ばせ、亭主見咎めて尋ねけるに」

ものあんじがほ 物案顔【名】心配してあるらしき様子。思案顔。ものおもひがほ。心中及は氷の朔日「小萬に、ちよっと逢うたらば、物案じ顔して」

ものあんじすがた 物案姿【名】物案じせる様子。狂言(法師物狂)「はたちばかりな女房が、手に太刀をさげ、物案じ姿にて」

もの-あらがひ 物爭【名】**ものあらそひ**(物爭)に同じ。源氏「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」

ものあらがひ 【名】【動】腹足類に屬する軟體動物。淡水に棲み、大さは椎の實ほどにて、殼は、薄く、口廣くして、やや卵形をなし、濃暗色を呈す。後撰「はちす葉の上はつれなきうらにこそものあら貝は附くといふなれ」

もの-あらそひ 物爭【名】物事を爭ふこと。ものあらがひ。

もの-いうま 物射馬【名】犬追物(イヌオモノ)・笠懸・流鏑馬(ヤブサメ)などに馴れたる馬。

もの-いぐつ 物射沓【名】古、騎射に用ひし、韋(イ)の**ものあんじがほ**(つぐいのも)

もの-いはず 物不言【名】口數をきかぬこと、又、その人。だまりむし。

物言はずの早細工【句】腕前ある者は、口には出さねど、すばやく實際の成績を示す。〔諺語〕

もの-いはぬ-はな 物言はぬ花【句】はな(花)の條を見よ。

もの-いはひ 物祝【名】**いはひごと**(祝事)に同じ。沙石集「世間の人の物祝、返す返す道理なく侍り」

もの-いひ 物言【名】一話すこと、又、その有様。ことば。ことばづかひ。狭衣「ものいひ惡しかりし大納言は」二話すことの巧みなること、又、その人。源氏「くまなきものいひを定めかねて」三人の上を、かれこれと言ふこと。うはさ。風評。拾遺「ここにしも何匂ふらん女郎花人の物いひさがにくき世に」榮花「さらぬ事だに、聞きにくき物いひは、ましてことわりなり」四言葉にて爭ふこと。いひあひ。口論。喧嘩。五相撲(スマヒ)にて、勝負の決定に對し、異議を插むこと。

物言が附く【句】相撲の興行場にて、行司の勝負の批判に對して、見物人が不服を唱ふ。

ものいひ-ざま 物言様【名】物いひの有様。物の言ひ様(ザマ)。ことばつき。

ものいひ-とぎ 物言伽【名】話相手となりて、無聊を慰むること。博多小女郎女祝「この六人を請(ウ)出して、これに居らるる人人の物いひ伽」

ものいひ-ぶり 物言振【名】物いひのさま。はなしぶり。くちのききかた。

ものいふ-はな 解語花【名】美人の異稱。俗つれづれ「幔幕を絞れば、ものいふ花ども顯はれ」

もの-いまひ 物忌【名】次條二に同じ。

もの-いみ 物忌【名】一祭祀に與りなどする時、その前後數日の間、飲食・行爲を慎み、沐浴し、觸穢(ケガレ)を忌みなどして、身心を清淨にすること。散齋(イリミ)・致齋(マイミ)の別あり。各條を見よ。齋戒。紀「齋戒、モノイミ」二或種の物事を、不吉なりとして忌み避くること。例へば、忌言葉(イミコトバ)など。ものいまひ。ごへいかつぎ。保元「武將の身として、夢見・物忌など、あまりにおめたり」三中古以後、陰陽(オンヤウ)道の盛んなりし時代に、方違(カタヘ)と同樣に、星鬼遊行の方面を犯す時は、災禍を來すとて、これを避けんがために、或日限の間、家に籠りて慎みしこと。ぶつき。もつき。枕「上に引きたりつる靈さへ消えたるを、おはしまさざりけりとも、もしは、物忌とて取入れずなどいひて」源氏「今日は、六日の御物忌明く日にて」四前項の物忌の時、柳の木を、長さ三尺ほどに薄く削りたる簡(ブダ)又は忍草などに、「物忌」の二字を記して、冠・簾などに附けおきしもの。枕「烏帽子に物忌附けたるは」源氏「母屋(モヤ)の簾は、皆おろしわたして、物忌など書かせて、附けたり」五明治維新以前、伊勢大神宮を始とし、鹿島(カシマ)・香取(カトリ)・加茂・平野・松尾・春日・平岡等の諸大社に在りて、神事に與りし童男・童女。大神宮にては、神官の女の未婚なる者、又、稀には童男を用ひ、大宮の垣内に館を造り、常に大神に近侍して仕へ奉り、その分掌に從ひて、數種の別ありし中に、朝夕の大御饌に仕へまつるは、大物忌といひて、最も重んぜられ、これに宮守(ミヤモリ)物忌・地祭(ツチマツリ)物忌を加へて、三色の物忌といひ、この他にも、酒作(サカツクリ)物忌・御鹽焼(カマヤキ)物忌・土師器(ハジキ)物忌・御炊(ミカシキ)物忌・菅裁(スガタ)物忌・根倉物忌・荒祭(アラマツリ)物忌・高宮(タカミヤ)物忌・瀧祭(タキマツリ)物忌などあり。鹿島神宮にては、經水前の少女を、鉋トにて採用し、神官等の上首に立ちて、殿内の事を掌りたり。正統記「伊勢の神宮の新嘗の祭、夜ふけて、かたへの人人罷り出でて後、神主・物忌等ばかり留まりしに」

もの-いむだち 物忌館【句】**かむだち**(神館)に同じ。

物忌の父【句】伊勢神宮にて、物忌を輔佐して、その事に從事せし、物忌の父。同じ。

物忌の館【句】**かむだち**(神館)に同じ。

物忌の札【句】**ものいみ**(物忌)四に同じ。

もの-いり 物入【名】費用を要すること。俗つれづれ「この物入に身代薄くなり」

もの-う 物憂【形】**ものうし**(物憂し)の略。感動句に用ふ。榮華「あなものうや、ここにとまりなばやとのたまふに」

もの-う-がる 物憂がる【動四他】ものうしと思ふ。枕「わざと思ひ立ちて、宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる」

もの-うげ 物受【名】綴部司(ツヅリベ)の職員の(物)は接頭語』何となく憂し。うるさくて、心進まず。ものぐさし。古今「春立てど花もにほはぬ山里はものうかる音(ネ)に鶯ぞ鳴く」枕「いとものうげに歩み來(ク)るを」

もの-うじ 物倦【名】**ものうんじ**(物倦じ)の轉。〔古語〕源氏「あはれと思ひし人の、物うじして、はかなき山里に隱れぬにけるを」

もの-うたがひ 物疑【名】物事を疑ふこと。枕「わりなく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女」

もの-うち 物打【名】太刀などの、物を切る時、刃のその物に觸るる部分、即ち切先(サキ)より、鍔元(ハバキ)の方へ三寸程にて、刀心の幅の廣くなり初むる所。持統天皇歌軍法「太刀……物打より、段段に折れ」

もの-うひうひし 物初初し【形二】『もの(物)は接頭語』何となくうひうひし。源氏「今は、物うひうひしくわかびたまふべき御程にもあらず」

もの-うんじ 物倦【名】物事に倦むこと。ものうく思ふこと。ものうじ。【古語】源氏「おしなべてし際(キハ)には思はざりし人の、はかなき物うんじをして」

もの-うらみ 物恨【名】物事を恨むること。ものゑんじ。ものねたみ。嫉妬。源氏「あいなき物うらみしたまふなと、いとよく教へきこえたまふ」

もの-うらめし 物恨めし【形二】『もの(物)は接頭語』何となくうらめし。源氏「御うしろみなども、物うらめしき心にて」

もの-うらやみ 物羨【名】物事を羨むこと。ものねたみ。枕「物羨し、身の上嘆き」字治「物羨はすまじき事なりとか」

もの-うररか 物麗か【貌】『もの(物)は接頭語』何となくうररかなるさま。源氏「彌生(ヤヨ)になれば、空の色も物うररかにて」

もの-うり 物賣【名】物を賣ること、又、その人。商賣。商人。字治「物賣、怪しう思へども」

もの-おき 物置【名】住宅に附屬して、薪炭・雜具などを藏めおくに用ふる小屋又は場處。「て使用する小屋。

もの-おき-ごや 物置小屋【名】物置として使用する場處。

もの-おき-ば 物置場【名】物置として使用する場處。「同じ。

もの-おそれ 物怖【名】**もの-おぢ**(物怖)に

もの-おそろし 物怖し【名】【形二】『もの(物)は接頭語』何となくおそろし。源氏「人氣(ケヒ)遠き心地して、ものおそろし」

もの-おぢ 物怖【名】物事に怖づること。ものおそれ。臆病。源氏「物おぢをなん、わりなくせさせたまふ御本性にて」

もの-おと 物音【名】物事の音。おと。俳諧新選(瓜流)「物音のせぬ船も行く月見かな」

もの-おどろき 物驚【名】物事に驚くこと。俳諧新選(雁宕)「女嬬連の物おどろきや今朝の秋」

もの-おぼえ 物覺【名】見、聞きなどしたる事を忘れぬこと。記憶。俳諧新選(湖十)「元日や稚き時の物おぼえ」

もの-おもしろし 物面白し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく面白し。源氏「空のけしきなども、うररかに、物面白く」

もの-おもはし 物思はし【形二】物事、心にかかりてあり。物おもひせらる。源氏「いと物おもはしく、よろづ心細ければ」

もの-おもひ 物思【名】思ひわづらふこと。ものあんじ。ものもひ。思案。心配。古今「年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」

もの-おもひ-がほ 物思顔【名】物思をしてある顔つき。心配らしき樣子。ものあんじがほ。源氏「いと物おもひ顔にて」

もの-おもひ-ぐさ 物思種【名】物おもひの材料。心配のたね。源氏「なかなか、あまたの人の物おもひぐさなり」

もの-おもひしり-がほ 物思知顔【名】物のあはれを知りてある顔つき。道理・人情を解してある樣子。榮花「蟲の聲聲、物おもひしり顔に、荻吹く風の音もそぞろ寒く」

もの-おもひ-やま 物思山【名】〔地〕陸奥國にありといふ山。六帖「見ても思ひ見ずとも思ひ大かたはわが身一つや物おもひ山」

もの-か 物か【句】**もの**(物)の條下を見よ。

もの-がらしや 物巧者【名】物事に巧者なること。薩摩歌「蚊帳(カヤ)へ入るやら、駈出るやら、更に差別は無かりけり。中にも、源五、物巧者」

もの-かき 物書【名】一文書を書くこと。二文書を巧みに書く人。四他人の依頼を受け、その人に代りて、文書を書くこと、又、その人。代書。盛衰記「南都に、便宜(ビギ)の物書してゐたりける」

もの-がくし 物隱【名】物事をつつみ隱すこと。ものづつみ。源氏「女君の、いと心うかりし御物がくしも、つらけれど」

もの-がげ 物蔭【名】物の蔭。物におほはれて暗き處。ものかくれ。俳諧新選(涼岱)「物蔭に雉の光や春の雨」

もの-かしまし 物喧し【名】【形二】『もの(物)は接頭語』何となくかしまし。一代男「しめ木に爭ひ、衣打つ槌の音、物かしましう」

もの-がしら 物頭【名】一一部の人人の上に立つ人。かしら。首領。首魁。小町歌「今朝祝ふ雜煮の芋や物がしら」二武家時代の職制にて、弓組・鐵砲組など諸隊の足輕・同心の首領。足輕大將。足輕頭。同心頭。川角太閤記「年寄ども又は物頭・物頭へ觸れ申すべきものなり」

もの-かず 物數【名】物のかず。しなかず。天の網島「男ざかりの小袖まで、さらへて、物數十五いろ」

物數言はず【句】多く語らず。口かず少し。「代玄「少し勿體も附け、むづかしく見せて、物數いはぬこそよけれ」

物數言ふ【句】『前條の語に對して、戲に、それと反對の意を現すに用ひたる語』しやべる。多言す。和合人「その面(ツラ)でさ、物數言って、放蕩でさ、底に癇毒氣(ケカタ)のある男だ」

物數を心懸く【句】慾張りて、數の多からんことを望む。きのふはけふの物語「粗忽なる若衆、餅を參るとて、物數を心がけ、あまりふためいて、喉に詰る」

もの-かぞへ 物數【名】物事を數ふること、又その樣子。計算。空穗「あやしの物かぞへぞや」

もの-がたし 物堅し【名】【形一】物事に手堅し。規律正し。律儀(ギヤウ)なり。謹直なり。五人女「都の物がたき住(ヒス)を嫌ひ」太平記「物堅き老の化粧や衣がへ」

もの-がたらひ 物語【名】**ものがたり**(物語)一に同じ。空穗「物かたらひすべき人も無き所に」

もの-がたらふ 物語らふ【動四他】**ものがたる**(物語る)に同じ。伊勢「かのまめ男、うち物語らひて」

もの-がたり 物語【名】一ものがたること。はなし。談話。萬葉「靑みづらよさみの原に人もあらぬかも岩ばしの近江あがたの物語せむ」二『談話の代りにする意』中古以後、事實又は空想を、假名文にて記したるもの。空想のは、特に作(ツクリ)物語ともいひ、竹取物語・空穗(ウツホ)物語・落窪物語・源氏物語など、また、事實のは、宮廷・朝臣の生活を記したる榮花物語などあり。武士の戰を記せる保元物語・平治物語・平家物語なども事實の物語の一なれども、これらに對しては、別に軍記物の名あり。「譚」源氏「物語の出來はじめのおやなる竹取のおきな」榮花「これは、物語に作りて、世にあるやうにぞ聞ゆめる」

もの-がたり-あはせ 物語合【名】物合(モノアハセ)の一。人人、左右に分れて、短き物語の文を作りあひ、歌など添へて出し、判者ありて、その優劣を定めしもの。後拾遺「六條前齋院に物語合しはべりけるに、小辨遲く出すとて、かたの人人とめて、次の物語出しはべりければ」

もの-がたり-し 物語詩【名】〔文〕『英Tale』主に一國、一地方又は一社會の物語を、律語にて書きたるもの。格調備はりて、內容は寫實小說の如くなるもの。

もの-がたり-どころ 物語所【名】物語をする場所。榮花「心やすき物語所には、殿上人など、かの御かたの細殿をぞしける」

もの-がたり-ぶみ 物語書【名】**ものがたり**(物語)三に同じ。「じ。

もの-がたり-ぼん 物語本【名】前條に同

もの-がたり-ゑ 物語繪【名】物語三の記事によりて描きたる繪。源氏「物語繪こそ心ばへ見えて、見所あるものなれ」

もの-がたる 物語る【動四他】物事を語

る。かたる。話す。 蕪村「春雨や物語りゆく蓑と笠」

もの-がなし 物悲し【形二】『もの(物)は接頭語』何となく悲し、うらがなし。 高葉「春まけて物悲しきにさよふけて羽ぶき鳴く鴫たが田にかすむ」

ものがなし-ら 物悲しら【名】物悲しきさま。 蕉堂「小金門(ナヤカ)に物悲しらに念へりし吾が兒の刀自(ウ)を」

ものかは-の-くらうど 物かはの蔵人【名】「人」「物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもいかに戀しかるらん」といふ歌によりて、上西門院の蔵人藤原經尹(ツネ)の得たる異名。 徳大寺實定卿の摂津國福原の新都より上京して、近衛河原に在りし、その妹、高倉院の皇后多(ヤ)子を訪ひし時、經尹隨從せしが、多子の侍女小侍從(コジジ)、實定卿と懇懃を通ぜしため、實定卿翌朝辭し去りて後、藏人を遣して、惜別の詞を小侍從に述べしめし時、藏人、小侍從に、この歌を讀みかけしなり。 まつよひのこごゆう(待宵の小侍從)参照。

もの-かひ 物飼【名】生物を飼ふこと。飼養。飼育。 著聞「都鳥……よろづの蟲を喰はせはべるも所せくおぼえて、ゆゆしき物かひなるによりて」

もの-から 物から【句】もの(物)の條下を見よ。

もの-がら 物柄【名】物事の品質。ことがら。しながら。 著聞「光の中に、年寄りたる姥の、ゑみゑみとしたる形を顯して見えけり。抜きたる太刀にて切らんと思ふに、むげにまぢかきを、よく見れば、物がら安平におぼえければ、太刀を捨てて、むずと捕へてけり」 徒然「費も無くて、物がらのよきが、よきなり」

もの-き 物著【名】能樂にて、演者の、舞臺にて、新たなる裝束を著ること。

もの-ぎ 物著【名】衣服を著飾ること。盛装。 俳諧新選「鶴英」「粽(サマ)まで都女の物著かな」

もの-きき 物聞【名】『ものみ(物見)』四参照』樣子を探り聞くこと、又、その役の人。

もの-ぎき 物聞【名】世間へのきこえ。世のきこえ。外聞(ブンブン)。 蕉窪「をかしく、物ぎきよく言ひつる人かな。形も清げなりと見つる程に」

ものきき-やま 物聞山【名】〔地〕上野國群馬郡伊香保(ホイカ)町の東南なる金毘羅(コンピ)山の古稱。伊香保八景の一に數ふ。

もの-きせ 物著【名】能樂にて、裝束を取り扱ひ、舞臺に出でて、演者に新たなる裝束を著しむる事をも掌る人。

もの-きたなし 物穢し【形一】『もの(物)は接頭語』何となくきたなし。 源氏「上達部(カンダメ)の筋目にて、なからひも物ぎたなき人ならず」

もの-ぎは 物際【名】一物のまぎは。いざといふ時。 三河物語「はやりて槍を入るれば、物ぎはになりて、精が拔け、槍が弱き者なり」 二きは(際)三に同じ。 新永代蔵「家内三十七人のくらし、世間の節季・物際も、この内は、楊弓の格音(オト)靜かに」

もの-きぼし 物著星【名】爪に生ずる、白き點。俗に、婦人の間に、衣服を得る前兆なりと信ぜらる。

もの-きようじ 物興【名】物事に興ずること。 榮花「餘り物興じする程に、むげに政知らぬしれ者にこそなりぬべかめれ」

もの-きよし 物清し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく清し。 榮花「聊かかたほなる事も無く、物清き御なからひなりし」

もの-きらひ 物嫌【名】食物など、或種類の物を嫌ふこと。よりきらひ。(物好(モノズキ)に對して)

もの-きららか 物きららか【貌】『もの(物)は接頭語』何となくきららかなるさま。 榮花「女房四十人、童六人、下仕六人……、物きららかに、なりいでよきを選らせたまへり」

もの-ぎれ 物切【名】しなぎれ(品切)に同じ。 狂言成上者「太刀……、名作物なれば、物ぎれで御座る」

もの-ぐさ 物種・物草【名】物の材料。物事。ものだね。 六帖「櫻花わが宿にのみありと見ばなき物草に思はざらまし」

もの-ぐさ 物臭・懶【名】ものぐさき性質、又、その性質の人。

もの-ぐさし 物臭し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく臭し。 蕉窪「物くさき部屋に臥して」

もの-ぐさし 物臭・懶【名】ものぐさ(物臭)に同じ。 御伽草紙「物臭太郎」「名を物ぐさ太郎と申す事は、國に並なき程の物ぐさしなり」

もの-ぐさし 物臭し・懶し【形一】成るべく物事をなしたくなし。無性(ヤウジ)なり。ものうし。 十訓「かやうの事を言ふ者は、心の至りて、物ぐさく、性の極めて不覺なるが致す所なり」

もの-ぐさだうしん 物臭道心・懶道心【名】生活の煩しさを厭ひて、僧となること。

もの-ぐさ-たらう 物臭太郎・懶太郎【名】ものぐさ者を、人名めかしていふ語。 御伽草紙「物臭太郎」「名を物ぐさ太郎と申すことは、國に並なき程の物ぐさしなり」

もの-ぐさたらう 物臭太郎【名】〔書〕御伽草紙の一。ものぐさき男の、思はぬ女と契を結びて立身する事を、滑稽を交へて記せるもの。

もの-ぐさ-もの 物臭者・懶者【名】ものぐさき人。なまけもの。無性(ヤウジ)もの。物臭者の節句働【句】「懶者(モノグサモノ)の節句働」に同じ。〔諺語〕

もの-ぐらし 物暗し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく暗し。 枕「物ぐらうなりて、文字も書かれずなりたり」

もの-ぐらむ (英 Monogram)【名】姓名の頭字などを組み合はせて作りたる花押。

もの-ぐるはし 物狂し【形二】ものぐるほし(物狂し)に同じ。 堅藍「あな物ぐるはしや。人ぎきこそやさしけれ」

もの-ぐるひ 物狂【名】氣のちがふこと。物に狂ふこと。狂氣。亂心。 和名「癲氣、毛乃久流比」 俳諧古選「春舟」「おく霜に摩枯しけり物ぐるひ」

物狂、水と隔さず【句】「生醉(ナマヨ)、本性違はず」に同じ。〔諺語〕

もの-ぐるほし 物狂し【形二】物に狂ひたるさまなり。氣がちがひたるやうなり。ものぐるはし。 枕「夜(ヨ)も起きてゐて嘆けば、聞く人、物ぐるほしとて、笑ふ」

もの-けざやか 物氣淸・物氣冴【貌】『もの(物)は接頭語』何となくけざやかなるさま。 榮花「中宮の御方の衣が、への有樣も、物けざやかに、月日の行きかふ程も知られて」

もの-けたまはる 物けたまはる【句】もの(物)の條下を見よ。

ものげ-なし 物氣無し【形一】物物しからず。それと見立つる程にてはなし。 源氏「いと物げなき足もとを見つけられてはべらん時」 榮花「薄きは物げなきに、いと清げに見ゆ」

もの-こころ 物心【名】世の物事を知り味ふ心。よどころ。人情。

もの-こころぐきなし 物心附無し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく心づきなし。 榮花「かやうの事を、宮には聞しめして、もの心づきなう思しめすべし」

もの-こころぼそし 物心細し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく心細し。 源氏「物心細げにおぼいたり」

もの-ごし 物越【名】一物を隔ててあること。 伊勢「物ごしにだに對面して」 源氏「物ごしにてなどあるべきかはと、臥したまへる所に、御座(シヤウ)近う參りたれば、入りて、物など聞えたまふ」 二人の言語・動作。 一代男「太夫姿に備はつて、顏に愛敬(アイキヤウ)……、物ごし利發」 武家義理物語「物ごしに小訛(コナマリ)あつて、四國そだちとは知れける」

もの-ごとなし 物骨無し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく骨(ホネ)無し。何となく無骨(ブコツ)なり。 續世説「物ごちなき主(シユ)」

もの-ごと 物事【名】物と事と。物又は「事。事物(ブツ)。

もの-ごのみ 物好【名】一ものずき(物好)に同じ。 二或種類の物を、特に好むこと。よりきらひ。(物嫌に對して) 榮花「あながちに、物ごのみする人のみ多くなり

て」 狭衣「いと花やかに物どのみしたまふ御本性にて」

もの-ごはし 物強し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく情強(ゴシヤウ)なり。何となく堅苦し。 源氏「すくよかに言ひて、物ごはきさましたまへれば」

もの-こひし 物戀し【形二】『もの(物)は接頭語』何となく戀し。うらごひし。 萬葉「旅にして物戀しきに山もとの朱(ハネ)のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ」

もの-こまやか 物濃やか【貌】『もの(物)は接頭語』何となくこまやかなるさま。 榮花「殿の君達などぞ、今少しものこまやかなる事どもは語らせたまふめる」

もの-ごもり 物籠【名】さんろう(參籠)に同じ。 太平記「御しのびの物籠なれば」

もの-ごり 物懲【名】物事に懲るること。 源氏「危かりし物ごりに、いかにせんとおぼし煩へど」

もの-さし 物差・物指・尺度【名】物の長さを差し計る具。竹・鐵などにて、長く作り、長さの單位の目盛を施せり。さし。

ものさし-し 物差師・物指師【名】物差の製造を職とする人。

もの-さた 物沙汰【名】物事の沙汰。訴訟の聽斷。裁判。 東鑑「諸人訴訟事、爲レ無二成敗懈緩一……被レ結二人數、定二御物沙汰日結番事一」

もの-さだめ 物定【名】物事の良否・優劣を言ひ定むること。しなさだめ。鑑定。 源氏「馬頭(カウノ)、物定の博士になりて」

もの-さね 物實【名】物のたね。實物(ジツブツ)原料。ものしろ。ものぐさ。 古語「先に生(ア)れませる女子(ヒコ)は、物實、汝(ミマ)の物に因りて成りませり」

もの-さびし 物淋し【形二】『もの(物)は接頭語』何となく淋し。うらさびし。 丹奏「烟絶えて物さびしかる庵には人こそ見えね冬は來にけり」

もの-さぶ 物荒ぶ【動上二自】『もの(物)は接頭語』何となく見だてなく見ゆ。 十訓「いとど物さびたる家の簀子(コシ)の下に」 謠曲「夜討曾我」「我等兄が弟幕の内ほど、物さびたるは候ふまじ」

もの-さむし 物寒し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく寒し。心寒し。 玉葉「秋の雨の物寒くふる夕暮の空にしをれて渡る雁がね」

もの-さわがし 物騒し【形二】『もの(物)は接頭語』㊀何となくさわがし。 源氏「人人立ちこみて、物さわがしかりけるを」 ㊁世の中、靜穩ならず。物騒(サウ)なり。 平家「世間物さわがしと承れば」

もの-し 物仕・物師【名】『仕も、師も假借の文字にて、實は爲(シ)の義』物事に馴れて、それを整ふるにすぐれてある人。 落窪「いみじき物しぞ、まろは」 一代女「江戸の色町さかんの時、坂倉といへる物師、太夫千とせに親しくあひ」

もの-し 物し【形二】氣にくはず。いやに感ぜらる。不都合なり。 源氏「みづからは對面したまふべきさまにもあらねど、いと物しとおぼして」 榮花「かけても、斯く申す人をば、ものしき者におぼしのたまはず」 「じ」。

もの-じしん 物自身【名】〔哲〕次條に同じ。

もの-じたい 物自體【名】〔哲〕『獨 Ding an sich』ぶつによ(物如)に同じ。

もの-しづか 物靜か【貌】『もの(物)は接頭語』何となく靜かなるさま。 五人女「物しづかなる、斯かる山家(ヤマ)」

もの-しどけなし 物しどけなし【形一】『もの(物)は接頭語』何となくしどけなし。 源氏「宮は、なほ、いと若くおほどきて、物しどけなき御心にも」

もの-しらず 物不知【名】物事を知らぬこと、又、その人。無智。無識。無學。 蜻蛉曲輪日記「やい、ここな物知らずめ」

もの-しり 物知・物識【名】物事を知りてあること、又、その人。ことしり。博識。徒然「かきや木のまたにと、歌ふべしと、ある物しり申しき」

ものしり-がほ 物知顔・物識顔【名】物知らしき顔つき。物事を知りてありと誇る樣子。 枕「今まゐりの、さし越えて、物しり顔に、教やうなる事いひ」

ものしり-の-みこと 物知命【名】ながしらほのかみ(長白羽神)に同じ。

ものしり-びと 物知人・物識人【名】物知なる人。博識の人。ものしり。 祝詞(龍田風神祭)「物知人どもの卜事(ウラ)を以(モ)ちて卜(ウラ)へども」 續紀「物知人ども治めたまふ」

もの-じるし 物標・物印【名】物に取り附くるしるし。 傾城島原蛙合戰「磨臼(カスリ)・篩の物印」 源氏十二段長生島事「小松は、源氏の物じるし」

もの-しろ 物代【名】ものぎね(物實)に同じ。〔古語〕 紀「物實、此云二望能志呂一」

もの-す 物す【動佐變他】動作をおぼろげにいふ語。(隨ひて、前後の關係にて、種種の意に解せらる)。 榮花「消息など物すれど」 榮花「はかなき事も、故ありて物したまふ」

もの-す 物す【動佐變自】㊀あり、居り、行くなどの動作を、おぼろげにいふ語。 源氏「年頃經るに、御子も物したまはで」 同「形・心もすぐれて物したまふこと」 增鏡「九月の供花(クヱ)には、新院さへ渡りものしたまへば」 ㊁男女交合す。 一代男「わるごう、有るほど盡して物しける。打解けて後、この女、さしらつむきて」 同「しみじみと語りかけ、帶解きて、解かせて、心よく物して、初めて、首尾のしるしにて、硯取寄せ」

もの-ずき 物好・物數寄【名】ものごのみ(物好)に同じ。 俗つれづれ「さりとは至りたる物ずき」

もの-すご 物凄【形】ものすごし(物凄し)の略。 謠曲「山姥」「あら物すごの深谷やな」 鬼葉「物すごやあら面白の返花」

もの-すごし 物凄し【形二】『もの(物)は接頭語』何となくすごし。

もの-すさまし 物凄じ【形二】『もの(物)は接頭語』何となくすさまじ。 源氏「今より斯くこそはと思ひやられて、物すさまじくなん」

もの-ぞこなひ 物損【名】物事の趣を傷けそこなふこと。 枕「裳も著ず、袿(キチ)姿にてゐたるこそ、物ぞこなひに口をしけれ」 榮花「宇治の行幸せさせ給ふ。……めでたしなども、世の常なり。言ふにもおろかなれば、物ぞこなひにもやとて」

もの-その-もの 物其物【名】〔哲〕ものじたい(物自體)に同じ。

もの-それ-じしん 物其自身【名】〔哲〕ものじたい(物自體)に同じ。

もの-たいぷ (英 Monotype)【名】歐文の活字を組み、且つ植字と鑄造とを同時に行ふ、自働植字鑄造機の一種。米人ランストン(Folbert Langston)の發明に係る。

もの-だくみ 物工【名】たくみ(工)に同じ。 藻鹽草「物だくみ」

もの-たち 物裁【名】㊀布帛を裁つこと。たちもの。 ㊁衣服を裁ち又縫ふこと。たちぬひ。裁縫。ものぬひ。 源氏「物たちなどするねび御達(ゴタチ)、お前に、あまたして」 ㊂ものたちがたな(物裁刀)の略。

もの-だち 物斷【名】斷物(モタチ)をすること。

ものたち-がたな 物裁刀【名】たちものばちやう(裁物庖丁)に同じ。 和名「剪刀、毛乃多知加太奈。所二以裁二衣裳一也」

もの-だね 物種【名】㊀物事のたね。材料。原料。ものざね。 紀「物根、モノダネ」 五人女「命は物種、この戀草のいつぞは靡きあへる事もと」 ㊁草木の種。農作物の種。たねもの。 きのふはけふの物語「物種を蒔いて、生えぬが不思議でもない」

もの-たの-もし 物頼し【形一】『もの(物)は接頭語』何となくたのもし。 落窪「まじらひの程などに試むるに、物たのもしげありて、人のうしろみしつべき心あり」

もの-たら-ず 物足らず【句】『もの(物)は接頭語』何となく不十分に思はる。

もの-ぢかし 物近し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく親し。けぢかし。(物遠し

物種は盜まれず【句】血統は、いかなる事の爲にも隱るる事なき譬。〔諺語〕

ものだね-うり 物種賣【名】草木の種を賣ること、又、その人。 蕪村「初午や物種賣に日の當る」

に對して）源氏「御簾の前にだに、物ぢかうもてなしたまはず」

もの-つき 物憑・物附【名】一物怪（モノ）の憑（ツ）りつきてあること、又その人。二**よりまし**に同じ。盛衰記「俊寛・康頼が靈（ヤ）どもとて、御物附に移りて」太平記「山門の安否、軍の勝負を問ふに、この物つき、涙をはらはらと流して」

もの-つくり 物作【名】穀物・野菜などを耕し作ること、又、その人。耕作。本朝二十不孝「滋賀の片里に住みなして、あまたの人馬を抱へ、物つくりをして」「よ。

もの-つけ 物附【名】**もっつけ**（物附）を見

もの-つつまし 物慎まし【形二】『もの（物）は接頭語』何となくつつまし。源氏「いと物つつましくて、まだひびたる心に、いらへ聞えん事も無く」榮花「女官どもの、したり顔に、……物つつましげも思ひたらぬ氣色にて」

もの-つつみ 物慎【名】物事をつつみ隠して、言はぬこと。ものかくし。源氏「若君は、おほどかにらうたげなる樣して、物づつみしたるけはひ」

もの-づよし 物強し【形一】『もの（物）は接頭語』何となく強し。源氏「御心ばへども、いとどあやにくに物強げなるは」

もの-でらし 物調子【名】物の調子。一代男「能（ノウ）……、定家・松風・三井寺、かれこれ三番しめやかに、物調子、一きは低うして、なほやさしく」

もの-とがめ 物咎【名】物事を咎むること。とがめだて。源氏「夜はいたく更けゆくに、この物とがめする犬の聲、絶えず」

もの-とひ 物問【名】**うらない**（占）に同じ。狭衣「物とひ、何やかやと、心知るどちは、安き空なく」

もの-どほし 物遠し【形一】『もの（物）は接頭語』何となく疎し。けどほし。（物近しに對して）源氏「いと靜かに、物どほきさましておはするに」

もの-ども 者共【代】一多くの人。人人。宇治「越前國かぶら木の渡（ワタ）といふ所に、渡（ワタ）せんとて、者ども集まりたるに」平家「世に美しき若君を、北條の、只今斬らるるぞやとて、者ども、ひしひし走り集りければ」二從者など、第二人稱の複數。曾我會稽山「やあやあ、者共、色ある君が見る物、豕でも、鹿（シシ）でも、一匹生捕り、龜菊が髮筋にて繋いで見たし」

もの-とり 物取【名】他人の物を盗み取ること、又、その人。太平記「斯かるまぎれに物取ども、人の太刀・刀を奪ひて」

ものな-がしは ものな柏【名】〔植〕**ははそ**（柞）に同じ。

もの-なげかし 物歎かし・物嘆かし【形二】『もの（物）は接頭語』何となく嘆かし。枕「常に物なげかしう、世の中に心にあはぬ心ちして」

もの-なげき 物歎・物嘆【名】物事につきて嘆くこと。悲嘆。榮花「公・私、今の物なげきにして、しづ心なし」

もの-なつかし 物懐し【形二】『もの（物）は接頭語』何となくなつかし。俳諧新選（可幸）「つぎ木して物なつかしきあしたかな」

もの-なり 物成【名】一田畠よりの收穫。二諸侯・諸家の祿高の其礎たる、一年の米の收穫高。年貢・取箇（カリ）・成箇と歸する所は同一なれども、指す所、各、小異あり。〔戰國時代より德川時代にかけての語〕義輪軍記「關東八箇國に、上杉召抱の城四十二ケ城なり。その外、陣屋と名添、物成取立所、二十三箇所これあり」續撰清正記「物成の多少、地の上下を隱して、高ばかり御覽ありて」

ものなり-づめ 物成詰【名】『高には拘らず、物成にて增減する義』德川幕府の制度にて、知行渡（ワタ）の際、物成の高き地と低き地とを通計して、一石の地に就き、物成三斗五升、即ち物成三・五分（ブン）の通則に合はせて、知行を渡ししこと。

もの-なる 物馴る【動下二自】物事に馴る。世故に通ず。源氏「したりがほに、物馴れても候へるかな」

ものなれ 物馴【名】物馴れてあること、又その人。源氏「三つが一つにてあらん

かしと宣ふに、心得はてて立ちぬ。物馴のさまやと、君はおぼす」

もの-にくみ 物憎【名】物事を憎むこと。源氏「斯かる筋の物にくみは、あて人もたきものなり」

もの-ぬし 物主【名】物の持主。領主。天正記「羽柴孫七郎秀次、江州のものぬしとして」

もの-ぬひ 物縫【名】衣服などを縫ふこと。又その人。裁縫。榮華「日に一たび物食はせん、物ぬひにより、命は殺さじと思ひ」一代男「物縫の小宿（ヤド）、板橋のたはれ女も、見殘さず」

ものぬひ-や 物縫屋【名】物縫を業とする家、又その人。したてや。一代女「十四五人の手代、この物縫屋へ行く事を爭ひける」

ものぬひ-をんな 物縫女【名】物縫を業とする女。若風俗「土手町の素人女に忍び通ひ、宿にては、物縫女を、畫居睡らせ」

もの-ねがひ 物願【名】物事を願ふこと。空穗「苦しげなる御物ねがひかな」

もの-ねたみ 物妬【名】物事を妬むこと。ものうらみ。嫉妬。著聞「いと物ねたみする女」

もの-ねんじ 物念【名】物事をこらへ忍ぶこと。忍耐。源氏「物念じしてのどかなる人こそ、さいはひは見はてたまふなれ」

もの-の 物の【句】**もの**（物）の條下を見よ。

もの-の-かひ 物のかひ【句】**もの**（物）の條下を見よ。

もの-の-ぐ 物具【名】一**だうぐ**（道具）二に同じ。枕「御物の具運び、いみじう騷しきに合はせて」榮花「四月には、枇杷殿、一品宮の御裳著とて、春より、よろづに急がせたまふ。殿の御前、御物の具ども、えもいはずしととのへさせたまふ」三**ぐそく**（具足）四に同じ。和「兵器、モノノグ」保元「直兜（ヒタカ）にて、物の具したる兵」

もの-の-ぐ-ぶぎやう 物具奉行【名】**よろひぶぎやう**（鎧奉行）に同じ。

もの-の-け 物怪【名】死靈（シリヤ）・生靈（イキ）の憑（ツ）きて、人を惱ますといふもの。形を現はす妖鬼にもいふことあり。靈怪（リヤウ）。**よりびと**（寄人）三參照。枕「驗者（ゲン）の、物のけてうずとて」榮花「加持なども參らぬ程に、いとど御物怪はこはくなりまさりければ」

物怪移る【句】物怪、よりましの身に移る。源氏「御もののけ、小きわらはに移りて」

物怪を移す【句】物怪を、よりましの身に移り遷かしむ。榮花「御物のけ、人人に移しののしる」

物怪を驅移す【句】前條に同じ。榮花「御物のけどもを、四五人にかり移しつつ、各、僧どもののしりあへるに」

物怪を渡す【句】前條に同じ。宇治「物のけ渡しし程に、物のけ、物につきて」

もののけ-だつ 物怪だつ【動四自】物怪らしく見ゆ。物怪のとりつきてあるやうに見ゆ。和泉式部續集「物のけだつ心地に、うつし心もなくわづらふを」

もの-の-ぞき 物覗【名】物事をのぞき見ること。源氏「物のぞきの心もさめぬなめり」

もの-の-ぞみ 物望【名】物事を望み欲すること。枕「初瀬……、む月などには、只、いと物騷しく、物のぞみなどする人の、ひまなく詣づる見る程に」

もの-の-どやか 物長閑やか【形】『もの（物）は接頭語』何となくのどやかなるさま。榮花「その夜は、物のどやかにて、女房たち、船に乘りて遊び」

もの-の-な 物名【名】〔文〕和歌、又は俳諧にて、他の語句の中に、物の名を含ますること。例へば、古今和歌集の紀貫之の歌「秋人は宮木引くらし足引の山の山彦呼びとよむなり」の「引くらし」に「蜩（ヒグラシ）」の名を含めて詠みたる、又、「移るらん」といひて、「鶯・鶴・鬣」の三種の鳥の名を含むる類。

もの-の-ふ 武士・武夫【名】『本居宣長の說に依れば、元來はひろく朝臣をいひし語なれど、主としては、武臣を指ししこと多く、姓氏の物部（モノベ）も、「もののふべ」の

約音にて、武士の部族の義なりといふ。一説には、物部氏、可美眞手(マヲアヂシ)命に率ゐられて、軍功を建て、漸次、門族の盛大を致しより、物部の語、轉じて「もののふ」となり、「もののふの八十氏(ウヂ)」などの稱も生ずるに至りしなりともいふ。『ぶし(武士)に同じ。萬葉「もののふの八十伴男(ヲトモ)を、まつろへむけのまにまに」

もののふの道 【句】ぶしだう(武士道)に同じ。風雅「命をば輕きになしてもののふの道より重き道あらめやは」

もの-のふ-し 物節 【名】近衛の舍人(トネリ)の中にて、東遊(アヅマビ)にすぐれたる者。源氏「右近の中將・少將、もののふしらひきゐて參りたり」十訓「大二條殿、大將にておはしましける時、内へ參らせたまひけるに、物の節にて、近利が仕うまつりけるを」

もののふ-すがた 武士姿・武夫姿 【名】武士たる姿。增鏡「大納言も、大塔(ダイ)の前座主の宮も、うるはしき武士姿にいでたたせたまふ」

もののふ-の 物部の・武士の・武夫の 【枕】 ㊀もののふの數は多きによりて、八十氏(ヤソヂ)・五十(イ)と同音なる地名にかけ、又轉音なるうぢ(宇治)にかけていふ。**もののふ**(武士)參照。萬葉「物部のやそうぢ川のあじろ木にいさよふ浪のゆくへ知らずも」同「物部のいはせの森のほととぎす今も鳴かぬか山の常陰(トカ)に」同「物部のうぢ川渡り」㊁男は猛きものなるより、をとこ(男)にかけていふ。萬葉「秋野には今こそ往かめもののふのをとこをみなの花にほひ見に」

もの-の-べ 物部 【名】㊀伴造(トモノヤツコ)の一。大伴部の兵刑を督せしもの。㊁古、刑部省の囚獄司、京職の東西市司、及び衛門府に置きて、刀剣を帶び、罪人の決罰を掌りし職。

もののべ 物部 【名】『**もののふ**(武士)參照』㊀姓氏の一。神別。姓(カバネ)は、朝臣(アソン)なると、連(ムラジ)なると、又、姓無かりしもあり。饒速日(ニギハヤ)命、神武天皇東征の時に、歸順し、命の子可美眞手(マヲアヂシ)命、天物部を率ゐて、賊を討ち、天皇の信任を得、垂仁天皇の御代、連姓を賜はり、爾後、世世、大連として、門族の盛大を致し、武士を「もののふ」といふも、この氏族より出でし語にて、物部守屋、蘇我氏と爭ひて亡びしより、本宗はやや衰へたれど、榎井(モヒ)・石上(カミ)等の支族、なほ世に聞えたり。㊁姓氏の一。孝昭天皇の皇子彦國押人(ヒコオシヒト)の裔。姓(カバネ)は、公(キミ)なると首(オビト)なるとありたり。萬葉「物部の臣(オミ)の壯士(ヲトコ)は大王(オホキミ)の任(ヨサ)のままに聞くといふ物ぞ」

もののべ-あらかひ 物部麁鹿火 【名】〔人〕武臣。麻佐良の子。仁賢天皇以後の五朝に仕へて、大連(オホムラジ)となる。繼體天皇御卽位の時、定策の功あり、又、筑紫國造磐井、火・豐二國に據りて叛するや、勅命を奉じ、起き戰ひてこれを斬る。宣化天皇の元年薨ず。

もののべ-しんじや 物部神社 【名】石見國安濃(アノ)郡川合(カハヒ)村に鎭座せる國幣小社。祭神は物部氏の祖なる可美眞手(マヲアヂシ)命。古來、この國の一ノ宮にして、土俗、單に大社(オホヤシロ)と呼ぶ。神官金子氏は、物部の裔孫なりといひ、男爵に列す。

もののべ-そらい 物部徂徠 【名】〔人〕**をぎふそらい**(荻生徂徠)に同じ。

もののべ-の-おきな 物部翁 【名】〔人〕前條の尊稱。萬葉十紅「物部の翁の、牛込にいませし頃にやありけん、南郭・春臺・蘭亭を始として、このほとりの十五景を別ちて」

もののべ-もりや 物部守屋 【名】〔人〕朝臣。尾輿(オコシ)の子。父に繼ぎて、大連(オホムラジ)となる。敏達天皇の朝、佛法信者なる蘇我馬子と意見を異にし、用明天皇の崩じたまふや、穴穗部(アナホベ)皇子を立てんとして、事洩れ、馬子、兵を發して、穴穗部皇子等を殺し、遂に豐聰耳(トヨトミミ)皇子等と、師を率ゐて、守屋を攻め、守屋敗死す。

もののべ-をこし 物部尾輿 【名】〔人〕朝廷。物部目(マノベ)の孫、荒山の子。欽明天皇の朝に大連(オホムラジ)となり、獻替する所多く、又、中臣(ナカトミ)鎌子と排佛を主張し、天皇、ために、有司に詔して、百濟獻ずる所の佛像を、難波ノ堀江に投ぜしめたまふ。「を見よ。

もの-の-ほん 物本 【名】**もの**(物)の條下に至れり。

もの-の-ほん-えどさくしやぶるね 物本江戸作者部類 【名】〔書〕江戸の小說作者の經歷とその著作とを記せるもの。目次には四卷とあれど、卷一(赤本作者・洒落本作者・中本作者・卷二(讀本(ヨミ)作者の上)のみにて、卷三(讀本作者の下、淨瑠璃江戸作者)、卷四(小說・淨瑠璃本の畫工及び彫版者)は發行せられしや否や、詳かならず。著者も、自序に天保五年蟹行散人獨稿すとあるのみにて、詳かならず。溫知叢書に收む。具さには、近世物之本江戸作者部類といふ。

もののほんや 物本屋 【名】**ほんや**(本屋)に同じ。雞州府志「倭俗書冊惣謂二物本一、撰レ之謂二草子一、賣レ之家謂二物本屋一、多在二京極一」

もの-は 物は 【名】**ものはづけ**(物は附)の

もの-はかなし 物果無し 【形一】『**もの**(物)は接頭語』何となくはかなし。拾「楓の木、……、花も、いと物はかなげにて」

もの-はかばかし 物果果し 【形二】『**もの**(物)は接頭語』何となくはかばかし。榮花「男持たる人も、物はかばかしからぬは、いかにせんと思ひ」

もの-はじめ 物始 【名】「物の始」㊁に同じ。太平記「武家の大將一人討取ったり、物始よしと喜びて」

もの-はぢ 物恥 【名】物事に恥づること。空穗「あなあぢきなの御物はぢや」源氏「所せき物はぢを見あらはさんの御心もことになくて過ぎゆくを」

もの-はづかし 物恥し 【形一】『**もの**(物)は接頭語』何となくはづかし。源氏「かたみに物はづかしく、胸つぶれて、物も言はで泣きたまふ」

ものはづけ 物は附 【名】**なぞづけ**(謎附)に同じ。浮世床(後編)「長き物、飛頭蠻(ロクロ)の反吐(ヘド)とは、清女が筆めきたる物は附の通句(トホク)なり」浮世風呂「白き物は、初湯の三方とかいふめる、物はづけとやらんも、うべなり」「同じ。

もの-はな 藻花 【名】〔植〕**もづく**(水雲)に

もの-はなやか 物花やか 【名】『**もの**(物)は接頭語』何となく花やかなるさま。榮花「御衞府すがたども物はなやかに、折に合ひたる御有樣ども」

もの-はなる 物離る 【動下二自】『**もの**(物)は接頭語』何となく人家より遠ざかる。大鏡「まして、物はなれたる所など、いかならん」

もの-はみ 物食 【名】鳥類・蟹などの胃。〔古語〕和名鰾、毛乃波美。鳥受レ食處也」同「沙藥」加邇乃毛乃波美。在二獐腹內一者也」

もの-はゆし 物映し 【形二】『**もの**(物)は接頭語』何となくはゆし。盛衰記「少し物はゆげに覺して」

もの-はり 物張 【名】『張るとは、布帛を板に張りて、光澤を出すをいふ』人の家に雇はれて裁縫すること、又、その者。おはり。ものぬひ。今書「老いたる尼……、おのれは、故殿の物はりにて」拾玉「それもいさ爪に藍しむものはりのしいし取り置くたすき姿に」

もの-はるか 物遙か 【貌】『**もの**(物)は接頭語』何となく遙かなるさま。榮花「中島の物の音(ネ)など、物遙かに聞ゆるに」

もの-び 物日 【名】㊀祭・祝事など、特別なる事の行はるる日。やくび。傾城反魂香「今日は、二日の拂日なり。……、ほんに、ほんに、物目なかに痩せたはいな」諸藝太平記「何時となく逢ふ人絕えて、物日の淋しきを」㊁**ものび**(紀日)に同じ。色道大鑑「物日。毎月、傾城の賣日をいふ」織留「十四日の祇園女郎の物日とて、揚屋きはめて呼びおき」

ものふ 桃生 【名】㊀〔地〕『**ふは**、ウの如く發音す』陸前國十四郡の一。郡役所を飯野川町に置く。古は、「もむのふ」といへり。㊁明治の初年設置の縣の一。**みやぎ**(宮城)㊁參照。

もの-ふかし 物深し【形一】『もの(物)は接頭語』一何となく、物の奥に籠りてあるやうなり。枕「鳥の聲も、初は、羽(ハ)のうちに口をこめながら鳴けば、いみじう物深く遠きが、次次になるままに、近く聞ゆるも、をかし」二心、何となく奥深し。おくゆかし。源氏「物深く重き方はおくれて」榮花「思ひつづけ、言ひつづけ泣く程、物深からぬ人も、涙留めがたし」

もの-ふる 物舊る【動上二自】『もの(物)は接頭語』何となく古くなる。ふるぶる。源氏「荒れまさり、廣う物ふりたる所」同「いと物ふりたる所にて」

ものべがは 物部川【名】〔地〕土佐國香美(カガ)郡の西部を、南西に流れて、土佐灣に注ぐ川。源を、郡の東北部なる槇山林大字別府の白髮(シラ)山に發す。幹川のみの流程十四里二十二町。

もの-ほし 物干【名】ものほしば(物干場)の略。重井筒「山口屋の物干傳ひ忍び來る」

ものほし-ざを 物干竿【名】ほしものざを(乾物竿)に同じ。

ものほし-ば 物干場【名】洗ひたる布帛・衣類などを日に乾す場所。ものほし。

もの-まう【感】『もと、物申さんの略』他人の許を訪ふ時、まづ言ふ掛聲。たのまう。たのむ。狂言「連歌見沙門」「參る程に、これちや。ものまう、内にござるか」雅楽醉狂集「長閑禮者物申聲」

もの-まうで 物詣【名】『物へ詣づる義』神社・寺などに詣づること。ものまゐり。參詣。枕「物まうでする供にも、我も我もと參りつかうまつり」源氏「院の御物まうでにいでたちたまふ」

もの-まぎれ 物紛【名】物事にまぎるること。心のまぎれ慰むこと。一代男「人の娘子(ムスメ)に限らず、知れたいたづら、所そだちも物まぎれして」

もの-まさ 物まさ・戸者【名】古、死人の著る衣を著て、弔問の人に會ふ役に當りし人。「古語」紀「尸者モノマサ」「學問」。

もの-まなび 物學【名】物事を學ぶこと。

もの-まね 物眞似【名】一人・動物その他種種の物事の態度・聲音などを眞似ること、又、それをなす興行物。大鏡師貴暦「今の傾城の物眞似・芝居御好(オス)の一德」二次條の略。胸算用「月待・日待に物眞似して、人の氣に入りける」

ものまね-きやうげん-づくし 物眞似狂言盡【名】歌舞伎の、承應元年停止せられて後、翌二年三月、再び許可せられし時の名目。三都の芝居は、何れも、將棋の駒に似たる形の札に「物眞似」の三字を記して、木戸口に掲げ、これを物眞似札(モマネ)と呼べり。

もの-まねび 物眞似【名】他の言葉・樣子などを眞似ること。源氏「今樣だちたる御物まねびになん」榮花「講師などのしつづけたまふ有樣、なかなかなる物まねびなれば、書かず」

ものまね-ふだ 物眞似札【名】ものまねきやうげんづくし(物眞似狂言盡)を見よ。

もの-まへ 物前【名】一戰爭の始まる前。甲陽軍鑑「物前にて、腰立たず無性になる人は、本の臆病者とて」二盆・暮などの贈答。諸支拂などに忙しき時の前。胸算用「買物は當座拂にして、物前の取り遣りも、やかましきことなし」

もの-まめやか 物忠實【貌】『もの(物)は接頭語』何となくまめやかなるさま。源氏「物まめやかにうしろみ」

もの-まゐり 物參【名】ものまうで(物詣)に同じ。中務内侍日記「公(オホ)・私、打ち紛れて、物參りなどのひま、いつを限となければ」

もの-まをし 物申【名】物を取り次ぎて申し上ぐる役。紀「謁者、モノマヲシ」

もの-み 物見【名】一物事を見て樂しむこと。みごと。觀覽。見物(ケン)。源氏「物見には、え過(ス)したまはで參りたまふ」二みごと(見物)三に同じ。きのふはけふの物語「京の町にて、しだれ柳の物見なるを持ちあるく」醒睡笑「世にすぐれて、物見なる大鬚を持ちたまへるあり」三遠方を見渡すために、高く構へたる處。ものみだい。ものみやぐら。四戰爭の時、敵の樣子を探ること、又その役の人。人數の多少によりて、大物見・中物見・小物見の稱もありたり。各條を見よ。ものみばん。ものみやく。斥候。五牛車(ギシヤ)・駕籠などの窓。牛車のは、左右の立板に設け、その戸を物見板といひ、又、その窓に掛けてある簾を物見簾といひ、又、長物見・切物見の別あり。各條を見よ。盛衰記「車の物見を打ち塞ぎ、前後に障子を立てたれば、月日の光も見たまはず」六次條を見よ。七和船の挾(サシ)と步(ブ)との間。八昔の水戰にて、敵の樣子を探る役をつとめし船。快速なる小早(コハヤ)を、盲船(メクラブネ)に仕立てて用ひ、張板の窗より窺ひ見て探りたり。九ものみやぐら(物見櫓)の略。和田合戰女鑑「門前近く來りしが、跡先見廻し、館(タチ)を眺め、あれが物見、これがお座敷、内の首尾を窺ふは」

物見の幅(ノ)【句】『所所總ひ殘したる部分より、敵を窺ふによりていふなるべし』外幕(ナヒ)の、多くは五幅なる中にて、上端と下端との二幅以外の三つの幅。紋(モン)の幅(ノ)。

ものみ-あしがる 物見足輕【名】物見四の役をつとむる足輕。「を見よ。

ものみ-いた 物見板【名】ものみ(物見)五を見よ。

ものみ-がさ 物見笠【名】物見二の人のかぶりてある編笠。

ものみ-ぐさ 物見草【名】一〔植〕まつ(松)二の異稱。藏玉集「物見草。松。物見草袖にかざさんをりに涙をだにも花と思へば」二はりすげ(針菅)に同じ。

ものみ-ぐるま 物見車【名】祭禮の時などに、貴人の、見物のために乘りあるく牛車(ギシヤ)。大鏡「石清水の臨時の祭、……、物見車ども、二條・大宮の辻に立ちかたまりて見るに」「五を見よ。

ものみ-すだれ 物見簾【名】ものみ(物見)五を見よ。

ものみせ-だて 物見立【名】『だて(立)は接尾語』めにものみせだて(目物見立)の略。狂言「竹子爭」「目に物見せう。……。そちが物見せだては、おいてくれ」

ものみ-ぞなへ 物見備【名】昔の軍にて、主隊より離れたる所に居りて、敵の狀勢を察し、臨機應變の戰を爲す一隊。

ものみ-だい 物見臺【名】ものみ(物見)三に同じ。

ものみ-だかし 物見高し【形一】『次條の轉』聊かなる事をも珍しがりて見物する傾あり。ものみだけし。八笑人「只さへ物見高き往來の人」卷つれづれ「千本念佛に、女は物見高くて出でける」

ものみ-だけし 物見猛し【形一】前條に同じ。五人女「女は物見だけくて」同「このあたりの裏借屋に住める女の、物見だけくて」

ものみ-どり 物見鳥【名】〔動〕さる(猿)一の異稱。

ものみ-ばん 物見番【名】ものみ(物見)四に同じ。

ものみ-びと 物見人【名】物見の人。見物人(ケンブツニン)。落窪「下臈の物見人ども、わななき、騷ぎ、笑ふ事、限なし」

ものみ-ぶね 物見船【名】物見二をなす人の乘りてある船。

ものみ-まど 物見窓【名】のぞきまど(覗窓)に同じ。

ものみ-やく 物見役【名】ものみ(物見)四に同じ。

ものみ-やぐら 物見櫓【名】さほみやぐら(遠見櫓)に同じ。平家名盛衰記「屈强の物見櫓でござんなれと駈上る門(ド)の松」

もの-むつかし 物難し【形二】『もの(物)は接頭語』何となくむつかし。何となく氣がつまるやうなり。源氏「殿も、物むつかしき折は、近江の君見るこそ、よろづまぎるれとて」

もの-むつかり 物憤【名】物事にむつかること。榮花「あさましう、心うるはしう、物憤かりなどせさせ給はざりつれば」

もの-めかし 物めかし【形二】一かどの物と見えてあり。源氏「位など、今少し物めかしき程になりなば」

もの-めかす 物めかす【動四他】一かどの物と見ゆるやうに扱ふ。榮花「今、人の物めかしたまふに、わがせし事を、人のせんやうにのたまふは、何ぞ」源氏「はかなく見給ひけん人をも、物めかし見たまひて」

もの-めづらし 物珍し【形二】『もの(物)は接頭語』何となく珍し。

もの-めて 物愛【名】物事を愛づること。源氏「海の中の龍王のいといたう、物めてするものにて」

もの-も 物も【感】**ものまう**(物申)の約。狂言(吟醒)「急いで參らう。程なうこれでござる。ものも、お案内」

物も三分【句】來訪する人は、大抵、何物か、求むる所あるものなれば、「物も」の辭は、卽ち少くとも、銀三分の賀となる。〔諺語〕

もの-もち 物持【名】金品を多く所持する人。かねもち。財産家。

もの-もどき 物抵牾【名】物事をもどくこと。紫式部日記「物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、うるさければ、物言ふことも、ものうく侍る」

もの-もの 物物【名】多くの物。和泉式部續集「汐の間(マ)も見えぬものものありけりと蜑のあまたに見せじとぞ思ふ」續猿蓑(露沾)「物物の心根問はん月見かな」

もの-ものし 物物し【形二】いかにも一かどの物事と見えてあり。おごそかなり。立派なり。枕「いと物物しう、清げによそほしげに、下襲(サンネガ)の尻、長く所せく候ひたまふ」源氏「御年の加はるけにや、物物しきけさへ添ひたまひて」 ㊁さまでも無き物事を、いかにも、一かどの物事らしく見せかけてあり。大袈裟(ケサ)なり。大層らし。謠曲(盆藏)「物物しやと、夕日影に、打物ひらめかいて切つてかかれば」

もの-もの-づくし 物物盡【名】赤き物は何何、樂しき物は何何など、或性質を備へたる物事を、面白く列ね擧げたる文章。清小納言の枕草子より始まる。

もの-もひ 物思【名】**ものおもひ**(物思)の略。萬葉「防人(サキモリ)に行くは誰がせと問ふ人を見るがともしさものもひもせず」

もの-もらひ 物貰【名】㊀金品・食物などを他人に乞ひて、生活すること、又その人。おもらひ。こじき。若風俗「伽羅(ラキ)の燒殼(ガラ)下されませいと、都なれや花車(シヤ)なる物貰」 ㊁『他人の物を見て、欲しがる罰として、生ずる物との義か』目ぶたに發する、一種の小き腫物。

物貰に種無し【句】「乞食(キジ)に種無し」に同じ。〔諺語〕

もの-やはらか 物柔か【貌】『もの(物)は接頭語』何となくやはらかなるさま。しとやか。源氏「律(リツ)の調は、女の物やはらかに掻きならして」

もの-やみ 物病【名】やまひ。病氣。伊勢「物やみになりて、死ぬべき時に」

もの-ゆかし 物床し【形二】『もの(物)は接頭語、床は、假借の字』何となくゆかし。枕「若き男どもの、物ゆかしう思ひたる」

もの-ゆゑ 物故【句】もの(物)の條下を見よ。

ものゆゑ-に 物故に【句】もの(物)の條下を見よ。

もの-よし 物吉【名】㊀めでたきこと。吉慶。江次第「元日奉拜二龍眼一是物吉之事也」 ㊁**らいびやう**(癩病)の忌詞。醒睡笑「或者、正月二日の夜、夢に、思ひよらず我が身に、癩瘡いできたるを見て、目ざめて案ずるやう、かれをば物吉といふなれば、仕合、なにはに物よからう」 ㊂癩病の乞食。人倫訓蒙圖彙「物吉は、竹の皮籠(カゴ)の疊筵に張りたるを負ひて、洛中を勸進に出づるを、物吉といひそめしより、緣起よしとて、名づけしものなり」

もの-よし 物善し【形一】『もの(物)は接頭語』何となくよし。仕合(シアハセ)よし。運よし。紫花「ものよかりけるまうとかな、いみじう多く物を賜はりたるとぞ笑はせたまひける」

もの-よみ 物讀【名】書物を讀むこと。讀書。學問。五人女「この客僧は、わが物讀のお師匠なり。よくもてなせ」染模樣妹脊門松「物讀したしるしか、さっぱりとした詰開(ツメヒラキ)、道筋が立って、面白い」

もの-よわし 物弱し【形一】『もの(物)は接頭語』何となく弱し。續猿蓑(荊日)「物弱き草の座とりや春の雨」

もの-ら 物等【名】何やかやの物事。

物等言ふ【句】「物を言ふ」を、おぼろげにいふ語。古今「親の守りける人の娘に、いと忍びあひて、物ら言ひける間に」

ものろおぐ(英 Monologue)【名】〔文〕ざく

もの-わかやか 物若やか【貌】『もの(物)は接頭語』何となく若きさま。紫花「物若やかに輕輕しからぬ人は、出でて走りもいぬべかりし」

もの-わかれ 物分【名】雙方の意見一致せずして、相談のまとまらぬこと。

もの-わすれ 物忘【名】物事を忘るること。失念。古今「いにしへになほ立歸る心かな戀しき事に物わすれせで」

もの-わびし 物侘し【形二】『もの(物)は接頭語』何となくわびし。源氏「いと物わびしき事、數知らず」

ものわびしら 物侘しら【貌】物わびしきさま。〔古語〕堀文「夕づく日さすや嵐の山もとに物わびしらに猿さけぶなり」

もの-わらひ 物笑【名】他人の言行を見聞きして、笑ひ興じ、又は嘲り笑ふこと。落窪「花花と物笑する人にて、笑ひたまふこと、限無し」紫花「など、これがをかしからん、物わらひいたらしける女房たち多かりける宮かな」

もの-ゑんじ 物怨【名】**ものうらみ**(物恨)に同じ。枕「人の妻(メ)などの、すずろなる物ゑんじして隱れたるを」

もの-をしみ 物惜【名】物を惜しむこと。やぶさか。吝嗇。紀「物をしみせさせたまふ宮」

もは 藻葉【名】〔植〕も(藻)に同じ。一說に、主として、大葉藻(モノ)をいふと。和名「藻、毛波」

もは【副】もはや(最早)に同じ。一代女「宵したまへ。もは一つもならぬ」

もはう 摸倣・摹倣【名】眞似ならふこと。似ること。摸擬。ぼはう。

もはう-げいじゆつ 摸倣藝術【名】〔美〕『英Imitative Arts』繪畫・彫刻・彫版等、多少自然を再現する、卽ち題材を自然に仰ぐ諸藝術の總稱。

もはう-せつ 摸倣說【名】〔哲〕『英Imitation theory』社會學にては、社會人心の結合、社會の成立等の原理を、言語學にては、言語の起源を、又、藝術上には、藝術の起源を、人類の模倣性より出づとする說。

もはげ【名】〔動〕まはぎに同じ。

もはづし 藻外【名】昔の船軍に、我船の櫓舵に、敵の引網などの絡まりたるを切るに用ひし具。鐵又は木の枝にて、雁股(カリマタ)を作り、長き柄を取り附く。

もはん 模範【名】『模は木製の型(カタ)、範は竹製の型の義』かた。のり。てほん。範(ハン)。ぼはん。

もはん-おんかい 模範音階【名】〔音〕『英Normal scale』ハ調長音階及びその關係したるイ調短音階。この兩者は、これを移調せる他の諸長音階と諸短音階との模範又は基礎となる。

もはん-しう 模範囚【名】囚人の中にて、よく獄則を守り、他の囚人の模範とすべき者。

もはん-せい 模範生【名】全校又は全級等の學生の中にて、學術・品行等、他の學生の模樣とすべき者。

もはん-へい 模範兵【名】多くの兵士の中にて、學術・品行等、他の兵士の模範とすべき者。

もはん-りん 模範林【名】業を指導するために、府縣その他の公共團體にて設置したる公有森林。

もはめっと-けう 摩哈麥敎【名】〔宗〕まほめっとけう(摩哈麥敎)に同じ。

もはや 最早【副】今となりては。すでに。

もはら 專【副】もっぱら(專)に同じ。古今「逢ふ事のもはら絕えぬる時にこそ人の戀しき事も知りけれ」伊勢「夜ひと夜酒のみしければ、もはら逢ふ事もえせで」

もばら 茂原【名】〔地〕上總國長生郡にある町。市街は房總街道に沿ひ、千葉驛と勝浦驛との略中間に位し、鐵道房總線の停車場あり、醬油の釀造盛んなり。**さうげん**じ(藻原寺)參照。

もひ 盌【名】水を盛るに用ふる器。〔古語〕和名「盌、毛比」

もひ 水【名】『前條の語の轉義』飲料に供する水。のみみづ。おひや。神宮儀式帳「御水(ヒミ)四毛比、御水六毛比」

もひ-がた 盌形【名】椀の形に作れる陶製の器。〔古語〕延喜式「椀形、モヒガタ」

も-ひき 裳引・裳曳【名】裳裾を曳くこと。萬葉「わがせこが言(コト)うるはしみ出でて行かば裳引しるけむ雪な降りそね」

もひとり-の-つかさ 主水司【名】しゆすゐし(主水司)に同じ。

もひとり-の-つかさ 水司【名】後宮に屬せし十二司の一。尚水(モヒトリノカミ)・典水(モヒトリノスケ)・采女(ウネメ)の職員ありたり。

もひとり-の-つかさ 水部司【名】齋宮寮に屬せし十二司の一。

もひとり-の-むらじ 水取連【名】上古、水取部の部民を率ゐて、供御(ゴ)の水を司りし官職。

もひとり-べ 水取部・水部・水戸【名】古、供御(ゴ)の水漿・饘粥及び藏氷に從事せし部民。

もひとり-べ 水部【名】古、主水司と水部司とに屬して、その事務に從事せし者。

も-ひも 裳紐【名】裳に取り附けて、それを結ぶに用ひし紐。紀「裳帶、モヒモ」

もふ 思ふ【動四他】おもふ(思ふ)の略。〔古語〕記「い切らむと心はもへど」萬葉「物もふと人には見えじ下紐の下ゆ戀ふるに月ぞ經にける」

もふく 喪服【名】喪中に著用する服。いろ。ふぢごろも。凶服。もぎぬ。和名「縗、不知古路毛。喪服也」

もふし-つかふな 藻臥束鮒【名】藻に臥す、長さ一束(タバ)ほどの鮒なりとも、古、河内國志紀郡裳伏より產せし鮒なりともいふ。萬葉「沖べ行き邊(ヘ)に行き今や妹がためわがすなどれる藻臥束鮒」

もふね 喪船【名】棺を載せゆく船。〔古語〕紀「喪船、モフネ」

もふね 藻船【名】もかりふね(藻刈船)に同じ。

も-へう 模表【名】もはん(模範)に同じ。

もへえる (英Mohair)【名】『古代佛蘭西語Mohere の訛にて、その古代佛蘭西語は、亞剌比亞語Mukhayyar(山羊の毛の衣の義)より出でしならんといふ』小亞細亞原產のアンゴラ山羊の毛に、絹絲又は木綿絲を交へて織りたる織物。

もへやあ (英Mohair)【名】前條に同じ。

も-ほこ 【名】〔植〕しきみ(櫁)に同じ。〔古語〕字鏡「莽草、毛保己」

も-ほん 摸本・摹本【名】摸寫したる本。

もほん 模本【名】手本(テホ)。臨本。粉本。

もま 【名】〔動〕むささび(鼯鼠)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

も-また 亦【名】漢字の「亦」の字を、「又」「復」など同訓の字と區別するために、特に呼ぶ名稱。

もみ 【名】すりみ(摺身)Ⅱに同じ。

もみ 籾【名】Ⅰ『漬して萌えしむるより、萌實(モエ)の義にていふとも、眞實(マ)の轉にて、美稱なりともいふ』米の、殼の附きてあるままのもの。もみごめ。紀「穀、モミ」Ⅱもみがら(籾殼)の略。

籾を下(オ)す【句】籾を磨りおろす。一心二河白道「いざ籾おろしませうと、臼を挽き、さまざま働く」

もみ 蝦蟇【名】蝦蟇を調理して煮たる食品。〔古、大和國吉野の國樔(クズ)の語〕紀「國樔者……煮二蝦蟇一爲二上味一、名曰二毛瀰一」

もみ 紅絹・紅【名】『もと、紅花(ベニ)を揉みて染めしによりていふ』紅(ベニ)にて、緋色に染めたる絹布。多くは、婦人服の裏地に用ふ。一代女「菖蒲(アヤ)八丈に、紅のかくし裏を附けて」

もみ 攤【名】だ(攤)に同じ。

もみ 鼯鼠【名】〔動〕むささび(鼯鼠)に同じ。和名「鼯鼠、毛美。俗云二无佐佐比一」

もみ 樅・椹・鳳尾松【名】〔植〕松杉科に屬する常綠喬木。我國、所在の山地に自生し、老大なるは、高さ十五丈に達するもあり。樹皮は、普通灰白色にして平滑なれども、老樹にありては、下部、褐色を呈し、割裂す。枝は對生し、葉は、線形にして、先端二裂し、厚く且つ剛直にして、革質をなし、長さ八分乃至一寸ばかり。四月頃、單性花、雌雄同株に開き、長卵形なる毬果を結ぶ。材は帶褐白色、質、輕軟・反張・伸展すること甚しきがために、建築用には適せず、天井板・折箱板・障子の小框、茶箱などの製作に供し、又、炭に燒きて、鍛冶屋に使用せらる。もみそ。もみのき。さかもみ。たらもみ。ほうびしよう。字鏡集「樅、モミ・モミノキ」

もみ-あげ 揉上【名】鬢の毛の、耳に沿ひて、ややその前方を、細く生えさがりてあるもの。「ぐ」を見よ。

もみ-あぐ 揉上ぐ【動下二他】「氣を揉上げ」

もみ-あふ 揉合ふ【動四他】互に入り亂れ、強く摩れあひて爭ふ。俳諧新選「嘯出」「揉みあうて朝日に霧のこぼれけり」太平記「高(カウ)・上杉が八萬餘騎に駈けあひて、……、黑煙を立てて揉みあひたり」

もみ-あね 揉藍【名】藍の葉の乾したるを碎きて製したる藍色の染料。

もみ-いた 揉板【名】せんたくいた(洗濯板)に同じ。

もみ-いだす 揉出す【動四他】もみだす(揉出す)に同じ。

もみ-うら 紅絹裏・紅裏【名】衣類の裏の紅絹(ベニ)を用ひてあるもの。

紅絹裏四天王【句】德川時代に、紅絹裏の著用を許されし士分四人ありしものといふ。其角「破魔弓や當時紅絹裏四天王」

もみ-うり 揉瓜【名】Ⅰうりもみ(瓜揉)に同じ。遲歩色葉集「揉瓜、モミウリ」Ⅱ〔植〕つけうり(漬瓜)に同じ。

もみうり-なます 揉瓜虀【名】瓜揉をなますに作りたるもの。織留「七日の祇園の山鉾の有樣、つひに見たる事もなく、索麪(サウメン)・揉瓜膾を、祭はありがたき物とばかり樂しむ事の外なし」

もみ-えぼし 揉烏帽子【名】紗(サ)・絹などにて作り、柔かに揉みて、冑の下にかぶり得るやうにしたる、一種の烏帽子。烏帽子は、鳥羽天皇の時より、漆塗の强(ハリ)きものとなりしに拘らず、元のまま柔かにして用ひしもの。引立(ヒキタテ)烏帽子・梨子折(ナシ)烏帽子及び柳さびの折(ヲリ)烏帽子の三種あり。各條を見よ。盛衰記「冑をば脫ぎ、童に持たせ、揉烏帽子引立てて」

もみ-かち 籾搗【名】『搗ちて、籾を去る義』からぎを(殼竿)に同じ。

もみ-がのこ 紅鹿子・紅絹鹿子【名】紅絹の鹿子絞。一代男「肌は白綸子、中は紅鹿子のひっかへし、上は淺黃八丈の八端懸」

もみ-かは 揉皮【名】韋(ガハ)の上面を削り揉みて柔かならしめたるもの。をしかは。

もみ-がへし 紅返【名】藍返の類。白く抜きたる部分を、更に紅に薄く染むること。一代女「紅返の下著に、箔形の白小袖を重ね」

もみ-がみ 揉紙【名】揉みて、皺(ボシ)を立てたる和紙。浮世風呂「もみ紙で拵へた島田・丸髷・島田くづし」

もみ-がら 籾殼・籾【名】籾米(モミ)の外皮。稻の花の時には、穎(エ)と呼ぶものにて、舟狀をなし、彈力性に富むため、破損しやすき器物の荷作に際して、塡充用とし、又防寒・防熱の目的にて、冷藏庫などに用ひ、燒きて、加里性の肥料とする等、用途多し。あらかは。もみぬか。あらぬか。すりぬか。もみ。

もみ-ぎぬ 紅絹【名】無地のもみ色の絹。胸算用「物の見事に、紅絹にて、張拔(ハリ)にして、二匁五分にて出來けり」

もみ-ぎり 揉錐【名】きり(錐)Ⅱに同じ。

もみ-くさ 揉腐【貌】もみくた(揉腐)に同じ。重離子「顏に、べったり手拭のちぢみと皺ともみくさの、どさくさまぎれ」

もみ-くじ 揉鬮【名】幾つかの紙片に、文句を記して揉みひねりたる中より、無心に一つを取りて開き、その文句によりて、吉凶を占ふこと、又その鬮。ひねりぶみ。長町女殺切「揉鬮は憲方(ヌエ)果報、後に無理言ふまいぞ」

もみ-くしや 揉腐【貌】次條に同じ。

もみくた

もみくた 揉腐【貌】紙布帛などの、揉みひねりたるために、皺になりたるさま。もみくしや。もみくさ。もみくちや。

もみくちや 揉腐【貌】前條に同じ。

もみぐら 籾蔵【名】籾を入れおく蔵。

もみぐるま 籾車【名】たうみ(唐箕)に同じ。

もみけし 揉消【名】揉み消すこと。

もみけしうんどう 揉消運動【名】自己に不利益なる事の起りかけたるを、奔走して、大事に至らぬやうにすること。

もみけす 揉消す【動四他】一紙・布帛などに、火の附きたる時、その物を揉みて、火を消す。五人女「茂右衛門、炙思ひ立ちけるに、目を塞ぎ、齒をくひしめ、堪忍せしを見、悲しく揉消して」二自己に取りて不利益なる事の起りかけたるを、奔走して、大事に至らぬやうにす。

もみごめ 籾米【名】籾殼の附きたるまの米。もみ。あらしね。

もみさらひ 籾杷【名】農具の一。日に干す籾を掻き散すに用ふるさらひ。

もみし 紅絹師・紅師【名】絹を染めて、紅絹(ベニ)に作るを職とする人。

もみじま 紅縞【名】紅色の縞模様。俗つれづれ「下には藤色に、碁盤の紅縞付け」

もみすき 籾寸莎【名】籾を用ひたる寸莎。(藁寸莎・麻寸莎などに對して)

もみすずめ 籾雀【名】稻などに來り集る雀なるべし。定家卿鷹三百首「秋の田に刈るてふ稻のもみ雀御をうとむにや鷹や飼ふらん」

もみすり 籾摺・籾磨【名】籾一を磨臼にかけ、唐箕(タウミ)にて秕(ナリ)を除きたる後、篩又は千石通(センゴクドホシ)などを用ひて、籾殼を去りて、玄米とすること。

もみすりうす 籾摺臼・籾磨臼・轉【名】からうす(唐臼)に同じ。

もみすりき 籾摺機・籾磨機【名】籾摺に使用する、やや大規模の農具。從來の籾摺臼に調製裝座を附け、多少の改良を加へ、動力にて運轉するもの、普通なれど、

もみそ

精米の業、大規模の度を加ふるにつれて、新機軸のものも生ずるに至れり。

もみそ 【名】〔植〕もみ(縱)に同じ。

もみだいこ 揉大根【名】もみだいこん(揉大根)の訛。

もみだいこ 揉太鼓【名】周防國德山町の祭禮に、氏子が、團扇太鼓を、はげしく打つ儀式。

もみだいこん 揉大根【名】うろぬき大根を、鹽にて揉み、漬けたる香(カウ)の物。

もみだす 揉出す【動四他】揉みて、外に出でしむ。もみいだす。

もみだす 紅葉す・黄葉す【動四他】紅葉(モミ)せしむ。〔古語〕萬葉「雁がねの寒き朝けの露ならし春日の山をもみだすものは」

もみたつ 揉立つ【動下二他】もむ(揉む)三四を強めていふ語。太平記「防手の上杉・畠山が五萬餘騎、楠木が五百餘騎に揉立てられて、五條河原へ引退く」代男「その夜、俄かに揉立て、吉野を請(ウケ)出し」

もみだね 籾種【名】田に蒔きて稻を生ぜしむるに用ふる籾。

もみたび 揉足袋【名】つらぬき(頰貫)に同じ。舞の本(高館)「熊皮のもみたび、しろがねにて緣(ヘリ)金わたし」

もみたふ 籾塔【名】五穀の豐饒を祈るために造る塔。

もみだふ 紅葉ふ【動四自】もみづ(紅葉づ)に同じ。(但し連用形以外に用例無し)「古語」萬葉「百船(フナモネ)の泊(ハ)つる對馬のあさぢ山しぐれの雨のもみだひにけり」

もみだら 揉鱈【名】鱈の肉を蒸し、揉みながら皮を去り、これを篩に掛けて、日ぼしにせるもの。

もみぢ 紅葉・椛【名】『椛は和字』一もみづること。草木の葉の、秋の末に紅又は黄に變ること。萬葉「秋さらばもみぢの時に春さらば花のさかりに」古今「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらん」二〔植〕『その紅葉せる時の美觀他の植物のよりもすぐれたるによりていふ』槭樹科、槭樹屬に屬するものの

もみぢ

總稱。〔槭樹・槭・楓樹・楓(楓の字は誤用にして、實は別種の樹の名なり)〕三〔植〕槭樹科に屬する落葉植物。我國、山地に自生し、高さ數丈に達す。葉はやや圓形にして、通常七裂し、往往十一裂なるもあり。裂片は、鋭尖頂にして、鋸齒あり。四五月頃、暗紅色の小花、攢簇して、繖房花序に開き、後、雙翅果を結び、十月に至りて成熟す。觀賞用ともす。邊材は褐色、心材は帶紅淡褐色、材質堅靱緻密にして、甚だ美しく、粧飾材・寄木細工・箱・机などを作るに適す。變種・變品、頗る多し。いちぎやうじ。かへで。かへるで。つまこひぐさ。にしきぐさ。はないたや。はいた。やまもみぢ。〔槭樹・槭・楓樹・楓〕四もみぢば(紅葉葉)の略。萬葉「秋山のもみぢをかざしわがをれば浦ほ滿ち來(タ)いまだ飽かなくに」五紋所の一。前項の葉に象りたるもの。尚その種類に葵(アフ)紅葉・抱(ダキ)紅葉・三割(ワリ)紅葉などあり。六襲(カサネ)の色目の一。陰曆九月より十一月にかけて使用し、表は紅、裏は青。一説に、表は赤、裏は濃き赤なりと。きもみぢ。なほ、青紅葉・櫨(ハゼ)紅葉・蝦手(ヘビ)紅葉などの種類あり。女房の五衣(イツツギ)にては、上には黄、次に山吹の濃淡、紅の濃淡の順にて重ね、單(ヒトヘ)は、蘇芳を用ふ。七『鹿と紅葉とは、歌・畫などに於て配合せらるること多きよりいふなるべし』鹿の肉。八少女などの、はぢらひて赤らめたる顏の色の譬。九麩(マス)を、女の顏を洗ふに用ふる時にいふ語。〔大阪の語〕十小兒の手の愛らしき形の譬。狂言集鳥「三十四人の公達(キンダチ)の、花を飾つて出でさせられ、もみぢのやうな手を出いて」十一『濃う善うといふを、紅葉(コウヨウ)の音に通はせていふ』茶を、濃く味よく立つること。醒睡笑「御茶をもみぢに立てよ。……、ただこうようにといふ事なり」紅葉の筏【句】紅葉葉の水面に散り浮べるさまを筏に譬へていふ語。續後撰「大井川風のしがらみ掛けてけり紅葉の筏行きやらぬまで」

紅葉の賀【句】一紅葉の季節に行ふ賀

もみぢ

の祝。「扇の賀」・「菊の賀」・「花の賀」・「桃の賀」の類。空穗「神泉に、もみぢの賀きこしめすべき御消息きこえたまふ」二香(カウ)の一。香(カウ)古く、甘くして、少し辛味あり。

紅葉の笠【句】紅葉の枝の美しきさまを笠に譬へていふ語。空穗「立田姫もみぢの笠を縫ふことは一木ある松を露にあへとぞ」

紅葉の川【句】紅葉葉の散り浮びてある川。夫木「秋風のたつた山より流れ來てもみぢの川をくくる白なみ」

紅葉の粉【句】もみぢ(紅葉)九に同じ。

紅葉の衣(モミジ)【句】紅葉の一面に染め渡したるを、衣に譬へていふ語。夫木「秋の著る紅葉の衣日を重ねうつろひまさる三寶山かな」

紅葉の帳(トバリ)【句】紅葉の一面に染め渡して美しきを、帳に譬へていふ語。夫木「鵲の川風立ちぬ七夕のもみぢのとばり浪やかくらん」

紅葉の錦【句】紅葉の一面に、染め渡して美しきを、赤地の錦に譬へていふ語。古今「この度はぬさも取りあへず手向山(タムケヤマ)もみぢの錦神のまにまに」

紅葉の橋【句】一『古今和歌集の夏の部に「天の川もみぢを橋に渡せばやたなばたつめの秋をしも待つ」とあるに本づく』天の川に渡してありといふ橋。空穗「もみぢの橋はいかに」新古今「星あひのゆふべ涼しき天の川もみぢの橋を渡る秋風」二山家などにて、紅葉葉の散り敷きてある橋。

紅葉の鰭【句】魚類の脊鰭の一部。〔料理上の語〕「の語」

もみぢ【名】〔植〕なすび(茄子)一を云ふ〔女語〕

もみぢあはせ 紅葉合【名】物合の一。紅葉三の葉の美しさを比べあはすること。元輔集「もみぢあはせ、殿上人にさせたまふに」

もみぢあふひ 紅葉葵【名】〔植〕錦葵(アフヒ)科に屬する多年生の草。原産地は、北米合衆國の南部なれども、觀賞用として

諸國に栽培す。莖は、高さ三尺乃至八尺ほどに達し、平滑綠色にして、やや白粉を帶ぶ。葉は互生し、掌狀に深裂して、長き葉柄を具へ、裂片は長き線狀披針形にして、鋭尖頂をなし、鋸齒あり。夏、徑四五寸なる鮮紅・五瓣の美花を開く。

もみぢーいたや 紅葉板谷・楓樹板屋【名】〔植〕めいげつかへて(明月楓樹)に同じ。

もみぢーいちご 紅葉苺【名】〔植〕きいちご(木莓)に同じ。

もみぢーうを 紅葉魚【名】もみぢぶな(紅葉鮒)に同じ。小町踊「川晉の時雨そむるや紅葉魚」

もみぢえだのーまる 紅葉枝丸【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(紅葉枝丸)

もみぢーがさ 紅葉笠【名】『古今和歌集の秋の部下に「雨降れば笠取山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞ照る」とあるに本づき、照る笠の義にていふなるべしといふ』ひでりがさ(日照笠)に同じかるべしといふ。若鳳俗「十二三なる美少人、まだ夏ながら、紅葉傘を持ちて、差さで來にけり」松の落葉(古來中興踊歌百番)「紅葉笠まんまるこうて著ようて樣が菅笠百萬貫」

もみぢーがさ 紅葉傘【名】一 差したる時の中央の部分を、青土佐にて張り、他の部分を白くしたる蛇目(ジャノメ)傘。又、周圍の部分を青くせるを、軒青(ノキアヲ)といふ。二〔植〕菊科に屬する多年生の草。我國の山地に自生し、高さ一尺餘に達す。葉は、長き葉柄を具へ、掌狀に七裂し、各裂片に鋸齒あり。花は、細長き頭狀花序をなしたるもの、更に疎なる穗狀に集まりて開く。もみぢさう。

もみぢーがさね 紅葉襲・紅葉重【名】一 もみぢ(紅葉)(四)に同じ。榮花「宮の女房の有樣もみぢがさね色を盡したり」同「紅葉重の薄樣に書きて」二 劍法の一。謠曲(折烏帽子)「八方拂や腰車、……紅葉重・花重、三頭(ミツガ)より火を出して」

もみぢーかしは 紅葉柏・紅葉膳【名】昔、八月の饗膳に、紅葉の葉の上に食器を置きしこと。山槐記「三月爲ㇾ饗、用二櫻膳一、……八月用二紅葉膳一」

もみぢーかづら 紅葉葛【名】〔植〕きづた(木蔦)に同じ。

もみぢーがはらけ 紅葉土器【名】普通の赤き土器を、白き土器と區別していふ語。一說には、紅葉狩の時の酒盃なりと。雅經醉狂集「この秋の彼岸にもまた酒櫻もみぢは春も酒のかはらけ。紅葉土器といへるあり」

もみぢーかぶら 紅葉蕪菁【名】〔植〕蕪菁の一品種。根は、長さ六七寸、徑一寸ほどにて、紅色を呈し、鹽漬にすれば、內部まで紅色となり、生のまま、膾に料理してもよく、莖葉共に食用に適す。主に、近江國彥根邊にて栽培す。

もみぢーからまつ 紅葉唐松【名】〔植〕毛莫(ウキゲン)科に屬する多年生の草。山地に自生し、高さ三四尺に達し、葉は、掌狀に五深裂乃至十深裂し、各裂片は、菱形にして、鋸齒を具へ、下部のものは、葉柄特に長く、花は、六月より八月にかけて開き、花瓣無く、白色にして、花瓣樣なる蕚と多數の雄蕊とを具ふ。もみぢしようま。

もみぢーがひ 紅葉貝【名】〔動〕海盤車(ヒトデ)類に屬する棘皮動物。我國到る處の海底の沙泥の上に棲息し、體は、扁平にして、帶青灰色をなし、五腕を挺出して、星芒狀をなす。中世代中の侏羅紀に現出し、今なほ生存するものとす。べにひとで。

もみぢーがり 紅葉狩【名】一 山野に紅葉を尋ねて、眺め樂しむこと。もみぢみ。夫木「しぐれふる交野(カタノ)の里の紅葉狩頼む蔭なく吹く嵐かな」二 謠曲の一。平維茂(コレモチ)將軍、信濃國戸隱(トガシ)山にて、美女と化して、紅葉狩せる妖鬼に酒を勸められ、酣睡して、殺されんとする時、八幡の夢告により、睡覺めて、遂にこれを退治する由を作れるもの。歌舞伎の振事にも用ひられ、從ひて、長唄にも謠はれ、又、淨瑠璃には、土佐節以後、幾回も飜案せられ、上方唄にも、殆どそのまま謠はる。三 江戸長唄の「色見草月盃(イロミソウツキサカヅキ)」及び重陽紅葉狩(ヨウヤウヤウ)(モミヂガリ)」の俗稱。

もみぢーぐさ 紅葉草【名】一〔植〕はげいとう(葉雞頭)に同じ。二 もみぢばぐま(紅葉白頭翁)に同じ。

もみぢーくわ 楓樹科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門の一科。二屬凡そ百二十種より成り、皆、喬木又は灌木にして、我國に自生し、又は栽培せらるるもの、一屬凡そ三十三種あり。學者中、無患子(クロボク)科の亞科として、分類する者あり。かへで科。せきじゆ科。

もみぢーごろも 紅葉衣【名】紅葉襲(モミヂガサネ)の衣。謠曲(紅葉狩)「片敷く袖も紅葉衣のくれなゐの深き顏ばせ」

もみぢーさう 紅葉草【名】〔植〕もみぢがさ(紅葉傘)(三)に同じ。

もみぢーしようま 紅葉升麻【名】〔植〕もみぢからまつ(紅葉唐松)に同じ。

もみぢーづき 紅葉月【名】陰曆九月の異稱。蓬傳抄「吉野山青根が峯のもみぢ月時雨降り來て知られぬるかな」

もみぢーどうふ 紅葉豆腐【名】下の文を見よ。堺鑑「紅葉豆腐の事。何國にも豆腐はあれども、別して當津のをすぐれたりと、古より云傳へたり。紅葉といふ名を加へたる事は、堺の櫻鯛にも劣らぬ味なればとて、斯く言へるとぞ。又、或人の言ふ、この豆腐を人の買ふやうにと祝ひ附けたる名ともいへり。買ふ樣と、紅葉(コウヨウ)と、音便なる故か。今、豆腐の上に紅葉を印す。詞について、形を顯すなるべし。買ふ用も通ひてよし」

もみぢーどころ 紅葉野老【名】〔植〕薯蕷(ヤマノイモ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、莖は、細長くして、他物に纏ひ、葉は互生して、長き葉柄を具へ、心臟形にして、掌狀に分裂し、花は小形・單性にして、雄花は圓錐花序、雌花は穗狀花序をなし、三個の翅を具へたる蒴果を結ぶ。

もみぢーどり 紅葉鳥【名】〔動〕しか(鹿)の異稱。藏玉集「紅葉鳥。鹿。時雨降る龍田の山のもみぢ鳥紅葉の衣著てや鳴くらん」

もみぢーながし 紅葉流【名】流水に散れる紅葉を描きたる模樣。俗曲(丸惡川書曙)「縮緬の黑き小袖の裾模樣紅葉流の附いたるを、母が形見と取り出し」

もみぢーの 紅葉樹・楓樹【名】〔植〕もみぢ(紅葉)(二)(三)に同じ。

もみぢーば 紅葉葉・黃葉葉【名】一 もみぢしたる葉。秋の末に、黃・紅等の色に變りたる草木の葉。萬葉「もみぢばの散らふ山邊ゆ漕ぐ船のにほひにめでて出でて來にけり」二 楓樹(モミヂ)の葉の、秋の末に紅色に變りたるもの。三 同類の植物中にて、葉の形の、楓樹(モミヂ)に似たるもの。「楓樹葉」

もみぢば-いちご 紅葉葉苺・楓樹葉苺【名】〔植〕苺の一種。山野に自生し、葉は裂刻深く、楓の葉に似、實は食用とす。

もみぢばーぐま 紅葉白頭翁・楓樹白頭翁【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。山地に自生し、高さ約一尺に達す。葉は、長き葉柄を具へて互生し、掌狀に分裂せるさま、楓樹(モミヂ)のに似、夏、叢生葉の中心より、花莖を抽くこと約一尺、その上部に、數多の頭狀花序、何れも一側に向ひて排列して、穗狀をなし、舌狀花は、長くして、外方へ反曲す。もみぢぐさ。

もみぢーばこ 紅葉筥【名】紅葉(モミヂ)(四)を入れおく筥。

もみぢばーの 紅葉葉の【枕】もみぢ葉は、殊に散り過ぐるを惜しむものなるより、すぐ(過ぐ)にかけていふ。萬葉「もみぢ葉のすぎがてぬ子を人妻と見つつやあらむ戀しきものを」

もみぢばーのーつた 紅葉葉蔦・楓樹葉蔦【名】〔植〕きづた(木蔦)に同じ。

もみぢばーのーはぐま 紅葉葉白頭翁・楓樹白頭翁【名】〔植〕もみぢばぐま(紅葉白頭翁)に同じ。

もみぢばーのーをみなへし 紅葉葉女郎花・楓樹葉女郎花【名】〔植〕ぎれいくわ(地花菜)に同じ。

もみぢふ 紅葉斑【名】鷹の羽毛の、赤きもの。「斑文あるもの。

もみぢーぶくろ 紅葉袋【名】『もみぢ(紅葉)(四)を見よ。顏などを洗ふに、糠と麩(フス)

とは、互に代用し得るなり』**ぬかぶくろ**(糠袋)に同じ。嬉遊笑覽「空穂隨筆、空にけふもみぢ袋や月の顔 といへるも、糠袋の事なるべし。汁をもみ出して使ふものなればなるべし」俗曲(花川戸身替の段)「お俊(シュン)は、ひとり湯がへりの浴衣をちよつと抱帶(カカヒ)(オビ)、紅葉袋にうつろひて」

もみぢ-ぶな 紅葉鮒【名】近江國琵琶湖に產する鮒の、秋の末に、鰭の紅色になりたるもの。もみぢうを。新水代藻「これほど鱉昌なる所に住んで、櫻鯛・もみぢ鮒の味を知らず」

もみぢ-み 紅葉見【名】**もみぢがり**(紅葉狩)に同じ。拾遺「もみぢみに宿れる我と知らねばや佐保の川霧立ちかくすらん」

もみぢ-むしろ 紅葉筵【名】紅葉の散り敷きたる所を、筵に譬へていふ語。後撰「草枕もみぢむしろにかへたらば心を碎くものならましや」

もみぢ-やま 紅葉山・楓山【名】江戸城内、西丸と本丸との間に在りて、德川家康以下、歷代の將軍の靈廟及び富士見寶藏の在りし小丘。又、紅葉山文庫の在りし所。もと槭樹多くして、山上に山王祠あり、城下の諸人、鎭守の神として、參詣・遊歩せし所といふ。

もみぢやま-がくにん 紅葉山樂人【名】德川幕府の職制の一。江戸城內なる紅葉山の東照宮祠の祭禮に、奏樂の事を掌りし役。

もみぢやま-ごしやさん 紅葉山御社參【名】德川將軍の、每年四月十七日、江戸城內紅葉山なる東照宮靈廟に參詣せしこと。幕府年中行事の一。

もみぢやま-ぶんこ 紅葉山文庫楓山文庫【名】德川時代に、江戸城內なる紅葉山にありて、幕府所藏の圖書を收めおきし所。慶長七年、家康の、江戸城の南富士見の亭に、金澤文庫の規制を摸して設けし文庫所藏の書を基本とし、家光の時、寛永十六年、紅葉山に移して、爾後、歷代の將軍の漸次增加せしめしものに係り、金澤文庫及び足利學校より傳來の古書、又、家康の命じて印行せしめし漢籍、慶長年間の勅版等をも含み、將軍以外には、その特許を得たる者に非ざれば、閱覽するを得ざりき。寛永十年に、書物奉行(定員、初は四人、後には二人)を置きて、これが保管に任じ、享保中、櫻田文庫の圖書を併せ、明治以降、その藏書は、大部分、昌平坂學問所の藏書と合して、內閣文庫となり、一部は、近年宮內省圖書寮に入れるもあり。楓山祕閣。

もみぢやま-べったう 紅葉山別當【名】德川幕府の職制の一。江戸城內なる紅葉山の東照宮祠及び歷代の靈廟に屬して、その祭祀の事務を掌りし役。

もみぢやま-みや-ごばん 紅葉山宮御番【名】德川幕府の職制の一。江戸城內紅葉山なる東照宮祠及び歷代の靈廟の番人。

もみぢ-わげ 紅葉髷【名】女の髮の結ひ方の一。

もみづ 紅葉づ・黃葉づ【動四自】次條に同じ。〔古語〕萬葉「こもり山若かへるでのもみづまで寢もと我(ワ)はもふ汝(ナ)はあどかもふ」同「わが宿の萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば斯くぞもみでる」

もみづ 紅葉づ・黃葉づ【動上二自】秋の末に、草木の葉、霜に逢ひて、赤又は黃に變る。もみだふ。古今「しぐれつつもみづるよりも言の葉の心の秋に逢ふぞ嬉しき」人丸集「秋山の木の葉もいまだもみぢねばけさ吹く風は霧消えぬべし」

もみづ 紅葉づ【動下二自】前條に同じ。〔古語〕萬葉「春まけてかくかへるとも秋風にもみでむ山を越え來(コ)さらめやも」

もみ-つぶ 籾粒【名】**いなつぶ**(稻粒)に同じ。

もみ-て 揉手【名】詫(ヒテ)・賴事(オクリ)などの時、左右の掌を摩りあはせ、物を採む時のやうなる手付をなすこと。東海道名所記「もみ手を致してへつらへば」

もみ-どうふ 揉豆腐【名】豆腐を攪きまぜて煮たるもの。

もみ-ない 【形】味よからず。まづし。もむない。〔大和國・攝津國・河內國・和泉國及び九州の方言〕浮世風呂「上の拵へ方は、

又、あないなもみないもんぢやない」

もみ-ぬか 籾糠・稃【名】**もみがら**(籾殼)に同じ。

もみ-ひき 籾挽【名】籾㊀を、殼を去るために、挽臼に掛くること、又、その人。一代男「御藏の籾挽とて雇はるる女」

もみ-ふす 揉伏す【動下二他】『**もむ**(揉む)㊂を見よ』入り亂れ押しつけて、疲らす。平家「揉伏せたる馬ども、たやすう追附くべしとも見えざりければ」

もみ-ふり 揉瓜【名】『**ふり**(瓜)參照』**もみうり**(揉瓜)に同じ。卯月凋色「俎板に白瓜、菜刀取って……てきてきしやんともみふりに」

もみ-よね 籾米【名】**げんまい**(玄米)に同じ。和名「糙米、毛美與禰」「に同じ。

もみ-れうぢ 揉療治【名】**あんま**(按摩)㊁

もみ-わり 揉割【名】㊀籾㊀を、磨臼(ヒキウス)にかけて割ること。㊁籾㊀を磨臼にかけて割るが如くに、敵を打ち拉ぐこと。傾城島原合戰「磨臼・篩の物印敵を揉割たつ割に手並を見せん」「無」

もむ 攤【名】**だ**(攤)に同じ。和名「攤、毛牟」

もむ 揉む【動四他】㊀左右又は片方の掌にて握りながら擦り動かして、柔かならしめ、又は皺を寄らしむ。㊁錐にて穴を穿たんとする時、左右の掌にて、その柄を摩り廻して、刃を深く入らしむ。㊂入り亂れて押しつく。押しあひ、靡りあふ。保元「揉みに揉うで攻入れば」萬葉「眞野の浦入江のかたの若すすき波にもまるる五月雨の頃」㊃相撲(スマヒ)などの術を、相手になりて敎ふ。㊄揉療治を施す。太平記「賣て容許せざりければ、あまりに身を揉みて」

揉まる【句】人人の間に交りて、世わたりの經驗を得。

もむ-き 鳥臟・肫【名】**ももけ**(鳥臟)に同じ。名義抄「肫、モモキ・モムキ・鳥ノモムキ」

もむ-ない 【形】**もみない**に同じ。〔大阪の語〕今宮心中「一人の娘に、親の身で、もむない男を喰はさうか」

もむ-にれ もむ楡【名】百楡なりとも、榆なりとも、榆に似たる榆なりともいふ。〔古語〕萬葉「足引のこの片山のもむにれを五百枝(イホ)はぎ垂り天照るや日のけに干し」

もむ-の-き 榿木【名】〔植〕**もみのき**(榿木)に同じ。字鏡「榿、毛牟乃木」「よ。

もむのふ 桃生【名】〔地〕**ものふ**(桃生)を見

もむのふ-の-さい 桃生寨【名】陸前國桃生(モモ)郡中津山村にありし寨。天平寶字四年、鎭守府將軍惠美朝獵(ヒトカリ)の、蝦夷に備へんがために造りしもの。北上川を帶び、大峰山を負ひ、要害の地なりしかど、寶龜五年夷民叛して、その四郭を破りし事あり。

もん 物【名】**もの**(物)の音便。「云云したもん」

もん 文【名】㊀**ぶん**(文)に同じ。發心集「發願(ホツグワン)の文あり」盛衰記「これは、史記項羽本紀の文なり」㊁**きやうもん**(經文)又は**じゆもん**(呪文)の略。盛衰記「敬禮(キヤイ)天人大覺尊の四句の文を誦(ジユ)しけり」太平記「虛空に向ひ、目を眠り、口に文呪したるに」㊂**ほんもん**(本文)㊀に同じ。保元「非常の斷(コトワリ)は、人主專にせよといふ文あり」狂言(鹿狩)「殺生して苦しうない文がある。語つて聞かせう。それ、達磨の文に曰く」

もん 紋・文【名】㊀あや。模樣。枕「かたばみ・あやの紋にても、こと物よりはをかし」榮花「袴・うはぎも、裳・唐衣も、うす物にて、紋には金をし、縫物どもをし、心心に繪など書きたれば」㊁もんどころ(紋所)に同じ。太平記「中黑(ナカグロ)の旗を卷いて、文を隱し」

紋の幅【句】『紋所を描く所なるによりていふ』「物見(モノ)の幅」に同じ。

もん 門【名】㊀家の外構(ソトガ)に設けたる出入口。かど。㊁物事の出入、經由する處。門戶。「初學、德に入るの門」㊂『李密の陳情表に「門衰祚薄、晚有二兒息一」とあり』家がら。門戶。家門。㊃分類上の大別の區分。部門。㊄〔生〕『英 phylum』動植物の分類に用ふる語。最大の

區分にして、例へば、動物にありては、第一門原生動物、第二門海綿動物、第三門腔腸動物以下、第十六門脊椎動物に至り、植物にては第一門菌藻植物、第二門蘚苔植物、第三門羊齒(ヒ)植物、第四門顯花植物と分つ類。六平安京の坊保の單位。即ち民家一戸にして、間口五丈、奥行十丈と定められたり。

門に入りては、笠を脱げ【句】「簑笠(カサ)を著て人の家に入らぬもの」に同じ。〔諺語〕

門に入る【句】師と頼みて、教を受く。弟子となる。入門す。

門に倚りて望む【句】「倚門(イモン)の望」に同じ。

門に倚る【句】いもん(倚門)を見よ。

門の前の痩犬【句】弱者も、後援ある時は、勢強き譬。〔諺語〕

門を出でては大賓を見るが如くす【句】『論語の顔淵篇に「仲弓問仁、子曰、出門如見大賓、使民如承大祭」とあり』敬を以て身を持する譬。

門は市を成し、心は水の如し【句】『漢書の鄭崇傳に「上責崇曰……崇對曰、臣門如市、臣心如水」とあり』媚を呈して來り求むる者は多けれども、我が心は清くして公平なり。

門を同じくして、戸を異にす【句】『揚子法言に「吾於孫卿、見同門而異戸也」とあるに本づく』師門を同じうすれども所見を異にす。

もん 悶【名】もだゆること。煩悶。

もん 文【名】一錢高の單位。 ㊐稻荷銀錢一文】 延喜式「錢一貫文」 二もと、一文錢を並べて數へたるによりていふ』紐の廣さ、足袋の裏の長さなどの單位。 宗吾大雙紙「紐は、一文(モンヒン)とて、昔より定まりたることにて候ふを、殊の外、今は廣く候ふ」 持統天皇歌軍法「草足袋……九文半で、指先もはいらず」 「門」

もん 門【助數】大砲の數にいふ語。「砲百門」

もんあや 紋綾【名】紋織にしたる綾織。

もんいん 門蔭【名】にんし(任子)に同じ。

もんいんでん 紋應帝【名】鐵印(ハガネ)などにて、種種の模樣を打ち出したる應帝革(インガワ)。

もんうち 紋打【名】『紋とは、表面に俳優などの紋づくしを現したる面子(コシ)の意』めんうち(面打)に同じ。

もんうづら 紋鶉【名】綠青(ロクシ)にて、菊花の形を所所にあらはしたる鶉革。

もんえふ 門葉【名】一門のわかれ。一門。一族。門族。 平治「門葉の輩、多く朝敵となりて」 二一門の流派。門流。門派。 三攝家(セッケ)方へ出入する平(ヒラ)堂上。門流。

もんおめし 紋御召【名】紋織の御召縮緬。もんおりおめし。(平御召に對して)

もんおり 紋織【名】模樣を浮織にしてあらはすこと、又、その織物。

もんおりおめし 紋織御召【名】もんおめし(紋御召)に同じ。

もんおりき 紋織機【名】次條に同じ。

もんおりきかい 紋織機械【名】織物の經(テ)絲を上下に運動せしめて、種種なる形狀及び組織の紋樣を現すに用ふる、機械。種類多し。

もんおりちりめん 紋織縮緬【名】もんちりめん(紋縮緬)に同じ。

もんおりもの 紋織物【名】紋織にしたる織物。即ち紋羽二重・紋紹・紋甲斐絹・紋縮緬・紋御召・紋繻子・紋博多など。

もんか 門下【名】一門の下。二やしき。邸宅。 三『史記の信陵君傳に「誠一門下」とあり』もんかく(門客)に同じ。 四もんかせい(門下生)に同じ。 五もんかせい(門下省)の略。

もんかいき 紋甲斐絹【名】紋織の甲斐絹。(平(ヒラ)甲斐絹に對して)

もんかう 紋縞【名】古、奥州より織り出しし、模樣つきの絹物。

もんかう 問拷【名】【名】せめ。とがめ。勘當。 十訓「斯かる問拷を負ふ事は」

もんかきさきよらう 門下起居郎【名】一支那唐代の門下省の職員の一。天子の動作・法度を錄し、記事の史を修むる事を掌りしもの。定員二人。 二げき(外記)の唐名。

もんかく 門客【名】門下に寄食せる者。「貴人の家の食客。

もんがく 文覺【名】(人)眞言宗の僧。俗名は遠藤盛遠。十八歳の時、袈裟御前との事によりて出家し、熊野山等の難所にて苦修練行し、京に歸るや、高雄の神護寺を再興せんとし、廣く資財を募り、一日、後白河法皇の宮に至りてこれを强要せしため、推參の罪によりて、伊豆國に配せらる。配流中、源頼朝に擧兵を勸め、後白河法皇の院宣を得て、これを頼朝に傳へしため、頼朝、鎌倉開府の後、その厚遇を得て、神護寺再興の目的を達す。建久中、更に東寺の再興を發願し、また罪を得て、隱岐に流さる。建仁三年十二月、赦されて歸りしが、終る所を詳かにせず。

もんかじちゆう 門下侍中【名】一支那唐代の門下省の長官。定員一人。 二中務卿(ナカツカサノカミ)の唐名。

もんかじらう 門下侍郎【名】一支那唐代の門下省の次官。定員二人。 二中務輔(ナカツカサノスケ)の唐名。

もんかせい 門下省【名】支那にて、古、帝命の出納を掌りし官衙。尚書・中書の二省と共に、梁陳の時代より既に設けられ、唐・宋も亦三省併設の制を取りしが、金に代りて、中書省と共に廢せられたり。

もんかせい 門下生【名】もんじん(門人)に同じ。

もんかた 紋形【名】紋のかた、模樣。

もんかたばみ 紋酢漿【名】〔植〕酢漿(カタバミ)科に屬する、多年生の草。莖は根莖にして、その上端に廣卵形の鱗片を具へ、葉は、倒三角形の小葉四個より成り、下面に褐色なる一條の帶あり。紅色又は紅紫色の花、繖形花序をなして排列す。

もんがは 門側【名】門のある方の側(カハ)。 俳諧類選「鶏頭や片山里の門がはや」

もんかはづつみ 紋革包【名】かうじかはおざし(柑子革綴)に同じ。

もんがまへ 門構【名】一家屋の構に、門を設くること、又、門を設けてあること。二漢字の構の一。即ち「閉」・「閑」・「問」などの有する門の字。かどがまへ。

もんがみ 紋紙【名】一白地に種種の模樣を打ち附けてある紙。二ジャカアド紋織機の昇降運動によりて、所要の通絲及びこれに通ぜる經絲を上下せしむる原動をなす、厚紙製のもの。

もんかん 門鑑【名】門の出入を許しし事を證する鑑札。

もんかんばん 紋看板【名】劇場の看板の一。總座員の名前を、一枚ごとに分ち記して、各、その頭部に各自の定紋を記したるもの。 根南志具佐「紋看板には、甲乙を顯し、繪姿、藝のあらましを知らしむ」

もんがら 紋柄【名】もんやう(紋樣)に同じ。 俗曲(京鹿子)「これは京小袖、色もよや、紋柄手際もよや、著よや」 「じ。

もんかれいし 門下令史【名】次條に同

もんかろくじ 門下祿事【名】一支那唐代の門下省の第四等職員、即ち・侍中・侍郎・給侍中に次ぎしもの。定員四人。 二中務錄(ナカツカサノサクワン)の唐名。

もんぎ 文木・文尺【名】『寛永通寶錢の直徑八分を、一文とするよりいふ』足袋の裏の長さを度るに用ふる物指。

もんきりがた 紋切形【名】一紋形を切り抜くための法式。 二一定の樣式。さだまり。きまり。

もんきりき 紋切機【名】ジャカアド紋織機の紋紙に、紋樣と組織とに相當して、穴を穿つに用ふる機。種類多し。

もんく 文句【名】一文章の一部なる語句。辭句。文言。 二不服に思ひて理窟を述ぶる語句。いひがかり。いひぐさ。いひぶん。苦情。

もんくなし 文句無【名】苦情の言ふべき所なきこと。理想的。「文句なしに面白し」

文句は無い【句】苦情をいふを要せず。全部、氣に入る。理想的なり。

文句を附く【句】一つまらぬ物事に、强ひて理窟を附け加ふ。 二不滿に思ひて、理窟を言ひ掛く。

文句を手摺に預く【句】操人形(アヤツリニン)にて、意味を、文句の方には略して、人形の身振の上にのみ示す。

もん-ぐ 文句【名】一〔佛〕『文字と句讀とを分ちて解説せる者の義』經文を註釋せる書。例へば、天台智者の妙法華文句、金光明經文句など。二〔書〕**めうほっけもんぐ**(妙法華文句)の略。

もん-くいひ 文句言【句】不服に思ひて理窟を述ぶる性質の人。苦情の多き人。

もん-くいり 文句入【名】都都逸・追分節などにて、その中間に、他の歌曲の成句又は會話の語句などを插入するもの。

もん-ぐし 紋櫛【名】俳優などの紋所を書きてある櫛。一代女「逢ひもせぬ大夫、天神の、紋櫛など持つ事、心はづかしき事なれども」

もん-ぐし 紋串【名】ジャカアド紋織機の附屬具の一。紋紙一を二十枚又は三十枚位づつ插入して、紋流(モンナガシ)の上に引き掛くるもの。

もん-ぐるま 紋車【名】家の定紋を、その網代(アジロ)に組み、又は袖に書きてあらはしたる牛車(ギッシャ)。

もん-ぐわい 門外【名】一門のそと。二専門のほか。その物事の範圍以外。門外、雀羅を設く【句】『漢書の鄭當時傳贊に「下邽翟公有レ言、始翟公爲二廷尉一賓客塡レ門、及レ廢門外設二雀羅一」とあり。來訪する人なきため、雀多く集まり、羅(アミ)を張りて捕ふるを得る程なりとの意』權勢衰へて、來り訪ふ者無き形容。門前、雀羅を張る。門外不出【句】書籍・品物などの紛失を恐れて、他人に貸すことを欲せざること。

もんぐわい-かん 門外漢【名】『五燈會元に「是門外漢耳」とあり』專門のほかの人。その物事に關係なき人。

もんくわん 文觀【名】〔人〕醍醐寺の座主、東寺の長者。世に小野の文觀と稱す。後醍醐天皇の北條氏を滅さんとしたまふや、圓觀と共に天皇の命を奉じて、北條氏を呪詛し、事泄れて捕へられ、硫黃島に流され、亂平ぐに及びて、本寺に歸り、足利尊氏の京師を犯すに及び、脇屋義助等と拒戰して敗れ、正平十二年寂す。佛畫に巧なり。

もん-くわん 門管【名】『英 Vent sealing tube』砲の發火具の一。金屬製の小管に、爆劑と點火劑(黑色火藥)とを塡充し、發火に要する裝を施して、砲身又は尾栓の中心火門に插入して、藥莢を用ひざる砲の藥包に點火するに用ふるもの。發火法には、擊發に依るもの、打擊に依るもの、電氣に依るものなどの種類あり。現時、大口徑砲に使用するは、多くは、爆管と類似の構造を有し、我國海軍にては、爆管と合はせて、火管と呼ぶ。

もん-ぐわん 文官【名】**ぶんくわん**(文官)に同じ。〔古語〕

もんぐわい-さんしや-ゆ 門外三車喩【名】〔佛〕法華經の譬喩品に見えたる譬喩。**さんしや**(三車)三を見よ。

もんげざん-けつばん 問見參結番【名】鎌倉時代及び室町時代に、參候の人を點定せし役。問(ト)見參結番。

もん-けつ 門闕 **けつ**(闕)三に同じ。

もん-げふ 門業【名】その家代代の職業。

もん-げん 門限 一『曲禮に「不レ踐レ閾」とありて、註に「閾、門限也」と見ゆ』**しきみ**(閾)に同じ。二門を閉づる刻限。

もん-こ 門戶【名】『急就篇に「大目レ門、小目レ戶」、韻會に「外目レ門、內目レ戶」とあり』一門と戶と。家の出入口。二『易の繫辭の註に「天地者、易之門戶」とあり』**もん**(門)三に同じ。三獨立の世帶。一家。家門。四『晉書の王敦傳に「我兄老婢耳、門戶衰矣」とあり』家がら。門地。家門。五專門家としての流儀。一派。一家。「門戶の見(ケン)」

門戶開放【句】『英 Open door』外國人に對し、自國の領土を開放して、最善の便宜を與ふること。

門戶に傍うて飛ぶ【句】『書言故事に「唐元和中、士人下第多爲レ詩刺二試官一、獨章孝標作二歸燕詩一、上二度承宣傳郎一目、舊壘危巢泥已落、今年故向二社前一歸、連雲大廈無二棲處一、更傍二誰家門戶一飛」とあり』他人に依賴して立身す。門戶に傍ふ【句】『故事成語考に「傍二人門戶一、憐二士無レ依」とあり』書生など落魂して、他人をたよる。

門戶を立つ【句】一一家を構ふ。一家を立つ。二『蜀志の張裔傳に「使レ立二門戶一」とあり』朋黨を結ぶ。門戶を成す【句】一『梁書の王茂傳に「成二門戶一者、必此兒也」とあり』一家を興す。一家を成す。二專門家として、一派を立つ。一家を成す。門戶を張る【名】一「門戶を立つ」に同じ。二住居を壯大にして、見(エ)を張る。三獨自の見識を主張す。四勢力を張る。

もん-こん 門闃【名】**もんぬき**(門閾)に同じ。『著聞「我もし生身(シンヤウ)の彌陀を見奉らずば、永く伽藍の門闃に出でじ」

もん-どん 文言【名】語句。文句。辭句。

もん-ざい 文才【名】**ぶんさい**(文才)に同じ。源氏「もんざいをば、さるものにて、言はず」

もん-ざい 問罪【句】『北史の隋煬帝紀に「商郊問レ罪、周發成二文王之志一」とあり』罪を問ひただすこと。ぶんざい。問罪の師【句】罪を問ひただすために遣す軍隊。征伐の軍隊。

もんざう-の-しやう 文章生【名】**もんじやうしやう**(文章生)に同じ。源氏「まだもんざうのしやうにはべりし時」

もんざう-の-はかせ 文章博士【名】**もんじやうはかせ**(文章博士)に同じ。源氏「もんざうのはかせ召して、願文(グワンモン)作らせたまふ」

もん-さき 門先【名】**もんぜん**(門前)二に同じ。若鳳爺明(ケ)の日も、御門先に立ち暮し」

もん-さく 文作【名】即席に面白き文句を作り出すこと、又その文句。一代男「大道に出でて文作、何れか腰をよらざるはなし」御伽名代紙衣「今まで騷ぎし末社ども、文作の口を閉ぢ」

もん-さつ 門札【名】家の門などに、住者の姓名を記して掲ぐる、小形の札。かどふだ。表札。門標。

もんざぶらう-いなり 紋三郎稻荷【名】常陸國西茨城(ハニライギ)郡笠間(カサ)町にある稻荷社。本名は胡桃下稻荷といひ、參者極めて多く、二月・十一月の祭日には、參詣者のために、臨時汽車を發す。

もん-さんさめ 紋棧留【名】模樣を打ち出したる棧留革。

もん-さや 紋紗綾【名】紋織にせる紗綾。

もん-し 門齒【名】『口腔の門戶に當れるよりいふ』上顎と下顎との前方・中央にある齒。齒冠、楔狀をなし、銳緣を具へ、食物の攝取・切斷の用をなす。人類の歯は左右各二枚づつありて、脣音の形成にも關係あり。

もん-し 門子【名】一門を守る人。門番。門人。門者。門徒。二古、支那にて、卿大夫の嫡子。

もん-し 門資【名】**もんち**(門地)に同じ。

もん-し 悶死【名】もだえ死ぬること。もだえじに。

もん-し 紋紙【名】「棒引(ボウキ)の紋紙」を見よ。

もん-じ 文字【名】一六書(リクショ)の內、轉注と假借とは字に當り、他は文に當る』言語の成分たる音(オ)又は言語そのものを、形に書きあらはして、その符牒とするもの。故に音字と意字とに分つ。各條を見よ。もじ。じ。二ど(語)に同じ。三**ぶんしやう**(文章)に同じ。

文字の飲【句】詩文・書畫などに携はる人人の宴會。

文字の國【句】支那を、その文字(漢字)の豐富なるにつきていふ語。

文字の辯【名】『陳造の八月晦試院中詩に「官居課程地、生有二文字辯一」とあり』學問を好むこと。

文字の法師【句】〔佛〕『摩訶止觀の卷五に「非二闇證禪師・文字法師所能知一也」、又、同書の卷七に「不下與二世間文字

法師一共上、亦不下與二事相禪師一共上とあり』專ら教相を習ひて、禪行を修せざる法師。徒然「文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、己に若かずと思へる、共に當らず」

もんじけいすう 文字係數【名】〔數〕『英 Literal coefficient』項の係數の、文字にて記したるもの。例へば $Ax+By+C$ の A. B. の類。(數係數に對して)

もんじつ 門室【名】〔名〕〔佛〕■門跡の居室。■門跡たる法親王の敬稱。

もんじつしんご 捫蝨新語【名】〔書〕『「蝨(シラミ)を捫(ネ)って、當世を論ず」を見よ』儒釋・歷史・詩文等を評論せるもの。十五卷。支那宋の陳善の著。

もんじなまり 文字訛【名】もじなまり(文字訛)に同じ。

もんじはうていしき 文字方程式【名】〔數〕『英 Literal equation』文字係數なる方程式。例へば $ax^2+bx+c=0$ など。(數字方程式に對して)

もんじふ 文集【名】〔書〕はくしもんじふ(白氏文集)の略。枕「文(フミ)は文集・文選」新古今「文集嘉陵春夜の詩に、不レ明不レ暗朧朧月といへることを詠みはべりける」紫式部日記「宮の御前にて、文集の所所讀ませたまひなどして」

もんじぼうびき 紋紙棒引【名】ぼうびきもんづけ(棒引紋附)に同じ。

もんしま 紋縞【名】所所に模樣をあらはしたる縞の織物か。一代女「黃無垢(クワウ)に、紋縞を、一つ前に重ね、紺地の今織後帶(オビ)」

もんじん 門人【名】■『史記の孟軻傳に「孟軻鄒人也、受二業子思之門人一」とあり。師の門下に居る人の義』でし。門下生。門下。門生。門弟。門弟子。門徒。■『戰國策の齊國の條に「鄙之登徒、見二孟嘗君門人一」とあり』もんかく(門客)に同じ。■『博物異志に「門人曰、汝已至、此、何不レ求二遊覽華而返一」とあり』もんし(門子)■に同じ。

もんじん 問訊【名】■安否を問ひ訊(トフ)ふこと。訪問。■會釋(エシク)すること。太平記「和尙答へて曰く、吹毛急に用ひて前まんには若かず。高重、この一句を聞きて、問訊して、門前より馬引寄せ、打乘りて」

もんしや 門者【名】もんし(門子)■に同

もんしや 紋紗【名】紋織の紗。紋樣を出すに、地の經緯絲に依るもの、紋緯を使用するもの等の種類あり。顯紋紗。その他、生(キ)紋紗とて、生綾(キヤ)のまま使用し、一名を竹屋町ともいひて、專ら法衣用とするもあり。金絲又は銀絲を紋緯に使用する金紗・銀紗あり。義經記「紋紗を以てぞ包みたる」

もんしや 文者【名】學問せる者。學者。儒者。文人(モンジン)。大鏡「まことしき文者にて、御前の作文(モンク)には、文(ブン)たてまつられしは」謠曲(正尊)「土佐は、聞ゆる文者にて、自筆にこれを書きつけ」

もんしや 問者【名】講經の時、講師に質問を發し、又、論義の時、圓座に著きて、法を講師に問ふ僧。

もんしやう 紋章【名】家家の紋所及び公共團體・國家などの徽章の總稱。

もんしやう 門牆【名】■門と垣と。■『論語の子張篇に「夫子之牆數仞、不下得二其門一而入上、不レ見二宗廟之美、百官之富一」とあり』師の學問の入口。■『揚子法言に「在二夷狄一則引レ之、倚二門牆一則麾レ之」とあり』極めて淺近なる處の譬。

もんしやう 文章【名】ぶんしやう(文章)に同じ。

もんじやう 問狀【名】鎌倉時代及び室町時代に、訴人の訴狀に對し、官府これを受理したる時、論人の答辯を求むるために發せし召喚狀。執權又は管領より發する問狀御教書(モンゲウシヨウ)と、頭人又は奉行人より發する問狀奉書との二種ありたり。

もんしやうがく 紋章學【名】『英 Heraldry』紋章の意義・由來・傳統等を研究して、系圖・祖先等を明かにする學問。從つて、史學の重要なる補助學科たり。

もんしやうじ 紋障子【名】すかし模樣ある障子紙。

もんじやうしやう 文章生【名】令制の貢舉(コウ)・省試廢せられてより、文章博士、希望者に與ふる稱號。天平二年に設置す。定員二十人。雜士・白丁中より選拔し、その上に文章得業士二人を置き、文章生を省試の進士に、文章得業生をその秀才に擬したり。又、延喜式の制にては、大學の學生又は擬文章生に對し、大學寮にて、春秋二季に試驗を行ひて、文章生を取り、文章生を直ちに進士と呼び、又、文人(モンジン)ともいへり。

もんじやうしやうさんね 文章生散位【名】『ね(位)は、散の字の韻に引かれて、ニと發音す』文章生の、諸國の掾(ジヨウ)に任ぜられて、任期の滿ちたる者。次第に京官に任ぜらるる定なりき。

もんじやうとくぶせい 文章得業生【名】文章生の、詩賦を以て、對策及第せし者。定員二人。更に方略の宣旨を蒙り、文章を以て、對策及第すれば、文章博士となりたり。もんさう(問頭)及びもんじやうしやう(文章生)參照。

もんじやうはかせ 文章博士【名】古、大學寮に屬して、詩賦と歷史とを掌りし博士。もと歷史を掌る者に紀傳博士と紀傳得業生とありしが、承和元年、これを停めて、文章博士の定員を一人增すに至り、爾來、文章博士は紀傳道をも掌ることとなり、定員も二人となり、文章博士を紀博士と呼びしこともあり。位は從五位下。唐名翰林學士・翰林主人。はかせ。

もんじやうほうしよ 問狀奉書【名】もんじやう(問狀)を見よ。

もんじやうみげうしよ 文章御教書【名】もんじやう(問狀)を見よ。

もんじやうゐん 文章院【名】古、菅原・大江二氏の、文の子弟を教育せし所。菅原清公(キヨキミ)、遣唐使の任を終へて歸朝の後、官許を得て、設立せしもの。東西兩曹司あり、各十七間、東曹を大江家、西曹を菅原家の學舍とす。康平年中、屋舍顚倒のため、大學寮の一部を使用せしこともあり。廢滅の年代は、詳かならず。

もんじやき 文字燒【名】『盤面に文字の形に滴らして燒くこともあるよりいふ』ぼったらやき(ぼったら燒)に同じ。

もんじやく 文籍【名】ぶんせき(文籍)に同じ。源氏「文籍にも、家禮といふことあるべくや」

もんじやく 問籍【名】なだいめん(名對面)■に同じ。日中行事「瀧口の戶より罷り出でて、もんじやくの先追ひ散して」

もんしゆ 門首・門主【名】〔佛〕一門の上首。即ち延曆寺の座主(ザス)、東寺の長吏など。高野山にては、二人ありて、その上に撿挍(ケンカウ)を置きたり。

もんじゆ 文殊【名】〔佛〕■『もんじゆしり(文殊師利)の略』普賢菩薩と共に釋迦如來の脇侍(ワキジ)となり、その左方に在りて、智慧を司る菩薩。その像、身の色は黃金の如く、頂に五髻を結びて、五智を表し、(變體には、一髻、八髻のもあり)、手に劍を持して、智慧の利劍とし、獅子に駕して、智慧の威猛を表す。又、雉子(ヂ)文殊とて、未だ發心・出家せざりし時、即ち梵德婆羅門の家に在りし時の形なりといふ像ありて、傳敎大師、支那より將來し、今、なほ叡山の經藏に祕せらるといふ。覺母(オボ)。まんじゅ。空穗「文殊、獅子に乘りて」■はんにやじ(般若寺)を見よ。

(ゆじんも)

文殊の淨土【句】〔佛〕支那の五臺山、即ち清涼寺の在る所。文殊菩薩、常に住まひて法を說くとて、山中文殊の像あり。謠曲(石橋)「向(ヒムカ)は文殊の淨土清涼山、よくよく御拜み候へ」

文殊の智慧【句】〔佛〕小乘の比丘には、釋迦十六弟子中、舍利弗(シヤリホツ)を智慧第一とするに對して、大乘の菩薩にては、文殊を智慧第一とするによつていふ語。雪女五枚羽子板「女子(ヲナゴ)同士の床入りは、文殊の智慧にも能はぬ事」謠「三人寄れば文殊の智慧」

文殊の祕法【句】〔佛〕『種種の文殊法の中にて、慈覺大師の門徒の最極の祕法とする所なるよりいふ』**はちじもんじゆほふ**(八字文殊法)に同じ。朝野群載「毎年於二神宮寺一可レ修二文殊祕法一」

もんじゆ 文壽【名】〔人〕刀工。陸奥國の人。源滿仲のために、その佩刀鬚切と膝丸とを鍛ふ。安和・天祿頃の人。

もんじゆ-こう 文殊講【名】〔佛〕**もんじゆゑ**(文殊會)に同じ。

もんじゆ-さん 文殊山【名】〔地〕越前國今立(イマダチ)足羽(アスハ)二郡に跨れる山。福井市の南二里半。山容、富士山に似たりとて、角原(カハラ)富士の稱あり。泰澄上人の開きたる五山の一にして、山上に白山權現を祀る。

もんじゆし 文殊師利・文殊尸利(梵Manjusri)【名】〔佛〕『文殊は妙の義、師利は頭の義、德の義、吉祥の義、依りて、妙德・妙首・敬首・妙吉祥など譯す』**もんじゆ**(文殊)に同じ。

もんじゆ-しり 文殊尻【名】『前條の語の師利は、梵語なるを、尻の義に取りなし、又、僧は、男色と關係あるより轉用せるなるべし』しり。肛門。(主に、男色の上につきていふ)鹿筑波「無性にもあり賢うもあり(ミいふ句に)朝寢してはこを垂れたる文殊しり」長老百首狂歌「橋立の松のふぐりも入海の浪もて濡す文殊しりかな」

もんじゆしり-ぼさつ 文殊師利菩薩・文殊尸利菩薩【名】〔佛〕前前條に同じ。

もんじゆしり-ぼさつ-はちじさんまいほふ 文殊師利菩薩八字三昧法【名】〔佛〕**はちじもんじゆほふ**(八字文殊法)に同じ。

もんじゆす 紋繻子【名】繻珍と同樣にて、緯絲はただ一種のみを用ひたる織物。

もんじゆ-だう 文殊堂【名】文殊菩薩を安置せる堂。五人女「丹後路に入り、切戸(キレド)の文殊堂に通夜して」

もんじゆ-はちじぼふ 文殊八字法【名】〔佛〕**はちじもんじゆほふ**(八字文殊法)に同じ。

もんじゆ-ぼさつ 文殊菩薩【名】〔佛〕**もんじゆ**(文殊)に同じ。

もんじゆ-ほふ 文殊法【名】〔佛〕密教の修法の一。文殊菩薩を中心として、曼荼羅(マンダラ)を建立し、福智增長・息災延命等のために修するもの。一字文殊法・五字文殊法・六字文殊法・八字文殊法などあり。

もんじゆ-まい 文殊米【名】美濃國本巢(ムモト)郡文珠村より產する米。品質の佳良を以て著れ、炊ぎて、一種の香味あり。藩政の頃は、戶田家より、特に吏員を派して、耕種・調製等を監督し、又、明治十二三年頃、皇室の御膳米に供せられし事あり。

もんじゆ-ろう 文殊樓【名】比叡山東塔の中にある樓。慈覺大師入唐の時、五臺山に文殊の石像を拜せし記念として建てしものといふ。平家「大津の打出の濱にもなりぬれば、文殊樓の軒端の、しろしろとして見えける」

もんじゆ-ゐん 文殊院【名】〔佛〕胎藏曼陀羅十三大院の第七。文殊を中尊として、二十五尊を安ず。

もんじゆ-ゑ 文殊會【名】〔佛〕天長十年以來、京畿諸國並びに諸寺院(殊に京都の東寺と西寺と)にて、毎年七月八日行ひし法會。前後三日の間、殺生を禁じ、會集の男女に三歸・五戒を授け、文殊の號を唱へしめ、又、畿內の郡邑廣くこれを設け、竈食などを辨じて、貧者に施したり。太平記「八日の文殊會、十四日は盂蘭盆(ボウ)」

もんじゆゑ-ちやう 文殊會帳【名】稅帳の枝文の一。毎年、文殊會を行ふ料として割り充つる、救急稻の利子に關する事を記入せしもの。

もんじよ 文書【名】ぶんしよ(文書)に同じ。空穗「かくの如く人の嘆除き給はば、人の嘆、願、滿つべしとなん、もんじよにいへる、まことに然ある事なり」

もんじよ-びつ 文書櫃【名】ふみびつ(文櫃)に同じ。

もんじよ-ぶくろ 文書袋【名】文書を入るる袋。平治「齡七十ばかりなる入道の、柿の直垂に、文書袋、頸に掛けたるが」

もんじ-よみ 文字讀【名】もじよみ(文字讀)に同じ。

もん-じるし 紋印【名】紋所をあらはしたるしるし。薩摩歌「六十餘州の大名樣、お馬印・鎧印、お駕籠おさへの紋印、そらに覺えて罷り在る」

もんしろ-てふ 紋白蝶【名】〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲類。口部は管狀の長吻より成り、觸角は棍棒狀をなし、複眼二箇、二枚の前翅は白色にして、黑紋あり。後翅は多少黃色を帶ぶ。前緣に暗紋あり。幼蟲は菜蟲といひ、綠色にして、細毛を有し、十字花植物を食す。蛹は綠色或は枯葉色をなし、絲を出して、自體を樹枝に縛す。

もん-すう 門樞【名】門のとぼそ。

もんすうん (英Monsoon)【名】〔地〕**きせつふう**(季節風)に同じ。

もんすたあ (英Monster)【名】異形の物。「怪物。妖怪。

もん-ずり 【名】〔動〕斧足類に屬する軟體動物。殼は圓くして厚く、表面に、淺くして細き溝、放射狀をなして存し、濃淡の栗色をなす。

もんずゐ 文粹【名】〔書〕**ほんてうもんずゐ**(本朝文粹)の略。聖文私言「文粹・懷風藻などの類も讀みみるべし」

もん-せい 門生【名】**もんじん**(門人)に同じ。「同じ。

もん-せき 問責【名】**せきもん**(責問)【一】に

もん-ぜき 門跡【名】【一】〔佛〕『門流の跡の義』一門派の教義を、師弟相傳し、その本寺に嗣住して、法系を持續する者。扶桑略記「智證大師乃門跡爾、旁有レ所中支」【二】〔佛〕皇子・皇族・攝籙・淸華の子弟の入室して、その法系を持續する寺院。宇多天皇御出家の後、眞言宗の一門派の教義を相傳し、仁和寺を創められしより後、皇子の出家して、天台宗・眞言宗等の一門派の教義を相傳し、一寺に嗣住せらるる者、又は公卿等のこれに倣ふ者の稱呼。平安朝末期には、諸大寺の勢力、漸くこれに歸するに至りしが、室町時代以後は、寺院の資格となり、江戶時代に及びては、宮門跡・攝家門跡・淸華門跡・准門跡(一名脇門跡)の等差も設けられて、資格の名稱たること、ますます確定せり。明治維新と共に、宮門跡は還俗せられ、四年、遂にこの稱號は廢止せしめられたれども、十八年に至り、諸寺の請によりて、その私稱を許されたり。太平記「梶井二品法親王尊胤は、天台座主にならせたまひて、大塔・梨本の兩門跡を并せて御管領ありしかば」殿上日記「十二月二十六日、六條の上人本願寺を門跡になすべき由、武家より申さるる」【三】『淮門跡に列しゐたりしによりていふ』**ほんぐわんじ**(本願寺)の俗稱。

もん-ぜき 門籍【名】人名を書きたる門鑑。〔王朝時代の語〕**もんぱう**(門牓)【三】參照。

もんぜき-ふぎやう 門跡奉行【名】室町幕府の職制の一。諸奉行中、門跡に關する政務を掌りしもの。

もん-ぜつ 悶絕【名】悶えて氣絕すること。苦悶して絕倒すること。著聞「相撲の節に、……、久光、悶絕してけり」太平記「悶絕躃地(クビキ)しけるを輿に載せて」

もん-せん 門扇【名】門のとびら。門扉。

もん-ぜん 門前【名】【一】門のまへ。もんさき。【二】寺院の門のまへ。門前、市を成す【句】媚を呈して來り求むる者、甚だ多き形容。門庭、市を成す。太平記「當今泰公の人人は、皆、一時に望を達して、門前市を成し、堂上、花の如し」曾我「門前に市をなせり」門前、雀羅を張る【句】「門外、雀羅を設く」に同じ。門前の小僧、習はぬ經を讀む【句】「勸學院の雀は、蒙求を囀る」に同じ。〔諺語〕

もん-ぜん 問禪【名】〔佛〕禪寺にて、住持の僧の陞座(ノボリ)・說法する時、聽衆の中より、禪客出でて、往持と問答すること。

もん-ぜん 文選【名】〔書〕先秦・周末より梁代に至るまでの詩賦・文章中、典型たるべきものを分類・編次せるもの。梁の太子蕭統の撰。もと三十卷なりしを、唐の李善これが註を作るに及びて、各卷を分ちて二とし、六十卷とす。註釋には、李善の後、五臣註とて、玄宗の開元六年、工部侍郎呂延祚が、呂延濟・劉良・張銑・呂向・李

周翰の五人をして作らしめしものあり、李善のと併せて。六臣(リク)註といふ。枕

「文(ミ)は文集・文選」

もんぜんち 門前地【名】寺院の境内の一部。その收入を、寺院の費用に充てんがために、町家を建てたる地。よものあか「孟子のおふくろは、隣えらみのむづかしやにて、……寺町・門前地を嫌へば」

もんぜんばらひ 門前拂【名】一徳川時代の刑罰の一。追放の、最も輕きもの。單に奉行所の門前に於て放逐し、武士に對しては、祿を沒收して、屋敷の門より放逐したり。二面會せんとて來訪したる者を、面會せさせずして、歸り去らしむること。「に建てたる町家。

もんぜん-まちや 門前町家【名】門前地

もんぜん-よみ 文選讀【名】昔、漢籍を讀むに、文字ごとに、一一その音と訓とを讀みしこと。即ち音讀と訓讀とを交互に行ふ方法。夏山雜談「鄙しき詞に、へらへいとうと云ふは、文選よみの如く、平平等なるべし」

もんそ 門祚【名】家のまはりあはせ。家運。

もんそ 門訴【名】德川時代に、衆人相率ゐて、領主・代官又は地頭等の邸門に至りて、所願を訴へしこと。捨訴(ソシウ)・張訴(ハリウ)・強訴(ゴウソ)などと共に、民事訴訟の一變體にして、何れも重罪として、嚴科に處せられたり。

もん-ぞ 文書【名】**もんじよ**(文書)の約。「古語」空穂「もんぞといふ物見たまへつきぬれば」

もん-そう 門僧【名】その貴人の家に常に出入する僧。

もん-そう 門送【名】**かどおくり**(門送)に同じ。盛衰記「一同に、皆、庭上に下りて門送す」「葉。

もん-ぞく 門族【名】一門一族の者。門

もんぞ-ぶみ 文書文【名】**もんぞ**(文書)に同じ。「古語」空穂「さるもんぞぶみをさへ尋ぬ出でたらん、いとかしこきこと」

もん-ぞめ 紋染【名】所所をしごきて染むること、又、その染方の物。とりぞめ。

もん-たい 問對【名】「文」漢文の文體の一。

もん-だい 問題【名】一答へしむるために設くる題。設問。二研究・論議して解決を遂ぐべき事件又は條件。三爭論の材料となれる事件。四「數」『英 Question 又 Problem』解答を要する問。五世の口に上ること。世人の疑問となること。「なし。

「問題の人」

問題にならず【句】研究・論議の價値

問題の解【句】「數」問題の解法。**かいほふ**(解法)を見よ。

もんだい-げき 問題劇【名】「文」『英 Problem drama』藝術上の描寫の中心に、社會問題・結婚問題・倫理・宗教問題などの思想を包含せしめたる劇。社會劇。

もんだい-せつ 問題小說【名】「文」『英 Problem novels』藝術的描寫の中心に、社會問題・結婚問題・倫理・宗教問題などの思想を包含せしめたる小說。

もん-たうし 紋唐紙【名】花鳥・唐草などの模樣をあらはしたる色唐紙。

もん-だふ 問答【名】一問ふことと、答ふることと。問ひ又答ふること。貞丈記「文」諸曲にて、互に問ひつ答へつする時の詞。二**もんわ**(問話)の俗稱。四落語家が、寄席にて、前項の禪宗の問話に擬して、「十(ト)無いのに東京とは、これ如何」「千(セン)無いのに仙臺と云ふが如し」といふ類を、問ひつ答へつすること。

もん-だふ 問答ふ【動四他】問答をなす。謠曲「安宅」「とかくの是非をばもんだはずして」

もんだふ-ぐも 問答雲【名】上層のと下層のと移動の方向の異なる雲。降雨近き前兆といふ。

もんだふ-はふ 問答法【名】「文」『英 Dialogue』修辭上、第三者の立場より平敍せず、二人以上の人物を點出して、問答せしむる方法。劇詩の結構など、これなり。

もん-だん 文段【名】**ぶんだん**(文段)に同じ。五人五左の袖に、吉田の法師が面影、ひとり燈火のもとに古き文(フミ)など見て

のもんだん、さりとは子細らしき物好」

もん-だん 文談【名】漢文・漢詩に關する談話。著聞「この佐實、花園殿に參りて物語申しける次(ツイ)に、御文談の候はん時は、佐實も召されん候ふべきものを」保元「臥しながら文談したまひけるに、龜の卜(ボク)と易の卜との淺深を論じたまひけり」

もん-ち 門地【名】家がら。門閥。門戶。門資。

もん-ちやう 紋帳【名】紋の標本を集めたる册子。染物屋などに備へつく。紋本。

もん-ぢやうちん 紋提燈【名】紋所を記してある提燈。「代男「床までもなくて、暮れてそのまま歸るさに、紋提燈の翟麥(ツツジ)」

もん-ちやく 悶著・捫著【名】『ちやく(著)は接尾語』いさかふこと。もめ。もつれ。紛爭。葛藤。

もん-ちゆう 問注【名】『問ひて、注記する義』訴人と論人とを取り調べて、その陳述する所を記すこと。訴訟の對決。著聞「僅かに田を持たりけるに、爭論の事ありて、六波羅にて問注すべきに定りにけり」沙石集「兄弟・親類、骨肉、仇を結び、問注・對決して、境を爭ひ」

もんちゆう-き 問注記【名】鎌倉時代及び室町時代に、法廷の問注を記錄したるもの。東鑑「重書問注記以下燒失」

もんちゆう-じよ 問注所【名】一鎌倉幕府及び室町幕府の職制の一。訴訟を問注せし官衙。鎌倉幕府にては初、政所(マンドコロ)にて、引付衆、訴訟を聽斷せしが、元曆元年、營中の東廂に新たにこれを設け、後、更に、館外に移し、財貨の貸借・領地の爭論・盜難等の事件を扱ひ、重大なる事件は、引付に付して、審理せしめたり。職員に執事・寄人(ヨリウド)あり、室町幕府は、職員に、なほ執事代と紛失方(紛失證文を沙汰するものなるべしといふ)等を置きたり。されども、侍所の權限の增大に壓せられて、有名無實となりたり。二**もんちゆうじしつじ**(問注所執事)の略。俗曲(恨葛藤)「罪咎重き久八が、心の鬼に責められて、今の地獄の苦しみと、問註所さして急ぎ行く」

もんちゆうじよ-くにん 問注所公人【名】**もんちゆうじよりうど**(問注所寄人)を見よ。

もんちゆうじよ-しつじ 問注所執事【名】問注所の長官。政所(コンドコロ)執事と相並ぶ重職。寄人を管して、問注を爲さしめ、訴訟を裁判するのみに止まらず、政務評定の席には臨まざる事なかりき。

もんちゆうじよしつじ-だい 問注所執事代【名】室町幕府の職制の一。問注所執事に事故ある時、臨時に置きて、代りて、事を執らしめしもの。問注所代。

もんちゆうじよ-しゆう 問注所衆【名】『**もんちゆうじよりうど**(問注所寄人)を見よ。

もんちゆうじよ-だい 問注所代【名】『**もんちゆうじよ**(問注所)二を見よ』**もんちゆうじよしつじだい**(問注所執事代)に同じ。

もんちゆうじよ-よりうど 問注所寄人【名】問注所の職制の一。執事の命を受けて、問注の事を奉行せしもの。室町幕府にては、問注所公人(クニン)又は問注所衆ともいへり。

もんちゆう-ぶぎやう 問注奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。問注所の職員、即ち執事と寄人(ヨリウド)との總稱。

もんちゆう-ぶぎやうにん 問注奉行人【名】前條に同じ。〔鎌倉幕府の語〕

もん-ぢらし 紋散【名】一種種の紋所を散(チラ)模樣にしたるもの。二『その胞衣(エナ)に、關係せし男たちの紋所、すべて現るとの俗說によりていふ』多數の男に關係したる女の腹に生れたる、父親の確かならぬ子。

もん-ちりめん 紋縮緬【名】紋織の縮緬。普通の縮緬よりは、地合薄く、組織細かなり。もんおりちりめん。

もん-つき 紋附【名】紋所の附きてあること、又その物。二代男「御紋附の傘」一代男「見知つた紋附の小盃にて」

もん-づくし 紋盡【名】俳優・遊女などの紋所を集め記したるもの。一代男「先づ吉原の咄聞きたし。新板の紋盡、紅葉は三浦の太夫と讀みそめるより、色にそまり」

もん-づけ 紋附 【名】ぼうびきもんづけ(棒引紋附)に同じ。

もん-てい 門弟 【名】もんじん(門人)に同じ。

もん-てい 門庭 【名】門と門内の庭と。門庭、市を成す 【句】『戰國策の齊國の條に「群臣進諫、門庭若市」とあり』「門前、市を成す」に同じ。「に同じ。

もん-ていし 門弟子 【名】もんじん(門人)に同じ。

もん-てふ 門帖 【名】詩などを書きて、門又は堂舍・樓閣などの柱に掲ぐる、縦に狹く長き、額(ガク)の如き物。その左右一對に掲げたるを、門聯といふ。

もん-てん 紋天 【名】もんびろおび(紋天帶)に同じ。娘節用「黑の紋天に、緋のどろふくりんの、腹あはせの帶」

もん-と 門徒 【名】一『周禮の司門篇の註に「監門、門徒」とあり』もんし(門子)に同じ。二『後漢書の鄭玄傳に「師三事扶風馬融、融門徒四百餘人」、梵摩喻經に「其諸門徒、觀ノ師盡ノ虔」とあり』もんじん(門人)に同じ。桂林遺芳抄「菅江門徒、相二分東西曹司」。三〔佛〕その宗門の信徒。門葉。門流。門侶。太平記「六師外道(ゲダウ)が門徒、雲霞の如く早く參じて著座したるに」四〔佛〕門徒宗の信徒。俳諧新選(存義)「買ふ人を門徒と指すや梅もどき」

もんと-ぐ 門徒 【名】『門徒と、物と、頭韻を成す』門徒宗の者の、阿彌陀如來のみを頼みて、他を顧みざるを嘲りていふ語。(「法華(ホッ)骨無」に對して)

〔諺語〕

もん-ど 主水 【名】もんどのつかさ(主水司)の略。(但し、その職員をいふ時に用ふ)

もん-どう 問頭 【名】古、大學寮に於ける文章生(モンジャウセウ)・文章得業生の試驗に於ける出題者。十訓「都良香、策對の時、問頭の博士は春澄・善繩なり」〔旨の申文。

問頭の申文(マウシブミ) 【句】問頭博士の宣

もん-とう 門燈 【名】門に取り附けたる電燈。「し。

もんどうに 【名】〔植〕こえんどう(胡菱)に同

もんどく-じつろく 文德實錄 【名】〔書〕文德天皇の嘉祥三年三月より天安二年八月まで(卽ち文德天皇在位の間)の事蹟を漢文にて編年體に記せる、勅撰の歴史。十卷。貞觀十三年、藤原基經・南淵(ミナブチ)年名・大江音人・善淵愛成・都言道・島田良臣等、清和天皇の勅を奉じて編纂に從ひ、故ありて、暫く中止し、元慶二年に至り、更に藤原基經・菅原是善・都良香・島田良臣等、陽成天皇の勅を奉じて、その業を繼ぎ、同年十二月上進せり。日本文德天皇實錄。六國史の一。

もんどく-てんわう 文德天皇 【名】〔人〕第五十五代の天皇。御名は道康(ミチヤス)。仁明天皇第一の皇子。御母は藤原順子(冬嗣の女)。在位八年(紀元一五一一年—一五一八年)。天安二年八月崩御。壽三十二。世に田邑帝(タムラノ)と申す。

もんどく-へいし 文德平氏 【名】文德天皇第三の皇子惟彦親王より出でし平氏。親王、四品に敍し、常陸・上總・上野等の太守を經て、中務(カナツカサ)卿・太宰帥に至り、男惟世王の子警幹、平姓を賜はる。但し賜姓の年時、詳かならず。

もんどころ 紋所 【名】家門の目じるしとして用ふる幾何學的形象。本紋・裏紋の別あり。各條を見よ。家紋。定(ヂヤウ)紋。紋。胸算用「みな紋所を、葉付の牡丹と、四つ銀杏の丸、女中方のはやり物」

もんど-しゆう 門徒宗 【名】〔佛〕『他宗に比して、多く門徒を有し、且つ何事も門徒を主とするよりいふ』いっかうしゆう(一向宗)の俗稱。

もんど-でら 門徒寺 【名】門徒宗の寺院。胸算用「毎年、節分の夜は、門徒寺に定まつて、平太郎殿の事讃談せらるるなり」

もんど-の-かみ 主水正 【名】主人司の長官。

もんど-の-つかさ 主水司 【名】もひとりのつかさ(主水司)に同じ。日中行事「もんどの司の御手水まゐる。女官案に据ゑて」

もんど-ばう 門徒坊 【名】次條に同じ。芭蕉「名月や我が家に戻る門徒坊」

もんど-ばうず 門徒坊主 【名】門徒宗の坊主。門徒坊。炭俵(沾圃)「なほいきれ門徒坊主の水いはひ」「じ。

もんど-ひ 門樋 【名】ひのくち(樋口)に同

もんど-ん-づかさ 主水司 【名】もんどのつかさ(主水司)の音便。「止すること。

もんど-め 門止 【名】その家へ出入を禁

もんどり 翻筋斗 【名】『もどり(翻筋斗)の音便』とんばうがへり(蜻蛉返)に同じ。翻筋斗を打つ 【句】とんばうがへりを爲す。

もん-な 問話 【名】〔佛〕『話の字、問の韻に引かれてナと轉ず』もんわ(問話)に同じ。

もん-ない 門内 【名】門のうち。

もん-ながし 紋流 【名】ジャカアド紋織機に附屬せる裝置の一。その一側、シリンダアの下部に裝置せる、彎曲せる二條の鐵軌又は木道にて、紋紙を、紋串によりて、正しく裝置するためのもの。「の略。

もんなし 文無 【名】いちもんなし(一文無)

もんなし 紋無 【名】紋所を記してあらぬこと、又その物。若風集皆之丞を誘(サ)ひて、紋なしの挑灯に面(デオモ)を背け」

もん-にん 文人 【名】一漢文・漢詩を作る人。文者(ブンヤ)。二もんじやうしやう(文章生)に同じ。樂書「文人はかせより始めて、進士(シン)より出でたる人二十人」源氏「文人・擬生(ガキ)などいふなる事どもよりうち始め」

もん-ぬき 紋緯 【名】紋樣を織り出すために、種種の色に染めたる緯絲。ゑぬき。

もん-の-くるま 文車・紋車 【名】網代(ジロ)車の一種。物見・立板・屋形などに、種種の模樣を描けるに因る名稱。四位・五位の乘用とす。棟融には總を懸け、その色、壯年者乘用のは眞紅、老年者のは白、又、壯年者のには、融文とて、袖格子の上に模樣を描き、老年者のは、白繪車(シロエ)ともいひ、物見板は、黑漆地に、胡粉にて白く畫きたり。ひやうもんのくるま。

もん-のり 紋糊 【名】紋所を染め出す時に用ふる染糊(ノリ)。

もん-ば 紋羽・文派 【名】地質粗く厚くして、起毛法を施せる、一種の綿布。安永年間、紀伊國那賀郡非白(ヒロ)村の者、和泉國日根郡樽井村の大津屋新助に嫁して、織り出ししもの。足袋・肌著などに用ひらる。近時は、綿(メン)フランネルの發展等に壓せられて、生產、大いに減少せり。

もん-ば 門派 【名】もんりう(門流)に同じ。(寺院にては、主に禪宗にていふ)

もん-ばう 門牓 【名】一門のかけふだ。門牌。「門榜」二物の數を記したる門鑑。「王朝時代の語」もんぜき(門籍)參照。

もん-ばう 門望 【名】門地と人望と。

もん-ばおり 紋羽織・文派織 【名】もんば(紋羽)に同じ。

もん-はく 紋白 【名】錦地に、白色の絲にて模樣を織り出せる織物。

もんばしら 門柱 【名】門のはしら。

もんばつ 門閥 【名】家がら。門地。

もんばつ-か 門閥家 【名】門閥のよき家。

もんぱ-びやう 紋羽病 【名】菌類の寄生によりて發する、植物の一種の傳染病。

もんはぶたへ 紋羽二重 【名】紋織にしたる羽二重。

もんばん 門番 【名】門の開閉・出入を掌ること、又その人。門衛。

もんばん-しよ 門番所 【名】門番の詰所。

もんばんづけ 門番附 【名】やくわりばんづけ(役割番附)に同じ。

もん-び 紋日 【名】『ものび(物日)の音便』各商賈の書入(カキ)にせる日。例へば、鰻屋ならば、土用の丑の日、蕎麥屋ならば、毎月の三十日、藝娼妓ならば、五節句・大祭日などの祝日。ものび。大阪新町(シンマチ)遊郭の案内記なる「澪標(ミヲツ)」に、一年の紋日約百五十を記せり。心中天の網島「二階座敷の三味線に引かれて立寄る客もあり、紋日近れて、顔隱し」

もん-び 門楣 【名】一門の上の梁(ハリ)。二家がら。家門。門戶。三『陳鴻の長恨歌傳に「男不ノ封ノ侯女作ノ妃、君看女却爲ノ門楣ニ」とあり』家門の光榮。四本家。宗家。太平記「義貞、不祥なりと雖も、當家の門楣として、譜代弓箭の名を汚せり」

もんぴ 門扉【名】門のとびら。門扉。

もんぴらき 門開【名】かどびらき(門開)に同じ。諺「女は門開」

もんぴろおど 紋天鵞絨【名】紋織にしたるビロオド。もんてん。

もんぴろめ 紋廣【名】家の紋所を許されたる時、これを披露すること。曾我扇八景「紋ぴろめの祝儀振舞」「略。

もんぶ 文部【名】もんぶしよう(文部省)の略。

もんぶ 門風【名】一家の風儀。家風。二【佛】その宗門の風儀。正統記「慈覺智證兩大師、又、入唐して、天台・眞言を究め習ひて、叡山に弘められしかば、かの門風、いよいよ盛になりて」

もんぶきやう 文部卿【名】もんぶだいじん(文部大臣)の舊稱。〔明治十八年の官制改革以前の語〕

もんぶく 紋服【名】紋附の服。

もんぶしやう 文部省【名】『唐書百官志に「天寶十一載、改二吏部一曰二文部一」とあるに本づく』一しきぶしやう(式部省)を、淳仁天皇の時、一代改めたる稱。二各省の一。文部大臣の統轄の下に、教育・學藝及び宗教に關する事務を總轄する所。大臣官房の外、專門學務局・普通學務局・宗教局の三局に分れ、次官・局長・參政官・副參政官・參事官・祕書官・書記官・屬及び督學官・圖書官・技師・技手の職員あり。又、帝國大學・直轄專門學校・帝國圖書館・中央氣象臺・臨時緯度觀測所・帝國學士院など、その管理又は監督に屬す。

もんぶしやう-だいじんくわんぼう 文部省大臣官房【名】文部省の大臣官房。各省官制通則に定めたる事項の外、公立學校の職員、建築・營繕・圖書の編輯・發行及び檢定、博覽會及び褒賞に關する事項を掌る。

もんぶしやう-ちよくかつ 文部省直轄【名】文部大臣の、直接に管轄すること。

もんぶしやう-ちよくかつがくかう 文部省直轄學校【名】府縣廳の手を經ず、文部大臣の直接に管轄する官立の專門學校。

もんぶしやう-びじゆつてんらんくわい 文部省美術展覽會【名】文部大臣監督の下に開催する美術展覽會。明治四十年十月、その第一回を上野公園に開き、爾後、毎年一回、同公園に開催す。その後、帝國美術院展覽會と改稱す。文展。美術展。「大臣の發する省令。

もんぶしやう-れい 文部省令【名】文部

もんぶぞく 文部屬【名】文部省の屬官。

もんぶだいじん 文部大臣【名】各省大臣の一。各省官制通則に於て定めたれる、職務權限の外、教育・學藝及び宗教に關する政務を管理するもの。

もんべ 門部【名】かどべ(門部)の誤讀。伊呂波字類(毛の部)「門部」

もんぺ 【名】形、袴に似たる股引。括袴に似たるもの。〔出羽國の方言〕「じ。

もんぺう 門標【名】もんさつ(門札)に同

もんぼうしよ 紋奉書【名】種種の模樣を漉き込みたる奉書紙。「名。

もんぼく 門僕【名】てんやく(典鑰)の唐

もんぼふ 聞法【名】〔佛〕教法を聽聞すること。盛衰記「聞法隨喜の窓にして、命を亡す事あらば、彌陀の淨刹に往生せん」

もんぼん 紋本【名】もんちやう(紋帳)に同じ。「じ。

もんぼり 【名】はきみきりがた(鋏切形)に同

もんまう 文盲・蚊虻【名】『蚊虻は假借の字』文字を讀み得ぬこと、又その人。あきめくら。無學。大鑑「義懷(ヨシカ)の中納言、……もんまうにはおはせしかど」

もんまつ 門末【名】〔佛〕もんと(門徒)三に同じ。

もんみんしつ-し 問民疾苦使【名】古、朝廷より諸國に派遣し、飢寒を救恤し、疾苦を尋ね、諸國の治績を巡檢せし使者。孝謙天皇の朝に始まりたり。

もんむ-てんわう 文武天皇【名】〔人〕第四十二代の天皇。御諱は輕(カル)。天武天皇の皇孫、皇太子草壁皇子の御子。御母は阿閉(ヤ)皇女。御在位十一年(紀元一三五七年—一三六七年)。慶雲四年六月崩ず。壽二十五。

もんめ 匁【名】一『文(ンモ)目の義にて、字も「文」の變體「匁」と「匁」との合略なる和字。支那唐代に、その開元錢一枚に相當する重さを、重さの單位として、一錢とせしに倣ひ、我國にては、錢一文の「文」に「目」を附けて重さの單位とせしなり。又、「匁」は「錢」の字の古體なりとの說もあり』目方の單位。貫の百分の一。きん(斤)參照。二銀錢の高の單位。小判の兩の六十分の一。〔德川時代の語〕「銀五匁」

もんめん 木綿【名】もめん(木綿)の音便。

もんめん-いと 木綿絲【名】もめんいと(木綿絲)の音便。

もんめん-きんちやく 木綿巾著【名】もめんきんちやく(木綿巾著)の音便。丹波與作「もんめん巾著ねぢ込んでこそ歸りける」

もんめん-しりがい 木綿靴【名】もめんしりがい(木綿靴)の音便。

もんも 紋紋【名】次條の訛。〔幼兒の語〕浮世風呂「お杉坊も、紋(モン)の足袋(タビ)も脫いで」

もんもん 紋紋【名】もん(紋)又はもんつき(紋附)を云ふ。〔幼兒の語〕「紋紋の衣(ベベ)」

もんもん 門門【名】多くの門。門門不同八萬四千【句】〔佛〕『支那唐代の高僧善導の般舟讚にある語』佛教の法門多きをいふ。「八萬四千の法門」に同じ。門出八島「門門不同四萬八千」

もんもん 悶悶【貌】憂へもだゆるさま。

もんもん-くく 文文句句【名】『文句・文句の義』多くの文句。又、一一の文句。盛衰記「一一の返答、文文句句面白く申れつるものかな」艶道通鑑「源氏供養の廻向(カエ)ン)發願(ホツグ)の文文句句」「がら。模樣。

もんやう 紋樣【名】紋のありさま。もん

もんやうじ 紋楊枝【名】俳優などの紋所を記したる楊枝。若風俗「紋楊枝を手に觸れて、口中琢ける時」

もんやぎう 紋野牛【名】鐵印(ハカナ)などにて、種種の模樣をあらはしたる野牛應帝(ヤギヤイ)。「じ。

もんやく 門役【名】もんばん(門番)に同

もんやく-ぶぎやう 門役奉行【名】室町幕府の職制の一。奉行人の內一人をして、諸家の輩を分配し、諸門の警衛に從事せしむる事を掌り奉行。「櫓。

もんやぐら 門櫓【名】門の上に造れる

もんやぐら-ちりおとし 門櫓塵落【名】門櫓を設け、敵の、門際に來りたる時、門の扉より外方へ出張りたる、その櫓の板敷をはづして、敵を防ぐやうに仕掛けたるもの。「(八橋織)を見よ。

もんやつはし 紋八橋【名】やつはしおり

もんら 紋羅【名】模樣を織り出せるうすもの。新可笑記「紋羅のかたぎぬ、まくり手の紫紐」

もんらう 門廊【名】中門の廊。續世繼「鳥羽に籠りゐさせたまひて、年の始にも、門廊などさして、人も參らざりき」

もんり 紋理【名】木材の木目(モク)の、さまざまの條理を形づくれるもの。

もんりう 門流【名】技術・宗門などの流派。門葉。門派。「やなぎ。

もんりう 門柳【名】門前にある柳。かど

もんりよ 門閭【名】家の門と、村里のはづれにある門と。

もんりよ 門侶【名】もんと(門徒)三三に同じ。

もんるゐ 文類【名】〔書〕一じやうざもんるゐ(淨土文類)の略。二次條の略。

もんるゐ-しやうしんげ 文類正信偈【名】〔書〕『淨土文類の中なる正信偈の義。正信急佛偈と區別するためにいふ』ねんぶつしやうしんげ(念佛正信偈)に同じ。

もんるゐ-じゆせう 文類聚鈔【名】〔書〕じやうざもんるゐじゆせう(淨土文類聚鈔)の略。「よ。

もんれん 門聯【名】もんてふ(門帖)を見

もんろ 紋絽【名】紋織にせる絽。男子の肩衣などに用ふ。「樓。

もんろう 門樓【名】門の上に設けたる

もんろおーしゆぎ モンロオ主義(英Monroe Doctrine)【名】佛蘭西のナポレオン第一世の、西班牙よりブルボン(Bo-

nrbor)王朝を逐ひて、兄ヨセフ(Joseph)を封ずるや、亞米利加に於ける西班牙の諸植民地に獨立運動起り、西班牙王復位の後も、その命を奉ぜずして、漸次獨立せしに對し、露西亞・普魯西亞・澳太利の諸君主國、神聖同盟を組織して、歐洲に於ける民主自由の運動を制止すると同時に、これら植民地の獨立をも、兵力を用ひて鎮壓せんとせし時、當時の北米合衆國第五代の大統領モンロオ(James Monroe)の、西暦一八二三年十二月二日、議會に與へたる教書に於て、北米合衆國は、自ら歐羅巴の事に干渉せざる代りに、歐羅巴各國の、亞米利加大陸の諸共和國の事に干渉するを許さずと宣言し、爾來、久しく同國外交の原則となりし主義。

もん-わ 問話【名】〔佛〕『話は、上の門の韻に引かれて、ナと發音す』住持の陞座(ジョウ)・說法する時、禪客の、これに向ひて發問する語句、即ち問禪の語句。もんな。

もん-わく 紋框【名】布帛に、紋所を染め出すために、紋糊を塗布する際、その部分の生地(チ)を張り伸ばすに用ふる框。形、水嚢に似て、底なきもの。

もん-ねぎ 門閾【名】門のしきみ。門閾。「よ。ぢふく。

もん-ねん 門院【名】にょうゐん(女院)を見

もんねん-がう 門院號【名】某門院と呼び奉る尊號。「じ。

もん-ゐい 門衛【名】もんばん(門番)に同

もめ 揉【名】㊀揉まれて、皺寄り又は柔かになること。㊁あらそひ。もつれ。葛藤。もめごと。

もめ-あひ 揉合【名】前條㊁に同じ。

もめ-ごと 揉事【名】前條㊁に同じ。新版歌祭文「降つて湧いた銀のもめ事、これ言ひたてに隙を貰ひ」

も-めん 木綿【名】㊀めんくわ(棉花)に同じ。〔木棉〕㊁もめんいと(木綿絲)の略。

目もめんおり(木綿織)に同じ。

もめん-あはせ 木綿袷【名】木綿織にて仕立てたる袷。續七部集「まちがひに木綿袷の武田川」

もめん-いと 木綿絲【名】棉花又は屑綿を原料として紡ぎたる絲。綿絲。

もめん-うり 木綿賣【名】木綿を賣ること、又その人。

もめん-おび 木綿帶【名】木綿織にて仕立てたる帶。二代男「左卷の木綿帶したる男」

もめん-おり 木綿織【名】木綿絲にて織ること、又その織りたる布。もめん。綿布。綿織(オリ)。もんめん。

もめん-がっぱ 木綿合羽【名】あまぎ(雨著)を云ふ。〔江戸の語〕

もめん-がのこ 木綿鹿子【名】木綿織の鹿子絞。一代男「木綿がのこのちらしかたに、舊裏を吹返させ」

もめん-かひ 木綿買【名】木綿を買ひ集むる商人。諸國はなし「平野の里へ歸る木綿買、道を急ぎ」

もめん-がみ 木綿紙【名】木綿の裁屑を原料として、パルプ・藁などを加へずして漉き、純粹の纖維素より成る紙。

もめん-きんちゃく 木綿巾著【名】木綿切にて製したる巾著。もんめんきんちゃく。(革巾著に對して)

もめん-ぎもの 木綿著物【名】木綿織にて仕立てたる著物。綿服(フク)。

もめん-きるもの 木綿著物【名】前條に同じ。〔京・都・大阪の語〕一代女「不斷は、下に洗小袖(コソデ)、上に木綿著物になりて」二代男「木綿著物の濡るるも、悲しさは同じ事」

もめん-ぎれ 木綿切【名】木綿織の切端(キレ)。若風俗「淺黄の木綿ぎれ」

もめん-さなだ 木綿眞田【名】木綿の眞田織。膝栗毛「木綿眞田の紐が下(ザ)ってゐらあ。……、越中褌であつた」

もめん-じま 木綿縞【名】縞を織り出せる木綿織。本朝二十不孝「木綿縞の袴」

もめん-しりがい 木綿鞦【名】木綿の緒を並べて、横に綴ぢつけたる鞦。もんめんしりがい。

もめん-だて 木綿楯【名】昔の戰に、木綿を垂し下げて、楯に代用せしもの。

もめん-たび 木綿足袋【名】木綿織にて仕立てたる足袋。五人女「裏解きかけたる木綿たび、草鞋(ワラジ)の緒もしどけなく」

もめん-ちぢみ 木綿縮【名】めんちぢみ(綿縮)に同じ。

もめん-づる 木黃芪【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する多年生の草。我國、山地に自生し、莖は地上に臥し、葉は、奇數羽狀複葉にして、互生し、その小葉は、概ね十一筒又は十三箇にして、長卵形又は長楕圓形をなし、鋭頂・全緣なり。黃色の蝶形花穗狀の總狀花序をなして開き、根は藥用に供す。

もめん-にしき 木綿錦【名】經(タテ)に絹絲、搦(ヨコ)絲に生絲を用ひ、緯(ヨコ)に木綿絲を用ひて、外觀は絲錦㊁の如く見ゆるやうにせる織物。

もめん-ぬのこ 木綿布子【名】木綿織にて仕立てたる布子。淀鯉出世龜鑑「いにしへの手代新七、もめん布子も物さびて、御免あれと、座敷に入り」

木綿布子に紅絹(ベニ)の裏【句】㊀表と裏との不釣合なる譬。〔諺語〕㊁人目に觸れぬ處に、却りて、金目の物を用ふる譬。〔諺語〕

もめん-ばうせき 木綿紡績【名】棉花を紡ぎて、和絲・唐絲・雙子(ヨツグ)絲・瓦斯絲などの紡績絲に作ること。綿絲紡績。綿(ワタ)紡績。綿紡。

もめん-ばおり 木綿羽織【名】木綿織にて仕立てたる羽織。世間妾形氣「白茶の木綿羽織」

もめん-ばかま 木綿袴【名】木綿織にて仕立てたる袴。油樽「十七八は鬼にこそなれ(こいふ句に)もめん袴著たる若衆の紅葉狩」

もめん-ばた 木綿機【名】もめんもの(木綿物)に同じ。本朝三國誌「里の名を織る木綿機」

もめん-はば 木綿幅【名】木綿物の幅。九寸三分乃至九寸五分を普通とす。今宮心中「風呂敷の木綿幅」

もめん-ばり 木綿針【名】木綿物を縫ふに用ふる針。絹針・紬(ギツム)針より太く、夜具綴(ナヅ)針よりは細し。

もめん-ぶとん 木綿蒲團【名】木綿織にて仕立てたる蒲團。一代女「油火の所を蠟燭になし、炬燵も木綿蒲團を掛げず」

もめん-ふんどし 木綿犢尾褌【名】木綿織にて造りたるふんどし。一代女「いかにしても、分里(ザトヒ)へ、木綿ふんどしにては かかられず」

もめん-ぼ 木綿帆【名】木綿織にて作りたる織物。もめんおり。もめんぼた。

もめん-もの 木綿物【名】木綿絲にて織りたる織物。もめんおり。もめんぼた。

もめん-や 木綿屋【名】木綿物を造り、又は賣る家、又その人。「に同じ。

もめん-わた 木綿綿【名】もめん(木綿)㊁

もめる 揉める【動下一自】『もむ(揉む)の受動形「揉まる」の口語なる「揉まれる」の約』㊀揉まれて、皺寄り又は柔かになること。㊁爭起る。葛藤生ず。㊂おちつかず。穩かならず。安定せず。いらだつ。㊃物を與ふ。おごる。色道大鑑「もめる。金銀の沙汰なり」物をつかふ貌なり」

もも 股【名】脚の上方、腰に連接する部分。和名「髀、毛毛」

股の附根(ツケネ)【句】股の、腰部と連接する部分、即ち鼠蹊骨の直前下。

股を割きて、腹に充す【句】『貞觀政要に「若損二百姓一以奉二其身一、猶二割股以啖一腹、腹飽而身斃」とあるに本づく』自己の利益を謀りて、却りて、自ら斃るる譬。〔諺語〕「腹を剖きて珠を藏む」參照。

もも 桃【名】㊀〔植〕薔薇(ライバ)科に屬する落葉喬木。我國、各地に栽培し、高さ一丈餘に達す。葉は、互生し、披針形にして、鋸齒あり。四月頃、五瓣の花を開き、花梗短く、色は淡紅を普通とすれども、緋白又は紅白相交れる變種もあり。核果は美味なり。支那北部の山地に自生する山桃(ヤマモモ)は、この植物の原種なるべしといふ。栽培上の品種に、源平桃・柚桃(モモバイ)・壽星桃(ジュセイトウ)・水蜜桃(スイミツトウ)などあり。みきふるぐ

さ。みちとせぐさ。みちよぐさ。記「その坂本なる桃の子(し)を、三箇(みつ)取りて待ち擊ちたまひしかば」 ㊁實。果實。〔方言〕 催馬樂人綾「今世には、田舍にて、桃といふことの弘まりて、綿のもも、瓜のも、梨のもも、栗のももとやうに云ひて、凡ての菓子(くだもの)をももとおぼえたる郷(さと)もあれば」 ㊂襲(かさね)の色目の一。表は紅、裏は紅梅、又は、表は白、裏は紅。一説に、表は薄紅、中倍(なか)は白、裏は萌黄。三月頃用ふ。 ㊃紋所の一。桃に象(かた)りたるもの。三桃(みつもも)・割桃(わりもも)などの種類あり。

桃・栗三年、柿八年【句】桃と栗とは、芽生(めば)の時より、三年を經れば、實を結び、柿は八年を要す。〔諺語〕 後萬載集「老子。 桃栗は三年、柿は八年の中に、李は八十とせの春」

桃・栗三年、柿八年、柚(ゆず)は九年で生(な)りかゝる【句】前條のに、柚の結實の年數を加へていふ語。〔諺語〕

桃・栗三年、柿八年、柚(ゆず)は九年で花盛【句】前條に同じ。〔諺語〕

桃の賀【句】桃の花の季節に行ふ賀の祝。「紅葉の賀」參照。 鬼貫「三日、桃の賀のもとにて、よろこべる事のありける物語など聞きて」

桃の實【句】桃の實の如き形の冑。 家忠日記追加「黑絲の鎧に、桃の冑を著し」

桃の盃【句】桃の節句に用ふる酒盃。 篤尹千首「さらば又やよひの三日の月の影はやさし添へよ桃のさかづき」

桃の酒【句】桃の節句に、百病を除く効ありとて、桃の花を漬して飲む酒。 日本永代藏「三月の節句を、心安く桃の酒を祝へり」

桃の節句【句】三月三日の節句上巳(じょうみ)。 碁太平記白石噺「桃の節句に、菖蒲(あやめ)葺く。燈籠、二度の月」

桃の弓【句】古、桃の木にて造り、追儺(ついな)の時、葦の矢と共に、鬼を射るに用ひし弓。

桃を吹く【句】木棉の實熟して、四つに裂けて、中より綿花溢れ出づ。

もも

三千歳(みちとせ)に生(な)るてふ桃【句】はんたう(蟠桃)を見よ。 拾遺「三千とせになるてふ桃のことしより花咲く春になりにけるかな」 蜻蛉「三千とせになるてふ桃の花咲けり折りてかざさん君がたぐひに」

物言はぬ桃【句】「桃季、物言はざれども、下、おのづから蹊を成す」を見よ。よものあか大鳥祭「物言はぬ桃も、言(とい)問ひかはす風情ありて」

もも 百【數】㊀十の十倍。ひやく。 紀「えみしを一人(ひとり)ももな人人はいへどもたむかひもせず」 ㊁數の多きこと。あまた。ももの。 萬葉「ももに千(ち)に人はいふとも月草のうつし心をわが持ためやも」 鶏鶏合戰「百の續松(つがい)をもちて、内より鳥を追出し」

百の官(つかさ)【句】ひやくくわん(百官)に同じ。 紀「百僚、モモノツカサ」

百の官人(つかさびと)【句】前條に同じ。 祝詞廣瀬大忌祭「王(おほきみ)たち、臣(おみ)たち、百の官人たち」

もも-いろ 桃色【名】『桃の花は、普通、この色に咲くよりいふ』うすあかき色。淡紅色。

もも-いろ 百色【名】㊀多くの種類。 ㊁『高田與清の説に、百尋(ももひろ)の轉訛にて、聲を長く引きて囀るを形容していへるなるべしといふ』鶯の鳴聲にいふ語。 夫木「日めもすにおのが鳴きをる聲のあやはげにもも色になりもしぬらん」 壒嚢「百色と今や鳴くらん鶯もここのかへりの君が春經て」

もも-いろ 股いろ【名】馬を歩ましめぬために、前脚の後部に結び附くる棒。

もも-いろ-いんこ 桃色鸚哥【名】〔動〕鸚哥類の一種。體長約一尺、上面は灰色、頸より眼下部以下の下面より尾筒にかけて、濃紅色なるもの。べにいんこ。

もも-いろ-おしろい 桃色白粉【名】べに(紅)㊁に同じ。

もも-いろ-さんご 桃色珊瑚【名】〔動〕軸の色、中央は白色、周圍は淡紅にして美しく、最も裝飾に適する珊瑚。我國にては、九州の西南海及び四國・紀伊の南海に產し、又、地中海に產するもの、布哇(ハワイ)に產するもの等ありて、種類は同一ならず。

もも-いろ-どり 百色鳥【名】〔動〕うぐひす(鶯)㊁の異稱。 教訓抄「春ごとに百色鳥の囀りてことし八千代と舞ひぞかなづる」

もも-か 百日【名】㊀百の日數。十日の十倍。 ㊁小兒の生後百日目の日、及びその日の祝。中古以來、宮中及び貴族の間に行はれ、その儀、ほぼ五十日(いか)と同じく、又、五十日百日(いかもも)とて、兩度の祝を、兩者の中間なる適宜の日に行ひしこともあり。 河海抄「天暦四年八月二十五日、儲君降誕之後、當二百日一依二世俗之例一、供二御餅一」 續古今「後朱雀院生れたまひて、百日の夜、詠ませたまひける」

百日の注連(しめ)【句】百日齋(ももかいみ)の時に引延(ひきの)ばふる注連繩。 爲忠百首「わが戀はきねがいもひに引き添ふる百日のしめの重なりぞゆく」

百日の餅(ももかもち)【句】百日(かもも)㊁の時に、五十日(いか)の餅と同樣に用ひし餅。 山槐記「今日、二女食二百日餅一」

百日行く【句】百日かかりて行く。往くに、百日を要す。 萬葉「ももかしも行かぬ松浦路(まつらぢ)今日往きて明日は來なむを何かさやれる」

もも-か-いもひ 百日齋【名】〔動〕ももんか(鼯鼠)に同じ。

もも-か-ねずみ 鼯鼠【名】〔動〕ももんか(鼯鼠)に同じ。

もも-かがり もも簪【名】『ももは百の義ならんといふ』いなづま。電光。〔古語〕 祕藏抄「秋の田の穗なみかがやくももかがり束(たば)の間もただ君めかれせし。ももかがりとは、稻妻なり」

もも-かは 桃皮【名】㊀楊梅(やまもも)の樹皮。多く土佐國より產し、漁網の染料に用ひ、又は、粉末として、火傷の塗藥とす。しぶき。楊梅皮。 ㊁(植)やまもも(楊梅)に同じ。

ももかは 百川【名】〔人〕ふぢはらももかは(藤原百川)を見よ。

ももかは-ざん 百川算【名】かめのぞく(龜井算)に同じ。

もも-からみ 百絡【名】網などの、幾筋もからみてあること。 萬代「宮木引くねりその綱の百からみ弱るけしきも見えぬ君かな」

もも-き 鳥臟・腫【名】もも(鳥臟)に同じ。 名義抄「腫、モモキ・モムキ・鳥ノモムキ」

もも-ぎ-いり 鳥臟煮・腫煎【名】食品の一。雁のももきの内の皮をすきて、細く割り、薄びろに作り、酒と鹽とを入れて、よく和(あ)へ、皮煎(かわい)と同樣に、石鍋にて煎り、鹽を多く入れて、常の皮煎よりも煎りすごし、取り上ぐる時、麴の酢を搾りかくるもの。

もも-くさ 百種【名】あまたの種類。 拾遺「百くさに八十くさ添へて賜ひてし乳房のむくいけふぞわがする」

もも-ぐさ 百草【名】〔植〕まつ(松)㊁の異稱。

もも-くばり-の 百配野【名】〔地〕美濃國不破郡關ゲ原の正東にある古蹟。慶長五年、德川家康の、陣を、赤坂の岡山(今、勝山)より移して大勝せし所。

もも-くま 百隈【名】多くの隈。やそくま。 萬葉「ももくまの道は來にしを又更に八十島過ぎて別れか行かむ」

もも-け 鳥臟・腫【名】鳥の五臟。むむき。ももき。

もも-こ-の-いけ 百子池【名】あまのがは(天川)の異稱。一説に、星祭に、水を湛へて手向くる、百箇の盥なりと。

もも-こ-ひめ 百子姫【名】棚機七姫の一。

もも-こ-ゑ-どり 百聲鳥【名】〔動〕ほととぎす(時鳥)に同じ。

もも-さか 百尺・百積【名】一尺(かねさし)の百倍。〔古語〕 萬葉「百積の船かづき入るるやうらさし母は問ふともその名は告(の)らじ」(一説に、百積は、「ももつみ」と訓みて、多くの物を積むをいふと)

もも-さへづり 百囀【名】數多く囀ること。幾度となく囀ること。 堀文「つれづれを何にかけてか慰まん百さへづりの鳥無かりせば」

ももしき 百磯城・百敷【名】『次條の枕詞の轉義』皇居。内裡。紀「内裏、モモシキ」 增鏡「百敷の御垣の櫻咲きにけりよろづ代までの春のかざしに」

ももしきの 百敷の・百磯城の【枕】皇居を形容して、多くの石にて、堅固に築き上げたる城(キ)の意なるより、**おほみや**(大宮)にかけていふ。一説に、百敷は、百官の座席を敷く義なるよりいふと。或は、敷は、その地、占領の義か。記「ももしきの大宮人は鵠鳥領巾(ヒレ)取り掛けて」 萬葉「百磯城の大宮どころ見れば悲しも」

ももしぬの 百小竹の【枕】多くの小竹(ササ)の生ひてある義にて、**みぬ**(眞野)にかけていふ。一説には、多くのしなえたる草にて、蓑を作る意より、蓑と音相近きみぬにかけたるなりと。萬葉「百小竹のみぬの大君西のうまや立てて飼ふ駒」

ももしね 百小竹【枕】前條に同じ。萬葉「百しね三野(ミノ)の國の高きたのくくりの宮に」

ももしゆ 桃酒【名】桃の實より製した「る酒。

ももじり 桃尻【名】桃の實の、尖りて、据ゑ置くこと難きに譬へていふ。『馬に乘るに、拙くして、尻の、鞍の上に安定せぬこと。平家六度まで、御落馬あり。世の人、桃尻とぞ申しける」 徒然「導師に請ひ(ウ)ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻にて落ちなんは、心うかるべし」

「に同じ。

ももじろ 股白【名】〔動〕**だいさぎ**(大鷺)

ももじろかうもり 股白蝙蝠【名】〔動〕我國に產する蝙蝠中の一種。大さ中位にして、兩脚の内股に、白毛のあるもの。

ももすずめ 桃雀【名】〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲。天蛾の一種。大形にして、翅は、開けば三寸に近く、體と前翅とは枯葉色にして、多くの褐色の條帶あり。後翅は桃紅色にして、外緣は褐色。幼蟲は大形の芋蟲にして、黄綠色にして、腹部には、七條の黄色なる斜條あり。多くは桃にたかり、老熟後、地中に入りて、蛹(サナギ)となる。六月より十月までに發生し、蛾は五月より八月まで生存す。一年に二回發生するものの如し。

ももせりう 百瀨流【名】和樣書道の一派。御家流に出づ。百瀨耕元を祖とす。

ももぞの 桃園【名】桃の木を栽ゑ育ててある園。たうゑん。

ももぞの 桃園【名】古、京都の一條大宮、世尊寺の南にありし、藤原保光の住邸。後、藤原行成の所領に歸す。一説に、藤原師氏の住邸なりと。

ももぞのうだいじん 桃園右大臣【名】〔人〕**ふぢはらつぎなは**(藤原繼繩)に同じ。

ももぞのてんわう 桃園天皇【名】〔人〕第百十六代の天皇。御名は遐仁(トヒト)。櫻町天皇の皇長子。御母は開明門院藤原定子。在位十六年(紀元二四〇七年—二四二二年)。寶曆十二年崩ず。壽二十二。

ももぞのの-みや 桃園宮【名】〔人〕後西(ゴサイ)天皇の御即位以前の稱號。

ももぞめ 桃染【名】桃色に染むること。

ももだいふ 百太夫【名】〔人〕**やまもとかねたいふ**(山本兼太夫)を見よ。

ももたがみ 百田紙【名】昔、肥後國より產せし和紙。

ももだち 股立【名】袴の左右兩側の上部にて、縫合はせず、明けてある處。今普「袴の股立を引きあげて」

股立を取る【句】股立をつまみ上げて、帶又は袴の紐に插む。

ももだっちやう 股脫腸【名】〔醫〕脫腸の一。股の附根に發するもの。比較的、女子に多し。

ももたに 百谷【名】次條を見よ。

百谷の主【句】「百谷(ヒヤク)の王」の直譯。夫本「ももの谷のぬしといふなる海なれば水の心のそむく世ぞなき」

ももたび 百度【副】一一度の百倍。二多くの度數。あまたたび。

百度鍊りたる銅【句】「百鍊(ヒヤク)の鏡」を見よ。續世說「百たび鍊りたるあかがねなりとて、いにしへをかがみ、今をかがみるなどいふ事にてあるに」

ももたらう 桃太郎【名】我國の昔の御伽話にて、桃の實の中より生れ、鬼ヶ島を征伐して、寶物を獲て歸れりといふもの。

ももたらず 百不足【枕】百に滿たぬ義より、八十(ヤソ)・五十(イ)などと同音なる(**やそほのき**(やそはの木)**やまだ**(山田)**いかだ**(筏)**いつき**(齋槻)などにかけていふ。記「僕(ア)は百足らず八十坰手(ヤソカ)に隱(カク)りて」 萬葉「百足らず山田の道を」 萬葉「持越せる眞木のつま手を百足らず筏に作り」 萬葉「百足らずいつきが枝に」

ももたりうえい 桃田柳榮【名】〔人〕畫家。名は守光。狩野探幽に學び、世に久隅(クス)守景・鶴澤探山・加藤遠澤と共に、その四天王と稱せられ、中にも、守景と共に最も傑出す。幾香齋・珪澤軒等の號あり。水戸家に仕へたりともいふ。苦學の結果、病を得て、元祿十一年正月歿す。

ももたる 百足る【動四自】多く揃ふ。百千(チモモ)足る。「古語」記「ももたる槻(ツキ)が枝は上枝(エホツ)は天(アメ)をおへり中つ枝は東(アヅマ)をおへり」

ももち 百千・百箇【數】『ち(箇)は接尾語。千は假借の字』**もも**(百)に同じ。月齡集「曉の寢ざめに過ぐる時雨こそももちの人の袖ぬらしけれ」

ももちいろ 百千色【名】多くの色。さまざまの色。丹波與作「ああ、どうせうと、百千色の憂き涙」

ももちたる 百千足る・百箇足る【動四自】**もたる**(百足る)に同じ。「古語」記「ちばの葛野(カヅノ)を見れば百千足る家庭(ハナ)も見ゆ國の秀(ホ)も見ゆ」

ももちどり 百千鳥【名】一**ももどり**(百鳥)に同じ。萬葉「わが門の榎(エ)の實もり食む百千鳥千鳥は來れど君は來まさぬ」 二〔動〕『**もういろどり**(百色鳥)を、前項の語と誤り混ぜしものといふ』**うぐひす**(鶯)【一】に同じ。拾愚「ももち千鳥こづたふ竹のよのほども共にふみ見しふしぞ嬉しき」 三〔植〕**かりがねさう**(雁草)に同じ。四〔植〕**きけまん**(黃蓮)に同じ。

ももちどりむすめだうじやうじ 百千鳥娘道成寺【名】江戸長唄の所作事の一、道成寺緣起の傳說に基づき、箱根の鐘供養に作りかへたるもの。寛保四年七月、中村座にての初演に係り、俗に「さなきだ道成寺」と呼びて、今も長唄として傳はれり。この百千鳥娘道成寺は娘道成寺の初、天保十一年十一月市村座初演の道成寺二人鐘入は、二人道成寺の初なり。花信風折(カザヲレ)烏帽子。

ももづたふ 百傳ふ【枕】一多くの地を傳ひ行く意にて、**わたる**(渡る)・**つ**(津)と同音なる地名にかけ、又、遠く行く時に用ひし、驛路の鈴の意より、**ぬて**(鐸)にかけていふ。記「この蟹いやづくの蟹百傳ふ角鹿(ガス)の蟹」 同「百傳ふぬて搖(ユ)くも」 同「百傳ふ度逢縣(ワタラヒ)」 二百に數へ傳ふる意より、五十(イ)と同音の地名**いはれ**(磐余)にかけていふ。萬葉「百傳ふいはれの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲がくりせむ」

ももづたふ 百傳ふ【枕】一多くの地を傳ひ行く意にて、**わたる**(渡る)・**つ**(津)と同音なる地名にかけ、又、遠く行く時に用ひし、驛路の鈴の意より、**ぬて**(鐸)にかけていふ。記「この蟹いやづくの蟹百傳ふ角鹿(ガス)の蟹」 同「百傳ふぬて搖(ユ)くも」 同「百傳ふ度逢縣(ワタラヒ)」 二百に數へ傳ふる意より、五十(イ)と同音の地名**いはれ**(磐余)にかけていふ。萬葉「百傳ふいはれの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲がくりせむ」

ももづつり 百綴【名】『晉書の隱逸傳に「董威在二洛陽一隱二居白社一得二殘絮敗繪一以自覆、名二百結衣一」とある百結の直譯』多くつぎ合はせてあること、又その衣。ぼろの著物。うづらどろも。百つづり、顏子が一ひさご」

ももづてのの 百傳の【枕】**ももづたふ**(百傳ふ)の誤讀より出でたる語。夫本「くちなしにいかが匂はんももづてのいはれの池の山吹の花」

ももつみ 百積【名】**ももさか**(百尺)を見よ。

ももて 百手【名】一多くの手だて。百方。雪女五枚羽子板「百手を千手(チテ)と、手を碎き」 二『矢は、二本を一手(ヒテ)とするよりいふ』射藝にて、二百本の矢を、百回に射る方法。盛衰記「射的の上手にて、百手の矢を以て、的を洲濱形に射成しければ」 庭訓往來「百手達者、究竟之上手一兩輩、可レ令二同道一也」 「る的。大的を用ふ。

ももてまと 百手的【名】百手二に用ふ。

ももてゑ 百手會【名】百手二を行ふ會。

ももど 百度【名】『勤公の者、一日百度と雖も食ふべしとの義にていふとぞ』古、公事(クジ)の時、大炊寮(オホヒ)より供せし飯。江次第「依レ不レ進二百度一、止二宴坐一例」

百度の座【句】古・王卿たちの、百度を食ふために著せし座。汗次第「王卿以下、入レ自二東西壁外砌一著二百度座一」

ももーとせ 百歳・百年【名】㊀年數の百なること。㊁年數の甚だ多きこと。萬葉「百年に老舌(ヲイ)出でてよよむとも我は厭はじ戀は増すとも」

ももーとり 百鳥【名】多くの鳥。ももちどり。萬葉「梅の花今さかりなりももとりの聲のこほしき春來たるらし」

ももーとり 百取【名】次條を見よ。

百取の机【句】『つくゑ(机)』㊀を見よ。**とり**(取)は、それらの物を一一取り持つ意』多くの飲食物を載せ並べたる臺。【古語】紀「貯二之百机一、而饗レ之、……モモトリノツクエ……」

百取の机代(シロ)の物【句】臺に多く載せ並べたる、多くの飲食物。【古語】記「百取の机代の物を持たしめて奉出(マツ)しき」

ももーなが 股長【名】足を伸ばしてあること。記「玉手さしまき股長に寢(イ)はなさむを」

ももーぬき 股貫【名】次條の略。

ももぬきーぐつ 股貫沓【名】皮にて作りたる、一種の深沓。股まで入るやうに作れるものかとも、股引の類なりともいふ。東鑑「以二股貫沓、差二長八尺串一」

ももーのーしんくひーむし 桃心食蟲【名】【動】蛾の幼蟲。一種。淡黄赤色の大さ七分内外の裸蟲。頭部は黒褐色、體の各節に、疣狀の小突起ありて、これより毛を生ず。一年二回發生し、第一回は桃の實に穿孔して食害し、第二回は梨・栗を食害し、老熟すれば、樹皮の間に粗繭を營みて、蛹(サナ)となり、越年の後、羽化して、蛾となる。蛾の翅は、開けば八九分、黄色にして、前後翅共に黑點撒布す。

ももーのーちよっきりーむし 桃のちよっきり蟲【名】【動】甲蟲類に屬する昆蟲。象鼻蟲の一種にして、成蟲は大さ三四分、吻長く、體には小點刻多く、赤紫色にして、黄澤あり。粗毛生じ、四月下旬より六月上旬にかけて發生し、桃・梨・枇杷等の果實に、長吻にて穿孔し、一粒づつ卵子を産みつく。幼蟲はこれを食して生長し、地中に入りて、蛹となり、翌春羽化す。

ももーのはなぞめ 桃花染【名】桃色に染むること、又その染色の布帛。水篋「その妻は、桃の花ぞめの裳をなん著たるとかや」 ―同じ。

ももーのはーゆ 桃葉湯【名】**ももゆ**(桃湯)に同じ。

ももーのねーなほつね 桃井直常【名】【人】武將。足利義康の裔。高祖父義胤・上野國桃井に居り、因りて氏とす。右馬權頭・刑部大輔・彈正大弼を經て、駿河守に任じ、後、播磨守に遷る。足利尊氏に從ひ、延元元年、北畠顯家の兵と戰ひて、箱根及び青野原に敗れ、磐若坂に勝ちたれども、尊氏これを賞せざりしより、正平五年、尊氏・直義(ヨシ)兄弟の隙あるや、直義に屬し、十七年以降、南朝に屬し、信濃・越中に兵を擧げしが、又、敗れて、遂に行ぐ所を知らず。

ももーはがき 百羽搔【名】鳴(モ)の、幾度も羽搔(ハネ)をすること。古今「曉の鳴のはねがき百はがき君が來ぬ夜はわれぞ數書く」

ももーはばき 股脛巾【名】**ももひき**(股引)㊁に同じ。【鎌倉時代・室町時代の語】宗吾大草紙「股はばき脚半は」

ももーばやし 桃林【名】桃の木を多く植ゑてある所。たうりん。

ももーひき 股引【名】㊀**さるももひき**(猿股引)の略。㊁左右の足に、膚に直接にはきて、上部は腰部まで達するやうにせる筒狀の服。

ももひきーがけ 桃引掛【名】股引をはきたる身形(ナリ)。俗曲(綾馬獅子)「大つごもりも、元日も、股引がけの旅神樂(カグラ)、我と浮れる道草に、獅子の眞似して來りける」

ももひろーどり 百尋鳥【名】【動】**ももいろざり**(百色鳥)を見よ。

ももーぶね 百船【名】多の船。

ももーへ 百重【名】多く重なりてあること。萬葉「み熊野の浦の濱木綿(ユフ)百重なす心は思(モ)へどただに逢はぬかも」

ももへーがはら 百重原【名】【地】河内國にありし原。夫木「交野(カタ)なる百重が原を東の間も戀ひずやあらん芝の都を」

ももへーばり 百重張【名】陣笠の、下地を、竹にて、網代(アジ)に組み、その上に、紙を幾重にも張りて、漆を塗りしもの。

ももへーやま 百重山【名】多く重なり續ける山。いほへやま。

ももーへるにや 股ヘルニヤ【名】【醫】**ももだっちやう**(股脱腸)に同じ。

ももーほほづき 桃酸漿【名】【動】**あかこ**(赤子)に同じ。

ももーまゆ 桃眉【名】ばうばう眉の約轉ならんかとも、眉書(ガキ)をするに、桃の實の如く、二つ額に置くをいふかともいふ。

ももーむささび 鼯鼠【名】【動】**ももんが**(鼯鼠)に同じ。著物をかぶり、臂を張りて、恰も、ももんがの毛皮を擴げたる如きさまして、人をおどしなどすること。【德川時代の語】

ももーむすび 百結【名】「鶉衣(ウヅラモノ)の百結」を見よ。

ももんが 鼯鼠【名】【動】齧齒類に屬する獸。深山の樹林に棲み、前肢と後肢との間に毛皮連接して、よく樹上を飛行すること、鼯鼠(ムササビ)に酷似すれども、それよりも著しく小し。體長七八寸、尾の長さ約四寸に過ぎず、又、背面は灰褐色、腹面は白ばみ、額より頸の側面に達する白色部なし。ももが。もみむささび。のぶすま。ばんどり。 ―じ。

ももんぐわあ 鼯鼠【名】【動】前條に同じ。【德川時代の語】㊁猪の肉。浮世床「猪(イノシシ)を百目買ってやる筈だが」㊂他人を罵りていふ語。げだもの。八笑人「ああ分らねえももんじいは無(ネ)え」

ももんじい 【名】㊀**ももんが**(鼯鼠)㊁に同じ。

ももや 百矢【名】㊀百筋の矢。太平記「百歩に柳の葉を射て、百矢を外さぬ程の射手ありけるが」㊁用意の料として、矢櫃に百筋づつ入れおく矢なりといふ。太平記「百矢の中より、只二筋抜きて、弓に取り副へ、……。その後、百矢二腰取り寄せて」

ももーやから 百族【名】あきんど。商人。【古語】和名「百族、毛毛夜加良」

ももやそーがみ 百八十神【名】多くの神。やそかみ。記「僕(ア)が子等(モロ)百八十神は」

ももやそーべ 百八十部【名】**ともものを**(伴緒)を見よ。

ももーやま 桃山【名】【地】**ふしみやま**(伏見山)を見よ。

ももやま 桃山【名】【地】㊀山城國紀伊郡堀内(ホリウチ)村にある、鐵道奈良線の停車場。㊁大阪・天王寺の間にある停車場。

桃山の狐【句】山城國伏見の遊廓を擅木(モクジ)町といひ、桃山も伏見に在るより、その山の狐と、その遊廓の遊女とを言ひかけたるなるべし。膝栗毛「已(ヤイ)あ、夕べ、伏見から船に乘って來たのだはな。何言はんすやら、桃山の狐がなつまれたもんぢやあろぞい」

ももやまーどてん 桃山御殿【名】桃山城中の殿舍の俗稱。

ももやまーじだい 桃山時代【名】**さとみじだい**(豐臣時代)に同じ。

ももやまーしやう 桃山城【名】『德川時代の中期に、城址に桃を植ゑしより起れる稱呼』**ふしみじやう**(伏見城)を見よ。

ももーゆ 桃湯【名】夏の土用に、汗疹(アセ)を避け又治する効ありとて、桃の葉を湯に漬して浴すること、又、その湯。ものはゆ。浮世風呂「六日の菖蒲湯、流行に後れ、殘暑の桃湯、あと篇なるべし」

ももよ 百夜【名】㊀百日の間の夜。千載「思ひきや榻(デン)のはしがき書きつめて百夜も同じまろ寢せんとは」㊁多くの夜。百夜の榻の端書(ハシガキ)【句】「榻(デン)の端書」を見よ。太平記「御文をだに書き絶えて、斯くとも聞えねば、百夜の榻の端書、今は我や數書くまじと打佗びて」

ももよ 百世【名】多くの世。限なく多き年月。百代。萬葉「百世しも千世しも生けてあらめやもわが思ふ妹をおきて嘆かむ」

ももよぐさ 百夜草【名】〔植〕一きく(菊)

ももよぐさ 百夜草【名】〔植〕一に同じ。萬葉「父母が殿のしりへのもも草百代出でませわが來たるまで」藏玉集「百夜草。菊。名にしおふ翁が庭の百夜ぐさ花咲きてこそ白妙になれ」二つゆぐさ(露草)に同じ。

ももよせ 股寄【名】あまおほひ(雨覆)二に同じ。今昔「太刀の股寄」曾我「股寄白く含みたる鞘を、前垂にさすままに」

ももわれ 桃われ【名】女の髪の結ひ方の一。銀杏返に似たる髷形にて、根懸には、鹿の子絞の絹片をあしらふ十四五歳頃の少女結ふ。

(れわもも)

もや 靄靄【名】『もやもやとせる物の義』霧の一層深きもの。俳諧新選(智先)「蒙こめて明け惑ふ夜や鹿の聲」

もや 【名】『燃す物の義』しば(柴)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

もや 【名】もやひ(舫)に同じ。藻鹽草「むやひ、……もやともいふなり。同じ事と」

もや 母屋【名】『おもや(母屋)の略とも、むや(身屋)の轉ともいふ』一寢殿造(シンデンヅクリ)にて、寢殿又は對(ツイ)の屋中央の間(マ)、即廂より中の部分。〔身屋・身舍〕榮花「東の對の母屋」二家の簷より内の部分。〔大工の語〕三一構の家の内、物置・長屋ならずして、住居に充つる主なる建物。おもや。むや。母屋の大饗【句】だいきやう(大饗)の條下を見よ。

もや 喪屋【名】本葬を營むまでの間、屍を假りに歛めおく屋。尊貴の人のには、殯宮又は「あらきの宮」「あがりの宮」と呼ぶ。記「天若日子(アヂカマネヒコ)が胡床(アグ)に寢たる高胸坂(タカムネザカ)に中りて、死(カ)せにき。……。乃ち其處に喪屋を作りて」

もや 【助】一感嘆の助辭もとやとを重ねて、感嘆の意を強めたる語。もよ。萬葉「吾はもや安見兒(ヤスミコ)得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり」二二以上の事物の内、何れかと疑ひあやぶむ語。

もやう 模樣【名】一ありさま。かたち。樣子。形式。二織物・染物・彫物などの表面に、裝飾のために、藝術的意匠によりてあらはしたる文(ヤ)。紋樣。三方法を思ひめぐらすこと。工夫。狂言(花蓑)「何とぞ、長閑なる、折は、ちと趣向をもやう致したらばよからうと存ずるところに」四もよひ(催)三に同じ。「雨(ア)模樣の空あひ」五てほん。軌範。太平記「禪宗の模樣とする處は、宋朝の行儀、貴ぶ處は、祖師の行迹なり」

もやうがへ 模樣替【名】事の順序・方法仕組などを變更すること。

もやうぐわ 模樣畫【名】風景・動植物などを、模樣二として適するやうに、形を崩して書く畫。

もやうづくし 模樣盡【名】さまざまの模樣を並ぶること、又、さまざまの模樣を並べてあるもの。傾城島原蛙合戰「縫箔・織物の模樣づくし、手を盡し」

もやくや 【名】もやもや一に同じ。千兩曦「岩川が、胸のもやくや、さっぱりと、わが家へ歸る戻足」

もやくや 【貌】もやもや三に同じ。

もやくる 【動四自】落ちつかず。ごたごたと騷ぐ。もやつく。曾根崎心中「後(ア)の月からもやくり出し、押して祝言させうとある」今宮心中「氣ももやくって」

もやし 萌【名】一水に浸したる穀類、大根の種、紫蘇の實などを、筵に捲き包み、又は軟化室に入れて、溫度を與へ、發芽せしめて、蔬菜として用ひるもの。籾米のは苗代(ナワシロ)の種に用ひ、大豆のは食料、麥のは飴の原料に供す。なんくわはふ(軟化法)參照。和名「蘖、與禰乃毛夜之、牙米也」二たねかうぢ(種麹)に同じ。三ばくが(麥芽)に同じ。

もやし-まめ 萌豆【名】萌して生長せしめたる豆。そやしまめ。

もやす 燃す【動四他】燃えしむ。もす。たく。竹取「火を附けてもやすべき由、仰せたまふ」

もやす 萌す【動四他】萌(ヒキ)を造る。六帖「春雨の降るにおもひの消えなくていとどなげきの芽をもやすらん」

もやつき 【名】一思ひ煩ふこと。不平。煩悶。もやくや。二食もたれなどにて、胸ぐあひの惡きこと。三ごたつき。もめごと。紛擾。淀鯉出世灘鑑「吾妻が客を切ったと、町のもやつき」

もやつく 【動四自】一思ひ煩ふ。娥歌加留多「嬉し、恥かし、氣はもやつく」二食もたれぢどにて、胸あぐひよからず。三紛擾起る。ごたつく。もめる。

もやひ 舫【名】一船と船とを繫ぐこと。むやひ。太平記「流れ淀みたる浪に、筏の舫を押し切られて」同「もやひを入れて、上にかぶ木を敷きならべたれば」二二人以上の人の、寄り合ひ、會計を共同にして、事を營むこと。〔催合・最合〕

もやひ-かかり 舫繫【名】多くの船の内、一艘に錨を入れて、その船に、次の一艘をもやひ、それに、又、次の一艘をもやひ、順序に斯くすること。

もやひ-ぐひ 舫材【名】船を繫ぐために、河中に立てたる杭。かせ。

もやひ-じよたい 舫世帶・催合世帶・最合世帶【名】數人又は數家族共同して、一の世帶を營むこと。もちあひ世帶。一茶「鰹汁(カツオ)や最合世帶の總いびき」

もやひ-づな 舫綱【名】船を繫ぐ綱。やりて。てやす。

もやひ-つめ 舫詰【名】多くの船の集まり合ひてあること。

もやひ-ぶね 舫船【名】一互に繫ぎ合はせて泊りてある小船。二碇泊せる船。

もやふ 舫ふ【動四自】一船と船とを繫ぐ。むやふ。夫木「流れやらでつたの入江にまく水は船をぞもやふ五月雨の頃」二二人以上の人、寄り合ひ、會計を共同にして、事を營む。「最合ふ・催合ふ」

もや-もや 【名】一思ひ煩ふこと。心配。もやくや。もやつき。二情慾の燃え立つこと。戀慕の心。松風村雨東帰鑒「島渡したもやもやが、互に深うなって來て」

もやもや 便【名】穩かに安らかなること。快く安らかなること。〔古語〕紀「不便、モヤモヤナラズ」同「不便、モヤモヤモアラズ」

もや-もや 【貌】一分明ならぬさま。朦朧。濛濛。二繁く生ひてあるさま。三思ひ亂るるさま。心の閉ぢ塞ぐさま。もやくや。むやむや。四情慾の燃え立つさま。一代女「もやもやと上氣して」

もやもや-の-せぎ もやもやの關【名】うやむやのせき(有邪無邪關)に同じ。

もゆ 萌ゆ【動下二自】芽出づ。萌え出づ。きざす。めぐむ。發芽す。萌發す。

もゆ 燃ゆ【動下二自】一火附きて、焰立つ。燃燒す。二火の燃ゆるが如き狀態をなす。萬葉「蜻火(カギロヒ)のもゆる荒野(ノ)に」三赤き色の、極めて鮮かに見ゆる形容。四思ひ亂れて、心たかぶる。情熱おこり立つ。こがる。もえこがる。古今「夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」

もゆる 燃ゆる土【句】石炭・泥炭など。〔古語〕紀「越國獻三燃土與二燃水一、コシノクニヨリ、モエルツチトモエルミヅトヲタテマツリキ」

もゆる 燃ゆる水【句】石油・石臘油など。くさうづ。〔古語〕前條參照。

もゆら 【貌】『もは、接頭語ま(眞)の轉なりといひ、又、下の用例の初の「もゆら」のもは、上の語に附く助辭なりとの說もあり』搖れて音を立つるさま。〔古語〕記「御頸珠(ミクビタマ)の玉の緒、もゆらに取りゆらがして」同「十拳劍(トツカツルギ)を乞ひ度(ワ)して、三段(ミキ)に打ち折りて、瓊音(ヌナ)ももゆらに、天(ア)の眞名井(マナ)に振り滌(スス)ぎて」

もよ 【助】何れも感嘆の助辭なるもとよとを重ねて、その意を強めていふ語。もな。〔古語〕紀「置目(オキ)もよ近江の置目」萬葉「足柄(アシガリ)のあきなの山に引こ船のしり引かしもよここはこがたに」

もよーぎ 萌黄 【名】もえぎ（萌黄）の轉訛。運歩色葉集「萌黄・青黄、モヨギ」

もよぎ もめん 萌黄木綿 【名】もえぎもめん（萌黄木綿）に同じ。

もよひ 催 【名】一 次條一に同じ。 承久記「字治橋邊に押寄せ、軍のもよひせられけり」 二 次條二に同じ。

もよほし 催 【名】一 もよほすこと。うながすこと。もよひ。催促。 二 設け起すこと。くはだて。計畫。 榮花「女院には、待ちつけきこえさせたまひて、いとどしきもよほしなり」 三 さそひ出すこと。又その原因・材料。 增鏡「哀れなる御消息のみ常は奉るを御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり」 四 起らんとすること。きざし。 宇治「辰の時にこそもよほしはありしか。さがるといふ定（ヤウ）、午・未（ヒツジ）の時には渡らんずらんものをと思ひて、待ちゐたるに」

もよほしがほ 催顔 【名】さそひ出す樣子。 源氏「風、いと涼しく吹きて、草村の蟲の聲聲もよほしがほなるも」

もよほしぐさ 催種 【名】さそひ出す原因・材料。 源氏「物思のもよほしぐさなり」

もよほしぜい 催勢 【名】うながし集めたる軍勢。驅り集めたる軍勢。 太平記「今は、末末の源氏、國國の催勢などを向けては敵ふべしともおぼえずとて」 「さす。

もよほす 催す 【動四自】起らんとす。きもよほす 【動四他】一 うながす。せつく。催促。 土佐「船漕げ、日のよきにともよほせば」 二 さそひ出す。いざなふ。 源氏「吹きまよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧の音かな」 三 設け起す。くはだつ。擧行す。

もーより 最寄 【名】極めて近きところ。近所。近邊。附近。むより。

もより-ぶね 最寄船 【名】もよりの船。陸に近く碇泊せる船。 新六「漕ぎかへる三島がくれのもより船帆にばしこふな人知れずのみ」

もよろ-わん 藻寄灣 【名】〔地〕千島國擇捉（ウルフ）島の東北にある灣。水深く、碇泊に適し、北北西より西を經て、南南西に至る諸風に對する、安全なる錨地なり。

もらかす 貰かす 【動四他】『貰はしむる義』貰ひ得るやうにす。 織留「これ落したる人は無きかといへば、……われ落しけるに、もらかしたまへ」

もらす 漏す・洩す 【動四他】一 漏るるやうにす。滴り出づるやうにす。こぼす。 源氏「涙をもらし落しても」 二 祕しおくべき事を、ひそかに他に知らす。漏洩す。 源氏「人にもらさじと思ひたまふれば」 三 誤りて脫せしむ。ぬかす。おとす。脫落せしむ。「一字漏す」

もらとりらむ （英 Moratorium）【名】しはらひいうよ（支拂猶豫）に同じ。

もらひ 貰 【名】一 貰ふこと、又その物。 二 祝儀又は施物として、金錢などを貰ふこと、又その貰ふ金錢など。 三 他の座敷に呼ばれをる藝娼妓を、中途にて退席せしめて、自己の所に來らしむること。 一代男「丸屋方より、尾張のお客樣、先程からお出と、せはしき使重なりぬ。初てなれば、貰もならず、何の因果に、けふの約束はしたぞと」

もらひ-うく 貰受く 【動下二他】貰ひて受け取る。乞ひ受く。

もらひ-ぐひ 貰食 【名】食物を貰ひ受けて食ふこと。

もらひ-ご 貰子 【名】他人の子を貰ひて育つること、又その子。貰息子又は貰娘。とりご。もらひっこ。

もらひ-こじき 貰乞食 【名】やたらに人より物を貰ひたがる人。〔俚語〕

もらひこ-ころし 貰子殺 【名】他人の子を、養育すべき約束の下に金を添へて貰ひ受け、その子を、窃かに殺すこと、又その行爲ある人。

もらひ-さぐ 貰下ぐ 【動下二自】警察署などに拘留せられたる者を任意に出頭辯解して、連れ戻る。

もらひ-さげ 貰下 【名】貰ひ下ぐること。

もらひ-たむ 貰溜む 【動下二他】貰ひて貯ふ。 一代男「朝に貰ひためて、夕に皆になし」

もらひ-だめ 貰溜 【名】貰ひ溜むること、又、貰ひ溜めたる物。 平假名盛衰記「順禮に御報謝で、貰ひ溜の米もあれど」

もらひ-ぢ 貰乳 【名】兒を育つるに、他人の乳を貰ふこと。ちもらひ。 大鏡「夜更けて、貰乳も仕憎いに、嬉しや、嬉しや」

もらひ-ちち 貰乳 【名】前條に同じ。 織留「貰乳の不自由さ」

もらひ-つく 貰附く 【動下二他】屢ば貰ふ。もらひなる。 醒睡笑「その所に貰ひつけたる乞食あり」

もらひ-っこ 貰子 【名】もらひご（貰子）の「音便。

もらひ-っぱなし 貰放 【名】もらひばなし（貰放）の音便。

もらひて 貰手 【名】貰ふ人。 俳諧新選（麻兒）「咲いたほど貰ひ手も無し桃の花」

もらひ-どし 貰年 【名】厄年を避くるために、假に實際より多き年齡となすこと。

もらひ-どり 貰取 【句】もらひばなし（貰放し）に同じ。

もらひ-なき 貰泣 【名】他人の泣くに感動して共に泣くこと。

もらひ-なみだ 貰淚 【名】貰泣の淚。 嫗山姥「諸共に貰淚にくれければ」

もらひ-ばなし 貰放 【名】貰ひたるままにて、返禮をせぬこと。もらひっぱなし。もらひどり。

もらひ-はむ 貰食む 【動四自】もらふ（餬ふ）に同じ。 字鏡「餬、寄食也、毛良比波无」

もらひ-び 貰火 【名】他より燒け來りたる火事の火。類燒。

もらひ-みづ 貰水 【名】他家より水を貰ふこと、又その水。 續近世畸人傳（秋色）「朝顏に釣瓶取られて貰水」

もらひ-むこ 貰聟 【名】一 我娘の聟として、貰ひたる者。 二 能（ノウ）の狂言の一。我娘の、聟の飲酒を嫌ひて逃げ歸り來れるをかくまひおきたるを、聟の尋ね來り、子ゆゑの愛を言ひたてて、連れ歸ることを作れもの。

もらひ-むすこ 貰息子 【名】やうし（養子）に同じ。

もらひ-むすめ 貰娘 【名】やうぢよ（養女）に同じ。

もらひ-もの 貰物 【名】人より貰ひたる物。贈物を、貰ひたる人の方よりいふ語。

もらひ-ゆ 貰湯 【名】一 他家の湯に浴すること。 二 『江戸時代の風習として、市中の錢湯にて、盆・暮卽ち正月の三箇日と七月の十四・十五日とは、湯錢の全部が、三助（サンスケ）の收入となりしよりいふ』盆・暮の錢湯。 浮世風呂「明日、貰湯に入りて、六欲の皮を磨りむき」

もらひ-わらひ 貰笑 【名】他人の笑ふに誘はれて、共に笑ふこと。 世間娘氣質「聟も、あんまりて、貰笑をして」

もらふ 餬ふ 【動四自】他人より食を受く。くちもらふ。寄食す。 下學集「餬、モラフ。寄食也」

もらふ 貰ふ 【動四他】『貰の字は、もと、おぎのる義なるを、轉用せるなり』一 與へらる。贈らる。 二 請ひて、我物とす。乞ひ受く。 三 他の座敷に呼ばれをる藝娼妓を、中途にて退席せしめて、自己の所に來らしむ。 冥途の飛脚「梅川殿は、宵の口、島屋を貰うて去（イ）なれたげな」 四 特に請ひて、又は自然に、他人の補助を受く。（他の動詞の下に、助辭てを隔てて續く） 召波「暖めてもらへば酒をへづりけり」

貰ふ物は夏も小袖 【句】貰ふ物は、何物にても辭退せず。〔諺語〕

もり 守 【名】こもり（子守）の略。おもり。

もり 森・杜 【名】一 『杜は社木の合字』樹木のむらがり生ひてある處。林よりは、樹木の數一層多きもの。 萬葉「妹が家にいくりの森の藤の花今來む春も常斯くし見む」 二 神社の地域に屬して、樹木のむらがり生ひてある處。 萬葉「山科の岩田の杜（モリ）にふみこえば蓋し吾妹（モヲ）にただに逢はむかも」

もり 森 【名】姓氏の一。本姓は清和源氏。源義家の第六子義隆、相摸國森莊に住して、森冠者と號し、第十八世の孫三左衞門尉可成（ヨシナリ）、美濃國可兒（エ）郡金山城に住し、齋藤道三に從ひ、永祿七年、織田信長

に仕ふ。その一子は、長久手に戰死し、その三子は、本能寺の變に戰死せしより、季子忠敬、家督を襲きて、豐臣秀吉に仕へ、羽柴の姓を賜はり、信濃國川中島に封ぜられ、慶長五年、德川家康に從ふ。八年、美作國津山に移封(前封と併せて、十八萬六千五百石)。長一の曾孫長成(ナガ)の時に除封せらる。四〔地〕明治の初年設置の縣の一。**ひだ**(日田)三參照。

もり 銛【名】鯨を刺すに用ふる具。鐵製の鋒に樫などの柄を取り附け、又は全部鐵製とす。我國古來の、手にて投げたれども、西洋式の、銃に裝置して發射す。**やす**(梢)參照。

(り も)

もり 盛【名】盛ること、又盛りたる分量。三〔物を盛るに用ふるよりいふ〕小き土器。三**もりそば**(盛蕎麥)の略。四**こもり**(石盛)の略。

もり 漏・洩・泄【名】雨が、屋根を通して、又はその他の液體が、容器より滴り出づること。

もり 母里【名】〔地〕出雲國能義(ヤ)郡の村。安來(ヤスギ)の南二里半。松江の松平氏の支族の陣屋ありし地。

もり-あがる 盛上る【動四自】盛り上げたるやうに高まる。うづだかくなる。俳諧新選「赤羽」「雪どけの盛上り來る流かな」

もり-あぐ 盛上ぐ【動下二他】もる(盛る)三を強めていふ語。

もり-あげ 盛上【名】水盛(モリ)にて、水平を高くすること。(盛下(サガ)に對して)

もりあげ-さいしき 盛上彩色【名】〔美〕日本畫にて、主として、花鳥畫の或部分に、濃厚なる繪具を高く盛り上ぐる彩色法。狩野派・宗達・光琳等の大和繪諸家、多くこれを用ひ、專ら襖・杉戸・屏風等の繪に應用せり。

もり-いうれい 森有禮【名】〔人〕政治家。鹿兒島の藩士有恕の第四子。夙に、英國に留學し、數年の後歸朝するや、明治維新の創始に際し、徵されて、外交の事務に與り、米國・支那に公使として駐在し、外務大輔となり、又、英國に公使となり、十八年文部大臣となり、大に教育の制度を規畫し、殊に體育に力を用ひ、又、女子教育を奬勵し、二十年五月、子爵を授けられ、二十二年二月十一日、憲法發布の式の當日、官邸に、刺客西野文太郎に要擊せられ、傷きて遂に卒す。年四十三。

もり-いっぽう 森一鳳【名】〔人〕畫家。大阪の人。字は子交、通稱は文平。森徹山の養子。畫法を徹山に受け、忽にして一家の風格を備へ、人物・花鳥を得意とし、幕末に於ける圓山派の一名手たり。明治四年歿す。年七十四。

もりいへ 守家【名】〔人〕備前國島田の刀工。貞永頃の人。備前の刀工中、長光父子と共に三絕の稱あり。二代目守家は、正元・弘安頃の人にて、技、父に似、三代目は、永仁頃の人にて、技はやや劣る。

もり-いる 盛入る【動下二他】物の中に堆く入る。平家「忠盛、藪にいくらもありけるぬかごを、袖にもり入れ」「の略。

もり-うた 守歌【名】こもりうた(子守歌)

もり-おうぐわい 森鷗外【名】〔人〕もりりんたらう(森林太郎)に同じ。

もり-かげ 森蔭【名】森の下かず。

もり-かげ 守景【名】〔人〕くすみもりかげ(久隅守景)を見よ。

もりかげ-したゑ 守景下繪【名】久隅(クスミ)守景が下繪を書きたりといふ九谷燒。

もりかは 森川【名】姓氏の一。本姓は宇多源氏。佐佐木信綱の孫堀部左衞門尉宗綱より出づ。宗綱の第九世の孫宗氏、尾張國比良鄕に移り、織田信秀に仕へ、堀部を堀場と改め、その孫氏俊、母の氏を冒して、森川と改む。永祿八年、德川家康に仕へ、その子重俊、將軍秀忠に仕へて寵あり、奉行となり、西丸に徙り、書院番頭を兼ねしが、十年除封せらる。大阪の役、私かに從軍して、下總國生實(イスミ)一萬石に封ぜられ、その曾孫俊胤、享保元年、若年寄となり、子孫相繼ぎて、明治に至り、華族に列し、子爵を授けらる。

もりかは-きよろく 森川許六【名】〔人〕俳人。近江國彥根の藩士。名は百仲、字は羽官、通稱は五助。無無庵・菊阿佛・琢琢庵・風狂堂・横斜庵等の號あり、又、驛ケ原に別墅五老庵を設けて、五老井と稱す。初、俳諧を北村季吟に學び、中頃、田中常矩の門に入り、遂に、元祿五年、芭蕉に、江戸深川の草庵に謁して、師弟の契を結ぶ。俳文・俳論にも長じ、性倨傲にして、自ら高うし、又、畫を狩野安信に學びて巧に、芭蕉も、畫は、これに師事せり。正德五年歿す。年六十。風俗文選・篇突(ハヤ)・俳諧問答・宇陀法師・一枚起請等著す所多し。

もりかは-ひでかず 森川秀一【名】〔人〕弓術家。通稱は總兵衞。大和流の射術を傳へ、薙髮して、香山觀德軒と稱し、子彥左衞門信一、その術を繼ぎて精達し、有馬周防守に仕へ、美人抄の著あり。

もり-かへ 盛代【名】盛りたる物の無くなりたるによりて、更に盛ること。藝「話の盛代と、お平(ヒラ)の盛代は無い」

もり-かへす 盛返す【動四他】元どほり盛んにす。勢力を恢復す。甲陽軍鑑「この合戰、信玄公の貢(ミツ)なるを、……、諸住豐後・小山田出羽・日向(ヒナタ)大和・今井伊勢守、この四頭を以て盛り返し、敵を三百二十餘射捕り」

もり-き 守木【名】身を防ぎ守るための木か。太平記「安田彈正、走り寄りて、いかなる事にて候ふぞ、大將の腹切る所にては候はぬものをといひて、己が六尺三寸の太刀を守木になし、鎧武者を鎧の上に搔負ひて、橋の上を渡るに、守木の太刀に堰落されて、水に溺るる者、數を知らず」

もり-きく 漏聞く【動四他】もれきく(漏聞く)に同じ。源氏「輕輕しうもてひがめたる事と、人やもり聞かん」

もり-きり 盛切【名】その器に盛りたるだけにて、それ以上は供給せぬこと、又その盛方(カタ)の物。丹波與作「與作といふ奴は、存じの外の大ぐひ、旅籠(ロウ)から、盛り切りから、莨菪食うて、煮竇食うて」

もりきり-おだい 盛切御臺【名】盛切の飯。心中宵庚申「二合半の盛り切りおだい、咽に詰つて、ぎっちぎっち」

もりぐち 守口【名】〔地〕河內國北河內郡の町。淀川に臨み、枚方(ヒラ)町と大阪市との間の驛路に當り、前者よりは三里十二町、後者よりは約二里。京阪電氣鐵道の一驛。淀鯉出世滝鯉「樽の名酒を守口や、佐太(サ)の煮竇を見る事も」

もりぐち-だいこん 守口大根【名】〔植〕大根の一品種。もと河口國守口町附近の特產なれども、現今にては、美濃國稻葉郡島村の產、最も著れ、根は、長さ三四尺、直徑六七分に達し、肉質堅くして、煮食・鹽漬には適せず、漬物・切干などに用ふ。相摸國の秦野(ハダノ)大根も、同一品種に屬す。ほそねだいこん。

もりぐち-づけ 守口漬【名】河內國守口町より出す、その特產なる守口大根の糟漬。但し、現今は、殆ど廢絕す。毛吹草「守口漬の香(カ)の物」

もりくに-しんわう 守邦親王【名】〔人〕鎌倉幕府第九代の將軍。第八代將軍久明親王の長子。延慶元年、將軍に任ぜられ、親王となり、三品に敍せられ、次いで二品に陞敍す。元弘三年五月、執權北條高時、新田義貞に攻められて、鎌倉に亡ぶるや、出家し、八月薨ず。年三十二。

もり-こむ 盛込む【動四他】はかりこむ(量込む)に同じ。

もり-ころす 盛殺す【動四他】一毒藥を調合して、人を殺す。毒殺す。二醫藥の調合を誤りて、病人を死に至らしむ。三毒酒を以て醉はしめて殺す。俗ったへ「利發なる小栗殿も、横山に盛り殺され給ふ」

もり-さげ 盛下【名】水盛(モリ)にて、水平を低くすること。(盛上(モリアガ)に對して)

もりさだ-しんわう 守貞親王【名】〔人〕ごだかくらゐん(後高倉院)に同じ。

もりしげ-ゆげひ 森重靱負【名】〔人〕砲術家。周防國の人。三島流砲術を創む。文化十三年歿す。年五十。

もりした 森下【名】次條の略。

もりした-がみ 森下紙【名】傘などを張るに用ふる、一種の厚紙。もりした。

もり-じほ 盛鹽【名】青樓・料理店・寄席など、客を呼ぶ稼業の家にて、縁起を祝ひ、門口に鹽を堆く盛ること、又その鹽。

もり-しゆんたう 森春濤【名】〔人〕詩人。尾張國の人。名は魯直、字は希黃。家、世世醫を業とす。父家業を繼がしめんとせしが、後、尾張の名儒鷲津益齋の門に入りて、同塾の大沼沈山と並びて、詩法に長ず。明治七年東京に移住し、茉莉巷凹に卜居し、天下の人心泰西の學に向へる間に在りて、詩社を創し、詩文を編し、枕山及び小野湖山と俱に、東京の詩壇に雄視す。明治二十二年歿す。年七十一。

もり-ずな 盛砂【名】『もりじほ(盛鹽)參照』儀式の時、砂を、門の左右に堆く盛りて裝とせるもの。たてずな。

もりずみ-くわんぎよ 守住貫魚【名】〔人〕畫家。阿波國の人。父は德島藩の銃卒。大和繪を渡邊廣輝に學び、光格天皇より、修學院行幸の儀仗三卷の補寫を命ぜられ、天保四年、江戸に出でて、坂谷廣當の日光緣起畫卷を補寫し、住吉廣定の門に入り、同六年、一橋(ヒトツバシ)家の命により、その寢室の屏障を畫き、翌年鄉里に歸り、遂に選ばれて、藩の繪師となる。明治十五年、十七年の兩度の繪畫共進會に作品を出陳しより、その名大いに著れ、後、大阪に住み、二十三年、帝國技藝員に任ぜられ、同年歿す。年八十二。

もり-そせん 森狙仙【名】〔人〕畫家。大阪の人とも、攝津國西宮(ニシノミヤ)の人とも又長崎の人ともいふ。名は守象、字は叔牙、靈明庵とも號す。初、狩野派に學びて、如寒齋と號し、祖仙ともいふ。長崎に在りし時、獵者に託して、一猿を獲、これを庭樹に繫ぎて寫生し、一淸人に評を乞ひしに、人家養育の形にして、山中自然の趣を缺けりと云はれ、發憤して、山中に入り、切磋兩三年、遂に猿を畫くを以て著れ、祖仙の號を狙仙と改む。文政四年歿す。年七十五。

もり-そだつ 守育つ【動下二自】養育す。保育す。繪鳩翁道話「かの乳母(ウバ)は、……橋彌(ハシヤ)を守育てまする」

もり-そば 盛蕎麥【名】蒸籠(セイロ)に盛りたる蕎麥切(キリ)。もり。

もりそん-ざん モリソン山【名】〔地〕『往時臺南に往來せる一英國船長の名を取りて命じたるもの』**にひたかやま**(新高山)の舊稱。

もりた-かんや 守田勘彌【名】〔人〕江戸の劇場森田座の座主。一〔初代〕通稱は太郎兵衞。うなぎ太郎兵衞と呼ばる。萬治三年、江戸京橋木挽町(コビキチヤウ)に森田座を設け、所作事の名人阪東又九郎と共同營業し、元祿十三年歿す。年六十七。二〔二代目〕阪東又九郎の次男。幼名は又七。初代の養子となり、寛文八年、家名を襲ぎ、元祿十二年、退隱して、又九郎と改め、享保十九年歿す。年五十八。三〔三代目〕幼名は、福松。元祿十二年退隱して、阪東又九郎と改め、後、又左衞門といひ、同年歿す。年二十八。四〔四代目〕阪東又三郎の三男。幼名は鍋太郎。三代目に養はれ、正德二年、家名を襲ぎ、享保八年退隱し、享保三年歿す。年六十二。五〔五代目〕四代目の母方の親戚。幼名は金藏。享保八年家名を襲ぎ、延享元年、退隱して又左衞門といひ、その後、休座八年間に及び、寛延三年歿す。年四十七。六〔六代目〕俳優中村重助の子。瀧中重井(ハシヰ)といひ、後、澤村小傳次といひ、俳優たりしが、五代目の女を娶り、寶曆元年、家名を襲ぐ。安永四年三月、阪東八十助と改め、同九年歿す。年五十七。七〔七代目〕六代目の實子。初の名は勘次郎。安永四年、家名を襲ぎ、天明三年歿す。八〔八代目〕七代目の弟。初の名は又次郎。天明三年家名を襲ぎ、寛政二年、八十助と改め、文化十一年歿す。年五十五。九〔九代目〕八代目の弟。初の名は又吉。後、阪東又九郎といひ、寛政十年、家名を襲ぎ、天保九年歿す。十〔十代目〕俳優二代目阪東三津五郎の養子。初の名は阪東三田八。天保九年家名を襲ぎ、同十三年十二月、淺草猿若町へ轉地を命ぜられ、翌年、木挽町より移轉し、嘉永四年歿す。年四十五。十一〔十一代目〕俳優三代目阪東三津五郎の養子。初の名は簑助、後、四代目三津五郎となり、安政三年、森田座を再興して、家名を襲ぐ。同五年五月、森田を守田と改む。文久三年歿す。年六十二。十二〔十二代目〕守田座の帳元中村甑左衞門の次男。初の名は壽作。十一代目の養子となり、勘次郎と改め、元治元年家名を襲ぐ。明治五年二月、猿若町より京橋新富(シン)町に移轉し、十月より興行し、七年十二月、座名を新富座と改め、一代の名優を網羅して、興行せしが、財政の困難を來して、劇場を他に讓り、三十年歿す。年五十二。古河・新永と號して、作者を兼ね、脚本・技藝の改良に盡力せし所多し。「こと。

もり-だくさん 盛澤山【名】分量の多き

もりたけ 守武【名】〔人〕**あらきだもりたけ**(荒木田守武)の略。

もりたけ-せんく 守武千句【名】〔書〕荒木田守武の獨吟千句。詳しくは、俳諧之連歌獨吟千句といふ。慶安五年の上梓。

もりたけ-りう 守武流【名】〔文〕俳諧の一派。荒木田守武を祖とす。伊勢流。**あらきだもりたけ**(荒木田守武)參照。俳家奇人談(高政)「末しげれ守武流の總本寺」

もりた-ざ 森田座・守田座【名】**もりたかんや**(森田勘彌)を見よ。

もり-だし 盛出【名】秤の目盛(メモリ)の初、即ち普通の秤の一匁の處。

もりた-しけん 森田思軒【名】〔人〕新聞記者。備中國倉敷郡の人。名は文藏。幼にして漢學を修め、後、慶應義塾に英語を學び、飜譯を善くす。朝野新聞に筆を執りて、文名高く、明治三十年死す。

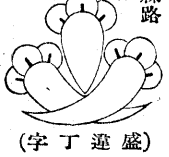
もり-たす 盛足す【動四他】**もりつぐ**(盛繼ぐ)に同じ。

もりた-せいさい 森田節齋【名】〔人〕儒者。大和國五條の人。名は益、字は謙藏。壯時、賴山陽に師事す。山陽の歿後、京師に門戶を張り、文章を以て、名聲を馳す。嘗て母より徵毒遺傳の害を戒められ、年五十、始めて、門人無該女史を娶る。女史は、痘痕滿面、醜比無けれども、博學にして、詩に長じ、海內第一の女學士の稱あり。節齋、後、備中倉子城の廣江丈兵衞の招に應じて、その學校に教授すること多年、門下多く奇士を出す。吉田寅次郎その魁たり。後、又、備後國藤江の豪農山路機富、詩文を好み、節齋を招きて師事す。明治元年歿す。年五十八。四十一年、從四位を贈らる。

もり-たつ 守立つ【動下二他】一守りて育つ。養ひ立つ。保育す。傳育す。平家「夜泣すとただもり立てよ末の世に淸く榮ゆる事もこそあれ」二助力して、衰へたるを盛んならしむ。三扶け護りて位に立つ。擁立す。

もり-ぢ 森路【名】森の中の道。萬葉「大野路(オホノヂ)は繁道(シゲ)の森路繁くとも君し通はば道は廣けむ」

もりちがひ-ちやうじ 盛違丁字【名】紋所の一。下圖を見よ。



(盛違丁字)

もり-つく 盛附く【動下二他】一割り當てて用ふ。一代女「上長者町(カミチヤウ)に、さる御隱居の禪門樣、七八軒の借屋(ヤシ)賃取りて、酢にも、味噌にも、慰にも、これを年中もりつけて、明暮、干着(カヒナ)より外なく、遊ぶを仕事に」二目盛(メモリ)を施す。

もり-つぐ 盛繼ぐ【動四他】盛りたる者の減りたる時、繼ぎ足して盛る。五人女「常香盤……香(カ)盛りつぎて」「便。

もり-っと 守子【名】**もりこ**(守子)の音

もり-つち 盛土【名】今までの地面の上に、更に土を盛りて、高くすること、又その盛りたる土。おきつち。

もり-つぶす 盛潰す【動四他】酒宴の席にて、醉ひつぶれしむ。正體を失ふまでに、酒を飲ます。假名手本忠臣藏「私(シワ)や、お前に盛り潰され、あんまりつらさに醉ざまし」

もり-て 盛手【名】飯を盛る人。飯の給仕をする人。新永代藏「通盆(ボンヨリ)なしに、女房の盛り手を、いかに腹ふくればとて、本望と思ふは、腑甲斐なき事ぞかし」

もり-てっさん 森徹山【名】〔人〕畫家。大

阪の人。名は守眞、字は子玄。狙仙の養子。圓山應擧の門に入り、人物・花鳥を以て、特に著れ、應擧十哲の一人に數へら る。京攝の間を來往し、應擧門の諸家と相呼應して、師家の畫風を鼓吹す。天保十二年歿す。養子一鳳、亦、畫家として著る。

もりさ 杜戸【名】〔地〕相摸國三浦郡田越(タゴ)村大字櫻山(田越川の南岸)の西方海濱の地。葉山村堀内の濱に連なり、鎌倉四境七瀨(セナ)祓所の一たりき。今、守殿(モリ)明神あり。

もりーどの 盛殿【名】〔一〕もりや(盛屋)に同じ。〔二〕古、伊勢大神宮にて、祭使寮官人などの、直會(ナホヒ)殿にて賜へる飯以下の物を盛りて供へし處なりといふ。儀式帳「盛殿一間(長五尺、廣一丈七尺、高八尺)」

もりーとる 守取る【動四他】手元に引き取りて養ふ。平家「忠盛、いもが子はは ふ程にこそなりにけれ と申されたりければ、院、やがて御心得ありて、ただもり(忠盛)取りてやしなひにせよ とぞ附けさせましましける」

もりーながかず 森長一【名】〔人〕武將。可成(ヨシナリ)の第二子。幼名は勝藏。武藏守と稱す。織田信長に仕へ、元龜元年、父戰死の後を承けて、美濃國可兒(カニ)郡金山城を守る。勇猛を以て聞え、世に夜叉武藏と呼ばる。信長、武田氏を滅して後、信濃國海津(カイ)城に居り、後、金山城に移る。小牧の役、その妻、池田信輝の女たる關係により、信輝と共に秀吉に從ひ、長久手の役、信輝戰死し、長一、亦、砲に中りて死す。年二十七。

もりーながさだ 森長定【名】〔人〕織田信長の寵童。可成の第三子。美濃の人。字は蘭丸。美濃岩村城を領す。本能寺の變に安田作兵衛に殺さる。年十八。

もりーながーしんわう 護良親王【名】〔人〕後醍醐天皇の長子。御母は權大納言源師親の女親子。文保二年、天皇踐祚の日、梶井宮に入室、承鎮法親王の弟子となり、名を尊雲と改む。次いで三品に敍せられ、延曆寺座主となり、大塔に居りしより、時人、大塔宮(ダイトウ)と稱す。天皇の北條氏討滅の密議に與り、講讀を廢して、武事を專らにし、つぶさに辛酸を嘗め、還俗して名を護良と改む。元弘三年六月、入京して征夷大將軍に任ぜらる。尊氏、親王の威名を忌み、親王叛を圖ると讒奏せしため、武者所に拘へられ、建武元年鎌倉に流され、尊氏の弟直義のために、二階堂谷(ニカイドウヤツ)東光寺内なる、土にて塗り籠めし牢舍に幽屏せらる。二年七月、北條時行の亂に、直義敗れ、鎌倉を去りて西上するに臨み、淵邊義博(フチベヨシ)をして親王を弑せしむ。御墓、二階堂村に在り、明治二年二月、同村に官幣中社鎌倉宮を建てて、奉祀す。

もりーはいのざ 守拜座【名】和船の筒の升形(ガタ)。

もりーばな 盛花【名】花籠などに、花を盛りて飾ること。

もりーひさ 盛久【名】謠曲の一。平家の侍主馬(シユ)の盛久囚はれて、鎌倉に下りしが、日頃信仰せし觀音の利益によりて放免せらるる事を作れるもの。

もりぶでん (英 Molybdenum)【名】〔化〕非金屬性を帶ぶること多き、一種の金屬元素。その酸化物は、水素又は炭にて容易に還元すれば得。白色にして、鎔けがたく、炭素を吸收すれば、融點下ると同時に、硬度の增加する點、鐵に似たり。配布は廣からずして、西曆一七七八年、シエエレ(Scheele)の發見に係り、一七八二年、ヒエルム(Hjelm)、その遊離に成功せり。概して、クロムに類すれども、分析上、錫族に屬す。水鉛(エンシン)。

もりぶでん-かう モリブデン鋼 (英 Molybdenum steel)【名】普通の炭素鋼にモリブデンを含有せしめたる、硬度著しく高きもの。水鉛鋼。

もりぶでん-さん モリブデン酸【名】〔化〕三酸化モリブデン及びその加水物。

もりぶでんさん-あんもにうむ モリブデン酸アンモニウム (英 Ammonium Molybdate)【名】〔化〕三酸化モリブデンをアンモニヤにて處理して生ずる、白色の結晶。燐酸の沈澱劑として用ふ。

もりーべ 守部【名】守る役の者。番人。〔古語〕萬葉「足引のをてもこのもに鳥網(トナ)張り守部をすゑて」 同「燒太刀をとなみの關にあすよりは守部やり添へ君をとどめむ」

もりーほうしう 森鳳洲【名】〔人〕畫人。名は充。岸駒の弟子。加州侯に仕ふ。

もりん 茂林【名】樹木の茂りてある林。

もりんじ 茂林寺【名】上野國邑樂(オフ)郡六鄕村大字堀上にある曹洞宗の寺。青龍山と號す。開山は大林正道にして、大林、諸國歷遊の途次、この地に來り、土人の歸向を受けて、一庵を營み、青柳城主赤井氏、寺地を寄付し、大永二年十二月、第三代の住持密天正茂の時、勅願寺たる綸旨を拜せし以來、大いに興隆すといふ。

もりもとーじんじや 杜本神社【名】河内國南河内郡駒ゲ谷に鎭座せる神社。祭神は桓武天皇の皇子仲野親王の妃當宗(マネ)氏の祖。延喜式内の古社。

もりもとーまつり 杜本祭【名】河内國杜本神社の祭禮。

もりーもの 盛物【名】〔一〕食品を盛りて、膳に供ふる物。空穗「もり物を四もり、をしき一つに添へて」 〔二〕佛前に供ふる食物。浮世風呂「お佛檀へ、御盛物を並べ立って」

もりーもり 【貌】物を噛む音。

もりーや 盛屋【名】神前への供物を調ふる所。もりどの。

もりーやく 守役【名】守りたつる役。かしづきやく。めのと。

もりやーじやう 守谷城【名】下總國相馬郡守谷町に在りし、相馬氏の城。町の東北に孤立せる丘陵に據り、東西三町、南北五町ほどにて、古城沼と呼ぶ澤に臨む。相馬氏累代の居館なりしが、永祿以後、小田原の北條氏に屬し、小田原落城と共に相馬氏の後も絕え、德川氏の代、菅沼定政封ぜられ、その子土岐定義の時、一旦攝津國高槻に移封せられたれども、又、舊に復して、寛永四年に至り、又、出羽國上山に轉封せられしより、遂に廢城となる。

平將門の居館を構へし遺趾なりとの說もあれど、信ずべからず。

もりやま 守山【名】〔地〕〔一〕近江國野洲(ヤス)郡の町。舊中山道の一驛。野洲川の西岸。草津驛の北五十町。もるやま。〔森山・杜山〕 平岩「馬に任せて、只一騎、心細く落ちたまふ。森山の宿に入りたま(ば)」 〔二〕磐城國田村郡の町。三春(ミハル)町の西南四里二十四町。水戸侯の支族なる松平氏の舊藩地。

もりやまーじやう 守山城・森山城【名】越中國射水(イミズ)郡守山村、二上(ニカミ)山の西なる海老阪に在りし城。能登・加賀に對する要害にして、貞治五年、越中の守護斯波義將、これに居り、康曆の頃、桃井直常の將寺崎備中守、これに據り、天正の初、佐佐成政これを守りしが、四年、富山(ヤマ)城主神保氏春、上杉に攻められ、遁れ來りて、佐佐氏に黨す。前田利長の領となるに及び、その臣岡嶋備中をして守らしめ、次いで自らこれに居り、後、富山城に移るに及び、廢城となる。一名、二上城・海老阪城。

もりよう 摸稜・摸稜【名】『唐書の蘇味道傳に「味道爲ㇾ相、嘗謂ㇾ人曰、決ㇾ事不ㇾ欲ㇾ明白、誤則有ㇾ悔、摸稜持二兩端一可也、故世號二摸稜手一」稜は四角の木にて、これを摸すれば、右すべく、左すべきによりていへり。一說に、蘇味道の、國事を問はれたる時、確答せずして、牀稜を摸(ナ)づるのみなりしよりいへる語なりと』事の是非を明言せぬこと。「曖昧・摸稜の言」

もりーらんさい 森蘭齋【名】〔人〕畫家。越後國の人とも、加賀國の人ともいふ。名は文祥、字は九江、又、子禎といふ。長崎に遊び、沈南蘋に就きて學べる通詞熊斐に畫法を問ひ、遂に門下の高足となり、殊に花鳥に秀づ。一時大阪に住し、後、江戸に出で、享和元年歿す。

もりりん-たらう 森林太郎【名】〔人〕醫學博士兼文學博士。石見國津和野の人。明治十年、醫科大學を卒業して、陸軍軍醫副官となり、十六年獨逸留學を命ぜられ、二十年歸朝し、軍醫學校の教官となる。日

清・日露の兩役を經て、陸軍軍醫總監兼醫務局長に至り、爾後、累進して軍醫總監となる。退役の後、宮内省に入りて、東京帝室博物館長となり、同十三年歿す。年六十七。明治二十三年以來、文壇の人ともなり、飜譯・創作・評論、何れも群を抜く。

もりもり【貌】堅き物を齒切よくかむ音。物を口中に含みてかむ音。

もり-らんまる 森蘭丸【名】〔人〕**もりながさだ**(森長定)に同じ。

もりをか 盛岡【名】〔地〕㊀陸中國の市。北上川の東岸に沿ひ、中津川に跨る。岩手縣廳の所在地。鐵道東北本線の停車場あり。南部氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。三年七月、陸中國盛岡藩の地に立てしもの。五年、三戸(サンノヘ)縣を廢して、これに併せ、岩手縣と改稱し、閉伊(トヘ)・和賀・稗貫(ヒエヌキ)・志波(シワ)・岩手・九戸(クノヘ)の六郡を管せしめしが、九年、磐井(ハヰ)縣の廢止と共に、陸中國膽澤(イサハ)・江刺・磐井の地をも管し、後、又、陸奥國の二戸(ニノヘ)、陸前國の氣仙(ケセ)の二郡をも管するに至りしもの、卽ち、今の岩手縣なり。

もりをか-じやう 盛岡城【名】陸中國盛岡市の中央に在りし城。明治維新前、南部氏の居りし所。清原武則の鎭守府將軍たりし時、その甥橘貞賴の創築に係るといふ。後、工藤小次郎の一族、これに據り、南部氏、これを滅して、その屬城とし、天正十九年九戸(クノヘ)の役、蒲生氏郷の進言に由り、築城す。南部信直の子利直、慶長二年、建築に著手し、元和五年、三戸(サンノヘ)より移りて居り、重直の時、火災に罹りて、郡山に在城の事ありたれど、寛永十年、信重より後、明治維新に至るまで、代代の治城となれり。

もり-をんな 守女【名】子守をする女。

もる 守る【動四他】**まもる**(守る)㊂に同じ。萬葉「筑波嶺のをてもこのもに守部(モリ)すゑ母はもれども魂(タマ)ぞあひにける」古今「ほにも出でぬ山田をもると藤衣稻葉の露に濡れぬ日は無し」

守る目【名】人の、日を著けて守ること。ひとめ。後撰「もる目のみあまた見ゆれば三笠山知る知るいかがさして行くべき」

もる 盛る【動四他】㊀飲食物を、器に入れ滿たす。紀「玉けには飯(イヒ)さへもり玉盌(モリヒ)に水さへもり」萬葉「家にあれば筍(タケ)に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」㊁人に侑むるために、飲食物を器に入れ滿たす。狂言(法師物狂)「呑む者は、畜生でも呑むが、盛らっしやる人が恨めしい」㊂堆く積む。「土を盛る」㊃或病人のために、藥を、匙に盛りて調合す。㊄度量衡・寒暖計などに、單位の目じるしを刻みつけ、又は書きしるす。「目を盛る」「度を盛る」

もる 漏る・洩る・泄る【動四他】次條に同じ。源氏「もり濡れたる廂の端つ方」榮花「忍びてとおぼしおきてしかど、事限あれば、皆もりきこえぬ」

もる 漏る・洩る・泄る【動下二自】㊀隙間(マスキ)をくぐりて、範圍の外に出づ。新古今「秋風のたなびく雲の絕間より漏れ出づる月の影のさやけさ」㊁祕しおくべき事、いつしか他に知らる。漏洩す。㊂誤りて脫す。ぬける。脫落す。脫漏す。源氏「この度の司召にももれぬれど」

もる《英 Mo.》【名】**ぐらむぶんし**(瓦分子)に同じ。

もるたあ《英 Mortar》【名】〔化〕セメント又は石灰と砂とを一定の割合に配合し、これに清水を加へたる泥狀の物。石材・煉瓦等の間に塗る時は、漸次水分を失ひ、炭酸瓦斯を吸收して硬化し、接合の用をなすにより、土木・建築上に廣く使用せらる。セメントを原料とせるものは、大氣中にても、水中にても、漸次凝結すれども、石灰を用ひたるものは、大氣中に於てのみ凝結して、水中にては、全然凝結せず。

もるたる【名】〔化〕前條に同じ。

もるちいる《蘭 Morter》【名】**きうはう**(臼砲)に同じ。

もるひね 莫兒比涅《獨 Morphine》【名】〔化〕阿片中に含有する、一種のアルカロイド。透明にして、光輝ある針狀又は柱狀の結晶をなし、無臭にして、苦味あり、水に僅かに溶解す。西曆一八一六年、セルチュルネル(Sertürner)の發見に係り、强き麻醉劑にして、又、鎭痛劑として廣く使用せらる。但し、藥用には、主として、鹽酸との化合物なる鹽酸モルヒネを用ふ。量多ければ、死を致す。莫比(モヒ)。「同じ。

もるひん《英 Morphine》【名】〔化〕前條に

もるもっと【名】〔動〕**まるもっと**の轉。

もるもん-きやう モルモン經《英 Book of Mormon》【名】〔書〕モルモン宗の敎祖スミスが、西曆一八二七年九月二十二日、キュモラア(Cumorah)の丘に一個の石甕を獲、その中に發見せる祕書なりといひ、敎祖、自らこれを飜譯・出板せるもの。舊約聖書に撰したるものにて、殊に亞米利加印度人の由來を記し、筆を、創世紀の第十一章に記せるバベル(Babel)の塔の建設に起し、列王記下の第二十四章第十八節乃至第二十五章第二十一節に記せるゼデキヤ(Zedekah)王の時、ジョセフ族の一人、その家族を率ゐて、南米智利國に移住せしが、その子孫、土民と戰ひて敗れ(時に西曆三八四年)、僅かに、モルモンとその子モロニ(Moroni)とのみ逃れて、記錄を集め、キュモラアの丘に埋めし由を記せり。されども、實は、一八一二年、ソロモン、スポオルヂング(Solomon Spalding)の著せる亞米利加印度人の歷史談を、スミスを輔佐せしリグドン(Sidney Rigdon)の手を經て、スミスに歸せしものといふ。明治四十三年には、邦語譯出版せられたり。

もるもん-しゆう モルモン宗【名】〔宗〕『英 Mormons 又 Mormonism』北米合衆國のジョセフ、スミス(Joseph Smith)の創設せる、基督敎の一派。スミス、十八歲の時、天使の告命を受け、西曆一八二七年、黃金板に記せる一の祕書を得たりと稱し、一八三〇年四月六日、敎團を組織するに至りしもの。多神的にして、一を主神とし、人死して、その靈の天上にて享くる果報は、生前の妻子の數に比例すと說くにより、自然の結果として、一夫多妻を主義とし、又、末世に於て、基督の復活すべきを信じ、初、死者の靈は、正邪の戰の結果、その正なる者のみ殘存して、一千年の王國建設せられ、ミズウリ(Missouri)州ジャクソン(Jackson)の地に、新しきエルサレム(Jerusalem)の出現を見たる後、再度の復活によりて、不死の新天地生ずべしと說く。スミス、生前に於ても、信徒漸次に加はりたれども、終に反對者の手に斃れ、常にスミスに侍して、これを輔けしブリガム、ヤング(Brigham Young)、推されて、第二世となるや、一八四七年、反對者を避け、信徒百四十三人を率ゐて、ユタア(Utah)州に赴き、荒漠不毛の地にソルト、レエク市(Salt Lake City)を建設し、爾來、同市は、この宗派の中心地となり、廣さ八千人を容るるに足る大本山、市の中央に在り。但し、一夫多妻主義は、北米合衆國の議會、その弊風を認めて、これが禁止の法律を可決したるため、一八九〇年の同宗大會にて撤回することとなれり。我邦には、明治三十四年以來布敎せられれど、敎勢甚だ振はず。

もるやま 守山【名】〔地〕**もりやま**(守山)に同じ。古今「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」

もれ 漏・洩・泄【名】漏るること。ぬけ落つること。脫落。脫漏。遺漏。

もれ-きく 漏聞く【動四他】宮中・政府などに關する事を、ひそかに聞く。

もろ【名】〔動〕**あをざめ**(青鮫)㊀に同じ。

もろ 諸・兩【接頭】㊀二つ揃ひてある意。雙。(片(カタ)に對して)「もろ鐙(アブミ)」「もろ矢」「もろ歌」「もろ手」㊁諸共にする意。とも。「もろ戀」「もろ寢」「もろ聲」㊂彼方・此方の意。「むろ向(ムカ)」㊃多くある意。もろもろの。「もろ色」「もろ人」

もろ-あげ 諸擧【名】古の歌曲の節の、本・末の兩方を上げて歌ひしもの。(片上(カタアゲ)・片下(カタオロシ)に對して)神樂「諸擧」

もろ-あげ 諸上【名】下の文を見よ。俚言集覽「今、諸大名、親屬、相謂つて、諸上といふ。その無緣を片上(カタアゲ)といふ。諸上とは、かの氏の家臣應答の辭に、己が主人家

を吃せず、互に内にするなり。兩相上ぐる故に、諸上といふなり。又、兩敬ともいふ。

もろ-あし 諸足【名】左右の足。兩脚。

もろ-あぢ 室鯵【名】〔動〕むろあぢ(室鯵)の轉訛。

もろ-あぶみ 諸鐙【名】左右の鐙。もろが諸鐙を合はす【句】馬上の人、同時に左右の鐙にて、馬の腹を打ちて、疾驅せしむ。兩鐙(アブミ)を合はす。内鐙(アブミ)を合はす。太平記「遙かの山の上より、これを見て、諸鐙を合はせて馳せ參じて」同「大高に組まんと、諸鐙を合はせて馳せかかる所に」

もろ-いき 諸息【名】出づる息と、入る息と。呼吸。新可笑記「天井板を引き破りて呼び立てしに、諸息、次第に募って、左の脈、ありし昔に變らず、正氣になりぬ」

もろ-いとおり 諸絲織【名】經(タテ)絲に、諸撚(モロリ)の絹絲を用ひたる絲織。(平絲織に對して)

もろ-いろ 諸色【名】もろもろの色。多くの色。若鳳傘「この人、品形の、諸色に勝れ、堅愚・貴賤共に、一度眸(ヒトミ)れば、手の舞ひ、足の蹈む事を忘れ惱ませ」

もろ-うきす 諸うきす【名】『うきすの(うきす篦)を見よ』矢竹の、五月に生じたるを、三年目の八月に切りたるもの。(片うきすに對して)

もろ-うすあを 諸薄青【名】襲(カサネ)の色目の一。表も裏も薄青。

もろ-うた 諸歌【名】上の句と下の句とを具へてある歌。(片歌に對して) 著聞「備後前司季兼朝臣、庭火の本歌を唱へけるに、秦兼弘、人長にて、もろ歌を仰すとて、外山なるとうたふ時」

もろ-おこし 諸起【名】食事の時、椀と箸とを、同時に取ること。

もろ-おもひ 諸思【名】もろごひ(諸戀)に同じ。(片思に對して) 五人女「しのびしのびの文書きて、人知れず遣しけるに、便(ヨシ)の人變りて、結句、吉三郎方より、思はく數數の文送りける志、互に入り亂れて、これを諸思とや申すべし」

もろ-おや 諸親【名】ふたおや(二親)に同じ。

もろ-かう 諸香【名】こがれかう(焦香)【二】に同じ。

もろ-かが 諸加賀・兩加賀【名】最も上等なる加賀絹。一代女「兩加賀半疋、紅(モモ)の片袖、龍門の帶一すぢ」

もろ-かぎ 諸鉤・師鑰【名】物の結び目に、左右一つづつの輪を作ること。(片鉤に對して)

もろ-がく 諸角【名】もろあぶみ(諸鐙)に同じ。(片角(カタツク)に對して)

もろ-かせぎ 諸稼【名】ともかせぎ(共稼)に同じ。

もろ-かた 諸縣【名】〔地〕日向國の舊郡の一。國の西南、霧島山の東麓を占め、明治十二年、分ちて東・西・南・北の四とせしが、二十九年、南諸縣は、廢して、大隅國に入り、囎唹(ソ)郡となる。

もろ-かたがへり 諸片回【名】鷹の生れて、四歳になりたるもの。又、三歳又は四歳以上なるものともいふ。定家鷹三百首「鷹ははや諸かたがへり過ぎぬなり今幾とせかとやに飼はまし」

もろ-かづら 諸葛【名】【一】古、賀茂の祭に、桂に葵を添へて、簾に懸け、頭にかざしなどせしもの。(片葛(カタカツラ)に對して) 後拾遺「諸かづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん」【二】〔植〕あふひ(葵)【一】に同じ。輔親集「山人の諸かづらとぞいふなれば今日のみあれにあふひなりけり」【三】名香の一。一代男「香爐に厚割の一木(キヒ)を燒(タ)きてきかせ……この木は、何と御聞き候ふぞと申す。正(ヤ)しくもろかづらといふ。さても、名譽の香ききかなと」

もろ-がひな 諸腕【名】りやううで(兩腕)に同じ。曾我會稽山「長沼五郎が諸腕」

もろ-がへり 諸回【名】鷹の生れてより、三年を經たるもの。あをたか。夫木「諸がへり空取る鷹を引き据ゑて粟津の原を狩るや誰が子ぞ」

もろ-がみ 諸神【名】もろもろの神。多くの神。しよじん。千載「いにしへの神の御代より諸神の祈るいはひは君が世のため」

もろ-き 諸木【名】もろもろの木。多くの木。大鑑「ちはやぶる神のみまへの橘ももろ木も共に老いにけるかな」

もろき-ぶね 同船【名】ほしぶね(端舟)に同じ。紀「同船、母慮紀舟」

もろ-ぐそく 諸具足【名】太刀を佩き、空穗(ホヤ)を著け、弓を持ちたる扮裝。太平記「片小手に腹當して、諸具足したる中間」

もろ-くち 諸口【名】【一】馬を、左右兩口を取りて牽くこと。又、差繩にて牽くことなりともいふ。(乘口に對して) 平家「多くの馬どもを見けるに、……或は乘口に牽かせ、或はもろ口に牽かせ」【二】多くの人の口。異口(ヒ)同音。【三】銚子の、注口(クチ)の同方にあるもの。(片口に對して)【四】次條の略。

諸口を押す【句】下文を見よ。太平記「侍十二人に諸口を押させ、千鳥足を踏ませて、小路を狹しと歩ませたり」五武器談「侍十二人、わが馬の左右に召し列ねたるなり。侍も馬に乘り、我も馬なり。これにより、もろ口といふ。押すは、人數の押しゆくなり」

もろくち-がみ 諸口紙【名】障子紙として用ふる、一種の和紙。もろくち。

もろ-くわはう 諸果報【名】二人ながら、よき果報を得ること。丹波與作「千代に、八千代に、よろづ與作が諸果報、小萬が戀もとほり町、仕合よして」「の略。

もろ-こ 諸子【名】〔動〕もろこばえ(諸子鯉)

もろ-ごころ 諸心【名】二人以上の者の、心を合はせてすること。同心。共同一致。源氏「もろ心に、はかなき事もしいでたまふ」蓬生「諸心に、何事もしたまへ」

もろこ-ざめ 諸子鮫【名】〔動〕あをざめ(青鮫)【一】に同じ。

もろ-こし 唐・唐土【名】〔地〕『諸越(ショツ)の直譯。諸越は、百越ともいひ、今の浙江省邊より南、安南邊へかけての稱呼にて、我國よりの遣唐使などの浙江省邊に著船せしより、直譯して、支那全土の稱呼ともするに至りしものといふ』古、我國より支那を指していひし語。唐土(ガク)。萬葉「もろこしの遠き境に遣され」

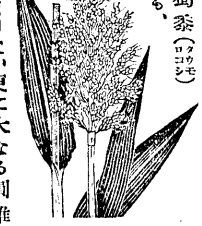
唐の判官【句】古、遣唐使の副使の次に位して隨從せし役。古今「寛平の御時に、もろこしのはう官に召されて侍りける時に」「黍)の略。

もろ-こし 蜀黍【名】〔植〕もろこしきび(蜀

もろ-ごし 諸腰【名】刀と脇差と。兩腰(ヨウ)。大小。

もろこし-がはら 諸越原【名】〔地〕相摸國中郡大磯町の邊より相摸川邊にかけての海濱の舊稱。奈良朝時代に、東國に配置せられし韓人の居りし所と傳ふ。今も、大磯町に、高麗(コ)と呼ぶ大字あるも、その緣によりてなるべしといふ。夫木「名にしおはば虎や臥すらんあづまちに立つといふなるもろこしが原」

もろこし-きび 蜀黍【名】〔植〕『もろこしは唐の義』禾本科に屬する一年生の草。我國、所在の地に培養せらる。稈は、高さ七八尺以上に達し、節高く、葉は披針形にして大きく、玉蜀黍(トウモロコシ)のに似たれども、やや短く、花は秋、稈の頂に一旦小穗花序をなしたるもの集まりて、更に大なる圓錐花序を作りて開き、花後、赤褐色の果實を結ぶ。種子は、粉末にして、餅・團子などに製し、又、その青刈は、家畜の飼料とす。たうきび。もろこし。



(びきしころも)

もろこし-だつ 唐だつ【動四自】唐の樣式めく。源氏「掛取、棹さすわらはべ、皆、みづら結ひて、もろこしだたせて」

もろこし-だんご 蜀黍團子【名】もろこしきびの寒晒(カンザ)粉にて製したる團子。

もろこし-づき 諸越月【名】陰暦八月の異名。

もろこし-びと 唐人・唐土人【名】支那の人。からびと。たうじん。空穗「もろこ

し人、我國に生ひ出づる者にも劣らぬ者かな」

もろこしぶね 唐船・唐土船【名】**からふね**（唐船）に同じ。徒然「もろこし船の、たやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて」

もろこしぶみ 唐書・唐土書【名】支那の書籍。からぶみ。漢籍。

もろこしもじ 唐文字・唐土文字【名】支那の文字。漢字。

もろこしもち 蜀黍餅【名】もろこしきびの粉を搗きて製したる餅。一代男「蜀黍餅・酒など持たせて」

もろこ-ばえ 諸子鯈【名】〔動〕『近江國諸子川に多く產するよりいふとぞ』硬骨類に屬する魚。體は、たなごに似て、長さ二寸前後に達し、背黑く、腹白く、側面に三條の黑線あり。うろこ。しまりを。はや。もろこ。

もろ-どひ 諸戀【名】互に戀ふること。もろおもひ。相思。（片戀に對して）六帖「みごもりの神しまことの神ならばわが片戀を諸戀になせ」

もろ-ごゑ 諸聲【名】諸共に發する聲。諸共に鳴く聲。伊勢「水口（クチ）に我や見ゆらん蛙さへ水の下にてもろ聲に鳴く」若風集「夢とはおぼしめさずやと嘆きかけて、嘆かせ、諸聲をあげて、互に半時（ジ）あまりの涙」

もろざき 師崎【名】〔地〕尾張國知多（タ）郡の町。知多半島の極端幡豆（ズ）崎に在り。半田（ダ）町の南方六里。德川時代には、船奉行千賀の居りし所。

もろ-ざし 諸差【名】相撲（ズモ）にて、兩手を差して取り組むこと。

もろ-さしなは 諸差繩【名】差差繩（サシナワ）と引差繩（ヒキナワ）とを、左右に二筋づつ著けて、馬を率くこと。もろなは。（片差繩に對して）

もろ-ざめ 諸鮫【名】〔動〕**あをざめ**（青鮫）【形一】たやすく壞（コ）れ、消え、負けなどする性質なり。耐ふる力少し。むる。源氏「からの紙は脆くて、朝夕の御手ならしにもいかが」同「山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなく脆きわが涙かな」

もろしほおし 諸潮押【名】船を漕ぐにも、引くにも、突くにも、潮のかかりゆくがままに、艪を押すこと。

もろ-しらが 諸白髮【名】**ともしらが**（共白髮）【一】に同じ。醒睡笑「夫婦諸しらがまで添ひたりし祖父」【二】兩方の鬢の毛の、白くなること。謠曲「融」「身は、すでに老い重なりて、諸白髮、雪とのみ積りぞ來ぬる」

もろ-すぎ もろ杉【名】〔植〕**むろ**（杜松）に同じ。

もろ-ずね 諸臑・諸脛【名】左右兩方の「臑」。

もろ-そで 諸袖【名】左右の袖。兩袖。繪本太功記「歎き沈めば、お道理と、心を汲んで、諸袖を絞るしのぶが共涙」

もろ-たづな 諸手綱【名】左右の手綱を、兩手に持分くること。（片手綱に對して）重井筒「心の駒の諸手綱」

もろた-ぶね 諸手船【名】我國、上代の船の一。丸木船にて、數多の水手（ミヅ）の乘りて漕ぎしものなるべし。「古語」紀「龍野諸手船、クマノノモロタブネ」

もろっこ 摩洛哥（英Morocco又Maroco）【名】〔地】【一】亞弗利加洲の西北部にある國。西曆一九一二年以來、佛蘭西の保護國となる。【二】〔地〕亞弗利加洲モロッコ國の首府。【三】次條の略。

もろっこ-がは 摩洛哥革【名】『亞弗利加洲モロッコ國モロッコ市の名に因みて呼ぶ』主として、貴婦人用の靴の甲、又は、書籍の表紙、椅子張その他の家具用、旅行具・裝身用具などに使用する、極めて柔軟なる革。山羊の皮を最上とし、綿羊・小牛などのもあり。亞弗利加の、地中海沿岸地方・土耳古等の原產。

もろっこ-じけん モロッコ事件【名】西曆一九〇五年、獨逸皇帝キルヘルム（Wilhelm）第二世の、佛蘭西の植民地たるモロッコ國に、巡遊を名として、突然上陸し、同國政府を煽動して、佛蘭西と英吉利・伊太利・西班牙との間の同國に關する協定に

容喙を試みし事件。

もろ-て 諸手【名】【一】左右の手。兩手（ヤウ）。重之集「春蒔きし山田の苗も生ひにけり諸手に人は引きて植えなん」【二】各方面の軍隊。甲陽軍鑑「諸手にすぐれたりとの御感狀をば、小幡山城に下さる」諸手を差す【句】相撲（ズモ）にて、兩手を敵の體に附け、抱くやうにして取り組む。

もろ-てん 諸點【名】歌の評點の、左右の肩に打つもの。（片點に對して）

もろ-ども-に 諸共に【副】相俱に。一緒に。ともどもに。古今「もろ共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人はなし」

もろ-とや 諸鳥屋・兩鳥屋【名】鷹の、鳥屋の中にて、陰曆四月より七月にかけて、二歲毛の脫けかはること。（片鳥屋に對して）

もろ-なは 諸繩【名】**もろさしなは**（諸差繩）に同じ。（片繩に對して）

もろ-なみだ 諸涙【名】諸共に涙を流すこと。國姓爺「錦祥女は縋りつき、母の袂の諸涙」

もろ-なり 諸【名】〔植〕**なはしろぐみ**（苗代胡頹子）に同じ。

もろ-ね 諸寢【名】**ともね**（共寢）に同じ。

もろ-ねり 諸練【名】精好織の、經（タテ）にも、緯（ヨコ）にも、練絲を用ひたるもの。（片練に對して）「（菱川師宣）を見よ。

もろのぶ 師宣【名】〔人〕**ひしかはもろのぶ**

もろ-は 諸刃・兩刃【名】刀劍などの、身の兩邊を刃にしたるもの。（片刃に對して）萬葉「劍たち諸刃の上にゆきふれてしせかもしなむ戀ひつつあらずは」

もろはがんな 諸刃鉋・兩刃鉋【名】表・裏兩面の刃を有し、堅き材を削る時に用ふる鉋。

もろ-はく 諸白【名】麴・米の兩方とも、よく精げたる白米を用ひたる、上等の酒。昔は、大和國奈良、攝津國池田、その名產地といはれたり。（片白に對して）狂言（目近大名）「諸白を飲めやて」

もろはぐさ 諸葉草・兩葉草【名】〔植〕**ふたばあふひ**（二葉葵）に同じ。續拾遺「もろは草引きつらねたる今日こそは永きためしと神も知るらめ」

もろはじんじや 諸羽神社【名】**もろはやま**（諸羽山）を見よ。

もろ-はだ 諸肌【名】上半身全部の肌。りやうはだ。（片肌に對して）諸肌を脫ぐ【句】【一】衣の上半身全部を脫き垂れて、肌をあらはす。大肌を脫ぐ。【二】事を爲すに、全力を盡す。

もろ-はだぬぎ 諸肌脫【名】諸肌を脫ぐこと。（片肌脫に對して）

もろはなぎなた 諸刃長刀【名】長刀【一】の、諸刃に作りたるもの。

もろはの-みや 諸羽宮【名】**もろはじんじや**（諸羽神社）に同じ。蜻丸「風に諸羽の宮所、今日を限と伏拜み」

もろはみやうじん 諸羽明神【名】**やましなまつり**（山科祭）【一】を見よ。

もろはや 諸羽屋【名】兩庇の建て方なる雜舍。

もろはやま 諸羽山【名】〔地〕山城國宇治郡山科（ヤマシナ）村にある山。諸羽神社あり。夫木「あふひ草もろはの山の明烏なれてみあれの頃や待つらん」

もろ-ひざ 諸膝【名】左右の膝。りやうひざ。太平記「敵のために、馬の諸膝薙がれて、步立（カチダ）になりて」

もろ-びと 諸人【名】もろもろの人。多くの人。しよにん。萬葉「梅の花折りてかざせるもろ人は今日の間は樂（タノ）しくあるべし」

もろ-ひねり 諸捻・兩捻【名】柄絲（ツカ）にて、柄を斜に左右より卷きて組み合はせ、その中間に幾つかの菱形を作るに、組み合はする度毎に、兩方の絲を捻ること。菱の上、擦れて切れやすき缺點あり。（片捻・捻無（ナシ））に對して）長町女殺切「締めた心の諸捻、その柄絲のほつれそめ」

もろ-びん 諸鬢【名】左右の鬢。兩鬢。雙鬢。（片鬢に對して）

もろ-ほ 諸穗【名】兩莖の穗とも、**やつかほ**（八束穗）に同じともいふ。神樂（木綿志大）

「いなの穂のもろ穂に垂(シ)でよ、枯落穂(ナビレ)も無く」

もろ-まひ 諸舞【名】東遊(アヅマビ)の駿河舞・求子(モトコ)の二曲を舞ふこと。(片舞に對して)

もろ-まゆ 諸眉【名】灰條の略。 用明天皇職人鑑「烏帽子屋が身を立烏帽子、諸眉は」

もろまゆ-えばうし 諸眉烏帽子【名】左右兩方に眉のある烏帽子。

もろ-み 諸味・醪【名】酒又は醬油の、醪酵中に屬し、未だ液汁を分離せぬもの。酒のは、即ちどぶろく。 和名「醪、毛呂美」

もろみ-ぐさ 諸味草・醪草【名】〔植〕はぎ(萩)【一】に同じ。

もろみ-ざけ 諸味酒・醪酒【名】諸味の酒。

もろ-むき 諸向【名】【一】彼方へも此方へも依り向ふこと。 萬葉「武藏野の草葉もろむきかもかくも君がまにまに吾(ワ)は寄りにしを」 【二】〔植〕ろらじろかんば(裏白樺)に同じ。

もろ-むすび 諸結【名】紐を結ぶに、左右兩方を動かして締め合はすること。男結と女結とあり。各條を見よ。(片結に對して)

もろ-め 諸目・兩目【名】左右の目。兩眼。 盛衰記「兩目にては睨み、片目にては睨み」

もろ-もち 諸持【名】諸共に持つこと。力をあはせてすること。 土佐「かの人人の、口網ももろ持にて、この海邊にて荷ひ出せる歌」

もろもっと 【名】〔動〕もるもっとの轉訛。

もろ-もろ 諸・諸諸【名】いろいろ。許多。又、衆くの人。衆。 祝詞「新年祭」「集侍(ツドヒ)はれる神主・神部等(ララ)、諸聞しめせと宣(ノル)」 「茅」もろもろの愚者も月夜の十夜かな」

もろ-や 諸矢【名】射術の練習に、同時に手に持つ一對の矢、即ち甲矢(ヤ)と乙矢(ヤツ)と、又、それを的に射當つること。ひとてや。(片矢に對して) 拾遺「引く人もなしと思ひし梓弓今ぞ嬉しき諸矢しつれば」 徒然「ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向ふ」

もろ-やしろ 諸社【名】もろもろの社。多くのやしろ。諸社(シヤシヤ)。諸神。 新六「六十(ヂウ)あまり國に滿ちたるもろ社世のためにこそ跡を垂れけめ」

もろ-ゆがけ 諸韘・諸鞲【名】左右の手に韘をはむること。歩立(カチ)にて矢を射る時は、左手のを去れども、騎射の時は、手綱を取る故、兩手にはむるなり。一具韘(ユガケ)。まごゆがけ(的韘)參照。

もろよせ-のはま もろよせの濱【名】〔地〕但馬國美方(ミカ)郡にある濱。 枕「濱は、……、打出の濱、もろよせの濱」

もろ-より 諸縒・諸撚【名】片撚絲を二本以上合はせ、これに前と反對の方向に撚を掛くること。即ち、木綿絲にては、普通に二子(ヨツ)・三子(ミツ)と呼ぶ撚方。(片撚に對して)

もろより-いと 諸縒絲・諸撚絲【名】諸撚にしたる絲。あはせいと。よりいと。(片撚絲に對して) 「同じ。

もろらん 室蘭【名】〔地〕むろらん(室蘭)に

もろ-わざ 諸業【名】もろもろのわざ。多くの事。諸事。 若風金「心にあらねば、もろわざうつる事難し」

もろ-わちがひ 諸輪違【名】棒術の一。 雪女五枚羽子板「棒の祕術……片手輪違・諸輪違」

もろわ-むすび 諸輪結【名】紐の結び方の一。下圖を見よ。

(諸輪結)

もろ-を 諸緒【名】緒の結び方の一。

もろをか-いちう 諸岡一羽【名】〔人〕神道流剣法の達人。常陸國江戸崎(ヤキド)に居り、飯塚家直に學びて、奥儀を極む。門人甚だ多し。中にも根岸兎角・岩間小熊・土子土呂之助等、最も顯る。

もろ-をりど 諸折戸【名】二枚開きの折戸。(片折戸に對して) 宇治「ふりたる家のもろ折戸の中へ落ち入りにけり」

も-わけ 藻分【名】魚を料理する時、先づ、俎の上にて、庖丁にて、魚の體を撫づること。

や

【發音】【一】や行第一の音。子音yが母音aと結び附きて發す。子音yの母音a・oに結び附きたるは、即ちゆ・よにして、同じくや行に屬するい・えも、もとyとi・eとの結び附きたるものなりしならんが、後世は、子音脱落して、發音のみならず、假名までも、あ行のい・えと全く同一なるに至れり(但し、外來語の場合を除く)。yは、氣息の咽喉より鼻腔へ通ずる路を閉ぢ、舌の中部を、母音い(i)を發する時の位置よりも一層高めて、その左右の緣邊を口蓋に密著せしめ、中央に僅かに存せしめたる空隙より、聲帶の振動を帶びたる氣息を通過せしめて發する音にして、摩擦音に屬し、その發する場所よりすれば、口蓋音に屬す。又、その氣息は聲帶の振動を帶びたるが故に、濁音の一にして、これに對する清音はひの子音なり。ひ【一】の條下を參照せよ。子音yの母音iと異なる所は、ただ舌の位置の少しく高きと、氣息通過の際、摩擦を生ずるとの二點に在るのみなるが故に、い列音の直下にあ音の續く時、その中間にy音加はりて、あはやの如くに發音せらるる場合あり。あ【五】の條下を參照せよ。ぱんぱいん(半母韻)參照。【三】長音は、やあと書くと

やーと書くとの兩法あり。本書にては前者に依れり。【四】一語の中にて、やの直後にうの續く時は、相合して、よの長音に發音せらるること多し。例へば、やうか(八日)・やうし(養子)をヨオカ・ヨオシと發音する類。又、やの直下にふの續く例は動詞もやふ(紡ふ)の類あれど、習慣上、ふをウと發音し、その直前の音と音節を分ちて發音せり。【四】やは、い列音の假名の下に記してあ列拗音を示すことあり。即ちきや(kya)・しや(sha=sya)・じや(ja=zya)・ちや(cha=tya)・ぢや(dya)但し後世の發音はじやに同じ)・にや(nya)・ひや(hya)・びや(bya)・ぴや(pya)みや(mya)・りや(rya)、これなり。同じや行のゆ・よも、同樣に、きゅ・しゅ・ちゅ・きょ・しょ・ちょ等の如く、う列拗音・お列拗音を示すことあり。又、これらの場合に、そのや行の假名を、きゃ・きゅ・きょ等の如く、右方に片寄せて小く記す方法もあり。漢字の音にては、い列音の假名の下にやを記したるは、すべて拗音に發音すること、いしや(醫者)・ちや(茶)などの例の如し。なほ、これら拗音の發音の方法・位置に關しては、各い列音の發音の條下に說けり。【五】漢語の熟語にて、やの頭音を有する文字がnの韻を有する文字の直後に續く時、そのやが拗音ニャと轉呼せられ、mの韻を有する文字の直後に續く時、拗音ミャと轉呼せらるることある場合に就きては、に【七】・み【五】の條下を見よ。

【字源】平假名やは漢字「也」(漢・吳音共にヤ)の草體、變體平假名ゃは「屋」(訓ヤ)の草體、ゃは「夜」(漢・吳音共にヤ)の草體、ゃは「邪」(漢・吳音共にヤ)の草體より出で、片假名ヤは「也」の略體、又、萬葉假名としては、前記「也」・「屋」・「夜」の外、字音に據れるものに「耶」・「揶」・「嫋」等、訓を取りたるものに「八」・「矢」・「箭」・「哉」等あり。

や 家・屋【名】【一】『やかた(屋形)・やしろ(社)・こや(小屋)・たまや(靈屋)・さや(鞘)・みや(宮)など複合語としても多く用ひらる』人などの住む料として、建築せる物。いへ。家